
緋弾のARIA～魔弾の射手～

岸辺 翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜魔弾の射手〜

【Nコード】

N9904P

【作者名】

岸辺 翔

【あらすじ】

リリカルなのはの世界を救った？銃騎士「隼人」？。

彼は闇の中で見つけた緋弾の世界へ行くことに！？ 「俺の名は銀狼。世界を救う、銃騎士だ」 彼の言葉にアリアはパートナーだと錯覚し……？ 「銀狼。私は貴方の物です」 「はあ？ お前、何を言ってる……」 突然の宣言に隼人はどうする！？ （注：この作品は「決意の弾丸」〜最期の刻限〜からの続編です） 「俺は彼女を殺した償いをせねばならない。幾万の命を奪った、俺がな……」

……」 だがそんな中、銀狼に任務が言い渡される。「イ・ウー

構成員の全てを死者に出さずに、尚且つ無傷で捉えよ」「……………
了解。コードネーム銀狼。任務を遂行する」それは、死への道し
るべだった……………？

主人公——銀狼についてのレポート（設定画あり）（前書き）

ただの主人公紹介です

「決意の弾丸」や「最後の刻限」を読んでいた方は既に知っていることばかりかと

主人公——銀狼についてのレポート（設定画あり）

名前：（本名）大原・H・O・隼人

コードネーム：銀狼
シルバールフ

年齢：27歳（外見上は20歳）

空想CV：大塚明夫

誕生日：4月27日

身長：196cm

体重：52kg

肌の色：わりと白い方

髪の色：白銀

髪型：前髪・目の下で切っている　後ろ髪・膝まであり、耳は隠れている

瞳の色：右目・蒼（アイパッチ眼帯着用なので見えない）　左目・紅

視力：右目・盲目（代わりに熱や人の気配、風の流れを見れる）
左目・9・0

主な使用銃：DESERT EAGLE 14inch・バレット

M82A1・SVD ドラグノフ。詳しいことは銃器紹介参照

キルゾーン
射殺可能範囲：5642m

役職：総合警備会社Outer・Heaven・nadaの創設者兼社長。だが、Outer・Heaven・nadaの裏の顔であるPMC部隊OHNの設立者兼総帥でもある。立場としては国家と同等に話し合える程。むしろ上かも

所属学科：アサルト 強襲科・スナイプ 狙撃科

経歴：ナノマシンを体内に宿し、兆速再生や体の一部を武器に変形させての戦いが可能な、プロジェクトF・A・L・C・O・Nの試験体として生み出された。6歳の頃から軍に入り、14歳で死亡。後にリリカルなのはの世界へ転生し、『銃騎士』という使命を背負いながらも役目を成し遂げ、消滅

特技

リフレク・シヨット
兆弾撃ち

壁や鉄柱など、障害物に弾丸を当て、兆弾させた弾で狙う精密射撃。弾の届く範囲であれば何処であろうと狙える

リターンズ・シヨット
銃弾返し

相手の弾に自分の弾をぶつけ、相手の銃口に撃ち返す技。場合によつてはただ相手の弾を弾くときもある

クイックドロウ
瞬間速射

銃声が1発に聞こえるほどの速さで連射する早撃ち。DESERT

EAGLEとリボルバー系統の銃で使用可能。最大発射数は14発

特殊能力

デイベイダー

EC兵器

エクリプス

EC因子と呼ばれる毒を体内に保持し、その副作用によって現れる武装。発動させると両腰に銀色のDESERT EAGLE 14 inchを一丁ずつと、両太股にマガジンを5個ずつ、背中に全長220センチの斬馬刀、それと全身を覆う機械的な鎧が現れる。外見はヴァンキッシュのワードスーツを黒く塗ったような物

エクリプス

EC因子

銃弾を弾き返すほどに肉体を超硬化させたり、身体能力を飛躍的に上昇させる毒。尚、肉体再生が可能で、腕が千切れようと生え変わる

リカバリー

再生

体内に存在する数億のナノマシンが細胞同士を結合させ、瞬時に傷を治せる

トランス

変身

体内に存在する数億のナノマシンがDNAを組み替え、体の一部を剣に変形させたりなど、全身を金属にしたりなどが可能

グラスバー・アイ

支配眼

最大で5秒間、右目で捉えたものをスローモーションにでき、その間自分はいつもと同じ速度で動ける。体力の消費が激しく、普段はアイパッチ
アイパッチ
眼帯で右目を隠しているため、基本的に使用されることは無い

トリガーハッピー

銀狼の持つ魔力を消費して無から銃弾を作り出すレアスキル。空中に出現させ、発射することも可能

マスターズ・チェンジャー

魔力を炎や雷、氷などに变化させて体外に出すことのできるレアスキル。その名の通りこの世に存在する全ての属性を出せる。剣などに付与することも可能

エアロ・スミス

自身の五感や体を風・空気と一体化させるレアスキル。風を操ることも可能。別名、エアロ・スミス森羅万象の覇者

ラヴァル・ヴィザー

存在しないとまで言われた忘却の都（狭間の世界）、アルハザードの魔法を行使することのできるレアスキル。使用時には魔力とは別に体の一部を対価として持っていていかれる。これを多用したせいで銀狼は右目の視力を失った

備考

基本的に依頼さえあれば殺しだろうと猫探しだろうと請け負う

本人は全く気付いていないが、その言動や行動により、多々誤解を受ける節がある。別名、フラグメーカー

言葉は常に冷静で、あまり人との馴れ合いを好んでいない。どうやら言葉に『ん』が付くことが少ないようだ

裏社会の人間には『刻限を届ける銀の狼』として恐れられている

本名は絶対に名乗らず、常にコードネームだけを名乗っている。が。相手に敬意を払ったとき・教えるべきと判断したときにのみ、本名を名乗る。今のところ本名を知っているのはイヴとレキの2人。

< ← クソ醜い設定画
> i
1
9
9
8
7
— 9
8
4
<

銃器説明（前書き）

サブタイの通り銃器の紹介です。

質問があつたら感想からでもどうぞ。

銀狼がお答えします。

銃器説明

DESERT EAGLE

> i 1 6 6 7 4 — 9 8 4 <

使用弾薬 50AE弾

装弾数 7 + 1発

画像最上のバレルが14インチである

銀狼は普段画像と同じマッドブラックを使用しているが、エクリプスEC因子
展開時に出てくるのはシルバーカラーである

機種はMk ???なのだが、銀狼の改造により、50AE弾用の
14インチバレルに増設している

3点バースト、フルオート可能な違法改造済み

使用者：銀狼

(41AE弾仕様を白銀狼が使用。バレルは通常の6インチ)

50AE弾

> i 1 6 6 8 3 — 9 8 4 <

(非実物大)

主にDESERT EAGLEに使用される『最強』の名を持つマ
グナム弾

武偵たちの着る防弾制服の上からでも、易々と人を殺しかねない威
力を持つ

H&K SOCOM Mk23

> i 6 1 1 7 — 9 8 4 <

装弾数 12 + 1発

使用弾薬 45ACP弾

LAM付属

使用者：不知火・亮

バレット（バレット） M 8 2

> i 6 5 5 0 — 9 8 4 <

セミオートマチック

使用弾薬 5 0 B M G 弾

装弾数 1 0 + 1 発

コンクリートの壁を紙のごとく撃ち抜くことで知られている
バリエーションとしてプルパップとボルトアクションもある
人に対して使うと一撃で真つ二つにできる

使用者：銀狼

5 0 B M G 弾

> i 1 7 4 9 7 — 9 8 4 <

（非実物大）

バレットや対物ライフルの使う銃弾
ブローニング機関銃などにも使用でき、尚且つ狙撃にも転用できる
という万能弾

N A T O 表記では 1 2 . 7 x 9 9 m m だが、これは「縦 9 9 ミリ ×
横 2 0 . 4 ミリ」サイズの、『薬莖』ではない

弾頭を含めた全長は 1 3 8 ミリあり、弾頭部分がどれほど大きいかがよくわかる

人に使うのはハーグ陸戦条約に触れんじゃね？ と言われているが、もつと強力な弾は結構あるので各国は生産・配備を続けている。
条約なんてそんなもんさ

G 1 8

> i 6 1 1 5 — 9 8 4 <

G 1 7 にフルオート機構が付いた物

全体的にプラスチックで形成されており、軽量

使用弾薬 9 ミリ × 1 9 弾

装弾数 17 + 1 発
使用者：綴

ベレッタ M92F

> i 1 6 6 7 5 — 9 8 4 <

ベレッタ社の代表とも言える自動拳銃

ハンドガン

通称キンジモデルと呼ばれる、3点バーストとフルオート機構のついた違法改造品

装弾数 15 + 1 発

使用弾薬 9ミリ×19パラベラム弾。

使用者：遠山・キンジ

コルト ガバメント

> i 1 6 6 7 6 — 9 8 4 <

2011年現在で、米軍正式採用から丁度100年が経つ今も尚現役の、超ロングセラー自動拳銃

ハンドガン

使用弾薬 45ACP弾

装弾数 7 + 1 発

使用者：神崎・H・アリア

アリアはマッドブラックの物とシルバーモデルの物を使用。グリッ
プのカメオにはアリアの母、神崎・かなえの横顔が掘られている

ワルサー P99

> i 1 6 6 7 7 — 9 8 4 <

ハンドガン

ワルサー社の自動拳銃

金属以外の素材が多用されており、軽くて丈夫。

使用弾薬 9ミリ×19パラベラム弾

装弾数 18 + 1 発

使用者：理子・峰・リュパン

SVD ドラグノフ狙撃銃

> i 1 6 6 7 8 — 9 8 4 <

ソビエト軍が開発したセミオート狙撃銃

→の物はレキが使用する初期生産モデル

レキは発砲と同時に写真を撮るライティング・スコープを使用

> i 1 6 6 7 9 — 9 8 4 <

これは銀狼の使用する後期生産型

以下、共通仕様

チェンバー
薬室内の未使用弾薬をマガジンへ押し戻す機構が増設されている

使用弾薬 7・62ミリ×54R弾

装弾数 10発

使用者：上の画像がレキ・下が銀狼

サコー M60

> i 1 6 6 8 0 — 9 8 4 <

SACO社の軽機関銃（LMG）

ベルトリンク式の糾弾方式による、驚異的な連射が可能

白雪は何処で改造してもらったのか、連射可能

尚、常識ではあるが、武偵たちの使う市販品（民間用モデル）にフ

ルオート機能をつけると違法である

使用弾薬 7・62ミリ×51弾

装弾数 ベルト糾弾

使用者：星伽・白雪

S&W M500

> i 1 6 6 8 1 — 9 8 4 <

最強と言っても差し支えないマグナム弾を使用する、『像殺し』の銃
反動が強烈すぎるため、10発も撃つと1週間は字が書けなくなる
と言われている

使用弾薬 M500S&W弾

装弾数 5 発
使用者：蘭豹

M 5 0 0 S & W 弾

> i 1 6 6 8 2 — 9 8 4 <

(非実物大)

S & W M 5 0 0 専用の弾薬

発射後 2 0 メートルを越えると、4 4 マグナム弾以下の威力になる
写真の関係で 5 0 A E 弾よりも大きい、実物は 5 0 A E 弾の方が
大きい

I M I ガリル A R M

> i 1 6 6 8 5 — 9 8 4 <

(写真古いです)

アサルトライフル

I M I 社の突撃銃

銃の中では珍しく、何故か栓抜きとワイヤーカッターが標準装備さ
れた銃

栓抜きは王冠専用

使用弾薬 5 . 5 6 ミリ N A T O 弾

装弾数 3 5 発

使用者：銀狼

上部にマウントレールが増設され、ホロサイトを装着されている
ハンドガード下にはバイポッドを装着

コンパウンド・テイクダウン式 ツインリムアーチェリー 「チエ
ーサー」

> i 1 6 8 4 7 — 9 8 4 <

無音兵器として銀狼の使った物

1 2 0 ポンドの引きを持ち、カーボン製の矢を使う

装弾数 1 発

使用者：銀狼

コルト SAA ピースメーカー

> i 1 7 4 9 5 — 9 8 4 <

コルト社の骨董品ともいえる回転式弾倉
リボルバー

西部劇などによく出てくる銃

早撃ちなどに優れており、バレル長はかなりのバリエーションがある

・シェリブズ（3インチ、保安官用）

・シビリアン（4 - 3 / 4インチ、民間用）

・フロンティア or アーティラリー（5 - 1 / 2インチ、砲
兵用）

・キャバルリー（7 - 1 / 2インチ、騎兵用）

・バントラインスペシャル（8インチ以上のバレルを持つSAA
の通称）

SAAはシングル・アクション・アーミーの略

使用弾薬 ロング・コルト 45LC弾

装弾数 カナ 6発

使用者：遠山金一（尚、金一は4インチのシビリアンを使用）

45LC弾

> i 1 7 4 9 6 — 9 8 4 <

（非実物大）

コルト SAA専用の弾

開発当初は黒色火薬を使用されていたが、現在では通常のガンパウ
ダーが使用されている

特徴というか歴史としては、ガバメントなどが使う45ACP弾の
元祖である

銃器説明（後書き）

以上で銃器の説明を終わります。

尚、本編で新たな銃が出るたびに、一番下にその銃が更新されます。
銀狼 「なにか質問があったら言ってくれ」

プロローグ

ここは……………何処だ

俺は、何をしている？

そうだ

俺は、銃騎士の役目を終えて、消えたのか……

なら、ここは無か…

自分の姿が見えない

感覚が無い

俺は、このまま消えるのか……？

—— 違うッ!!

俺の意識は存在している！

俺はここにいます！

まだ消えていない！

抗えッ！ 銃騎士隼人ッ！！

自らの死を受け入れるな！

自らの消滅を認めるな！！

運命など幻想！ 神の力など無力！！

俺はここにいます！

俺は――

「消えていないッ！！」

.....景色が、変わった。
瞬きをしたときのよう――瞬無が広がったと思うと、俺は夜空を見ていた。

重力は、俺が寝転がっている事を伝えてくる。

両手を突き上げて見てみると、俺は鎧に包まれていた。

ディバイダーの、戦闘防護服だ。

黒光りする機械的な、全身を包む鎧。ヘルメットのバイザーには、今俺の見える方角と、時間と、GPSでの居場所だけが表示されている。

AM04:28。

それが、俺の得た初めての情報だった。

『Bewegen Sie sich nicht!!』

(動くな!!)

聞き覚えのある言葉。

これは、ドイツ語か。

首だけを動かして音声のしたほうを見ると、そこには、何処かの学校の制服を着た男が、俺に銃を向けていた。

——撃つなら撃て。俺には効かんぞ。

そう言いたかったのだが、日本語では伝わらないだろう。仕方ない。

「Wer sind Sie?」

(お前は誰だ)

「Deutschland ist? But ei?」

(ドイツ武偵局の者だ)

「?Buttei??」

(武偵?)

「"Armed Detektiv", rief er But
ei.Wissen?」

(?武装探偵"、通称武偵だ。知らないのか?)

「Know.Auch habe ich keinen
Wid.erstand.Gunnten」

(知らない。言うておくが、俺は抵抗しない。銃を下ろせ)

「.....Ja」

(.....わかった)

男が銃を下ろし、俺は上半身を起こす。なんだ……? まだ体が
ダルい。

男が何かをしていたので気づかれぬよう横目で見てみると、携帯で
何処かへ連絡していた。

さて、俺はどうなるのだろうか。不審者で尋問か、お咎めなしか
……。

というか、こいつは学生だろう? なのに、何故銃を所持している?
お前のようなガキにはまだ早い代物だと思っが…。

ああそうだ。

いい加減ドイツ語で喋るのも一々頭の中で翻訳するのも面倒だ。
ヘルメットのスイッチを脳波で操作し、自動翻訳機能を入れる。

「……あの」

「なんだ」

おお、ちゃんと翻訳されているな。

「貴方の身分を証明できる物がありますか？」

「無い」

「………は？」

「無い、と言った。見れば分かるだろう。俺は全身鎧だ」

「………確かに……。では、出身は覚えてますか？」

「日本」

「ジパング？ では、何故ここに？」

「………わからない」

「………？ 記憶喪失、ということ？」

「違う。俺は——」

4度死んで気づいたらここにいた。と言っても、信じないだろうな。

「俺は、風に呼ばれてきた」

やつてもうたああああ！！

これと輝という電波とかいう奴だよな！？ チクショウ！

「風……。そういえば、そんな奴がジパングにいと聞いた事がありませんね」

「そうなのか？」

「いつも、風の音を聞いているそうです」

「……………そうか」

それは、レキだろう。

かつて俺と肩を並べた狙撃手スナイパーの、少女だ。

「一応武偵局には連絡をしておいたので、じきに迎えが来ます。ヘルメットを取ってもらえますか？」

「……………ああ」

ヘルメットを取り、右脇に抱える。

「あの、できれば鎧も脱いでいただけると」

「ぬ……。待ってくれ」

この鎧はデИБライダーで出現しているものなので、脱ぎ方は知らない。

ためしに、やってみるか。

「ブレードオフ」

デИБライダーを消す合図を口に出すと、鎧が消え、時空管理局の執務官制服になった。

なんだ、デИБライダーは健在か。なら、ブラックホークとジークも――
いないな。

ポケットの中なども探してみるが、いない。
どうやらあいつらは消えたらしい。

ためにエアロ・スミスを発動してみると、無事に発動できた。
魔法はコイツが見ているので、やめておこう。

「消滅……！？ 何処へ消えたんですか!？」

「は？ …… すまん、何処へ消えたかまでは俺も知らんだ」

「そ、そうですね……。新しい装備を作れると思ったのですが」

等と学生と思われる男と話していると、ハンヴィーがドリフトをかまして突っ込んできた。

咄嗟に地面を蹴って跳び、爆走中のハンヴィーのボンネットに着地する。

フロントガラスから中を覗いてみると、同じく何処かの学校の制服を着ている男が眼を見開いていた。

「ハロー？ いきなり現れて暴走とは、趣味がいいな」

ぱくぱくと口を開けている中の男は、俺の後ろを指差している。
なんだ？ と後ろを見てみると、壁が迫っていた。
どうやっても止まりきれない速度・距離だ。

まったく、仕方ない。

「トランス
変身」

右腕を巨大な刀——かつて俺が愛用していた斬馬刀、スライサー 斬馬刀——に変形させ、ハンヴィーのタイヤをパンクさせて横に蹴り飛ばす。
おかげでハンヴィーは横転したが、壁には激突せず、軽症で済んだ

な。

「リリース解除。おい、無事か」

トランス変身を解除してハンヴィーに駆け寄ると、中から男が出てきた。
どうやら軽く頭を打った程度らしい。

「——で？ お前らは武偵とやららしいが、殺人未遂でしょつぴくぞ」

「さ、さあっせんしたあ！」

「……………とりあえず、今お前らの事を調べた。ドイツの武偵局と
いうところにいる新米の武偵らしいな。ランクとやらは二人ともD。
最初に話しかけてきたお前は探偵科インクスタとかいう学科で、殺人未遂のお
前は車輜科ロジという学科のようだが」

「「は、はい……」」

「……………まあ、不審者を不慮の事故で抵抗不可能にしよ
うとしたという作戦は上出来だ。だがな、お前らはまだガキだ。そ
れに、俺は傭兵だ。その程度の攻撃、どうということはない。」

「傭……兵？ でも、あれは国際条約で禁止になったハズじゃあ」

「む、まあ、厳密に言えば傭兵ではなく、武装した警備員と言う扱
いだ」

「PMC!？」

「まあ……兎に角だ。死にたくなければドイツの武偵局とやらに連れて行け」

その後、俺は様々な事を知った。

ここが俺の生まれた地球ではなく、やはり別次元の地球だと言う事と、

双剣双銃^{カトラ}と呼ばれる最強武偵が存在していることと、俺が、いつのまにか――

『魔法使い』と呼ばれることに

1弾 ウルブズ、再来

俺はあのあと、学校の教師に尋問された。

といつても、拷問などではなかった。軽い質問程度だ。

まず、名前。

このとき俺は悩んだのだが、コードネームである銀狼シルバーウルフを名乗った。

そして、武偵をやらなやかと言われた。

本来は高校生から習い始めるらしいが、俺（27歳 外見は20歳にしか見えんらしいがな）は特例でドイツの武偵学校に通う事となっている。

身長とか、外見とかで、浮きまくりな俺。

髪は真つ白で膝まであり前髪で目を隠し、右目には眼帯（眼帯の下は蒼い眼だ）、左目は紅色。身長は196センチ。なんとも浮いているのがわかる。

一応制服を着ると言われたのだが、詰襟の学ランは着ないと言ったら、喪服のような防弾制服ディヴィーザ・黒ネロという服を渡してきた。これなら、着てもいいか。

他にも授業に出る等と最初は教師に色々言われたが、強襲科アサルトに所属している奴ら——無論、教師も含む——を全て倒したら何も言わなくなった。

「ギン、帰ろうぜ」

「いや、マスターズ教務科に行く」

「マジ?」

「ロンドンの奴との共同ミッションを与えられてしまつてな」

ロンドンにいるという双剣双銃と、共同で作戦を遂行してくれと言
う依頼が俺に来た。

面倒な他極まりない。

まあその打ち合わせもあり、マスターズ教務科に行かなければならない。

「ま、頑張れよ。ヴァイサード魔法使いさん」

「その名で呼ぶな」

俺はこの世界で、魔法が使えた。だが、普通のは発動できなかった。
使えるのはレアスキルのみだ。

……ともかく、俺は今、武偵とやらの馴染んでしまっている。

「いるか、フリード」

「すつすみません。お待たせしました」

マスターズ教務科の扉を叩いて名前を呼ぶと、メガネを掛けた男教師が出てき
た。

ちなみに、こいつの名前はアルセッダ・フリードリヒ。だからフリ
ード。あのチビ竜と間違いそうになるが、こいつは人間だ。

「もう映像回線はつないでるので」

「わかった」

パソコンの画面の前に座り、画面の上についているウェブカメラの位置を調整して顔の半分を見えなくする。

通信相手である双剣双銃は、堂々と顔を出していた。

『あんたが魔法使いね。あたしは「双剣双銃、だろう」……たしかにそうだけど、あたしの名前はアリア。神崎・H・アリア』

『俺は銀狼。今回は作戦会議ということだが、敵は』

『敵は武装集団よ。戦力的にはもう1人Sランク武偵がほしかったけど、あんたがいるんだし平気でしょ？』

「人数は」

『約80』

「少ないな」

『はあ！？ 80人よ！？ 多すぎるに決まってるわ！』

「俺は240人を同時に相手をした経験がある。その程度、少なすぎてやる気が出んというものだ」

『……………流石に、魔法使い様ってことかしら』

「そうなるな。ところで、強襲^{アサルト}はいつ頃やる予定だ」

『今日の午後8時よ』

「そうか。で、場所は」

『ロンドンの端。詳しい事はそのさえない教師に訊いて』

「いや、充分だ。今日の午後8時だな、了解した。集合場所で会おう」

通信を切り、画面を消し、そろーっと逃げようとしているフリードの頭を掴んだ。

そのまま力をいれ、アイアンクロー。

「今日の午後とは初耳だが？」

「しゅみますえーん！ー！」

号泣しているフリードを蹴り飛ばし、車輜^{ロシ}科にある俺のF・35Bのエンジンを起動しておくよう言う。

ちまにみ俺は、この作戦^{ミッション}を最後に日本へ行くかと思っている。

「ギン！ 起動終わってるぜ！」

「助かる」

今は午後の6時。戦闘機でなら間に合う速度だ。
ただし、着陸の事は考えていない！！

指定された地点^{ポイント}にたどり着いた俺はF-35Bを空中^{ホバリング}待機させ、合流地点へ飛び降りる。
高さ12メートルからの落下だが、俺は何も使わず、ダガンッ！と着地した。

おおう、脚に来る……。

「な、なんて登場のしかたしてんのよ……」

「……お前が、^{カトラ}双剣双銃か」

「ええ。^{ヴィザード}魔法使い、貴方に会えて光栄よ」

「それはどうも。——だが、俺は正直、パーティを組んでの強襲は向いていないようだな」

「あら、そう？ 奇遇ね。あたしもよ」

「なら、作戦なんぞ気にせず……」

「派手にやりましょうか」

俺はスタートアップと呟いて鎧とヘルメットを身に纏い、3点バーストとフルオートができるよう魔改造した銀色のDESERTEAGLE 14inchを両手に持つ。

ちなみにデバイダーの鎧は色々と弄繰り回したところ、出現と同時に銀色のDESERTEAGLE 14inchが二丁と両太股に50AE弾の入ったマガジンが4つずつ——計8個の予備弾倉スベアマガジンが出現するようになった。合計弾数は70発。

そして背中には、長さ180センチの斬馬刀。名前はスライサー。

「にしても、あんたのその装備って不思議よね」

「そうか？」

「どこからともなく現れるし、防弾制服よりも頑丈、ブースターとかまでついてるし……。どんな兵器よ」

「……………さあな」

武装集団がアジトにしていると思われる廃墟の扉を蹴破り、ヘルメットの集光装置を使って暗闇の中を歩いていく。

どうやら、双剣^{カトラ}双銃は——アリアは完全な暗闇には慣れてないらしく、きよろきよろと周りを見ている。で、コケた。

咄嗟に腕を前に出して助けると、ありがとうなどと礼を言われてしまった。

……性に合わんな、まったく。

「……………気をつける。今、キャタピラの音がした」

「キャタピラ？　なんでそんな音が……」

「待て。……………この音は……………ティガー……………だな」

「ティガー！？　あの！？」

「シッ！……………今ので、気づかれたな」

「あつ……………ごめん」

「いや、いい。俺の鎧^{コレ}は戦車の主砲でも防げる」

俺の鎧は世界を殺す毒とまで言われたデИБライダーの物だ。たとえば爆撃機だろうと、核爆弾だろうと、これなら防げる。

その俺の後ろでは、アリアが鎧の腰のパーツの一部をつまんで、少し怯えていた。

無理も無い。人間と言う生物は、見えない攻撃が一番の恐怖になる。
元々俺は狙撃兵だ。^{スナイパー}それがわかる。

「アリア」

「なっなに」

「俺が合図をしたら、何処かに隠れる。戦車は俺が片付ける」

「出来るわけ」できる。俺には「……………わかった。その代わり、負けたら風穴開けるわよ」

「好きにしろ」

アリアの背中を押し、俺の横に持ってくる。

俺はただ壁の一点、キャタピラの音がする方向だけを見つめ、時を待つ。

——ピシッ

コンクリートでできた壁に、亀裂が入った瞬間、

「行け」

「わかってる！」

アリアが猛ダッシュで何処かへ隠れると同時に、壁を破壊してティガー戦車が姿を現した。周りには全身にアーマーを着込んだ奴が30人ほど。

だが、こいつらを殺してはならない。

それが、武偵の掟。

「総員！ 確保せよ！」

ティガーからの放送で周りの奴らが動き出したのを見計らい、肘の内側や膝の横などの、装甲の無い部分に50AE弾をぶち込んでいく。

ガンッ！ ガガンッ！ ガンガンガンガキッ！

と7発撃ちつくすと同時に右手のDESERT EAGLE 14inchからマガジンエジェクトを排出し、左手のDESERT EAGLE 14inchで撃ち始めると同時に太股にあるマガジンマガジンリロードを刺す。
こうすることにより、弾倉再装填の隙は無くなる。
周りの奴らが減ってくると、ティガーの主砲が動き出した。

来るか、主砲が。

わざと撃つのをやめ、バク転で後ろに下がると同時に主砲を放ってきたので、月面宙返り蹴りムーンサルトキックで主砲弾を右側のキャタピラに蹴り返した。

小さな爆発が起こり、機動力を無くしたティガー。

間髪入れずに主砲の中に2発撃ちこみ、中にいた操縦士2人の肩を撃ち抜く。

「チイツ！ 次だ！」

という敵の怒声と共に現れたのは、試作段階だったハズのマイクロガンを構えた4人組。

何故これほど面倒な銃を持っているのかは知らないが、バレルが回転を始めたと同時に、全てのバレルに50AE弾を打ち込んだ。

マイクロガンは爆発し、残ったのは2丁。破壊するのも面倒なので、2人の顔面を蹴り飛ばした。

マガジンを取替え、両手のDESERT EAGLE 14inc
hを構える。

腕をクロスさせて敵たちの膝や肘を撃ち、戦力を削っていく。

建物の置くから敵が更に出てくると、横一列に並んで全員がM16を構えた。

どうやら、掃射するつもりらしい。

——ようやく、敵を俺1人だと思ったか。

アリアが隠れているのは、敵の後ろ。俺の合図が来るのを息を殺してジッと待っている。……良い子だ。

「ジーク、スタングレネード閃光手榴弾を——ッ！」

いつものように、俺はスタングレネード閃光手榴弾を出してもらおうとしたのだが、

今、気づいた。

今の俺には、ジークも、ブラックホークもない。

セーフティ

咄嗟にDESERT EAGLE 14inchの安全装置を解除位置から右回りに180 回し——フルオート的位置に持つていく。そして、秒間15発の連射速度で左右の端の敵へ向けて、1発ずつM16の銃口へ50AE弾をぶち込んでいく。そのうち1発を、リアの隠れている目の前に撃った。

これが、合図だ。

「遅いのよっ！」

「黙って撃て」

突然後ろから現れたリアに驚く敵の首筋に向かってDESERT

EAGLE 14inchを撃ち、首を掠める。

ライフル

狙撃銃でしかやったことが無かったが、できた。相手の視神経を外から弾丸で圧迫し、麻痺させる技。今のは脊椎を圧迫した。

「コンプリシエント完全制圧完了」

両手のDESERT EAGLE 14inchを両腰についているヒップホルスターにしまい、ブレードオフと呟いて鎧などの装備一式を消す。

敵戦力はゼロ。任務完了だ。

「……………あんだ、何者？」

「27歳の、元軍人だ」

「ああ、どつりで高校生とは思えないと……。それにしても若く見えるわね」

「……………まあ、俺は老いることができない体質でな」

俺の中にあるナノマシンは、常に肉体を再生しようとしている。よって、俺は成長ができて老いることはできない。

「……………これなら、パートナー相応しいわね……………」

「なにか言ったか」

「なんでもないわ。さっさと片付けましょ」

倒れている敵の腕に手錠をかけ、防弾制服・黒のベルトに付いているワイヤーで縛っていく。
後は教務科に連絡して、車輛科ロジの車で搬送、だな。

「こいつらの武装は一通り全て破壊しておいた。復元できないほどにな」

「よくもまあ相手の銃口に、あれだけのスピードで撃ち込めるわね」

「あの程度誰でもできねば困る」

「出来ないわよ。あたしらみたいなSランク武偵ならともかく、一般には無理」

「フツ。お前の銃、コルト・ガバメントならできるだろうて」

「ま、そのうちね」

全員縛り終わったところで、アリアが両手のガバメントをスカートに隠されたレッグホルスターへしまった。

武偵の決まりで、武偵は常に帯刀帯銃が命じられているが、俺はデイバイダーがあるので免除されている。

確か、こいつは背中に日本刀を2本隠しているのだったな。

「——で、銀狼。ちょっと話があるんだけど、いい？」

「なんだ」

「あんだ、イ・ウーって知ってる？」

「イ・ウー？ ……………伊^イ・ウ^ウ……？」

確か、伊は日本語の隠語で潜水艦、ウ^ウはドイツ語で潜水艦だったな。何処かで聞いた事がある。確か、このコードネームは……………

「……………ううん。いいわ。とりあえず、今回はありがと。正直このミッションはあたし1人では無理だったから」

「……………そうか」

アリアが手早くマスターズ教務科へと連絡を取ると、5分ほどで車輜ロツ科の車に乗ったフリードたちが来た。
何故お前が来るか、フリード。このヘタレ教師め。

「お、お疲れ様。予定より随分早かったね」

「お前らの計算ミスだ」

「うう……………」

今回の予定終了時刻は、フタマルサンマル二〇三〇時で、フタマルマルハチ現在二〇〇八時。予定より22分早く終わった計算だ。

シルバールフ「銀狼、もしかまた会うことがあったら、パートナー共闘相手になってくれる？」

ケース・バイ・ケース「時と場合によるな。敵が同じならば、そうしよう」

上空にいるヘリから垂れ提げられた縄梯子にアリアがつかまり、小さく微笑んでから飛んでいった。

俺も^{マスターズ}教務科に事後処理を任せ、^{ホバリング}空中待機しているF - 35Bに^{ライトニング？}跳び込む。
うっ、燃料が……。

仕方無しに途中で空中給油を受け、俺はドイツ武偵局へと戻った。

あれから俺は^{スナイプ}狙撃科の試験を受け、Sランクを取った。無論^{アサルト}強襲科もSランクだ。

そして、俺は日本へ行くこととなった。

まあ、その間に俺は新たな二つ名ができてしまったわけだ。

『独眼流』^{スナイパー}『隻眼の狙撃手』^{ブラックシャドウ}『黒き災い』等々。

^{ヴィザード}だが、俺が風を操ったりトリガー・ハッピーで弾丸を生成するので、魔法使いという二つ名は健在だ。

「……………東京武偵高校…か。27歳の俺が高校に行くことになる
とはな……………」

旅客機のスイートルームで、俺は窓の外を眺めていた。

俺は普通席でいいと言ったのだが、Sランク武偵というだけで特別
扱いされてしまう。

色々と厄介だ。

だが、それはそれでよかったのかもしれない。

俺は、見つけてしまった。

かつて俺と共に次元世界を渡り歩いた、馴染み深いあの船を。

次元航行艦、ベーオウルブズを。

海上に浮かぶそれは、光の屈折を変えているので、俺以外には見る
ことが出来ない。

つまり、不可視状態^{ステルス}で、俺を待っていたのだ。

「そう騒ぐな。今行く」

スイートルームということもあってか、この部屋には緊急用の脱出
口がある。

ドアに鍵をかけ、レバーを思い切り引いて反時計回りにひねると、
ガコンッ！

脱出用のハッチが開いた。

ハッチに脚から入れ、旅客機を飛び降りる。

それほど高いところを飛んでいたわけでもないのに、気圧はきつくない。

風を操ってウルブズの甲板に着地し、上部ハッチのパスワードを入れる。

そして、入った。

長年共に過ごした、船へと。

何も変わっていない。

あの時のままだ。

武器庫も、駐機場も、整備室も、居住区も、全てがそのままだった。俺は急いで艦橋へ行き、モニタを開いてエンジンを始動させる。

そうだ、動け、ウルブズ。

行き先を日本の東京——レインボーブリッジの隣にある、東京武偵高校へと設定する。

すると、ウルブズは期待通り、東京武偵高校ある人工浮島のすぐ隣へ瞬間移動した。

転移・転送、などと色々と呼び方はあるが、これを魔法で転移と呼ぶ。

「ここが、東京武偵高校……………」

AM7時55分。

俺は人工浮島の端に降り立った。

そこは、対物狙撃銃のゼロイン調整にでも使えそうなほどに長い、

直線の浮島。

周りを見てみると、第三男子寮というマンションが見えた。そしてなにやら、慌てた様子で自転車にのる男子生徒の姿も。

丁度良い。案内を頼もう。

そんな甘い考えで走り寄ったのだが、かなり急いだ様子で走り始めてしまった。

そういえば、この時間は遅刻ギリギリか。

まあなんにせよ、あの生徒についていけば着くだろう。

スタートアップと呟き、鎧とヘルメットを身に纏う。そのまま両太股、両脛にあるブースターを点火し、スライディングのような姿勢で追いかけた。

この状態での最高時速は68キロ。自転車程度は余裕で追いつくスピードだ。

などと考えながら追っていると、男子生徒の隣には見慣れない二輪が並走していた。

あれは………ゼグウェイ、と言ったか？

「どうした」

「おわっ！ こっち来るな！ このチャリには爆弾が！」

「爆弾？ ……サドルの下のこれか」

少しスピードを落とし、UZIの括り付けられたゼグウェイの後ろにつく。

そのままDESERT EAGLE 14inchでゼグウェイごとUZIを破壊。その残骸が飛んで来たので、俺は一旦止まった。

すると、建物の屋上から見覚えのあるピンク色のツインテールが現れた。

ああ、もう助かったな。

そう確信した俺は、自転車の後を少し遅めに追いかけた。

まではよかった。
のんびり追いかけていると、双剣双銃^{カトラ}と男子生徒は爆風で何処かへ飛ばされた。

どうやら、パラグライダーが爆風で煽られたらしい。とはいえ、俺はあの馬鹿と男子生徒を見て見ぬふりができるほど器用ではないので、追いかけてみると――体育倉庫に吹っ飛んでいた。

おーおー、相変わらずやることやることがでかいなー、双剣双銃^{カトラ}は。ため息をつきつつ2人^{カトラ}が入っているであろう跳び箱を覗くと、さっきの男子生徒の上に双剣双銃^{カトラ}が覆いかぶさっていた。どうやら気絶してしまっているらしい。下の男子生徒は意識がハッキリしているが。

「あんた、さっきの…」

「どうだ、気分は」

「とりあえず、こいつをどうにか……」

双剣双銃^{カトラ}を必死に起こそうとしているが、一切起きない双剣双銃^{カトラ}。
俺は少し、この男子生徒を応援したくなった。若気の至り、とでも
いうのだろうか。

「君、もう少し頭を低くして、その子の頭も守ってやってくれ」

「な、なんで」

「——来客だ」

腰にあるヒップホルスターからDESERT EAGLE 14 i
nchを抜き、右手で茂み向かって構える。
まだいたようだ、あの自動銃座のセグウェイが。しかも7機。
だが、相手としては大いに不足。

「存分にその感覚を味わうといい、少年」

「少年って、あんた何もんだよ？」

「ククク……。銃騎士、とでも名乗っておこう」

茂みから現れたセグウェイに向かってDESERT EAGLE
14 inchの50AE弾を放ち、全てを破壊する。
丁度7発だったので、マグチェンジ。

「By」

「あつ、ちょ！」

トンツ、と跳んで消えたふりをし、光の屈折を変えて不可視状態になる。俺はそのまま体育倉庫の奥に座った。

このあとどうなるのかなー、と眺めていると、予想通りの反応を双剣双銃は取った。

急に跳び箱から跳び出ると同時に、二丁のコルト・ガバメントを男子生徒に向かつて撃ち始めてしまった。

だが、先程とは明らかに違う気配を漂わせた男子生徒は双剣双銃に詰め寄り、腕を抑えて射程死角へ入り込む。と同時に投げ飛ばされた。

何度か組み手をやったことがあるが、双剣双銃は徒手格闘が上手いからな。確か、バリー・トウードと言ったか。

「強狼の現行犯で逮捕するわっ！！」

「お、落ち着いてっ」

残弾尽きたガバメントを両太股のレッグホルスターにしまい、今度は背中から2本の日本刀を取り出してしまった。

マズい。流石に止めるか。

地面を強く蹴って双剣双銃と男子生徒の間に跳んで割り込み、背中に背負っている斬馬刀で双剣双銃の日本刀を受け止めつつ、不可視

を解く。

「やりすぎだ、アリア」

「なっ！　なんであんたまでここにっ！！」

「説明はあとだ、馬鹿者」

ゴイン、とアリアの頭を軽く殴り、黙らせる。
ちなみに指先までキツチリ鎧で包まれているので、痛いだろうな。

「~~~~~っ！！　なにすんのよ！！」

「俺が見ていた限りあれは事故であり、不可抗力だ。こいつに罪は無い」

「はあ！？　こいつはあたしに強姦を——」

「風穴開けるぞ」

カチャ、とDESERT EAGLE 14inchを抜き、アリアの顎下に突きつける。

こいつの身長は142センチと小さいので、わりと無理のある体勢になるが。

「……………わかったわよ。でも、絶対許さないから！」

「……………君、すまなかった。ところで礼と言ってはあれだが、^{マス}科は何処か教えてくれ」^タ

ブレードオフと呟いて鎧を消し、^デ防弾制服・^イ黒になったのを確認してからたずねる。

「え……………あ……………。今から近くに行くんで、とりあえず、来ます…？」

「頼む」

短く返答して男子生徒の後ろを着いていき、俺はなんとか^{マス}教務科に行くことが出来た。

ついでにアリアも来たがな。そうとう荒れ気味で。

「でもまさか、『^カ双剣双銃のアリア』と『^ヴ魔法使い・^イ銀狼』なんて^{シル}有名人が^バ武偵高^ウに^ワ来るなんてね……………」

と、ほんわかした様子の担任、高天原ゆとり（^{イン}探偵科^ケ教諭・^ス22歳^タ独身・♀）。[♀]

おいコラ。俺を異性の対象みたいな目で見るな独身女。俺は27だぞ。外見上は20だがな。ナノマシンのせいだ。

「それじゃ、教室まで案内するわね」

特に異論も無いので無言でアリアと共についていき、教室の前で呼ばれるまで待っていてくれと言われたので、無言で待つ。

アリアはそわそわしているが、俺はどうでもいい。というか、俺はこいつが暴れそうなときは取り押さえないといけないので、面倒極まりない。

『はい、皆さん、二年生最初のホームルームを始めますよー。うふふつ、まずはー、去年の三学期に転入してきた可愛い子から自己紹介してもらっちゃいますよ』

アリアがドアを開けてずかずかと入って行き、教卓の隣で止まった。

『強襲科の神埼・H・アリアちゃんです。続いて、今日ドイツの武偵局から転入してきた、超ロングヘアのカッコ良い男性をどうぞー』

教室のドアを開けてアリアの隣に並び、後ろで手を組む。そのとき聞こえたのだが、生徒の誰かがデコボココンビなどと言っていた。

確かに、身長差は54センチ。そう見えるだろう。

アサルト
スナイプ
シルバーウルフ
「強襲科兼狙撃科の銀狼だ」

名前だけを言うと、アリアが無言で右手人差し指を――さっきの男子生徒に向けた。

「先生、あたしあいつの隣に座りたい」

その爆弾発言に教室中はざわつき、あの男子生徒の隣の男が騒ぎ始めた。

どうやら、アリアのために変わってくれらしい。
とはいえこのままアリアを放置しておいたら誰が止める？ 俺以外にあいつの抑止力ストップバーは勤まらん。戦力的に。

「俺もあいつの隣でいいだろうか」

「禁断の愛っ!？」

「もう一度言ったら風穴な？ ア？」

瞬時に鎧を換装してDESERT EAGLE 14inchを額に突きつけ、黙らせる。
黙ってこくこくとうなずいたので、DESERT EAGLE 14inchを下ろす。
すると、席を替わってくれらしい男とは反対側の女子が騒ぎ始めた。

「理子わかつちゃった！　これ、フラグばっきばきに立ってるよ！
！」

はいはいっ！　　と言いながら挙手したこいつは、理子という名らしい。

何があったのかと見てみると、アリアが男子生徒にベルトを渡していたのだ。いつのまに借りた？

「キーくんベルトしてない！　そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！　これ謎でしょ謎でしょ！？」

ふむ、謎だな。

「でも理子には推理できたでちやった！　キーくんは彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！　そして彼女の部屋にベルトを忘れていった！　つまり2人は——熱い熱い恋愛の真っ最中なんだよー！！」

そう言つてキーくんと呼ばれたさっきの男子生徒の周りを両手を高く上げてくると回り始めると、アリアがまたしても銃を抜いてしまった。

銃口の先には、キーくんと呼ばれた男子生徒と、騒いでいる女子生徒。マズい。直撃コースだ。

アリアが引き金トリガーを引くよりも早くDESERT EAGLE 14

inchを抜き、アリアと同じタイミングでトリガーを引く。

ズギャガンッ！

アリアのコルト・ガバメントから放たれた45ACP弾は2人の左胸——心臓めがけて飛び始め、その弾丸を俺のDESSERT EAGLE 14inchから放たれた50AE弾が弾き飛ばし、計4発の弾丸が天井に突き刺さった。

チキンッ、チンツチ——ン……………

空の薬莖が4つ床に転がり、教室は静まり返った。騒いでいた理子という女子生徒は起用に足首だけを動かして器用に椅子に座り、キーくん(?)は硬直状態。

「れ……恋愛だなんてくつだらない！！ 全員覚えておきなさい！
そういうバカばことを言う奴には…………… 風穴開け「させんぞ」み
ゃっ！？」

ゴズンッ、とDESSERT EAGLE 14inchのグリップの底でアリアの頭を殴り、ガバメントをしまわせる。

もし俺が弾丸を反らしていなかったら直撃していたのを分かっているのか、抵抗しなかった。

「理子、と言ったな」

「ひゃ、ひゃいつ！」

「席を変わつてくれるか？」

「どどっ、どうぞっ！」

ブレードオフを呟いて鎧とDESERT EAGLE 14inc
hを消し、席に座る。

アリアも俺に殴られたところをさすりながら、席に座った。

つまり座席順は、俺・キーくん(?)・アリア、だ。

とりあえず、早くこいつの本名を教えてもらおう。

時は経って昼休み。

キーくん(?)がクラスメイトに追いかけられながらも逃げ、俺は
弁当をカバンから出した。

言っておくが、誰かに作ってもらったとかそういうものではない。
俺は家事全般全てできる。それでも潜入操作で三つ星レストランの
コック長をやっていたことだってある。

「……………」

黙々と教室の隅で弁当を食うアリアの机に俺の机をぶつけ、正面に机をつける。

すると、アリアは驚いた様子で俺を見ていた。

「口、閉じる」

「へっ？ あう、うん」

ぽかんと開いていた口を閉じさせ、黙って弁当を食う。

俺やアリアと言った二つ名を持つ者は、自然と独りになりやすい。何故かは知らないが、俺はただそれを放っておけない性質らしい。

「……………」お前、ロンドンでもこうだったのか」

「……………」そうよ。悪い？」

「いいや」

俺はカバンからDESERT EAGLE 14inchを取り出して机の左側に置き、右手で箸を持って弁当を食い、左手で調整を始めた。

マルチタスク

同時思考・進行程度できなければ、戦場では生きていけない。

黙々と2つの作業をしていると、ひょいつ、とアリアに俺のから揚

げを食われた。特になんとも思っていない俺は、気にせず他のおかずを食う。するとまた、ひょいっ、と食われた。

ふとアリアの顔を見てみると、何故か幸せそうな笑みを浮かべていたが、俺に見られたのがバレると、すぐにぶっちょう面に戻った。

「あによ」

「……いや」

食われたこと自体どうでもいいのでDESERT EAGLE 14inchの整備を終わらせ、防弾制服・黒ネイロの上着に隠れているヒップホルスターにDESERT EAGLE 14inchをしま
う。

ちなみにヒップホルスターの後ろにはマグポーチもある。あとナイフも。

この学校の校則で帯刀帯銃が義務なので、しかたなく、だ。鎧でも駄目と言われてしまった。

というか、武偵の制服は凄いな。外見は普通なのに完全防弾式とは。

「っていうか、なんであんたまでこの学校に来てんのよ」

「用があつたからだ」

「なんの」

「お前に関係の無い用だ」

「……そう」

アリアは、何故か俺に対して深く訊いてこない。俺にとってはいいことなのだが、なにか引つかかる。まるで、こちらを誘っているような。

「ああそうだ、あんたに訊きたいことがあったんだ」

「なんだ」

「始めてあつた時から気になってたんだけど、なんでDESERT EAGLEなの？」

「昔から持っているからだ」

「いつ頃？」

「8歳」

「はあっ!？」

ガタツ、とアリアが立ち上がると、当たりを見回し、そそくさと座りなおした。

「あんた、8歳から超大型拳銃って何考えてんのよ。まさか小学生

ハンド・キャノン

の時から武偵やってたの？」

「6歳から軍にいた。それだけだ」

「……………だから、元軍人か…」

食い終わった弁当箱をカバンにしまい、机を元の位置に戻す。

「あまり出すぎたことはするな。止める俺の立場にもなれ」

それだけを言い残し、俺は教室を後にした。

何故かって？ そらキークんとやらを追いかけるためだ。

俺は担任の教師曰く、あいつと相部屋らしいからな。

そして屋上。

さつき教務科にあつた資料で見た、マスタース強襲科アサルトの女子が3人いた。
あいつは……………裏か。

「ここにいたか」

「……………ッ!？」

「そう驚くな。俺とお前の姿はあいつらから見えない」

俺はエアロ・スミスで光の屈折を変え、俺とこいつを見えなくした。

一応魔法だ。ここでいう超能力になるな。
ステルス

「お前はなんらかで気持ちが高ぶったり、興奮することによって身体能力が上がるといのはわかっている。今朝のアレでな」

「……………魔法使いが、俺になんのようだよ……………」
ワイザード

「その名で呼ぶな。俺は銀狼だ」

「銀狼？……………それで」
シルバーウルフ

「どうやら俺はお前と同じ部屋のようで、挨拶がてらと思ったのだが」

「へ？ そのこと？」

「ああ」

「……………えと、俺は遠山キンジ。探偵科だ」
インケスタ

「俺は強襲科と狙撃科の掛け持ちだ。ルームメイトだな」
アサルト
スナイプ

互いに握手を交わし、俺はキンジの隣に座った。

「あ、ああ。ってか、銀狼って明らかに高校生じゃないよな？
0くらいか？」
2

「27歳、元軍人。武偵の知識が無かったため、武偵高へ無理矢理編入させられた。それと、俺はギンでいい」

「そ、そうか。お前も災難だったな」

「まあな。…………お前は、元強襲科アサルトと聞いたが」

「……………昔はな」

「……………そうか。確かに、あの死ね死ね団はム力つく」

「ギンもその一員だろ？」

「俺は無闇に『死ね』などとは言わん。俺が強襲科アサルトにいるのは、ついでだ」

「ついで？ あの死亡率3%のところに？」

「俺は子供の頃から狙撃兵スナイパーだったからな。狙撃科スナイプのついでに強襲科アサルトにも入った」

「それでもって超能力ステルス持ち…か。すごいな」

苦笑するキンジには、今朝のような気迫が無かった。
あのとこのこいつは明らかに、別の誰かだ。

「ってかき、なんで防弾制服ディヴィーザ・黒着ネロてんの？」

「……………死んだ友の服に、似ているからだ」

「あ、ごめ……」

「…構わん」

ゴロン、と寝転がると、丁度チャイムが鳴ってしまった。
仕方無しに不可視化を解き、階段を下りていく。

「えと、同じルームメイトって事で、少し頼まれてくれねえ？」

「なにをだ」

「放課後逃げんの手伝って」

「Ja・了解だ」

階段を下り、教室へ戻った。

そして時は来た。

放課後のチャイムが鳴り響き、ゆとりが教卓の前にいる。

「では、今日の授業はここまでです。えー、皆さん、くれぐれも不用意な行動及び発砲は控えるよう——」

ギラッ！ とクラスにいる男子の視線がキンジに集まると同時に俺は立ち上がり、キンジを右肩に抱える。
クラスの奴らからは「そいつを渡せ」というオーラがにじみ出ているな。

「さらばだっ！」

キンジがそう言つと同時に俺は窓から飛び降り、建物の屋根を跳んで渡る。

一応ルームメイトだから助けたものの、いいのか？ これで。

中略

でまあ第二男子寮前。
本来なら電車やバスを乗り換えていくのだが、俺が跳んでいたらそれよりも速くついた。
キンジは失神寸前。

「ついたぞ」

「お、おう……」

キンジと共に部屋に入ると、幾つかのダンボールが玄関に積まれていた。

確かここは4人部屋を一人で使っていたのだから、空き部屋が最低3つあるわけだな。

「この見取り図、あるか」

「ちょっと待ってくれよ」

キンジが戻ってくるのを待っていると、1枚の紙を持ってきた。
(
緋弾のエリア？巻、294ページ参照)

ふむ……そうだな。ここにするか。

俺は、小部屋2を借りることにした。キンジは向かい側にある小部屋3を使っているらしい。

「荷物運ぶの手伝うか？」

「重いぞ」

「んな大したことねえだ——重オツ!!」

ダンボール1つ持ち上げられないキンジに変わって俺が段ボール箱を片手で担ぎ、部屋に移動させる。
あとはウルブズから銃を持ってくるだけか。

リビングに移動してバルコニーに出て、見えないウルブズに跳び移る。

そのまま調整室^{チューニングルーム}に行き、部屋にあった全ての銃を寮の部屋に転送した。もちろん魔法で。

ハッチを開けてウルブズから出てバルコニーに跳び移って部屋に戻る。

「おま、これいつのまに……」

「今転送した」

「転送つて、やっぱり超能力か……?」

「厳密には違うが、似たようなものだ」

俺の部屋には、壁一面に銃が掛けてある。ここで種類ごとに説明して行こう。

自動拳銃は、^{ハンドガン}H & K SOCOM Mk23（3点バースト、フル

イト付きの魔改造済み) × 2・Cz71 × 2・M92Fベレッタ ×
4・DESSERT EAGLE × 4・DESSERT EAGLE
14inch(3点バースト、フルオート付きの魔改造済み) × 8
だ。

リボルバー

回転式弾倉は、コルトSAA ピースメーカー × 36・S&W M
500 × 2・マテバ (Model) Sei Unica 6 ウニカ グリフォン × 4・
スタームルガー スーパーブラックホーク × 2・スタームルガー

スーパーレッドホーク × 2。

アサルトライフル

小銃・突撃小銃は、AK47 × 2・AK74 × 4・ファーマス × 2・
M16A2 × 1・M4カービン × 2・H&K G11 × 1。

ショットガンは無し。俺は使わんからな。

スナイパーライフル

狙撃銃は、レミントン M700 × 1・H&K PSG1 - RBS
S × 1・SVD ドラグノフ × 1・L96AWS × 1・L96A1
× 1・L96A2 × 1・WA2000 × 1 だ。

アンチ・マテリアル・ライフル

対物狙撃銃は、ゲパードM82A1 × 2・ゲパードM90 × 1・P
GM ヘカート? × 1・ステアー IWS2000 × 1・ボーイズ
MKI × 1 がある。

「……………」

「これでもまだほんの一部だ」

「……………!」

ぱくぱくと口を動かすキンジは、金魚のようだった。
と、俺が壊れたキンジを眺めていると、

ピンポン。

ドアのチャイムが鳴った。だが、キンジは未だ壊れたままだ。

ピンポンピンポン。

今度は目を白黒し始め、瞳孔が開いてきている。

ピポピポピポピポピポピポーン！　ピポピポピンポーン！

なんだ、新手のピンポンダッシュかと思ったが、違うのか。
動かないキンジに変わってドアを開くと、

「遅い！　あたしがチャイムを押したら5秒以内に出ること！」

「黙れ。ここは男子寮だ」

アリアがいたので蹴り飛ばした。
ガチャン、と鍵も閉め、チェーンもかける。

『ちよつと！　開けなさいよ！』

「ここは男子寮だと言っている。それとも風穴開けられたいのか」

ピタッ。

ドンドンとドアを叩いていた音がやんだ。

こいつは俺に勝てないことを自分で理解しているので、あまり怒ら

せないようにしているらしい。というのも、俺はこいつのせいで一度キレた事がある。それ以来、こうだ。

「用件を言え。場合によっては入れてやる」

『そのバカとあんたに用があんの。一応言っておくけど、ふざけてるわけじゃないわ』

「……………了解した」

チエーンを外して鍵を開けると、アリアがずかずかと入ってきた。それと同時にようやくキンジが目を覚ました。

「か、神崎！？　なんでここに！」

「アリアでいいわよ。トランクを中に運んでおきなさい！　ねえ、それよりトイレどこ？」

「ちょま、入んな！」

「カーテンが見えるだろう。その一個手前だ」

「ありがと」

ととと、パタン。とアリアが小走りでトレへ行くと、俺はリビングのソファに腰掛けた。

俺が15、6歳だったときは、こういう青春は無かったな。銃、銃！銃！！な毎日だ。

おかげでいつでも硝煙まみれだったが。

「キンジ、お前の人生は一度きりだ。今を楽しむといい」

「楽しめてねえ！」

「そういうな」

女子1人に追い回されている程度でなにをいうか、贅沢な。俺は国に追いかけられていたのだぞ。
最近の若い奴は……まったく。

「で、用件とは」

「ギン！それにキンジ！あんたらまとめてあたしのドレイに「ア？」……………強襲科アサルトであたしとパーティを組みなさい！」

「……………フロントが2人にバックが1人か。充分だな」

「おい！俺ぬきで話を進めんなよ！」

「不満か」

「ああそつだ！第一俺は強襲科アサルトになんか戻らねえ！」

「む……。あれはあれで、退屈しすぎには丁度いいと思うのだが」

「あんな死ぬような場所にいられっか！」

「——死ぬのは当然だ」

少しトーンを上げ、キンジを黙らせる。

「人は生まれ、死ぬ。それは森羅万象全てにいえることだ。かつて共に戦った俺の戦友は、全員死んだ。相手も、全員死んだ。この手で、俺が全てを殺した。生きている限り死からは逃れられない」

「なっ……。！ 殺したって、マジかよ！ ならどうして捕まってない！」

「戦争に生と死以外があると思うな！！ 目の前の敵を殺せ！ 敵を撃ち抜け！ 隙あらば全てを殺せ！ 俺はそう、子供のときから教え込まれてきた」

「…………ッ！ なんだよ、それ…！」

「自分は弱い、弱いから戦わない、死と向き合わない。それでは死への道が開かれるだけだ。弱ければ戦え、そして死を遠ざけろ」

「んなことできねえつつつてんだ！！ お前はSランクだからそう言っただけなんだ！」

「俺が戦場に出たのは6歳だ。銃もともに握れず、ナイフも大し

て使えない。だが、戦ってきたからガキの俺でも生きていた」

「……………ッ……………！！……………1回だけだ。1回だけ、お前らとパーティーを組んでやる。けど、どんなに小さな1件でも、それきりだ」

「……………そうと決まればまずは晩御飯ね。ギン、晩御飯作って」

「キンジ、材料あるか」

「……………ねーよ」

「……………そうか。アリア、先に下にあるスーパーに行ってくれ。お前の好きだったももまんがあったハズだ」

「ホント！？ 今すぐ行ってくるわね！」

猛スピードでアリアが部屋を出て行ったのを確認し、キンジを俺の対面にあるソファに座らせる。
少しきつく言い過ぎたな。

「すまない。言い過ぎた。本来ならあそこまで言う必要など無かったのだが」

「…………………………もう、いい」

「……………お前が、強襲科アサルトに行きたくないというのはわかる」

「ならなんで強襲科アサルトにいんだよ」

「……………言っただろう。ついでだ、と」

「……………そっか」

「さて、そろそろ俺たちも行こう。あまり待たせるとあの馬鹿が騒ぎだす」

「あいよ」

俺はこいつとの険悪な関係を直せるかと考えていたら、もう気にしてないと言われた。

一応何もせず許されるのは性に合わないので、今度飯を作ると言ったら、それで落ち着いた。

にしても、さつきからあいつは何故俺のことを見ている…？

ヘッドホンを付け、ショートカットのあいつは、何故俺を見ている…？

威嚇射撃をしてもいいが、アリアとキンジには気づかれないほうがいいだろうし…。

「——ギン」

「どうした」

「アリアのこと、教えてくれ」

アリアが風呂に入っているのをいいことに、キンジがそう言い出した。

「身長142センチ、体重約34キロ」

「んなこた訊いてない！　ってか何故知ってる！？」

「気にするな」

「……あー。とりあえず、生まれとかは」

「父がイギリス人とのハーフで、母は日本人。クォーターだ」

「……………それで、神崎・Hか」

「あとはあいつの二つ名が『カドラ双剣双銃のアリア』だという事意外は知らん」

「カドラ双剣双銃……………。てことは、やっぱりSランク？」

「ああ。14歳からだそうだ」

「ほー。お前の二つ名は、『ヴィザード魔法使いの銀狼』だよなシルバーウルフ

「いや、『ムトラ無刀無銃』のほうが知られていると思う」

無刀無銃。^{ムトラ}

存在しない『無』と、無限の『無』が組み合わせあって出来た、無限刀無限丁流・無刀無丁流で、ムトラ。

無から銃を出したり、無から刀を出すことから、その名が付いた。違法組織で恐れられる名が、『無刀無銃の銃騎士』^{ムトラ}
^{ガンズナイト}

「…………聞いたことはあるけど、それってお前？」

「そうだ。『無刀無銃の銃騎士』^{ムトラ} と言え、わかるか」
^{ガンズナイト}

「あゝ…………。なんか、驚くのに慣れてきた。なんでこんな超人が俺の周りに…………」

げんなりと肩を落とすキンジを無視し、窓の外に目を向ける。
まだ、俺たちを見ているな。

「俺は外を歩いてくる」

そう言つて玄関へ行き、靴を履いて外に出る。

まだ奴は向かい側のビルの屋上にいるな。

階段の手すりを蹴って向かい側のビルまで跳び、奴から少し離れた場所へ着地する。どうやら、ヘッドホンのせいで着地音が聞こえていないらしい。

「おい」なんのようですか「……………それは、こちらのセリフだ」

なんだ、気づいていたのか。

黙って第三男子寮を見つめているこいつは、淡々とした声だった。

「何故、お前は俺を監視していた」

「風に言われたからです」

「……………風に？」

「無刀無銃である貴方^{ムトラ}を、見ておけと」

すつくと立ち上がるこいつは、アリアなみに身長が低かった。

150弱と言ったところだろう。

「風……………か。俺も風と共に生まれ、生きているが……………。命令はさ
れた覚えが無いな」

「私に吹く風は故郷の風です。貴方は自分の故郷の風を聞いている」

「確かに、俺も風の教えに従っている。敵の場所・思考・動き、全
てを風が教えてくれる。だが、命令はされない」

「風が違うからでしょう」

「……………そうだな。確かに、その確立はある」

「唐突で申し訳ないのですが、私とパーティを組んでください」

「何故だ」

「風が命じるからです」

「お前にとって、風は絶対なのか」

「はい」

「……………そうか」

こいつは、かつての俺に似ている。
俺も昔は、風が絶対だった。

「だが、俺は他の奴から誘いを受けている」

「知っています。もし私が勝ったらパーティを組んでください」

「……………いいだろう」

「では、今から私は、最大7分間貴方に有余をあげます」

「……………フン」

「そして、私は今から7回貴方を襲います。貴方が一度でも1分以

上逃げられれば、貴方の勝ちとなり、私は貴方のものとなります」

そう言いながらこいつは床においてあった狙撃銃——SVD ドラグノフのマガジンを外し、中に入っている弾を俺に見せてきた。
アーマービース
装甲貫通弾だ。俺や生徒たちの着ている防弾制服を易々と貫く、鉄鋼弾。だが俺には核すら防ぐディバイダーの鎧がある。どうするつもりだ…？

「何処に逃げても構いません。私の絶対半径は2051メートルです。
キリングレンジ

「……………俺の射殺可能範囲は、5642メートルだ」
キルゾーン

「そうですか」

と言いつつもドラグノフを構え、トリガーに指を掛けてきた。

コイツ、本気だ。

そう悟った俺はビルを飛び降り、ヒップホルスターしまつてあるDESERT EAGLE 14inchを抜く。

あいつの言っている通りなら、互いに弾は7発。俺はナイフで弾を斬ったり弾いたりなどは普通にでき、それは自動拳銃でも同様。
ハンドガン
撃ち返すこと——銃弾返しも、兆弾撃ちもできる。
リターンズ・ショット
リフレク・ショット

——タァン！

聞き覚えのある銃声が聞こえると同時に、風を切つて弾が飛んできたのが感じられた。

咄嗟に振り向き、こちらへ迫り来る7.62mm×54R弾を、DESERT EAGLE 14inchから放たれる50AE弾で弾き返す。相手の銃弾を自分の撃つた銃弾で相手の銃口へ弾き返す、リターンズ・ショット銃弾返しで。

そのまま交差点を横に曲がり、死角へ入る。

スナイパー狙撃手はどうしても、狭い路地や入り組んだ市街には弱い。

だが、あいつなら撃つて来る。さっきの発砲で分かったが、あいつは俺が避けても後ろの石で、俺へ跳ね返るような角度で撃っていた。つまり、あいつも兆弾撃ちができるということだ。リフレク・ショット

「心躍る、良き戦いになりそうだ」

左手首につけてあるG-SHOCKの時計を見ると、初弾からあと数秒で1分が経過しようとしていた。

今はもう深夜だ。さっきは大通りで明るかったものの、路地に入ってしまった以上暗くて相手の弾は見えない。同時に、リターンズ・ショット銃弾返しも出ない。

そしてまた、ドラグノフ特有の乾いた銃声が聞こえた。

瞬時に右手に持ったDESERT EAGLE 14inchを左へもつていき、思い切り右へ振り――弾を弾いた。

俺の持つ全てのDESERT EAGLE 14inchはオリハルコン超金属と呼ばれる鉄で作られていて、銃弾程度では傷一つ付かない強度を保っている。故に、弾を銃身で弾くこともきる。

「俺以外にも、これほどできる狙撃手スナイパーがいるとはな」

狙撃手とは本来、観測手ベアと対になって初めて真意を発揮する。だが、一流の狙撃手に観測手はただの邪魔・足手まといとなる。しかし、逆に思考も狭まるということになる。その状況下でこれほどの技術。賞賛に値するな。

遠くに逃げたところで意味がないのを理解している俺は路地を使い、あいつのいるビルへ近づく。そのまま地面にDESERT EAGLE 14inchの銃口を向け、撃つ。

弾は地面、壁の順に兆弾し、屋上にいるあいつめがけて飛んでいく。

バギンッ！

——撃ち落されただと。

今の音は、銃声と弾同士がぶつかった音が混ざった独特の音だ。

俺が銃弾返しリターンズ・ショットをされたことに驚いていると、3発、こちらに向かつて飛んできていた。

急いで地面を蹴り、建物の壁を蹴って上へ跳んでいく。俺に向かつてきていた弾は全て、俺の心臓のあった位置を通過し、地面に突き刺さった。

完全に殺るや気だな、あいつは。

「姿を現した狙撃手スナイパーを待ち受けるのは、死のみだ」

屋上に着地すると同時にガガンッ！ と2発続けてあいつめがけて

撃つと、ドラグノフの銃口下につけられた銃剣で、2発とも切り落とされた。

「死ぬのは、貴方です」

「——ックソ」

片膝をついて放たれたドラグノフの弾を銃弾返しでドラグノフの銃口へ弾き返すも、銃剣で切り落とされる。

だが、今のであいつの残り攻撃回数は1発。俺はDESERT EAGLE 14inchをホルスターにしまい、刃渡り20センチのシース・ナイフを取り出し、左手に逆手で持つ。

どうする。このまま斬り殺すのは簡単だ。だが、今の俺は人を殺してはならない。

対するあいつは、俺を殺す気で撃っている。

互いににらみ合う拮抗状態が、40秒経過した。あと少しで俺の勝ちとなる。

「私は一発の銃弾……銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない……」

唄のような、詩のような言葉。
完璧な無表情のこいつからは、心が読めない。

「ただ、目的に向かって飛ぶだけ――」

最後の一発が、放たれた。

指の筋肉の動きからそれを予知していた俺は、弾丸が銃口から出てくるよりも早く走り出す。

弾丸は俺の頭に向かって飛び、俺は弾丸に向かって走る。

頭にぶち当たる瞬間、俺は身をかめて弾丸をかわし、床に右手を着いて腕力で跳ぶ。

発砲の反動故かまだ動けないこいつのドラグノフの上に着地し、銃身の変わりに下についていた銃剣を床に叩きつけ、折れたと同時にドラグノフを蹴って後ろへ回りこむ。

そして、ナイフを首筋につけた。

一応ドラグノフに傷はつけないようにしたが……………。

チエックメイト
「試合終了だ」

「……………そのようですね」

俺がナイフをしまうと、ドラグノフを床に下ろし、降参したように両手を腕に上げた。

こいつは、最後の最後まで俺を殺す気だった。

「約束に従い、私は貴方……のものです。貴方は私の銃を貴方の武力として、自由にお使いください。貴方は私の体を所有物として、自由にお使いください」

「……………なら、普段通りの生活をして帰れ」

「それはできません。私は、貴方の傍にいないければなりません。貴方に害成すものには、一発の銃弾となり、必ず滅ぼすことを誓います」

俺からは離れられない……………か。

ハッキリ言おう、迷惑だ。何故俺は転入初日から目をつけられねばならんのだ。

確かに俺は無言・無表情・無感情な奴が好きだ。五月蠅くないからな。だが、異性としてではない。人としてだ。

……………そういえば、何か忘れているような……………。

ああ、俺はこいつの名を知らないのか。

「命令……………という言葉は好きではないのだが、お前の名を教えてください」

「レキです」

「レキ？ ……名字は」

「知りません」

「……………そうか」

時々居る。こういう名字を知らない・持っていない奴が。

俺もその1人だ。ただ俺の場合は、故意に名字を捨てたのだから。

「ならば問おう。離れられる最大距離は」

「250センチです」

「理由は」

「いかなる状況においても貴方を守れる距離なので」

嫌に現実的な数値を出してきたな、レキは。

確かにドラグノフに銃剣をつければ、実質的な距離は数十センチ。だが、こいつの銃剣は俺が破壊した。

「そこに遮蔽物の有無は関係あるか」

「あります。直接貴方に触れられる状況下で250センチです」

レキがドラグノフを肩に掛けると、またしても現実的な事を言ってきた。

今の会話でわかったのだが、俺はこいつから離れることは出来ない。

……………仕方ない。諦めるか。

とは言っても、こいつを連れて男子寮で暮らすのはあれだな……。キンジもいるし。

「……………俺は銃を取りに行ってくる」

「はい」

俺が1歩、また1歩踏み出すと、その後ろを一定の距離でレキがついてきた。妙な感覚だ。

屋上の手すりに脚を掛けて第三男子寮へ跳ぶと、レキはいつのまにか俺の肩に掴まっていて、同時に着地した。

あ、危ない子だ……。まさかそこまでするとは。

コシタクトレス

非接触ICカードキーで部屋の玄関を開け、完全に気配を消して自分の部屋へ行く。

壁に掛けてある銃を眺めるレキ顔は、少しだけ輝いているようにも見えたが、多分気のせいだ。

俺は床に置いてある大きな工具箱を持ち、壁に掛けてあるSVDドラグノフとバレットM82A1を取り、スリングを肩に掛ける。

——っと、あとは…。

「レキ、右から2つ目の箱を持ってきてくれ」

そう言うつとレキは黙って指示された段ボール箱を持ち、無言でついてきた。

そのまま部屋をでて鍵を閉め、一旦段ボール箱を置くように言う。

「よい、せつと」

空いている方の手で段ボール箱を担ぎ、俺はレキの部屋に行くことにした。

だってなあ、部屋にはアリアとキンジがいるし、邪魔したら悪そうだし……。

レキ自身そっちのほう都合が良いとのことなので、案内を頼んだ。

途中、巫女装束を着た女子とすれ違ったが、何故男子寮へ向かっていたのだろうか……？

レキの部屋の前に着くと、そこには名字の表札が入っていないかった。名字の無い場合は下の名が入るハズなのだが……。まあいいか。

「このカードキーです。自由に使ってください」

「ああ」

カードを受け取って案内された部屋に銃と荷物を降ろし、リビングへ行く。

ぬっ。壊滅的に生活感の無い部屋だな……。

リビングには何も無く、カーペットや畳も何もかも無い。俺が案内された部屋はレキと同じ部屋らしく、テーブルがちょーんと一つだけあった。上には金床と銃を分解するための工具と、火薬を調整

するための天秤が置いてある。

他に家具は無いのかと各部屋を見て回った結果がこれだ。
リビング〃何も無し

寝室〃何も無し

キッチン〃カロリーメイトの空箱と冷蔵庫

小部屋1〃俺の荷物とテーブル&レキの工具

その他小部屋〃何も無し

洗面所〃洗濯機

風呂場〃ボディソープとシャンプー

(一応全ての部屋に電球だけは吊るされていた)

失礼を承知して言おう。

.....ここは廃屋かなにかか——？

1弾 ウルブズ、再来（後書き）

あとがき

作者 「凄い！ プロローグだけで感想2件来た！」

隼人（銀狼） 「……………流石は『アリア』といったところか」

作者 「だね。最期の刻限から続いて感想をくれた人もいるし……………。もう作者感涙！」

隼人 「お前のそれは迷惑だ。さっさと感想返しを始めるぞ」

感想返し

黒鋼様

作者 「さて、最期の刻限にも感想を下さったのですが、むこうは完結しているのでこっちでお返事をば」

隼人 「は、ハードボイ…………？ すまない。俺はそうだったのは意識していなくてだな…………」

作者 「皆さんも用語については疑問符を浮かべるかもしれませんが、作中でできる限り説明していきたいと思います。隼人はこの世界のことを知らないのです」

隼人 「それでもわからなければ、wikiだな」

作者 「でもさ、お前の言葉の中にも結構用語が入ってるよね」
隼人 「チェンバー エジエクシオンポート薬室や俳莢口はわかるか？」

映姫様

作者 「私なんか緋弾のアリアの二次創作を書いていいのでしょうか……？」

隼人 「書いてから言っな」

作者 「テヘツ」

隼人 「スタートアップ！ デイバイド・ゼロ！」

作者 「あっ！ ちょ！ まっ！ いやあああああああ！」

次回予告

レキと共に過ごすことになってしまった隼人。無口・無表情・無感情のレキと、無言・無表情・無情な隼人。狙撃手^{スナイパー}同士の2人の相性とは――？

次回、緋弾のアリア、魔弾の射手、2弾 自由を求める者

作者 「これ、誰ルートにしようかな」

隼人 「いや、俺には前の世界に残してきた奴らが……」

作者 「イヴたち残してきちゃったしね。どうなるんだろう」

2弾 自由を求める者

レキの部屋を探検し終わった俺はレキとの共用部屋に戻り、ダンボールを開く。

中から出したのは、

鉄板（一メートル×一メートルの物）

バレット M82A1の予備弾倉^{スベアマガジン}×5

SVD ドラグノフ狙撃銃の予備弾倉^{スベアマガジン}×5

各銃用の弾

だな。

工具箱を開き、鉄板の上にバレットM82A1を置き、分解開始。最近使っていなかったので、今のうちに完全分解整備しておこう。使用毎に必ずオーバーホールしているが、2年くらい使ってなかったし。

「……………なにか、用か」

「……………いえ」

「……………そうか」

レキは俺の肩越しにバレットM82A1の分解する様を見ていて、なにやら気まずい。

ネジの一本までブラシで磨き、組み直す。明日一番にゼロイン調整でもするか。

エアロ・スミスで真空状態にしてあるジップロックの袋を取り出し、中に入っていた弾を鉄板の上に並べ、選別開始。

俺は風呂に入るとき以外は常に黒地の皮手袋をしているので、余分なものは弾に付かない。
ちなみに50AE弾の場合はここまでしない。自分で作ってそのまま終わりだ。

「アンチ・マテリアル・ライフル
対物狙撃銃……初めて見ました」

「………本来は対拠点用や対戦車用だからな」

「………では、何故貴方は人に向かって使おうとしているのですか」

「俺が初めて使った狙撃銃^{ライフル}だったからだ」

「………貴方の銃は大型口径に偏っている光景があります」

「構わん」

「………そうですね」

俺のドラグノフの完全分解整備^{オーバーホール}も終わり、弾の補充も完了。
後は風呂入って寝るだけか。

「そこ、動くな」

「……………?」

小首をかしげるレキを無視してダンボールに手を突っ込み、一本の銃剣を取り出す。

鞘に納まっている銃剣をレキに投げ渡すと、またしても小首をかしげた。

どうやら意味が伝わっていないらしい。

「先程お前の銃剣をへし折ってしまったからな。同タイプのものだ」

「……………すみません」

「謝るのは俺のほうだろう」

レキがスカートの下に隠してあるベルクロのバンドに銃剣をしまうと、すたすたと歩き始めた。

そのままセーラー服の脱ぎ始め、洗濯機に入れると風呂場へ行ってしまった。

普通、女が男の前で服を脱ぐか？ そら俺は女の体やそういったものに興味は無い。言っておくが同性愛そっちの気があるわけでもない。なんというか、あいつはロボットのような奴だな。

『できれば洗面所まで来ていただけますか。その部屋が安全とは限らないので』

「……………了解だ」
コペー

やることも無いので指示通りに洗面所まで行こうとすると、バルコニーへ続く窓からコンコン、という音が聞こえた。

振り向いて見てみると、鴉が窓を突いていた。窓を開け、左肩に鴉を止まらせて窓を閉め、洗面所へ行く。

俺は、鴉と狼と隼と友達だ。細かい種類はおいとくが、基本的にそのどれとでも意思疎通ができる。そして、寄って来やすい。

だから、俺のいる所には必ず、その3種類のうちどれかがいる。何故かは知らん。

「そういえば、お前はヘッドホンで何を聞いている」

『風の音です』

「風の音？」

『はい。故郷の、風の音を』

「……………ほう」

試しに聴いてみると、本当に風の音だった。

音から察するに、録音場所は広いな……………この種類の葉の擦れる音も考えると、モンゴルやシベリアの辺りか…？

「記憶の聡明維持と共に、ホワイトノイズの役割も果たしているな」

『そうでしょうか』

「ああ。周波数的に、ホワイトノイズとしては優秀な部類だ……」

ホワイトノイズ——掃除機のモーター音・水の流れる音・テレビの砂嵐など、一定周波数が続き、集中力を高める効果のある音を、集中効果^{ホワイトノイズ}を有す雑音と呼ぶ。

この風の音は、それに当てはまる周波数だ。

——カチャ

レキが無言で曇りガラスのドアを開け、出てきた。

タオルで体を隠すでもなし、レキは無言のままタオルで体を拭き、髪の水分会を軽くとり、先程まで銃の整備をしていた俺たちの部屋に行き、セーラー服に着替えた。

洗濯機に一着制服が入っているのを見る限り、何着か持っていて、着まわしているらしいな。

タオルで髪を拭きながらレキが戻ってくると、洗濯機の上においてあった銃剣をベルクロバンドで左太股に付け、スカートで隠した。いくら校則で帯刀帯銃が義務付けられているとはいえ、風呂上りにもか……。徹底しているな。

「私はここにいますので、どうぞ」

「俺はいい。少々特異体質でな。汚れないように出来ている」

「……………そうですか。ではそろそろ就寝時刻ですので」

俺たちの部屋に行くなりドラグノフを抱くようにして壁際で体育座りし、レキはヘッドホンを付け、風の音を聞き始めた。
俺は部屋の対角線上に行き、壁に寄りかかって腕を組み、立ったまま寝ることにした。

「電気、消していただけますか」

「わかった」

膝まである長い髪に意識を集中させ、俺の体内にあるナノマシンを使つて髪を動かし、パチン、と電気を消す。

同時に、闇が俺たちを包んだ。

無音。

俺は元々口数が少ないほうだったのだが、情報を得るためには会話が丁度いいので、一応話すようにはしている。

といつても、かなり興味がないかぎりには自分から声を掛けることは無い。基本、訊かれたから答える程度の会話だ。

パササツ、と俺の左肩に乗っていた鴉が羽ばたき、体勢を立て直して眠り始めた。

時刻は9時ジャスト。丁度、就寝時刻だ……………。

AM4:30

俺がいつも目覚める時間だ。

いつものように起き、最初に目にしたのは——ドラグノフを抱きながら体育座りで寝ているレキの姿。

俺はレキを起こさないように防弾制服・黒の上着を掛けてやり、バレットM82A1と自分のドラグノフを肩に担ぎ、部屋を出て屋上へ行く。

まず最初にドラグノフのゼロインをやっておこう。2キロ離れた場所にエアロ・スミスで9ミリパラベラム弾を浮かせ、スコープで狙いを定める。

弾頭と薬莢が重なっているところを狙い……………よし、ドンピシヤだ。ゼロインの必要は無かったか。

次にバレット。5キロ離れた場所にさっきと同じように9パラを浮かべ、バレットのスコープを覗く。

本来対物狙撃銃とは匍匐状態アンチ・マテリアル・ライフル ほかくで二脚を使って撃つもののだが、俺はスタンディングフォーム——立った状態でも撃てる。精度は変わらずに、だ。

ダガンッ！

対物狙撃銃特有の大口徑弾が発射され、5キロ先に浮かぶ9パラは

粉々に砕けた。

……なんだ、どちらも調整必要だったか。流石に一ヶ月使っていないとズレると思ったのだが。

「む……。起こしたか。もう群れに戻れ」

クアー！ と元気な声を出して肩で寝ていた鴉が飛び立ち、お台場の方へ飛んでいった。

なんとなく気になったので第三男子寮を見ると、アリアとキンジが寝ている姿が見えた。え？ 視力？ 右：失明・左：9・4（2・6の範囲だ。何故変更可能かというと、ナノマシンを使って望遠レンズのように目の中の水晶を変化させられるからだ。

「……………刻限の向こうは、平和な世界……………か」

俺は14歳で一度死に、17歳で一度死に、18歳で一度死に、27歳でも一度死に、ここに立っている。つまり俺は、4回死んでいる。

最初は作戦に失敗して、次は敵が強くて、最後は刻限が来て。そしてまた、俺はこの世界でも死ぬのだろう。

呪われた力、呪われた生まれ、呪われた存在意義。その全てが、俺を縛り付ける。過去が変えられないように、俺はこの呪縛を解くことができない。

「まあ……………いい。俺はこの世界で生きる以外に術が無いからな……………」

バレットとドラグノフを背負って階段を下り、最上階のレキの部屋に入る。

まだ……起きてないな。今のうちに朝食でも——チツ。冷蔵庫の中にカロリーメイトしか無い……！ どれだけ好きなのだ、カロリーメイト……！！ カロリーメイト、美味すぎる！ ってことか？

（by:某蛇兵士）

仕方ない。材料買ってくるか。

バレットとドラグノフを壁に立て掛け、部屋を出る。そのまま階段から外に飛び降り、少し遠い24時間やっている大型スーパーへ足を運んだ。

——今回の戦利品。野菜類数種・卵・食パン・ドレッシング・塩コショウ・薄いまな板・皿4枚・箸2膳・スポンジ・洗剤。

部屋に戻り、キッチンへ行き、まな板の上に白菜などの野菜を置く。

トランス ブレード
「変身、刀」

右腕を刀に変形させて野菜を切り、皿に盛り付け、野菜サラダは終了。

食パン4枚と卵2つをエアロ・スミスで中に浮かせ、左手に魔力を集中させて——

「マスターズ・チェンジャー発動、炎熱」

左手から炎を出し、一瞬で表面を焼く。卵は目玉焼きに。皿に置き、簡素な朝食の完成。時間は7時半。皿と箸と塩コショウとドレッシングを持って俺とレキの部屋にあるテーブルに並べっていると、丁度レキが目を覚ました。

「……………これは、貴方が作ったのですか？」

「ああ。材料が無かったから、適当だがな」

「……………そうですか」

「冷める前に食べ。俺は、カロリーメイトだけで生きているような奴は放っておけん」

「お手数おかけしました」

一度手を合わせ、いただきますをしてから黙々と無言で朝食を食うレキ。

やはり落ち着くな。喋らなくていいというのは。風だけを感じて生きていける。……………そんな世界があればいいが、生憎俺が生まれ育った世界では、硝煙の匂いと金属音と血の匂いというオマケ付だった。あと悲鳴や断末魔もか。

「……………ごちそうまです」

「お粗末さま」

朝食を食い終わり、食器を台所へ運んで食器を洗う。その間、レキはドラグノフの点検をしていた。いわゆる、銃に命をかけてる、という奴か。いやまあ、俺もなのだが。

6歳の時から銃と共に生きている俺にとって、切っても切れない信頼関係がある。銃は俺を裏切らない。そう確信している。

だから俺は今まで、不発も弾詰まりも、一度も起こしたことがない。俺の精神は風であり、肉体は銃だ。そう言い切れる。風と共に生まれ、銃と共に育った。その事実があつてこそ、俺だ。

「貴方の銃も点検^{チェック}しておきました。バレットは構造をよく知らない
ので、簡素にですが」

「すまん。……それと、いい加減俺を『貴方』と呼ぶのをやめろ。
俺には銀狼^{シルバールフ}というコードネームがある」

「本名は無いのですか」

「名は捨てた」

「……そうですか。では、なんと呼びすれば」

「む……。周りの奴らは、ギンと呼んでいるな。日本語に訳して、省略したらしい」

「では、ギンさん。そろそろバスの時間ですので」

「ああ」

バレットとドラグノフを背負い、ヒップホルスターのDESERT
EAGLE 14inchのマガジンを抜いてスライドを引き、
チェンバー
薬室に弾が入っていないのを確認してマガジンを戻し、ベルトのマ
グポーチに入っているマガジンも確認。結果、問題無し。

レキと共に部屋を出て階段を下り、バス停へ向かって歩く。特に話
す話題もないので、無言。バス停に着いてからも、無言。バスに乗
ってからも無言。アリアとキンジが緊迫した様子でバスに乗ってい
たが、無言。バスを降りても、無言。レキと分かれて教室に入り、
無言。自分の席——キンジの隣——に座り、無言で窓の外を眺める。
……俺、終始無言だな。

「……………」

隣のキンジが引きつった顔で俺の背負っているドラグノフとバレッ
トを見ていたが、気にせず窓の外を眺める。

……秋葉原にでも行って、音楽プレーヤーでも買おうかな、暇
だし。ヘッドホンはレキが余ってるから欲しければ言ってください
とか言っていたし、それでいいとして……。俺はカセットテー
プしか知らんし、どうやって選ぶか……………。

キンジ……は詳しくなさそうだな。アリアは論外。レキは…………ど
うだろう。理子とかいう奴にでも訊いてみるか？ なにやらそうい
ったものに詳しくそうな喋り方だったし、一般人は知らないような
『フラグ』という単語を知っていたし…………。

確か、理子の席は…………あ、いた。

「理子……で、よかったか」

「ふにゅ？」

ぐてーっ、としているこいつは、明らかな改造制服を着ていた。
いいのか、それで。

「理子ちゃんにかようかい？」

「いや、用と言うほど大げさではないのだが……。音楽プレーヤーと
かに詳しいか？」

「電子機器やネットなら理子にお任せ！」

むっ、急に元気になりだしたな。

「それで？ どんなのが欲しいの？ 高音？ 低音？ ノイズキャン
セリング？ 容量？ 操作性？ サイズ？」

「ま、まで。急に言われてもわからん」

「そうだねえ。ノイズキャンセリングで言うならウォークマンだ
けど、拡張性を考えるとiPodとかかな？」

「ソニーとアップル社のあれか？」

「そだよー。カタログあげようか？ 理子は全部暗記しちゃったから」

「あ、ああ。すまん…」

暗記ってお前……。どれだけ好きなんだ。もしくは暇なんだ。とりあえず理子からカタログを受け取り、ガシガシを頭をかく。

「というか、言葉では分かりにくいから来てくれないか？」

「によおっ！？ 転向早々デートのお誘いですかい！？ でもでも、理子はキーくん一筋で！」

「ふざけるな。次言ったら風穴開けるぞ」

「によ……………ほお……………！」

DESERT EAGLE 14inchを出すと同時に理子は大
人しくなり、ガチガチに強張った。

「そ、それだけはやめくり……。9ミリでさえバツで殴られた
みたいな感触するのに、50AE弾なんて食らったら失神ものだお
……………」

「これで黙らなければゲ^{アレ}パードを使っていたところだ」

「それは防弾制服関係なく逝く！ 理子逝っちゃうよ！」

「逝ってしまえ」

「にゅふぁ！」

へなへなと机に突っ伏す理子を見捨てて自分の席に戻り、DESSERT EAGLE 14 inchからマガジンを抜いてマグポーチからもマガジンを抜き、3つのマガジンでジャグリングをする。ホームルームまで暇だからな。

「よっ」

「む……」

キンジにM92Fベレッタのマガジンを投げ込まれたので、落とさないよう4つのマガジンを宙へ投げていく。

「これでどうだ」

「なにっ」

今度はベレッタを投げ込まれたので、バレルを持って投げる。

「ラストオ！」

「甘いわア！」

刀身の出ているバタフライナイフを投げ込まれたが、刃を触らないように投げる。現在マガジン4つにベレッタ M92F1つにバタフライナイフ1つでジャグリングをしている。

「な……なんだこいつ！」

「フツ。もう終わりか」

「まだ終わりじゃないわ！」

「なに！？」

アリアに抜き身の日本刀を投げ込まれ、バランスが崩れたが――
落とさずにジャグリングを続ける。は、刃物が2つ。危ねエ…。

「これでどう！」

「恐るるに足らず！」

2本目の日本刀も難なく受け取り、計8個。

「ならこれはどうなの!」

「なん……だと!」

今度は45ACP弾を2発。流石に持つて投げる事は出来ないのので、指先で押すようにして投げる。計10個。

「皆さんおはようございまーす。ホームルームを始めま——……
……うつ、うつ。どうして朝から危険な遊びを……。先生は……
……先生わあ……。!」

教室に入ってくるなり担任は泣き出した。訳分からん。

「いい加減、返すぞ」

アリアに日本刀と弾を返し、キンジにベレッタとマガジンとバタフライナイフを投げ渡す。マガジンをDESERT EAGLE 14inchに落とし入れ、残った2つをマグポーチへしまう。
授業、メンドいな……。……。

チャイムが鳴り、放課後。

5時間目以降はそれぞれの学科で依頼を受け、単位や金を得ることが出来る。俺は強襲科アサルトと狙撃科スナイプと尋問科タギコラと装備科アムドで卒業できるだけの単位が揃っているんで、依頼を受ける必要が無い。

だが時々、俺のような特Sランク武偵——LDスコア900以上の全作戦を一度で完遂し、一度も失敗していない武偵——は教務科マスタースから公に出来ないような依頼がしょっちゅう来る。一番多いのが、暗殺だ。

俺もドイツに居たとき、暗殺を39件ほど任された。その全てを急性心不全で殺した俺は、無刀無銃ムトラと呼ばれるようになった。

「——で、理子。来てくれるのか」

「いいよ。暇だし」

「すまん」

理子を連れて教室のドアを開け、校舎を出る。そのままバスに乗ってモノレールの武偵高駅へ行き、キップを買って乗る。理子はさつきからなにやらそわそわしているが、無視。黙ってお台場まで行き、

電車を乗り換えて秋葉原へ。

………そういえば、レキは離れるなと言っていたがあっさり離れられたな。

まあ、なにもここまで追って——来てたアアアアああ!?

いつのまにかレキは電車内にいて、内心かなり驚いた。あいつ、気配も何も無かったぞ。お、恐るべし、レキ。

「あ、そつだ。ゲームズ寄ってもいい?」

「む………ああ。構わんが」

「……………」

無言でついてくるレキを出来るだけ意識しないようにし、理子についていく。

そこは……まあ、俺やレキの来るような場所ではなかった。テレビでやってるアニメ? だったか。そういったもののグッズが置かれている店だ。

そこで理子は、R-15指定のゲームをレジに持っていき、断られた。小さいから見ためで中学生に見られたのだろうな。

「理子ちゃんは高校生なのに……………」

「あ……。貸せ」

「ほへ?」

理子から金とゲームを受け取り、代わりにレジへ行く。すると、すんなり買えた。よく戦友に頼まれて買っていたので、慣れたものだ。

「おおつ、紳士がいる。シーくんは紳士だっ！」

「シーくん？」

「シルバーウルフでシーくん」

「くんは付けるな。風穴開けるぞ」

「じゃあもうギンさんでいいよ」だ。某超甘党の侍みたいな名前で――

「……………よくわからんが、皆そう呼ぶ」

「髪の色なんて同じだしね」

てこてこと歩く理子の後ろを無言でついていくと、電気街へたどり着いた。

そこでは外からでも見えるようにテレビで何かの映画が流れており、急に理子が止まった。

丁度横で流れていたのは、リュパン三世というアニメ映画。昔新聞で見たことのある題名だ。

「ねえ、ギンさん」

「なんだ」

「この映画、どう思う？」

「……どう、とは」

「兎に角、どう思う？」

「む………………。そうだな。俺としては、こいつの本名が気になる。何故名ではなく俗称で呼ばれるのか、不思議だな。リュパン三世ではなく、個人の名が知りたい」

「………………。そつか。ならもし、四世がいたら？」

「いるのか？」

「いたらの話だよっ」

「………………。少なくとも、リュパンという名では呼ばんな」

「ふーん……。意外とギンさんって礼儀が良いんだ〜！」

「それでもない。だが俺は、お前がそう呼ばれるのは見たくないな」

「——えっ？」

この道は人通りが少なく、今は俺と理子とレキシカいない。面を食らったように目を見開く理子は、焦点の合っていない目で俺

を見つめている。

「理子・峰・リュパン四世。悪いが、少ばかりお前のことを調べさせてもらった」

「……………いやいや、理子ちゃんはりこりんだおっ？」

「超人育成機関、伊・U。国家機密レベルらしいな」

「い・うー？ でっでうじゃなくて？」

「……レキ、一旦席を外せ」

「監視はさせていただきます」

「構わん」

レキがスタスタと遠ざかり、会話が聞こえない程度の距離で止まり、こちらを見ている。

「この際イ・ウーだろうが伊・Uだろうが伊・藤でもどうでもいい。お前は恨みを晴らすとは思わないのか」

「恨み？ んー？ 中学生と間違えた店員さんに？」

「『無限罪のブラド』。お前を監禁し、自由を奪った男だ」

「——っ!!」

一気に理子の表情が強張り、口を閉じることさえも忘れている。

「これ以上白を切るのであれば、俺はお前を四世として見る。もしお前が俺に全てを話すというのであれば、俺はお前に自由を届ける」

「……………どこで、それを」

「問っているのは俺だ。答えろ」

蒼白の顔で理子は黙り、何度か深呼吸し、一つの答えにたどり着いた。

今までとは違い、能天気な理子から、本当の理子が出てきた。

「……………したい……………」

「……………」

「……………倒したい……！　あたしは、ブラドを殺して自由になりたい！」

「……………そうか」

目に涙を溜めながらそう叫ぶ理子からは——ハッキリとした、決意

と憎悪を感じられた。

俺が死んでこの世界に来る前の、かつての妹に似た姿をしている理子の頭を撫でると、ついに泣き出してしまった。声を押し殺してはいるが、涙は止まらない。

いつもの理子ならば演技だろう。だが、こいつの心が本当に泣き叫んでいる。

「自由をくれ」——と、かつてのイヴのように。

「でも、あたし、には、あいつを倒せない……」

泣いているせいか、途切れ途切れの言葉。

「だから、証明っ、する……!」

「……なにを」

「あたしが、初代リュパン超えれば、ブラドはあたしを解放すると言っていた」

「待て。初代リュパンは、もう存在しない」

「だから、リュパンが倒せなかったオルメスの子孫をあたしが倒せば、曾お爺様を超えたことになる……!」

違う。それは初代リュパンの倒せなかったオルメスではないハズだ。そう言っただけならハズなのに、声が出ない。

というかオルメスって誰だ。

「銀狼、ありがと。これ以上一緒にいたら、理子我慢できない」

理子が俺から離れ、涙を制服の袖で拭く。

そのしぐさはやはり、かつての妹に似ていて、放っておけない。けれど、俺と理子は他人であり、生まれた次元も世界も違う。

「……………よしっ！ シーくんに迷惑かけちゃったし、バツチりご期待のミュージックプレーヤーを探し出してあげないとねっ」

パツ、といつももの明るい理子に戻ったが、やはり心の奥底は——周りの風は、濁っていた。

風の乱れは心の乱れ

人の心とその人の周りの風は連動し、全てを伝えてくれる。理子はまだ、なにかを悩んでいるようだ。

レキにこっちこいと手招きし、理子の案内通りについていった。

で、結局。

俺はi Pod touch第一世代16G（中古）を買った。

音楽を入れるときにパソコンと同期することなので、なんのデータも入っていないまっさらなノートPCとiPodと入れる予定だったMP3データの入ったSDカードを理子に渡し、入れておいてくれと頼んだ。

なにやら今日の詫びを兼ねて、i Podに脱獄とやらをしてくれるらしい。俺には意味が分からん。理子は拡張性が抜群に増えてうんたらかんたらと言っていたが……。なんのこっちゃ。

「私のと同じゼンハイザーPMX990です。色はオレンジしかありませんが」

「助かった。すまん」

「いえ」

レキにヘッドホンを貰い、武偵高のカバンに入れておく。

………そろそろ、ミッションスターティンク作戦開始時刻か。ファイナライズ武装の最終確認でもしておこう。

ヒップホルスターからDESERT EAGLE 14inchを抜き、弾を確認してマガジンも同様。シース・ナイフを鞘から抜き、手元にある小さなスイッチ——物質を原始レベルまで分解する振動を発生させる装置——を入れて動作確認。問題なし。黒地皮手袋を

はめ直し、グッと手を握る。

「今から特務へ行ってくる。お前も来るのか」

「特務、というと、マスターズ教務科からのですね」

「ああ。公に出来ない…な」

「わかりました。行きます」

「そうか」

ドラグノフを肩に掛けたレキを連れて女子寮の屋上へ行き、A・T ACS 迷彩のシートで隠してある俺のバイク——BMW・K1200 R（キックスターを車輜科ロツの武藤剛気によって増設済み）に跨り、キーを挿す。レキは後ろに乗った。

そのまま壊れたフェンスに向かってアクセルを回し、空へ出る。だが、バイクは重力に引かれず、空を走る。

答えは簡単。エアロ・スミスで空気を固め、見えない道を作っているだけだ。

そのまま東京にある高級ホテルの屋上までフルスロットルで走りぬける。ノーヘル万歳・免停上等。

「レキ、ここでじっとしている」

「はい」

今回の標的ターゲットが泊まっているホテルの部屋の窓の隣にバイクを止め、レキを待たせる。余裕で空中だが、なにか？
コンコン、と窓を叩く。

『なんだ？ いたずらか？』

無音のまま数秒おき、また窓をコンコンと叩く。
人は浅はかだ。黙って窓を叩き続けられると、例えそこが何階だろうと、人は窓を開けてしまう。

『誰だ！ いたずらなら警察に通報するぞ！』

またしても、窓を叩く。
しびれを切らした標的ターゲットが窓を開け放ったと同時に目の前に現れ、トン、と標的の心臓に人差し指を突きつける。

「エリアル・ロック」

「——ううっ！？ な……貴様ア……！」

体内の酸素などを動きを完全に止め、心臓の動きを止める。
これで、急性心不全患者のできあがり。
標的ターゲットを部屋の中に戻し、バイクに跨る。レキも同時に乗った。

「つまらない仕事だったろう」

「……いえ、そんなことは」

「フツ。世辞でも言わん方がいい」

俺は来た時と同じ様に空気を固めて道を作り、女子寮の屋上へ戻ると、理子がブンブンと手を振っていた。
やべ、能力バレたか？

「はいこれ。もう入れておいたよ。脱獄も済んでる」

「あ、ああ」

「それとさあ、ちょーつとばかり聞かせてもらっただけど……
なんで戦場？」

「気にするな」

理子から i Pod と SD カードを受け取って防弾制服・黒のポケ
ットに入れ、ノート PC を脇に担ぐ。

俺が頼んだ音は、今まで俺が育ってきた場所で、俺が戦った作戦の
時の全てが録音されている。つまり、内容は銃声や爆発音、人の悲
鳴や掛け声ばかり。俺は、かつての自分を忘れないためにコレを録
っておいた。

「それじゃ、レキユもおやすみーい！」

「……………」

無言でレキがうなずき、理子はさっさと消えた。

俺もやることがないので、バイクのキーを抜いてレキと共に部屋に戻る。

その後は説明する意味も無く、カロリーメイトを2人で食って、レキが風呂入って、就寝。

……………俺、第3の人生無駄にしてる気が…………。

2弾 自由を求める者（後書き）

あとがき

作者 「なにこれ？ レキ&理子ルート？」

銀狼 「お前が書いたのだろうが」

作者 「いやまあ、そうなんだけど」

感想が返し

空牙刹那 様

作者 「和輝、いつも言ってるけど、ほどほどに」

銀狼 「お前何度遊騎に殺されかければ気が済む？」

作者 「あとなのはにも」

銀狼 「それとはやてにも」

作者 「そういえば、お前の悪口言ってるフェイトとリンフォー
スにぶん殴られてたよね」

銀狼 「……………あの2人の感情は到底理解できん……………」

黒鋼 様

銀狼 「作者、お前コメディー入れたのか」

作者 「ふふん！ 私の文才では一部の人にしか理解できないくらいちっちゃなコメディーしか書けないのさ！」

銀狼 「胸張って言うな。風穴開けるぞ」

作者 「さーせん。ああそれと、今度から銀狼のポジションが変わっていきます」

銀狼 「悪魔でも主人公はキンジだからな」

作者 「でもさあ、お前の能力って前の世界なら受け入れられるけど、東京だと人じゃないよね」

銀狼 「……………それを言うな」

作者 「……………自分で言ってて、なんかごめん」

銀狼 「……………まあいい。では初級問題。プルパップ式、ボルトアクション式、セミオートマチックの意味を述べよ。簡素にで構わん」

次回予告

待て、4世。4世、お前は終わりだ。所詮は4世ということだ。動くな4世。……………隼人の声が機内に響く。それは、旅客機の中の出来事だった…？

次回、緋弾のARIA／魔弾の射手　3弾　4世

銀狼 「タイトルの『魔弾の射手』について、未だに一つも明かされていないのだが？」

作者 「そのうちわかるよん」

3 弾 4 世

嵐。

それは日本が年に何十回も襲われる自然現象。気圧・風圧・風の向き・雲・湿度・帯電。さまざまな条件が重なり、嵐は訪れる。

だが俺は、それを消すことも出来る。風を操り、自らの体と一体にさせる能力、エアロ・スミス。

故に、エアロ・スミス森羅万象の覇者。

とはいいつつも、嵐を一つ消そうとすると馬鹿みたいに魔力を持っていられるので、やらない俺。

というわけで、絶賛俺は女子寮で嵐の朝を迎えている。

「……………嵐だな」

「嵐ですね」

「……………風が、強いな」

「強いですね」

「……………髪が、なびいてウザいな」

「切ればよいのではないでしょうか」

「……………断る」

「そうですか」

レキとの会話にも大分慣れてきたな。何を返されるか大体予想できる。

……そろそろ、行くか。

レキから貰ったヘッドホン——ゼンハイザー P M X 9 9 0——に繋がった i P o d を防弾制服・黒の胸ポケットに入れ、戦場の音をながす。

「……………行くぞ」

「はい」

バレット M 8 2 A 1 と S V D ドラグノフの点検^{チェック}を終わらせ、肩に掛けてドアを開けた途端——ピリリリッ！
俺の携帯に、電話が入った。

「誰だ」

『あたしよ、アリア。今どこにいの』

「訳あって女子寮にいる」

『丁度いいわ。C型装備に着替えてレキを呼んで女子寮の屋上に来て。武偵殺しのバスジャックよ』

「……………ああ」

ブツッ、と電話を切り、レキに用件を伝える。C型装備に着替えるのは面倒なので拒否。

「屋上へ行くぞ」

「はい」

バレットを使ったら1発でバスを破壊してしまうので部屋に置いて行き、ドラグノフの弾を確認する。

あー、雨が凄いなー。

レキと共に階段の庇の下にドラグノフを抱えて体育座りし、通信機に向かって怒鳴り声を上げるアリアを眺める。

——ダアンダアン！ メディック 衛生兵！！ 手榴弾はどうしたア！ 奴が来たぞ！ うわああああああ！！

ヘッドホンから流れるのは、悲鳴と銃声。それを淡々と聞いている俺の横ではレキが風の音を聞いている。

……………旗から見れば同属だが、聞いている内容を知ったらその考えは吹き飛ぶだろうな。

「ちょっとアンタ！ どうして武装してこないのよ！」

「これで充分と判断したからだ。お前は、俺のあの姿を知っているだろう」

「——う……。まあ、そうだけど…」

あの姿。それは、ディバダーの鎧のこと。戦車の主砲を蹴り返したり、核爆弾すら防ぐあの鎧。使う気は無いがな。

「第一俺の本職は狙撃だ。最前線のお前にとにかく言われる筋合いはない」
フロント

「~~~~っ！ わかったわ！ その代わりに、へましないでよね！」

「するものか」

フン、と鼻を鳴らして音に集中していると、慌てた様子のキンジが来た。

なんだ、アリアはちゃんと説明していないのか？ 戦場ではより多くの情報を得た者が勝つというのに…。情報化社会なめてると痛い目みるぞ。

フリーファイニング
「状況報告が済んでいない所悪いが、俺は先に行かせてもらう。3人以上のパーティは向いていないものでな」

屋上の端においてあるバイク——BMW・K1200R——に被せてあるA・TACS迷彩のシートを取り去り、キーを差し込む。

「今回の作戦はバスと乗員の安全を確保し、爆弾を処理すること。
異論は」

「待つて！ 単独行動はやめたほうがいいわ！」

「…………… 1一つのチームに狙撃手は1人として必要ない。俺は、独
りで1軍隊だ」

エンジンをふかし、動作を確認して空気を固め、道路に続く道を作る。

「朗報だ。今、バスはホテル日光へ向かっている——」

ヴォーン！ とエンジンがうなりを上げ、空へ飛び出る。

ゆるやかなカーブを描きながら道路へと降りていき、俺はバスを追いかけた。

雨の中の高速走行——危険極まりないだろう。ほぼ直角のカーブを抜け、暴走するバスを追いかける。

中に乗っている生徒の安全は目視で確認できた。だが爆弾の位置が判明していない。

飛び移って中を探すか、それとも、バスの下にもぐりこんで車体の底を探すか……。どちらにせよ、犯人がこちらを監視している以上チャンスは一度きりだ。

バスに追いついた俺はDESERT EAGLE 14inchを
ヒップホルスターから抜き、バスの車体をゴンゴン、と叩いて窓を

開けさせる。

「中の状況は！」

「え、あ、中は問題ない！ それよりどうしてここに！？」

「武藤！ 御託はいい！ 何か報告があれば言え！ なければ俺は爆弾搜索に入る！」

「ちよつと待て！ 確かこの子が——この携帯だ！」

「貸せ！」

窓越しに武藤からビーズで装飾された携帯を受け取ると、ネットで聞いた覚えのあるボーカロイドの音が流れていた。

「速度を落とすと、爆発しやがります。速度を落とすと……」

「チツ。聞きたくない声だな」

ヘッドホンを首にかけ、携帯をバスの中に投げ返す。

「武藤！ 中に不審物は！」

「ねえ！ 多分外だ！」

「了解だ！」

バイクのスピードを落とし、バスの後ろへつけると同時にヘリが上空に現れ、キンジとアリアが屋根上へ降りてきた。

着地と同時にずっこけたキンジをアリアが支え、なにやら怒鳴っている。

「銀狼！ 後ろ！！」

「なっ！？」

アリアに言われて後ろを見ると、真っ赤なルノーがUZIを取り付けて迫ってきていた。銃口の先には、俺の頭が。

DESERT EAGLE 14 inchを使えば弾き返せる。だが、2つ以上の銃から放たれる弾丸を弾くには、最低でも両手が必要だ。俺はバイクを運転している以上、雨の中で後ろを向いて手放し運転はできない！

——こうなってしまった以上、あれを使うか。

「トランス
変身——」

バリバリバリバリ！ とUZIから9ミリパラベラム弾が放たれ、俺の顔へと迫ってくる。

「――ナノスライサー」

迫ってくる9パラを、刃に変形させた膝まである長髪で全て切り落とす。

ルノーの後ろへ回り込むために更にスピードを落とすと、ルノーのUZIはバスの中を掃射した。

その後UZIは屋根上に出てきたキンジに狙いを定め、キンジは――気づいていない！ あの馬鹿！

アリアはそれに気づき、両手にコルトガバメントを持ちUZIを撃とうとするが、先にUZIのトリガーが動いた。

バイクを踏み台にしてアリアとルノーの間に割り込み、後ろ腰のホルスターから二丁の超金属製のDESERT EAGLE 14inchを抜き――UZIから放たれた弾丸を弾き飛ばす。

踏み台にされた俺の愛車はバランスを崩し、見事なまでに転倒・ガソリン漏れ・火花で引火・大破・既に爆発済み。

あの馬鹿共、絶対弁償させる！

「アリア！ キンジ！ 弁償しろ――！」

「これが済んだらね――！」

両方のDESERT EAGLE 14inchをホルスターに戻し、バスのリアガラスのワイパーに脚を引っ掛け、逆さになって爆弾を探すと、明らかに過剰すぎる炸薬量のC4があった。ご丁寧に速度センサー付だ。解体……は無理だな。道具がない。

道に落ちていた石をキャッチし、上空にいるレキの足元に投げる。
レキが俺に気付いたと同時にC4がある位置をドラグノフで叩き、
位置を知らせる。すると、レキは無言でドラグノフを構え、兆弾撃^{リフレク・ショット}
ちでC4の付いている部品を撃ち落した。

同時に俺は逆さの状態でドラグノフを構え、全てのUZIを撃ち壊す。ついでに俺の愛車が壊れた恨みイ！！

レノーに10発の7.62ミリ×54R弾を撃ち込み、破壊。俺の愛車を破壊した恨み、これで済んだと思うなよ『武偵殺し』の犯人！

「髪が！ 髪がア！！」

道路と接触している髪がかなり痛んだので、ナノマシンで治す。クソッ。髪が長いのを忘れてた。

C4という脅威を失ったバスは徐々に失速し、停止した。乗っていた奴らは運転手以外無傷だそうだ。

俺はワイパーから飛び降り、肩に被弾しているという運転手に近づき、正面の座席に座る。

「名は」

「……………岡田、雄一ですが…？」

「そうか。よく、運転してくれた。感謝する」

岡田と名乗る運転手の被弾した肩に手を当て、指を極細のピンセット^{トランス}に変身させる。

麻酔代わりに岡田の首筋を殴り、軽く気絶させた後、体内の銃弾を摘出。その後、ナノマシンで傷を塞いだ。
元々出血はそれほど無かったので、完全に治療完了だ。

「『武偵殺し』……………これで、終わるのか……………?」

感情を持たないヘリのエンジン音が、ただその場に響いた。

翌日。

俺は壮絶に暇だったので、俺の周りの人物について片っ端から調べた。

まずキンジ。HSS―ヒステリア・サヴァン・シンドロームという身体能力を飛躍的に上昇させる能力―(?)を保持する遠山家の次男。長男、遠山金一は死亡扱い。兄の形見であるバタフライナイフを使用。

次、神崎・H・アリア。ホームズ家の子孫。シャーロック・ホームズ曾孫であり、双剣双銃カトラと呼ばれる。ガバメントのカメオにはアリアに似た横顔が掘られている。追記、でぼちん。
理子・峰・リュパン四世。リュパンの曾孫。こいつも双剣双銃カトラと呼ばれているが見当もつかない。ハッキングや盗撮が得意。あと五月蠅い。

武藤剛気。乗り物と名の付くものであればなんでも運転できるらしい。乗り物オタク。使用銃はコルトパイソン、俺の嫌いなリボルバーだ。俺はよくバイクの改造などを頼んでいる。
レキ。チングス・ハンの末裔。俺と肩を並べられるほどの狙撃の腕を持つが、社交性は皆無。無口・無表情・無感情と俺の好きな人格が揃っているが、異性としては見ていない。ps・風の声が聞こえるらしい。

岡田雄一。武偵高通学バスの運転手。就職理由は女子高生が見られるから。現在休職中。
予断で遠山金一。キンジの兄。実は生きていて、伊・Uにいるらしい。それ以外は知らん。

これが丸一日掛けてわかった情報だ。
外にもキンジの幼馴染とやらがいるらしいのだが、俺は会った事がないので調べてない。

そしてまた翌日。

俺はまたしても壮絶に暇だったので、ちよいと新宿までぶらついてみた。無論レキも後ろにいるわけだが。

俺とレキが並ぶと、丁度レキの頭が俺の鳩尾にくるあたりだ。つま

り身長差が激しい。そして防弾制服・黒で帯銃帯刀（というかナイフ）。

そんなこんなで適当にふらふらしていると、アリア——を尾行するキンジを発見。暇なので尾行。俺はキンジの後ろ１メートルを歩いているというのに、キンジはアリアに気をとられて全く気づいていない。こいつ戦場に行ったら真っ先に死ぬだろうな。

カ——チャンッ

ためしにDESERT EAGLE 14inchのスライドを引いてみたが、気づかない。阿呆だコイツ。
そのまましばし歩いていると、

「下っ手な尾行。シッポがによるよる見えてるわよ」

「あ……」

バレてないとも思っていたのか、キンジは渋々アリアの隣へ行った。俺もそれに伴い、キンジの尾行を続ける。

「で、キンジ」

「なんだよ」

「あんだ後ろの２人に気づいてないわけ？」

「……………は？」

恐る恐るキンジがこちらを向いたので、ビシッ！ と親指を立てる。
なんだ、本気で気づいていなかったのか。

「レキ、ここで待っている」

「……………」

レキが無言で頷いたのを確認し、アリアとキンジの2人と一緒に、
留置人面会室へ。

何故レキを置いてきたか？ 簡単だ。ここから先は、関係者以外は
こないほうがいい。アリアのためにも。

「まさか……キンジまで連れてくることになるとはね」

「ククク…」

「？ ？？ ？？？」

訳が分からず疑問符を浮かべるキンジを無視していると、アクリル
板越しに2人の管理官に連れられたかなえが出てきた。
こいつと会うのは3度目だな。

「まあ……………。アリア、この人彼氏さん？」

「ちっ、違うわよママっ」

「じゃあ大切なお友達さんかしら？　へえ…お友達を作るのさえへ
タだったアリアがねえ…」

「久しいな。かなえ」

「ふふっ。そうねえ。ごめんなさいね、アリアのお世話頼んじゃっ
て」

「いやなに、構わんさ。こういうガキの世話は慣れている。………
………面会時間が短いな、手短に話そう。この冴えない阿呆面
は先週起きた武偵殺しの被害者であり、一昨日は武偵殺しによるバ
スジャックがおきた」

「あらまあ……。怪我とかは、大丈夫だったの？」

「それはどうでもいい。兎に角、武偵殺しの無罪が照明できればお
前の懲役は864年から742年にまで減るだろう」

「あいつはもうそろそろシッポを出すはず。絶対あたしとギンが捕
まえるから！」

「こいつも、だろう」

「キンジは知らないっ！」

酷い扱いだな、キンジ。

「あたしはママをスケープゴートにしたイ・ウーの奴らをここにぶち込む！ 絶対！！」

「アリア、それはまだ早いわ。あなたにはパートナーがない。銀狼さんはそれになりうる素質があるけれど、アリアと核が違いすぎる」

「すまない。力になれず」

「いいのよ。——それより、イ・ウーには深入りしないほうがいいわ」

「……………俺はもう既に、イ・ウーと関わっている。この世界に来たのも、そのせいだろう」

「今からでも遅くは無いわ。早く引き上げたほうが…」

そうだ。

俺はもう、引き返せない。

イ・ウーのこと、アリアのこと、かなえのこと、ホームズ家のこと、超人育成機関のこと。俺は、底なし沼にはまってしまっている。もう抜け出せないのだ。

「時間だ！」

「あ……」

バンッ！

かなえが管理官に羽交い絞めにされ、小さく悲鳴を上げた瞬間――
アリアは椅子から立ち上がり、アクリル板に顔を近づけていた。

「貴様ら…………言動に気をつけなければ、OHNが黙っていないぞ」

俺がそう忠告すると、2人の管理官は首筋に冷や汗をたらし、さつさとかなえを連れて奥へ消えた。

――この世界にも、OHNは存在した。

兵士の皆は俺を閣下と慕ってくれて、アルファードもいた。
しかし、リインフォースたちは……………いなかった。

「……………レキ、少し、付き合え」

「…………ぞ」

「キンジ、そいつは頼んだ」

「え、あ、おう……」

アリアをキンジに任せ、レキを連れてビル街を歩いていく。そうだが、
確か、ここの裏路地のゴミ箱の背にあるレバーを動かせば……………ビー

ッ。

隠しエレベーターが、開いた。
レキを先に乗せてエレベーターに乗り、最上階を目指す。最上階で止まったと同時に4・2・7・4の順でボタンを押すと、更に上へ上がった。

「閣下！ ご苦労様です！」

「新宿警察署の現地エージェント工作員に連絡をして、管理官全員の素性を洗い。それと留置人を移動させる際の移送方法についてもだ」

「報告はどのように」

「情報が出来次第俺の端末に送れ」

「Yes, VIC BOSS！」

OHNの軍服を着た兵士がすぐに謀報課に連絡を取り始め、俺とレキはそれを尻目にビルを出た。
ちなみに帰るときは普通のエレベーターでだ。

俺は、嫌な予感しかなかった。

俺は武偵殺しについてあれから調べるに調べまくったのだが、『可能性事件』とやらが気になっている。

数年前だ。その犯人に仕立て上げられた——スケープゴートにさせられたのが、キンジの兄である、遠山金一。

外にも色々探してみると、武偵殺しは小中大と順にジャックする乗

り物のサイズを変えている。

つまり、今回は小が自転車、中がバス、なら大は――？

今までの事件と照らし合わせ、『大』は必ず武偵を仕留めようとしている。なら、近いうちに中のバスより大きな乗り物に乗る武偵といえ、俺とアリアの2人しかない。

俺はアリアの世話役を頼まれてしまっている、共にイギリス・ロンドンへ行かねばならない。

つまり、俺とアリアが狙われる可能性が非常に高い。正直言って、これはほぼ確実だ。理由は知らんがレキも来るとか言っているが、今は無視だ。

だが、俺が何かをできるわけもなく、ついにロンドンへ行く日となった。レキとはかなり話した後、ようやく納得してくれて、連いてこないということになった。

そして、今はもう、俺とアリアは旅客機のスイートクラスで別々の部屋にいる。無論、俺はSVD ドラグノフとバレット M82 A1とDESERT EAGLE 14 inchとナイフを持っているが、アリアはどうだか。まああいつの事だしガバメント^{ガバ}を持っているそうだが。

なにはともあれ、武偵殺しがこの旅客機をジャックする可能性は高い。事前に分かっていたれば対処も容易ということだ。だから、現に俺は防弾制服・黒のベルトの裏にTNKワイヤーを10メートルほど隠し持っている。

いざとなれば犯人の首を切ることも、殺人罠を仕掛けることも、旅客機から飛び降りることもできる。

そうして俺がバイク弁償してもらってないなー、などと考えていると、旅客機が動き出した。

しばらくして、俺がDESERT EAGLE 14inchの整備を終えると……

『お客様にお詫び申し上げます。当機は台風による乱気流を迂回するため、到着が30分ほど遅れることが予測されます』

そんな機内放送が聞こえた瞬間、雷が近くで鳴った。

そういえば、アリアは雷が苦手でいつも怯えていたなー、などと考えつつ、アリアの部屋へ行くと

「……………ああ、すまん。取り込み中か」

パタンツ。

アリアの部屋のドアを閉め、自分の部屋に戻る。いやー、キンジがあれほど積極的だったとはなあー。

……………ん？ ……キンジ？？
………なんであいつが？

「取り込み中じゃねえ!」「誰がこいつなんかと!」

「む、違うのか」

「つかなんでお前までここにいんだよ!？」

「私用だ。俺としては何故お前がここにいるのか問いたい」

「俺は——その、武偵殺しのことで」

「ああ、やはりか。俺も狙われるとは思っていたが、お前もか」

などと軽く話していると、
パンツ、パン!

という、俺の最も聞き慣れた乾いた音が聞こえた。——言うまでも無い。銃声だ。

2人を押しのけて狭い通路へ出ると、機体前部から小さなアテンダントが機長と副機長と引きずってきていた。——あの力の抜け方は

……気絶か。

………来たか、武偵殺し。

「動くな。貴様を逮捕させてもらっ」

「Attention Please」お気をつけくでやがります」

「む——ッ!」

ピンツ、と胸元から取り出した缶をアテンダントは通路に投げ捨て、缶からはガスが吹き出始めた。

俺はナノマシンとECエクリプス因子のおかげで毒が効かないのをいいことに、DESERT EAGLE 14inchを両手に抜く。

「全員部屋に非難しろ！」

乗客たちが一斉に部屋に戻ると同時に、俺はアテンダントを追いつながら体内でガスの成分を検出したのだが――やられた。完全に無害なただのガス、偽物だ。ダミー

「ここは旅客機の中だ。逃げられると思うな」

「くふつ。やっぱり銀狼が来ちゃったかー」

アテンダントは一階のバーでカクテルグラスを片手に、悠々とカウンターに座っていた。何故か、ひらひらと色々なものがついた武偵高の制服を着て。

しかし、今の笑い方……どこかで聞いたことがあるような……。

「ギンわぁ、言ったよね。自由をくれるって」

「……………貴様、もしや……………」

「うん、そう。りこりんだよ」

「……………流石にリユパンの血統か。変装が上手い」

「褒めてくれてありがとー。でも、逃がさないよ。オルメスを倒すまでは」

「何故だ。何故武偵殺しなんぞをやっている」

「言っただでしょ？ オルメスを倒すって」

「そもそもオルメスとは何者だ！」

「んー、そつかあ。ドイツ語で言うとお…」

—— Holmes
オウメンス。

変装した理子は、確かにそう言った。

「Holmes……………だど？」

「そ。まーつまりい、りこりんはアリアを倒しちゃうよーってこと。もちろん、自由のために協力してくれるよね？」

俺は、ここでNOと言えない。言うことが出来ない。
俺は理子に自由にしてやると言ってしまった。だが、自由を得るにはアリアを倒さねばならない。

だが俺は、アリアのことを任されてもいる。故に、YESとも言えない。言ってはならない。

俺は、どちらの敵に付くことも許されない。

何か他に理子を自由にする方法があれば、アリアの味方になれる。命を救える。

だが、やはり俺にはそれが見つからない。

「……………ノーコメントだ。俺は、お前を自由にしたいとだけ言うておく」

歯を食いしばりながら、理子の座っているカウンターの後ろに隠れる。

何故かって？ アリアやキンジに見つからないようにするためだ。

しかし、どうしたものか。ドラグノフとバレットは部屋に置いてきてしまったし、他の銃は後からウルブズで送ろうとしていたし……………。

手持ちはDESERT EAGLE 14inchだけか……………。^{スベア}予備マガジン

弾倉は2つ。ディバイダーの鎧の分を合わせれば、マガジンは全部で14——合計98発か。

かといって旅客機で50AE弾を撃ちすぎると、機体が壊れる可能性が高いし……………。少し、自制するか。

「理子。……………お前が自由になる方法は他にもあるハズだ。何故それを考えない」

カウンターの裏から理子に訊いてみると、くふふっ、と笑われた。

「理子もシーくんもブラドには勝てないからだよ」

「何故だ。俺ならば勝てるかもしれないだろう」

「あれは人じゃない。人間が勝てる相手じゃない」

「ハッ。人外とでも？ ならば俺が既に人外だ。4回も死んでいる化け物など、人であるものか……」

俺がそう吐き捨てると、理子の方から足音が聞こえた。これは走っている音だ。それも2人分。

「今回もキレイに引つかかってくれやがりましたねえ」

理子の声と共になにかが剥がされる音がすると、キンジの声が聞こえた。

「——理子！？」

「こんばんは
Bon soir」

「ギンはっ！？ ギンはどこ！」

「さーあねえー？ 愛想つかして帰っちゃったんじゃないのー？」

理子の挑発的な返答に、つい俺までイラつときた俺。
待て待て。動くなよ俺。台無しになる。

「アタマとカラダで人と戦う才能ってさ、けっこー遺伝するんだよね。武偵高にも、お前たちみたいな遺伝系の天才がけっこういる。でも……お前の一族は特別だよ。オルメス」

「——！……………あんた……………一体……………何者……………！」

「理子・峰・リュパン4世——それが理子の本当の名前」

俺は隠れているあいだ暇なので、何か理子を自由にする手はないかと考えることにした。

まず、問題となるのはブラドとやらだ。

ブラドという名自体は知っている。OHNのブラックリストにも乗っているからな。

『無限罪のブラド』——イ・ウーのナンバー2だ。

だが俺はそいつの姿を知らない。理子は人ではないと言っていた。真偽の程はわからないが、少なくとも俺ならば倒せるだろう。……

……一応、銃騎士なわけだし、ナノマシンやECエクシプス因子だつてあるからな。

多少人と言うカテゴリーから外れていたとしても、問題ない。

「でも……家の人間はみんな理子を『理子』とは呼んでくれなかった。お母さまがつけてくれた、このかわいい名前を。呼び方が、おかしいんだよ」

「おかしい……?」

「4世。4世。4世。4世さまあー。どいつもこいつも、使用人どもまで……理子をそう呼んでたんだよ。ひつどいよねえ」

「そ、それがどうしたってのよ……4世の何が悪いってのよ」

「——悪いに決まってるだろ!! あたしは数字か!? あたしはただの、DNAかよ!? あたしは理子だ! 数字じゃない! どいつもこいつもよオ!」

突然の怒声に俺は驚き、俺はDESERT EAGLE 14in

chを両手に抜いていた。

な、慣れとは恐ろしいものだ……。

「曾お爺さまを超えなければ、あたしは一生あたしじゃない、『リユパンの曾孫』として扱われる。だからイ・ウーに入って、この力を得た——この力で、あたしはもぎ取るんだ——あたしをッ!」

「待て、待ってくれ。お前は何を言っているんだ……!? オルメスって何だ、イ・ウーって何だ、『武偵殺し』は……本当に、お前の仕業だったのかよ!?!」

キンジよ。

その疑問に、数分前の俺は激しく同意していただろうて。

「……『武偵殺し』？ ああ。あんなの——プロローグを兼ねたお遊びよ。本命はオルメス4世——アリア。お前だ」

クソッ！ 駄目だ！ 最良の方法が見つからない！

どうすればいい！ 考えろ！ 銃騎士・隼人！

理子を救うには——この世界を救うにはどうすればいい！！

——ッ！

………そうか。

………どちらにせよ、この状況をどうにかせねばならないことに変わりはない。

もし理子が捕まったとしても、あいつの持っている情報で司法取引をしてしまえばいい話。

ならば、あの方法しかない——！！

「100年前、曾お爺さま同士の対決は「動くな、4世」………
シー……くん……！？」

「ギン！ あんたそこにいたの！？」

「シーくん！ 加勢してくれ——………なんの冗談？ これは」

「動くなと言った。聞こえないのか？ 4世」

俺はカウンターの裏から出て、右手のDESERT EAGLE

14 i n c hを理子へ向けていた。

あえて理子が嫌う呼び方を使い、冷静さを無くさせる。

「いいか、4世。物事には限度というものがある。4世、お前はそれを超えてしまった」

「——っ……！」

これを好機と取ったのか、アリアが漆黒と銀色のガバメントを構えようとしたので——俺は左手のD E S E R T E A G L E 14 i n c hをアリアへ向けた。

「お前もだ、アリア。俺は、4世に動くなと言ったはずだが」

「ギン……！ まさか、裏切って……！？」

「銀狼！ 武偵殺しの真犯人って、まさか「動くな」——ッ！」

キンジがベレッタ M 9 2 Fを構えようとしたので、俺は瞬時に左手のD E S E R T E A G L E 14 i n c hで撃ち、破壊する。
兎に角、どうにかしてこの場を終わらせねばな…。

「残念だったな、4世。決着はつけません」

「シーくん……。双剣双銃は伊達じゃないよ……！」
カトラ

理子の髪の毛がわさわさと動き出し、ナイフを掴んで突きを放ってきたが——当たると思うか？

髪の毛は俺の目の前で止まり、微動だにしなくなった。

「……………え……………！？」

「『双剣双銃の理子』・『双剣双銃のアリア』……。確かに、どちらも凄いのだろう。だがな、所詮合計しても4にしかない貴様らが、『無刀無銃の銃騎士』に勝てるっても？」

「なんで……！ どうして戻らないの！？」

「森羅万象の覇者。俺をそこの武偵と一緒にするな。俺はお前らで言う超能力持ちの——超偵だ」

「無刀無銃なんて幻想だ！ 存在するはずが無い！」

「なら、見えない弾丸をくらわせてやろうか」

カチンツ、とDESERT EAGLE 14inch同士をぶつけ、理子の髪を止めていたエアロ・スミスを解除する。

「っ！ 髪が自由に……！」

「まあ……いい。まずはお前から片付けよう、理子」

「……………なめないでよね…！」

「ハッ。どうだかな！」

理子が両手にワルサー P 9 9 を抜き、初弾を放ってきた。

俺はそれを避け、理子の腕を腕で反らす。

防弾服を着ている武偵への攻撃手段は刺突武器ではなく、銃弾による打撃が有効的だ。

理子の持つ P 9 9 は 9 ミリパラベラム弾。もし俺の防弾制服・黒にディウイザー当たったとしても、俺からしてみれば大した痛みは無い。

だが、俺の持つ DESERT EAGLE 14 inch は 5 0 A E 弾。一撃でも当てれば、失神ものだ。

ガッ！ ババッ！ ガウン！

マズい！

俺と理子の銃弾のうち一発が、あらぬ方向へ兆弾してしまった――

――！

兆弾した理子の 9 パラはアリアへと迫り――

「チィッ！」

「――っ！」

アリアの側頭部で鮮血を散らせながら、掠めていった。
危ない。直撃よりはマシだったが……。致命傷に近いな。

「武偵憲章第9条。武偵はいかなる状況に於いても、その武偵活動中に人を殺害してはならない」

「なにを言ってるの！？ だから手加減してるとでも！？」

「勝負は預ける。……………俺はお前を守るからな……………」

最後に小さく呟き、理子のスカートへ一発撃ち、理子が後ろへ飛んだと同時にアリアの下へ走った。

両手の DESERT EAGLE 14inch をヒップホルスターにしまい、キンジが俺に警戒する中、俺はアリアを抱きかかえた。

「おい銀狼！ お前裏切ったんじゃ——」

「第9条だ！」

それだけを言い残し、俺はアリアを抱えてこいつのスイートルームへと急いだ。

キンジは第9条と云っただけで理解したのか、バタフライナイフを構えたまま俺の後ろをついてきていた。

部屋に着いたと同時に、アリアをベッドに寝かせる。

「キンジ、出血具合は」

「マズい！ 止血テープでなんとかしてるけど……………」

「あれは気休めだ！　こうなってしまった以上、背に腹は…」

俺がDESERT EAGLE 14inchをマガジンを取り替えている間にキンジが出血具合を見てくれたが、役に立たないな。俺は手の平にナノマシンを集中させ、アリアの側頭部にある傷に手をかざす。

「出血が酷い。場合によってはRazzooラッツォを使っしかないか……？」

「待て！　お前、何を！」

「俺はこの程度の傷なら治せる。お前はラッツォの準備をしろ」

「……………おう！」

キンジの張った止血テープを剥がしてナノマシンで傷を塞ぎ、備え付けてあったタオルで深紅に染まった髪を拭いてやる。

アリアの息はもう掠れ掠れた。意識も殆ど無いだろう。

ああ、そうそう。ラッツォというのはアドレナリンなどを混ぜて凝縮させた、復活薬兼興奮剤だ。本来なら俺がアリアに打つてもいいのだが、面倒なことになるので嫌だ。理由はすぐにわかる。

「キンジ、説明が遅れたが、俺はお前らの敵になるつもりは無い」

「んな話、どうやって信じろってんだ…！」

「信じなくていい。俺は理子の味方もしてやりたいからな」

DESERT EAGLE 14inchを片方だけ抜き、スライ
チェンバー
ドを引いて薬室に初弾を送り込む。

「ラッツォを打ったら気をつける。アリアは異常なまでに薬品への体制が無いからな」

「は？ それってどういう…」

「……………な、な、な、なんじゃこりゃ——！！！」

キンジがアリアヘラッツォを打った後にそう言うと、アリアが手を付けられない程に荒れ始めたので、俺は隣にある自分のスイートルームへ逃げた。

だから言っただろう？ 面倒なことになる、と。案の定だ。

3弾 4世（後書き）

あとがき

作者 「そろそろ原作の一巻が終わるね」

銀狼 「約4話で原作が終わるとか……………配分可笑しいだろう」

作者 「言わないの！」

感想返し

黒鋼 様

作者 「答えよろしく」

銀狼 「ああ。ブルパップは簡潔に言うと、銃床^{ストック}内部に機関部を入れる事で全長を短くさせている物の事だ。ボルトアクションはまあ正解。詳細は作中で紹介するだろう。最後にセミオートマチックだが、これは『単発式』を意味する。つまりトリガーを一度引くと、一発発射されるということだ」

作者 「説明ありがと。次の問題は？」

銀狼 「む…………。全問正解をしてくれなかったので、超初級問題だ。キンジも使っているM92Fと、理子の使っているP99のメーカーを述べよ」

作者 「……………それ、黒鋼さんを馬鹿にしてない？」

銀狼 「これが正解したら次の問題だ」

次回予告

ラッツオを使い、興奮状態となつてしまつたアリア。それを無視してキンジに丸投げした銀狼。無理矢理任されてしまつたキンジ。3人は理子を捕まえることができるのか？

次回、緋弾のアリア、魔弾の射手、4弾 次の事件…？

作者 「なんと、旅客機が止まつた衝撃で次元震が起きるかも？」

銀狼 「なっ……。仕方ない。元管理局員という役職もある。対処するしかないだろう」

作者 「起きるかも、だからね？」

銀狼 「デメエ……。！」

4 弾 次 の 事 件 ……？

……………む。アリアの悲鳴が聞こえなくなったな。

自分のスイートルームを出てアリアのスイートルームへ行き――

「……………」

「……………取り込み中だったか。邪魔したな」

パタムツ。

――ドアを閉めた。

いやーはっはっは。まさかキンジとアリアがキスしているとはな。

「……………む。来ないな」

俺はすぐにアリアあたりがドアを蹴破ってくれたのだ、来なかった。

それどころか、キンジが今までとは違う気迫で出てきた。

「銀狼。どつちに味方だ？」

「両方、と言いたい所だが……………まずは客を入れた俺たち全員が生きて帰れるかだ」

「ならちよつと作戦がある。いいか？」

「……………Ja、今のお前なら信用できる」

俺はキンジの作戦通りにエアロ・スミスで自分の姿を消し、アリアのスイートルームへ行く。

そこにアリアを姿は無く、ベッドには枕と毛布が詰められており、アリアの気配は天上の荷物入れ——キャビネットから気配がしていた。

各部屋に取り付けられている小型の脱出用ハッチは半開きになっており、いかにも俺がそこから逃げたという風になっていた。

俺は内開きになっているドアの陰に隠れるように立ち、右手にマッドブラックのDESSERT EAGLE 14inchを持ち、左手に逆手でシース・ナイフを持って待機する。
キンジの作戦はこうだ。

アリアがいると見せかけたベッドにアリアはおらず、キンジはアリアがシャワールームにいるかのように見せる。そして実は天上のキャビネットに。

半開きになっている脱出用ハッチから俺が逃げたかのようにみせ、理子が来たときに真後ろになる立ち位置になっている。もし俺がここにいるとバレても、俺にはエアロ・スミスがあるので不意打ちも容易。

つまり、4重^{カトロ}ブラフだ。

というか、このようなことをせずとも、理子自体は簡単に捕まえられるのだがな。邪魔がいなければ。

俺らの配置が完了した頃、丁度理子が入ってきた。
両手にフルサー P99を持ち、手のように動く髪でナイフを携えながら。

というかお前、絶対ナノマシン入っているだろう。

「バッドエンドのお時間ですよー。くふふつ、くふふふつ。もしかしたら仲間割れで自滅しちゃってるかなあーなんて思ってたけどおー……………あつ。シーくん……………お友達を見殺しにして帰っちゃったんだ？ 理子も見放されちゃったのかなあー？」

理子は作戦通り、半開きになったハッチを見て誤解したのだが……………
やべ、イラついてきた。本気で殴りたい。

「でもさあ、隠れてない出てきたら？ シーくん」

左手のP99を見えないハズの俺に向け、殺気を飛ばしてくる理子。
それを見た俺は不可視化を解除し、ベッドの端に座る。
ステルス

「ククク……………面白い。お前のその行動には感心だ。そうだな。
代わりとしてはあれだが、ハンデをやるう」

ガシャンツ、カラララ……………、とDESERT EAGLE 14inchを二丁とも床に投げ捨て、ナイフも捨てる。

そのまま俺は、一瞬目だけでバスルームを見た。
それをものの見事に追ってくれた理子は、少しだけ口角を上げる。

「武装を自分から捨てちゃうなんて、おバカさん。でもでも、シ
ーくんにはあの鎧があるでしょう？」

「ハッ。あれを貴様に？ 笑えない冗談はよせ。貴様程度に使う必
要性が1ナノメートルも見当たらないのだが……？」

「……………いいよ。なら、決着付けよう！」

理子が右手のP99をキンジに向けたと同時に、俺は右手の人差し
指と親指を立てて銃の真似をする。
疑問符を浮かべるキンジを目尻に、理子はくふつ、と笑った。

「なあに？ それがシーくんの銃？」

「ああ、そうだ」

「そんなのじゃあ子供も騙せないよ！」

「ならば身をもって知れ、愚か者」

パンツ！

反動で俺の右手が少し跳ね上がり、理子が弾き飛ばされ——壁に
背中を打ちつけた。

困惑する理子とキンジ。天上のキャビネットにいるアリアの気も困惑していた。というか見えるのか、アリア。

フツ、と人差し指の先を息ではらい、重心を後ろにして体を支えるように両手をベッドにつく。

ああ、撃つたのは空気だ。エアロ・スミスでやった。大して威力は無いが、人が飛ぶぞ。

「^{ムトラ}無刀無銃。言語は知っているか」

「……………無限の、無……………でしょ」

ぐつたりとした様子ながら、言葉だけは返ってきた。

「あ……………。^{ミユウ・ノン}半分違う、^{イー・ミユウ・ヤ}だが半分正解。^{ムトラ}無刀無銃は無限の無と、
無いの無だ」

「無い？ ……………存在しないのに無限って、矛盾してない？」

「そう、『矛盾』。それが正解。俺の弾丸は存在せず、尚且つ何処にでも無限に存在する。俺の刃は何処にも存在せず、何処にでも無限に存在する。故に『^{ムトラ}無刀無銃』」

理子が俺のDESERT EAGLE 14inchを拾い、構えてきた。

キンジがアリアから借りたであろう漆黒のガバメントを構えようとしていたので、俺はやめさせた。

「いくらシーくんでも、50A E弾なら効くよねえ……？」

「む……。確かに痛いだろうな」

「痛い？ 痛いじゃすまないよ。理論上なら防弾制服の上からでも骨折程度簡単だから」

「そうだな」

「いいの？ さっきみたいに構えなくて。理子、本当に撃っちゃう撃てばいい」……え？」

「撃つのだろう？ ならば早く撃て。俺はお前のことが終わったら、旅客機これを着陸させねばならない」

「ほ、本当に撃つよ！？」

「……………はあ……………」

深いため息をつき、ポケットから薬草で拵えたタバコを取り出し、火をつけて銜える。

「人を殺す決意が無いのならば銃は握るな。お前は花火でも持ってる」

「……………怖くないの？」

「怖い？ 何故怖がる必要がある」

「死ぬんだよ！？ シーくんだって、これで撃つたら…！」

「そうか。俺はまた死ぬのか」

ベッドから立ち上がり、一步步つゆつくり理子に近づいていく。

すると途端に理子はDESSERT EAGLE 14inchを構えなおし、安全装置^{セーフティ}を解除した。

「Angst zu sterben？」

（死とは恐れるものなのか？）

「Oui……Oui」

（そ………そうだよ）

「Sie sind "Death" ist beängstigt
gend？」

（なら、お前は死が怖いのか？）

「Oui!？」

（当たり前だよ!？）

「ほう………ほう………ほう。人とはそういうものなのか」

ドイツ語とフランス語のやり取りを終え、再びため息をつく。

そう言いながら、タバコを部屋に備え付けてあった灰皿に押し付け、火を消す。

「おい銀狼、お前何を言ってる」

「ああいや、諸事情でな。だがまあ……………そうか。人間は死イコール恐怖なのか」

いい事を知った。

俺がそう呟くと、アリアの気が荒れ始めた。どうやら俺の呟きが聞こえてしまったらしく、俺に対して疑心難儀な感情が生まれているようだ。

「さて、これは返してもらおうぞ。……………理子、これで逃げろ……………」

…」

理子の持っている俺のDESERT EAGLE 14 inchを
取り上げると同時に耳元でささやきながら、閃光弾フラッシュと呼ばれる武偵
弾という特殊な弾を理子に渡した。

それを受け取った理子はP99を手にとると同時に俺にタックルし、俺が少し仰け反ったところでスイートルームの出入り口へと走っていた。

「アリア！」

「わかってるわよっ!!」

キンジが叫び、アリアが降りてきたと同時に理子が閃光弾^{フラッシュ}を床に投げた。

シュパアアアアアア……!

1600ルーメンを超える強烈な閃光がキンジとアリアの視界を奪い、その隙に理子は逃げていった。
態々、俺にアカンベーをしてから。

……… あれは、というふうに捉えればいいのやら。

「あ、アリア。無事か!？」

「目がやられてる! ギンは!？」

「無理だ」

大嘘を平然とつきながらタバコを銜え、火をつけて理子の後を追った。

といつても、歩いてだが。

1階のバーへ行くと、理子が俺に手を振ってから機体の壁をC4で爆破し、飛び降りた。

どうやら元々高度が下げられていたらしく、それほど気圧はきつくない。

といつても、グラスやらワインボトルやらが物凄い勢いで外に散ら

ばっているが。

「全く……。貸し1つだ」

俺はそう呟きながら、2階に戻る。

理子の心配はしないのかって？ 必要ないだろう。飛び降りたということは、飛び降りても平気な状況だったということだ。

コックピットへ続くドアを蹴破り、麻酔銃を撃たれて気を失っている機長と副操縦士を廊下に運び出し、機長席に座る。

えーと、高度は……。うげ。1020フィートか……。まあ、機体に致命的な外傷は無いし、どうでもいいが。

「面倒な……！」

ハンドル上の操縦桿を手前に引き、高度を上げる。

1030.....1050.....1070.....1100。

着々と高度を上げていると、急に操作を何かに奪われた。

計器を見てみると、そこには見たことの無い小さな箱が機械に食い込んでいた。

.....遠隔操縦用の受信機だ。しかも小さく『BY理子』と書かれている。

俺はそれを蹴飛ばして破壊し、機体の主導権を取り戻す。

「おいアリア！ キンジ！ いい加減目エ覚めたか！」

「まだ！ でもあともう少し！」

「俺もだ！」

「チツ。使えん奴らめ……—む。あれは………マズい！
伏せるオツ！！」

俺の声を聞いたアリアとキンジがその場に伏せ、俺は窓の外へ目を
やった。

そこには、対空用のミサイルが迫っていた——！

「エアロ・スミス発動！ エリアルロ——ツ！？」

ドゴオオオンッ！

空気と体に轟音が響き、俺は計器を睨んだ。

燃料計………燃料計は………あつた。Totalは………チイッ
！ 先刻まで600あつたが、今はもう570まで低下してしまっ
ている！

「ギン！ 今のなに！？」

「ミサイルだ！ エンジンを2機やられて燃料ダダ漏れ大サービス
状態になっている！」

「あとどれくらい飛べんの！？」

「もって15分だ！ 少々マズいことになった……！」

どうする。

ウルブズを急行させて乗客を移動させるか？ いやだが、ウルブズの存在がばれば、オーバーテクノロジーありえない科学力として没収されてしまう。エリアル・ロックで機体を空中に止めるか？ ……無理か。なにを言われるかわからない。

『こちら羽田コントロール。ANA600便、緊急通信周波数127・631で応答せよ。繰り返す。127・631だ——』

「フンッ。今頃無線が来たか」

無線をスピーカーに変更し、周波数を指示通りに合わせる。

「こちらANA600便。当機はハイジャックを受け、現在燃料を垂れ流しながら飛行している」

『犯人はどうした』

「乗り合わせていた武偵3人が追い払った。犯人は機外へ逃走」

『……………器官の名は』

「銀狼。ヴァイザード魔法使いの銀狼、武偵だ」

『他の武偵の名は』

「遠山キンジ、神崎・H・アリアの2名」

『では銀狼武偵。着陸の件だが——ザザッ!』

スピーカーから雑音ノイズが走ると、急に通信先が変わった。
と同時に、キンジが復活し、俺のところへ来た。

『ANA600便、こちらは防衛省・航空管理局だ』

「防衛省が何用だ」

『羽田空港への着陸は許可しない。羽田空港は現在自衛隊により封鎖中だ』

「それは訓練か」

『運悪くな』

「ほう……。ならその訓練とやらで忙しいハズの自衛隊は、何故F-15Jイーグルに乗って俺たちの隣を飛んでいる?」

窓から右隣を見てみると、F-15Jが対空ミサイルを積んで飛んでいた。

ハッ。撃墜するつもりか。撃ち落してやろうか。

『…………それは誘導機だ。そのまま海上に出て、千葉方面へ行け。安全な着陸地点へ行き、それから——』

「千葉にANA600便が止まれるほどのスペースは無い。羽田を開ける、クズ」

『……………これは防衛大臣の命令だ』

「ならその防衛大臣とやらにつなげ」

「なっ！ お前何言って！」

「黙れキンジ」

衛星通信で何処かにつながっているキンジを睨んでいると、スピーカーから無理だという音声が届いた。

『ただの武偵とはつなげられない』

「？ただの武偵？…？ ククッ、クククッ…！ おい、貴様の耳はちくわの穴か？ 俺は『銀狼』と名乗ったはずだが」

『それがどうした』

「クハハハハッ！ まだ理解できんのか、低脳め。俺の本職は武偵ではない。俺はOHN総帥の銀狼だ！」

『——ッ！？ わ、わかった！ 今すぐ取り計らおう！』

エンジンの出力を落し、少しでも時間を稼ぐ。
突然の変わり身についていけないキンジが、困惑している。

「お、お前…… O H N 総帥って本当か！？」

「ああ。その通りだ」

『通信代わりました。こちら防衛大臣。総帥のご命令であっても、羽田は開けられません』

「何故だ」

『自衛隊の模擬訓練は事実です。今から緊急撤収させても、20分はかかってしまいます』

「クソが……。これだから貴様ら低脳は」

『……………申し訳ない』

「まあいい。兎に角、俺らの隣にいるイーグルをあと10秒以内に帰らせなければ、撃ち落す」

『まつ待ってくれ！ すぐに連絡する！ おい！ 誰か撃墜用に飛ばしたイーグルに通信を……』

タバコを吐き捨てて踏み潰し、操縦桿にもたれかかる。
燃料は残り少ない。やる気がなくなってきた。疲れた。面倒。戦闘
機乗りたい。戦いたい。撃ち合いたい。戦争行きたい。
だアークソツ！

「１０秒経過だ」

『ちょっと待て——』

そう言うと、隣にひっついていていたイーグルは下がっていった。
どうやら、ようやく命令が届いたらしい。

「燃料が無い、疲れた、防衛省お前らウザい。以上の理由により、今から
独断行動を取る。オーバー」

ブツッ。

通信を切り、操縦桿を左に思い切り切る。
向かう先は、武偵高の反対にある空き地島。

「キンジ。今のお前なら、空き地島まで行けるだろう」

「……………博打だぞ？」

「なに。車輪出して着陸しろといっているわけではない。空き地島
に現在の進入角度で突っ込み、胴体着陸をすればいいと言っている

「ただだ」

「どうやってこの豪雨の中、止める気だ」

「……………俺は魔法使いだ。ウィザードその程度どうにでもなる。燃料には気をつける」

「ああ！」

機長席を出て、目を擦っているアリアを副操縦士のところに移動させ、俺は開けっ放しになっていたアリアの部屋の緊急用脱出ハッチから、外に落ちた。

エアロ・スミスで空き地島へ続く空気の道を作り、スライディングの要領で降りていく。

空気の道と言えど雨で濡れるので、スピードはANA600便より速い。これなら先に空き地島へ着くな。

しばらく滑っていると、空き地島の中心あたりに着地した。

ANA600便のライトも見える。だが……………向こうから空地島が見えているかどうか。

一応念のため角度等は全て設定しておいたが、風もある。多少のズレが生じるだろう。

ヒップホルスターからDESERT EAGLE 14inchを右手に持ち、マガジンの中の50AE弾を全て抜き捨て、閃光弾フラッシュに入れ替える。

「届けよ……………！」

ガガンッ!!

ほぼ同時に放たれた7発の閃光弾^{フラッシュ}は空き地島の地面に突き刺さり、強烈な光を発し始めた。

……クンッ……

ANA600便の機首がわずかに動いたのを確認し、俺はDESSERT EAGLE 14 inchのスライドを戻してをヒップホルスターに収める。

さて……ここからが本番だな。

「こちら銀狼。聞こえるか」

左耳の裏に付けてある小型インカムをANA600便につなぐと、2人の声が聞こえた。^{フラッシュ}
どうやら、先刻の閃光弾で空き地島を捉えられたらしい。

『銀狼! どうするつもりだ!』

『そうよ! いくら無刀無銃^{ムトラ}のあんたでも!』

「無刀無銃^{ムトラ}? 魔法使い^{ウィザード}? 知るか。俺は銀狼だ。止めるといったら止めてやる」

『銀狼! そこを退け! ぶつかる!』

「それでいい。——来い!」

目と鼻の先にまで迫っていたANA600便に向けて両手を突き出し、

「エクリプスEC因子、俺に力を貸せ……！ スタートアップ！」

エクリプスEC因子の鎧を出し、突っ込んできたANA600便を受け止める。

ガガガガガガガガガガッ！！

後ろへ押し返されながらも俺は脚に力をいれ、コンクリートの地面を削りながら速度を弱めていく。

ブースター鎧のバーニアを最大出力で放射するが、まだ止まらない。
空き地島の端まであと20メートル。

「クッ……………！ このオッ……………！！」

あと15メートル。

エアロ・スミスも併用して押し返すが、中々止まらない。

マスターズ・チェンジャーで巨大な氷の壁を作ってみるが、易々と破壊された。

「こうなったら博打だ。ラヴァル・ヴィザー発動！」

ラヴァル・ヴィザーで魔力の立方体を作り、激突させると――
ザアアアアアアアアアアアアアアア……………アアアア
アアアアアン

ANA600便は、止まった。

後ろを見てみると、残りは2メートル。間一髪だ。

俺は鎧を消し、血を吐いた後、タバコに火をつけた。

『ぎ……………ギン！ 止まった！ 止まったわ！！』

「阿呆。止まったのではない、止めたのだ」

『銀狼！ お前絶対人じゃないだろう！！？』

「何を今更」

緊急用のスロープで乗客たちが降りてくると、最後にアリアとキンジが降りてきた。

2人は降りてくるなり俺に愚痴り、車輛科^{ロジ}の奴らが運転する帰りのボートでも愚痴ってきた。

？ありがとう？

――と。

……………フツ。……………まあ、礼を言われて悪い気はしない。

だが俺は、この時気付いていなかった。
俺がラヴァル・ヴィザーで膨大な魔力を空气中に爆散させてしまったことで、極小規模の次元震が起きていたことに――！

あれから3日後。

と、その前に、それまでの経緯をここに書こう。

俺がレキの部屋に入るなりレキが無言・無表情で俺に抱きつき、離れてくれなかった。3日くらい。

飯の時間になると何処からともなくカロリーメイトを出し、俺の口の中に押し込んできやがった。3日くらい。

離れてくれないので（半ば強制的に）一緒に風呂に入った。3日くらい。

人生で一番、着替え辛かった。3日くらい。

離れてくれないから一緒に寝るハメになった。3日くらい。

レキのドラグノフがゴツゴツ当たって痛かった。3日くらい。

レキのヘッドホンがゴツゴツ当たって（ry。3日くらい。

レキの感情が完全に理解できるようになった。3日くらいで。

ちなみに、土日月の3日間やられたので、武偵高では物凄く噂された。

俺はA組なのに、C組のあいつがいたからもう大変。主に隠れファンクラブの奴らが。

で、今に至る。

「……………本来であればこれ以上に私を心配させたので、あと2年間はこの罰を与えたかったのですが……………貴方も充分反省しているようです、このくらいにしておきます」

「ああ、すまなかった」

反省の『は』の字もしていないがな。

「……………ですが、このままだと私が腑に落ちないので、これから貴方のことはギンと呼ばせていただきます」

「呼び名など勝手にしろ」

「では、ギン。最後の罰として夕食を奢ってください」

「全く……………。なにか希望は」

「そのファミレスで一番高い物の特盛です」

「な……………いい度胸だ。言ったからには全て食べよ?。」

「はい」

そう言ったレキの無機質な声からは、『嬉しい』という感情がハッキリと受け取れた。

レキがドラグノフを背負い、俺もドラグノフを背負う。

部屋を出て18時半の人工浮島^{メガフロート}——学園島を歩く。

夕日が3分の2ほど顔を出している中、俺とレキは横に並んで歩いている。

順番としては、道路 俺 レキ、の順で。

「……………」

「……………」

俺も、レキも、やはり無言。

そんなとき、ドラグノフを背負っている右肩ではなく、反対のレキの左手が、わずかに俺のほうへ反れていた。

それに伴ってか、顔もわずかにそっぽを向いている。恐らく、右に1度くらい。

だが、しっかりと、レキの心拍数は上昇していた。4くらい。つまりは高揚しているということだ。

「…………… ったく」

「……………？ これは……………どういっつもりで……………？」

「さあな」

丁度俺の肘の位置にある、レキの右肩に腕を廻す。
ちなみに俺の身長は196センチ。レキが150強くらい。
なので、こいつが俺にタツクルすると、レキの頭が丁度良く俺の鳩
尾に入る。あれは痛い。かなり痛い。思い出すだけでも顔をしかめ
たくなる。

「……………どういうつもりだ」

「……………さあな、です」

レキが俺の右手を両手で握り、嫌味のように俺の言葉で返してきた。
と言っても、反論する気にもならない。するだけ馬鹿馬鹿しい。

学園島に唯一存在するファミレス・ロキシーのボックス席に座り、
メニューを眺める。

……………レキよ。いい加減俺の隣から離れる。ボックス席の意味が
無いだろう。

「……………」

この野郎……………わかってて俺の隣にいるな…？ 周りの武偵に物凄
い見られているのだが……………
まあいい。

腹をくくってメニューから一番高い物を探すと……………

「……………すいません」

「あつ、はい！ ご注文はお決まりですか？」

「……………このうな重2倍スペシャルの特盛を…」

「はいっ。うな重2倍スペシャル特盛ですね」

「俺は……………コスタリカ・コーヒーで」

「はい。では、うな重2倍スペシャル特盛と、コスタリカ・コーヒーでよろしいでしょうか？」

「ああ」

「少々お待ちください」

1つ言わせてくれ。

レキの頼んだ『うな重2倍スペシャル』の値段はな、……………

……………もう見たくもない。

うな重で4000円超えとか何様のつもりだ。しかも特盛だから6000円超えてるし。

……………ああ、そうだった。レキはファンクラブ内で『レキ様』だったな。

畜生！ 銀行行って金おろすの面倒だッ！ レキ様！ 代わりに行ってこい！

「……………」

「……………」

俺の右隣に座る無言のレキが、ぽすつ、と頭を寄りかかせてきた。
……………正直言うと、こういうのは慣れている。今までフェイトや
リインフォース、イヴやティアたちにやられていたからな。
だが……………俺の隣にいるのは『レキ』なわけで、そう簡単に考え
るべき事ではない。

「……………ギン。貴方は何故、ドラグノフを使うのですか」

「……………お前が使っていたから、では駄目か……………」

「……………いえ」

実を言うと、俺がドラグノフを選んだ理由は別にある。

銃声が金属的なのと、装弾数と、実戦的であるということだ。

AKを基に設計されているということもあり、泥を詰めても平気だし、多少の悪環境なら絶えられると言う剛性。それと、銃剣を付けられると言う強み。

それに重心のバランスも良い。

「お待たせしました。お先にコスタリカ・コーヒーでございます」

「ああ」

「こちら、うな重2倍スペシャル特盛でございます」

「……………」

レキが無言で頷き、うな重を見つめる。

うな重は大きなどんぶりに乗せられ、米が2・5合・うなぎ1キロくらいの配分だ。

レキはそのまま静かに割り箸をキレイに割り、一瞬目が光ったように見えた。

ヒョイツ、パクツ。

ヒョイツ、パクツ、ヒョイツ、パクツ。

隙を感じさせない勢いで次々と米を食べていき、レキの生活や体格からは考えられないほどのスピードで食べていた。

こいつが一回で口を含む量は、寿司1貫の半分程度。だが、それを次々と口に入れている。

次が入ると同時に1貫の半分の量を飲み込み、また入れると同時に飲む。

そうしているうちに、2合以上あった米は5分程度で無くなった。俺はその光景を見ていたので、全くコーヒーに口を付けていない。ここでようやく1口目を飲んだ。

「……………」

啞然。

明らかに1キロ近くあるであろう特盛のうなぎを、寿司のネタと同じくらいの大きさに切ると、先刻と同じ様に食べていった。

は……………速い。

啞然としていた俺がコスタリカ・コーヒーを飲み終わると同時に、レキが箸を置いた。

おいおいおいおい……………。本当にレキか？　いつも某蛇兵士のようにカロリーメイトばかり食べているというのに、意外と大食いなのだな…………。そして食うの早い。

「……………食ったか。なら、帰るぞ」

「……………ありがとうございます。奢っていただいて」

「お前が奢れと言ったのだろう。罰と言つ名目で」

「……………そうでした」

レジで会計を済ませ、店を出る。

その後帰路へつくと、キンジの部屋から聞こえる物音が荒れていた。ここから見えるのは、巫女装束を着た女が日本刀を振り回し、アリアが応戦し、キンジがベランダの物置に入っていた。という光景。……………キンジ、その対応は正解だ。その物置は防弾物置。つまり、己への被害が最小限になる。

俺が物置に入ったキンジを見守っていると、右隣を歩くレキに手を取られた。

そして、俺の黒地の革手袋を外そうとし……………

……………バツ！

俺は、咄嗟に手を引いた。

何故手を引かれたのか、理由がわかっていないのであろうレキは無言で俺を見つめ、俺は革手袋を詰め直す。

俺がこの革手袋をしているのには、理由がある。

それは簡単だ。俺のような殺戮者の手に触れてしまい、そいつを汚したくないからだ。

昔からそうだ。俺の素手に触った奴は、2日以内に死ぬ。だからこそ、触らせない。

「……………すまん。だが、外そうとするな」

俺は後ろのポケットから葉草のタバコを取り出し、火をつけて銜える。

左肩に掛けていたドラグノフを下ろし、レキに渡す。

「ここはお前の距離ではない。先に行け」

「……………わかりました。では、部屋で落ち合いましょう」

「ああ」

レキの背中を軽く押すと、レキは勢い良く走り出した。

俺は後ろ越しに隠してあるヒップホルスターから、マッドブラックの DESERT EAGLE 14 inch を二丁抜いて両手に持ち、後ろへ振り向く。

「動くな。お前は何者だ。何故この世界の人間が魔力を持っている」

夕日が沈み、暗い夜道に向かって問いかける。

俺の体に寄生しているEC因子は、魔力反応を検出していた。
エクリプス

「武装解除をし、大人しくこちらへ来い。さすれば攻撃はしない」

俺は夜目が効く方だが、400ヤード——約365メートル——ほど離れているので見えない。

流石に夜目が利くといっても、この距離は無理だ。

カコンッ

突然聞こえたその音に反応し、俺は右手のDESERT EAGLE 14inchを向けた。

今のはボルトアクションライフル特有の音だ。

……ああ、ボルトアクションというのは、1発1発を手動でボルトをコッキングし、発射するシステムの銃。主に狙撃銃に多く、スナイパーライフルこのライフルは射撃制度が非常に高いという点がある代わりに、連射が利かないという悪点もある。

「動くなと警告はした。それ以上抵抗をするようであれば——ッ！」

バギンッ！

俺に向かって放たれたライフル弾をDESERT EAGLE 1
4inchで叩き落し、見えないそいつの周りに数発威嚇射撃をす
る。

すると今度は、41AE弾が飛んできた。

だが、それは威嚇射撃のつもりか、俺の右方向へと飛んでいった。

「……………お前は……ッ！」

雲に隠れていた月が出ると、そいつは月明かりに照らされ、姿を現
した。

——俺と同じ様に、膝まである白い髪。

——俺と同じ、蒼い右目に紅い左目。

——レキより少し大きいくらいの身長。

俺が前の世界においてきた、彼女が——

——『イヴ』が、そこにはいた。

4弾 次の事件……？（後書き）

あとがき

銀狼 「イヴ!？」

作者 「てへっ」

銀狼 「おい作者! どういうことだ!」

作者 「ちょ、まつ。まだイヴと決まったわけじゃ」

銀狼 「む……。そ、そうだな。落ち着こう」

感想返し

黒鋼様

作者 「銀狼、答えをお願い」

銀狼 「うむ。……………正解だ。ベレッタとワルサーは固

有名称というより、会社名で合っている。知っているとは思うが、

キンジが使うのがベレッタM92F、理子がワルサーP99だ」

作者 「んじゃあさ、次の問題は？」

銀狼 「そうだな……………。では、ベレッタM92FとワルサーP9

9の使用弾薬を述べよ」

作者 「ヒントは『同じ弾薬』です!」

銀狼 「そして最もポピュラーということだ」

次回予告

銀狼の目の前に現れたのは、『始^{イウ}りの姫』だった。少しずつ感情を覚えるレキは、今までに無いほどの怒りを体現する……！？
次回、緋弾のアリア！魔弾の射手！ 5弾 小さくて

レキ 「ギン。彼女^{イウ}は私の天敵のようです」

銀狼 「……………は？」

5弾 小さくて

「……………イヴ……………!?!」

「……………はや……………と……………?」

ガシャンッガヤシャシャンッ。

あまりに唐突なことで、両手に持っていたDESERT EAGLE 14 inchを落とし、俺は目を疑った。
ここにいるハズがない。

イヴは、前の世界に——なのはたちのいる世界に、おいてきたのだから。

「隼人……………!!」

「……………ッ……………」

たたたつ、と俺のほうへ走ってきたイヴを視界に捉えながら、落し
てしまったDESERT EAGLE 14 inchをヒップホル
スターにしまい——シース・ナイフの切っ先^{ポイント}をイヴに向けた。

イヴはそれを見た瞬間止まり、俺との距離はおよそ1ヤード——約
1メートル——しかない。

俺のシース・ナイフは超金属^{オリハルコン}製で、全長は21インチ——約50セ
ンチ——だ。いつでも刺殺できる距離だな。

「Wir können nicht entkommen」
(私たちは逃げられない)

「……………え？」

「Aber weg」
(だけど、逃げたい)

「あつ。…………Traurig…………」
(……………悲しいよ…………)

「Ich ersticke」
(……………苦しいよ)

「Beten」
(お願い、)

「Helfen Sie mir」
(私を助けて)

俺がイヴと出会ったときに歌った歌を歌うと、イヴも続きを歌い始めた。

これを知っていると言うことは……………本者か。

「……………何故、この世界へ来れた」

「わからない。極小規模の次元震が起きたと思ったら、ここに立ってた」

「……………そうか」

俺はシース・ナイフをベルトに付けられている鞘シースに収めた。
それを見たイヴは途端に笑顔となり、0ヤードにまで近づかれた。
つまり抱きつかれた。

「隼人……………隼人おっ！」

「な…………泣くな。頼むから」

「やっと会えたんだよ…！ 6年ぶりに！」

「ああ、そうだな。6年ぶりに……………は？」

「……………ん…？」

「待て。6年だと？ 俺はここに来てから半月しか経っていないし、
俺がこの世界に来たのは俺が消えてから1年後だ」

「そう……………なの？」

「そうだ。俺はお前や遊騎たちが飲み会をやっていたのを聞いている。
その後すぐに俺はここに来た」

「でも、私……………せいこう聖祥高校の2年だったんだよ？ それに、ほら。成長せいじょうもしたし……………」

そう言つてイヴが離れて両手を広げると、確かに聖祥女子高校のブレザーだった。身長も幾分か伸びて155くらいあるし、一番の発展と言えは……

「胸だつてフェイトさん並になつたんだよっ？」

そう。胸部だ。

高2にしては過剰ではないかと思われるくらいの胸部は、理子と張り合えるくらいはある。多分理子より大きい。俺はそれを直視しないようにしながら、タバコを銜える。

「無用な説明はいい。兎に角、話は部屋で聞く」

「部屋？」

「ああ。今は……その、潜入中だな。間借りしている部屋がある。そこへ行くぞ」

「うんっ」

流石に高校生やってるとは言い辛いので、適当に誤魔化す。そのまま女子寮に行き、最上階にあるレキの部屋に入ると――

「……………誰ですか」

「……………」

「……………」誰ですか」

「……………」

「……………」誰ですか、その方は」

「……………」

案の定、レキによる尋問が始まった。

さてどうするか。

ここで素直に「俺の子だ」と言うか、それとも「迷子だ」と言うかはたまた「勝手についてきた」と言うか……。

マズいな。最初のはレキに撃ち殺される。次のと最後のはイヴに刺される。それか泣き出す。

……………どうやってこの場を回避しろと。

「……………」レキ」

「……………」はい。なんでしょうか」

「……………」今度、台場のラーメン屋で一番高いのを食わせてやる」

「わかりました何も訊きません」

そう言うとレキはさっさとドラグノフを整備を始め、俺は安堵の溜め息をついた。

だが、今のでわかった。レキは意外と食べるのが好きらしい。まあその割りに、カロリーメイトばかり食っているが。

「さて……と。イヴ、お前の兵科は」
ボジション

「え？ あ、重火器支援だよ」
マシンガンナー

「………ということは強襲科か。狙撃はできるのか」
アサルト

「あんまり自信は無いかな……。700ヤード——約600メートル——くらいが限界だと思う」

「……そうか。身長は」

「156」

「平均……くらいか。了解だ」
コピー

イヴを適当なところに座らせ、携帯で担任に電話する。
7時過ぎだが……別にいいか。

『もしもし？』

「ああ、ゆとりか。俺だ」

担任、高天原ゆとり。

2年A組の担任であり、唯一武偵高の教師でまともな人間だ。

『俺…？ 銀狼さん？』

「少々頼みがあるのだが、いいか」

『それは構いませんけど……。先生のことを名前で呼ぶのは』

「訳ありで詳しくは話せないが、1人分の偽造転入届を用意してくれ」

『どうして？ それと呼び方のことだけど』

「訳ありだと言ったハズだ。明朝教務科^{マスターズ}へとそいつと共に向かう。制服はこちらで用意するから、情報操作を頼む」

『訳あり……。そうね、わかったわ。でもその前に呼び方を——』

ブツッ。

電話を切り、ポケットにしまう。

「レキ、制服を1着こいつに貸してくれ」

「……………わかりました」

レキが自室から制服を持ってきて、イヴに渡した。

「イヴ、とりあえずそれが合うかどうか着てみる」

「わかった」

イヴが空いている部屋に移動し、パタンツ、とドアを閉める。
すると、レキが俺の目の前から顔を見上げてきた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

無言。

「……………」

[.....]
[.....]
[.....]
[.....]

無音。

[.....]
[.....]
[.....]
[.....]

無・音。

[.....]
[.....]
[.....]

「……………話す気になったときに、話してください」

「……………ああ。話せるときになったら——話すべき時が来たら、全てを話す。俺のことも、あいつのことも」

「……………そうですね」

レキが部屋に戻って7・62ミリ×54R弾を作り始めると、ボソツとつぶやいた。

「その時まで待っています」——と。

「うう……。隼人、これ無理だった……」

「無理？ 身長はどうだった」

「違っの……………？ 胸？ が」

パキンッ！ チキンッ、チチィ——……………ン

何かが落ちた音がしたのでレキの方を見ると、レキが火薬の入った薬莢をテーブルから落し、7・62ミリ×54R弾の弾頭を握り締めていた。無表情で。

「……………すみません。私では小さかったようですね。胸が」

ドスの効いた声でレキがそう言うと、制服をクローゼットにしまった。

そうか…………寸足らずか。なら、理子に訊いてみるか。携帯から理子に電話をしようとしたところで、気付いた。今、理子いないし。

何処に行ったのかすらわからないし。

……………そうだ。女たらしとあだ名されるキンジに訊こう。あいつなら持っているかもしれない。持ったら通報するが。

「キンジ」

『……………銀狼か？』

「ああ。お前、女子の制服持ってないか。身長が156で、できるだけ胸部の大きいやつ」

『……………無くはないが、どうすんだ？』

「至急必要になってな。今から平気か？」

『んまあ……………なんとかな。だったら中にいる2人を止めてくれねえか？』

「……………善処しよう」

キンジとの通話を切った後、コネク通信科——無線機を使つての広報を学ぶ学科——にいる、なかそらち中空知・みさき美咲の携帯につなげる。

『はい、中空ですけど』

「明日の広報掲示板に『2年A組・遠山キンジの室内から女子生徒の制服発見！?』と書いておいてくれ。新聞部にも通達を」

『ええ、わかりました。報酬ギアラはいくらですか?』

「明日の昼飯を奢ってやる」

『……わかりました。では、失礼します』

携帯をポケットにしまい、俺は少し満足した。
と、こうしてはおれん。

俺はイヴを連れて部屋を出て、イヴを抱きかかえて階段の手すりを蹴り、第三男子寮のキンジの部屋のベランダへと跳び移った。

防弾物置をゴンゴン、と叩くと、中から怯えきったキンジが出てきて、女子の制服を渡してくれた。

明日大変なことになるからな? お前。

そっ心の中で忠告し、俺は再びイヴを抱きかかえ、女子寮へと戻った。

キンジに貰った制服は少し大きかったものの、胸部は特に問題なかったそうだ。

後日聞いた話によると、この制服は幼馴染のだったそうなの。というか、何故持っている。キンジよ。

そして、明朝。

俺はイヴとレキを連れてマスターズ教務科へ向かった。
無論、イヴの事を話す為だ。

「おい、ゆとりはいるか——ぬおッ!？」

マスターズ教務科のドアを開けた瞬間飛んできたM500S&W弾を右手で叩き飛ばし、壁に突き刺さった。
今のは……………誰だ。

「敵対行為として撃ち殺すぞ、らんびょう蘭豹」

「おう、やってみろや!」

俺の脅しを一切無視する、180くらいある大女、アサルト強襲科教諭・蘭

豹。

使用銃はS & W M 500。初速は恐ろしく速いが、20メートル以上の距離だと44マグナムと同じ程度の威力になってしまふ、至近距離専用のM 500 S & W弾を使う、『像殺し』の銃だ。

「……………と、いつもなら言っているところだが、今はお前と遊んでいる場合ではない。おい、ゆとり、いるのか」

「あつ、はい。おはようございます」

「おい銀狼ウ！^{シルバーウルフ} さつきあたしの銃弾、手で弾いただろ！？ もつかいやれえ！ 撃つたるから！！」

「遊んでいる時間は無いと、言ったハズだが……………」

M 500を振り回して騒いでいる蘭豹を睨むと、黙った。というか、その場に居た教師全員が硬直してしまった。……………少々、殺気を飛ばしすぎたか。

「……………チツ。しゃあないな……………」

「……………で、準備はできているのか」

「は……………はい。大丈夫ですよ」

^{マスターズ} 教務科の出入り口に居たイヴを手招きし、俺の隣に立たせる。

一応武偵高の制服を着せ、スカートの下——右太股に、41AE弾仕様のDESERT EAGLEを持たせてある。バレルは6inchの通常型だ。ナイフはCRK Mark・IVを左太股に潜ませている。刃折峰とも呼ばれる凹型のセレーションを備えた、高精度のナイフだ。

「銀狼さんと同じ、ドイツからの留学生とすることにしてあります」

「助かった。ほら、礼を言え」

「あ、えと、ありがとうございますっ」

「いいのよ。……それで、2人はどういった関係で？」

——ピシッ

空気が、固まった。

どどどどどする。ここで素直に言うか？ それとも誤魔化すか。逃げるか。

いや、逃げられない。狙撃科教諭・南郷なんごうがM16A2を徹底的に改造した狙撃銃スナイパーライフルを構えてるし、蘭豹もM500ダギユラを構えてる。それどころか、尋問科教諭・綴つづみは鞭とG18を持ってやがる。完全に俺を包囲してるぞ……………！！

「……………ゆとり」

「なんですか？」

「……………人にはな、言えない事が幾つかあるものだ」

「そうですねえ」

「というわけだ。イヴ、レキ。先に行け」

「生きて帰ってきてね」

「ああ」

イヴとレキが先に教務科を出たのを確認し、俺は魔力を溜める。
こつなったら、撃たれたと同時にエアロ・スミスで壁を作るか……？

「ところで蘭豹、フラッシュ・グレネード閃光手榴弾の訓練はやったのか」

「おうよ。スナイプお前が狙撃科に言ってるあいだになあ！」

「……………そうか」

俺は体を傾け、教師たちから見えないように、右手にスタン・グレネード閃光音響手榴弾を用意する。
スタン・グレネード閃光音響手榴弾とは、100万カンデラの閃光と170デジベルの爆音を発生させる手榴弾だ。強襲する際の手段の1つにもなっている。

見えないように安全ピンを抜き、セーフティレバーを放す。
セーフティ

「さらばッ！」

「あつ！ てめ！ ——っ！！」

閃光音響手榴弾を空中に投げ、俺は教務科を走り去った。
スタン・グレネード マスターズ

ギイイイイイイイイン！！

耳をつんざく爆音と視界を奪う閃光をマトモに食らった教師たちは動きを失い、俺を追うことさえ忘れていた。
危ない危ない……。念のために防弾制服・黒ネイロの上着に忍ばせとてよかった。

「……………お、あつた。中空知め、中々の速さだな……………」

廊下にあつた広報掲示板を見ると、俺が昨夜伝えた内容がはつきりと書かれていた。
でかしたぞ、中空知。昼飯の弁当を少し豪華にしておいたかいがあった。

新しい閃光音響手榴弾を買わないとなー、などと考えている間に教室に着き、自席に座る。
スタン・グレネード

まだアリアとキンジは来ていないらしい。というか教室に俺しか居ない。……………まあ、今はまだ7時20分。教務科へ行く用があつたから早く来たが、早過ぎたな。
マスターズ

俺がDESSERT EAGLE 14inchを二丁とも通常分解
リッピング
清掃していると、1人の女子が入ってきた。
ファイールド・スト

確か……………強襲科の木村・楓かえてという名だったな。
アサルト

楓は俺を見るなり急に赤面し、ギクシャクした動きで俺の前に来た。

「お、おは、おはようございますっ!」

「……ああ。早いな」

「ひゃい! いつも、この時間に来るので……」

「……………早起きは良い事だ。続けるといい」

「は、はいっ! ……………あのっ」

「なんだ」

DESERT EAGLE 14inchを組み直し、マガジンを入れてない状態でコッキングし、動作確認。問題なし。

マガジンを入れ、後ろ腰のヒップホルスターに二丁ともしまう。

ヒップホルスターの横にあるシース・ナイフを二本抜き、刃の砥ぎ具合を確かめる。問題なし。

ナイフを鞘に戻し、俺はヒップホルスターに付いているマグポーチからDESERT EAGLEのマガジンを抜き、弾を確認する。

ちら、と黙り込んでしまった楓を見ると、顔を真っ赤にしていた。

「……………大丈夫か。顔が赤いが……」

「——ふえっ!? ……………っ!」

セミロングの髪形を乱しながら楓が驚き、更に顔を赤くした。まるでリンゴ並だな。

流石に心配になった俺は楓の前髪を左手で上げ、右手を額に当てて熱を確認するが……………大した事は無い。

「調子が悪いのならば救護科^{アンビュラス}へ行け。歩けなければ送るが……………」

「だだっ！ 大丈夫ですっ！！」

「……………そうか」

そう言っただけで俺がマガジンから50AE弾を一発抜き、楓に投げると——コッソ。楓は「ひゃうっ！」などと言いながら額に直撃した。

「どこだ大丈夫だ。この程度もいなければ死ぬぞ」

「すっ、すみませんっ！」

床に落ちた50AE弾を拾い、マガジンに戻す。

マグポーチにマガジンをしまつと、楓は大事な話があるといってきた。

「……………？」

「あつあの！ わわわ私！ 銀狼さんが転入してきたときから気になつてて……！」

「……………で？」

「そつその、つ……………付き合つてくださ「ムリだNein」——へっ？」

「すまないが、俺は誰にも愛される気は無い。逆に、愛する気も無い」

「えっ、ま、まさか、男性を……！？」

「違う。俺は性別・種族関係無しに、愛する気も愛される気も無い」

160くらいの身長の楓は、俺を見上げている。まあ俺が196あるからな。

俺は楓の顎に左手を添え、くつ、と上げる。

「俺の事は忘れる。覚えていてもロクな事が無い」

「ふえっ！？」

「それに俺は27だ。歳が違いすぎる」

「は……………ひゃひっ！」

とうとう頭から煙を上げて気絶してしまった楓を抱きかかえ、こいつの席に座らせといてやる。

楓を座らせた後、自席に戻ると――教室の出入り口に、にこにこ
と笑みを絶やさないう男が居た。

「……………確か、不知火・亮しやうといったか」

「ええ。覚えていてくれたんですね」

「使用銃はH&K SOCOM Mk23・LAMレーザー・エイミング・モジュラサルト付属。強襲科所
属・武偵ランクはA。拳銃・格闘・ナイフ、全てにおいて優秀……
だったな」

「ッ……………何処でそれを？」

「マスタース教務科のデータベースを拝借した」

「自分でかい？」

「ああ。それがどうした」

「いえ。レザド諜報科に頼まず自分で……というのには、驚きました」

「そうか」

亮が自席に座り、カバンから教科書などを机に入れる。
俺はそいつの後姿を、ただ眺めていた。

「……………人に探りを入れるのはいいが、俺の情報には入らんぞ」

「……………そうですね。あまり良い成果はありませんでした」

「探すだけ金の無駄だ。大人しくしている」

「……………身体能力が異常に高い、というのはわかりましたけどね？」

「……………フン」

「蘭豹先生のM500S&W弾を素手で——いえ、性格には手袋つきですが……………。それ、普通の革手袋ですよね？」

「ああ。普通のな」

「どうやら、こいつは教務科でのやりとりを見ていたらしい。
チッ。できる限り知られたくは無いが……………。まあ、見られたものは仕方がない。」

「キンジ君でもできませんよ。そんなこと」

「ハッ。それがどうした。俺にとっては普通だ」

「いいえ。全然ピュラーじゃありません。一般的には」

などと言い合っていると、8時を廻り——殆ど全員が登校してきた。

キンジは疲れきった顔で。

アリアはキンジを見て真っ赤な顔で。

ゆとりは騒ぐ生徒を見てげんなりしながら。

……ああ、いつもの武偵高だな……

そんな事を考えていたのだが、俺の安堵はことごとく破壊されることになった。

そう、イヴがああ発言さえしなければ——。

ホームルーム

HRになり、教室が静かになると、ゆとりが転入生の話をしてきた。生徒たちは珍しがり、ゆとりに男か女かを訊いたりしている。

主に男子が。

ホワイトウルフ

「銀狼さんと同じドイツの武偵高から留学してきた、白銀狼ちゃんです」

「あ、えっと、白銀狼です。本名じゃないですが、事情があってコードネームしか言えません」

アサルト

スナ

「白銀狼ちゃんは銀狼さんと同じ出身で、科目も同じ強襲科と狙撃科の掛け持ちだそうです」

「え、えと、お願いします！」

イヴが頭を下げると、発達しすぎた胸部と長い白髪が垂れ下がり、男子たちが歓声を上げた。

ガガウンツ！！

俺は天上に二発50AE弾を放ち、男子どもを黙らせる。

………というか、男子どもにああいう目でイヴを見られると、殺したくなる。

「はい、しつもん！」

「白銀狼ちゃん、いい？」

「はい。大丈夫です」

「銀狼さんと髪の色とか目の色が一緒だけど、どついう関係ですかー？」

ハッ、とその事に気付いたクラスの連中が俺に視線を向け、銃を構えた。

な………なにか、壮絶に嫌な予感が。

「関係、ですか？ 隼人とは——あつ、えと、銀狼とは、親子です。」

ジャキジャキンッ！

一斉に男子が各々の銃を構え、俺に向けてきた。
流石は武偵高。やる事がOHNの兵士と同じだ。

「待て！……………白銀狼、今なんと言った」

「え？……………あつ！銀狼とは、従妹ですって」

『なんだ、従妹か』

『今、親子って聞こえたような……』

『危ねー。銀狼を殺すところだった』

『お前が殺されるだろうけどな』

死線を免れた気がする。

「で、白銀狼ちゃん、本当は？」

ゆとりがイヴにそう訊くと、イヴは緊張していたらしく――
言ってしまった。

「親子ですっ」

——と。

俺は深いため息をつき、ホスルターの閉め具合を確かめる。

「えー、では、今朝のHRはここまでにします」

「きりーっ」

クラス全員が立ち上がり、銃を構える。

「れい」

「『『『『『
銀狼シルバーウルフウウウウツ！！』』』』」

「さらばだッ！」

俺はイヴを抱きかかえ、適当に逃げた。

後ろから聞こえる銃声を聞き流しながら、俺はひそかに学校行事のことを考えていた。

そう。何を隠そう、俺は学校行事というものを1つも経験したことが無い。

つまり、学校関連のことについては全く無知なのだ。

とまあ、何故俺が急に学校行事のことを言い出したかというと、近々『アドシールド』と呼ばれる武偵の国際協議会が開かれる事にな

っている。

俺はガンシューティング
スナイピング拳銃射撃競技日本代表に選ばれたが、「面倒」の一言で辞退。
狙撃競技日本代表も辞退。身代わりにレキを推薦しておいた。

で、色々あつて昼飯時。

俺はカバンを持って教室を出て、C組の教室のドアをノックする。
すると、中から何人かの女子が出てきて俺を取り囲んだ。

……………五月蠅い。

「すまないが、美咲を呼んでくれ」

「美咲？ なつちーの事？ まあいいけど……。おい！ なつち
ー！」

『い、今行きますっ』

教室から呼ばれて出てきたのは、中空知・美咲。前髪は俺と同じ様に
眼の下まであり、後ろ髪も俺と同じくらいの膝まである。そして
胸部が——これまたデカイ。シグナムと同じくらいだろうか。
それともう1つの特徴が、酷い内股だ。まるで脚がXのように見え
るほどだからな。あとは……………メガネだな。視力が悪い。

「って、あ、しっ、ししし！　銀狼さんシルバールフっ！？　な、なんで、ここにっ！？」

「昨晚言っただろう。昼飯を奢ると」

「で、ですが、その、お、おお、男の人と、おしよつ、お食事は、初めてで。あつ、でも、頭の中では、い、いえ、なんでもないですつ。銀狼さんが、ええ、映像よりもカツコ良くてとか、頭の中では一緒に、あ、っその、なんでも、ありま、せんっ！」

……………実を言うと、この中空知は異常なほどに上がり症なのだ。

インカムや携帯など、直接でなければNHK——日本引き籠もり協会ではないぞ——のアナウンサーのような透き通った声で話せるのだが……。直接だったり、俺が視界に入っていると駄目らしい。

「……………あー……………。面倒だ。さっさと行くぞ」

「え、ええっ！？」

どうやればこいつが落ち着くのか考えたところ、不可能と判断。というわけで俺は美咲の手を掴み、屋上へと向かった。屋上の庇の上にある貯水タンクの隣は、この時間帯日向になっていて、尚且つ貯水タンクによって風が遮られるので、ほどよい暖かさだ。

それに『屋上』寒い』という方程式が勝手に皆の頭の中にあるので、
ここには俺以外誰も来ない。飯を食うには良い場所なのだがなあ…
…。

「あ、あのっ」

「なんだ」

「お、おひつ、お昼ご飯を奢ってくださるので、頂けるのなら、し
よ、食堂、おひるっ、学食かと思うのですがっ！」

「すまん。学食だと高いから、弁当作ってきた。それで我慢してく
れ」

「お、おべべ、お弁当っ!? ま、まさか、男子、おとこっ、銀狼
さんの、お手製っ、手作りですかっ？」

「……………まあ、そうだが。嫌か？」

「iiiiiiiiいえっ！ そんなっ、ことは!」

「……………そうか」

1つ言いたい。この言語並べ替えクイズのような美咲をどうにかし
てくれ。

翻訳に時間が掛かる。

「ああ、そうだ。一応シートを引いた方がいいか」

「へっ？ あ、はいっ。お願い、しまっ、しましま、す」

「……ああ」

困った子だ。

そう思いつつも、カバンからブルーシートを取り出し、隅にDES
ERT EAGLE 14 inchを重石代わりに置き、残った2
箇所はナイフを刺して止める。

カバンから弁当の入った包みを出し、割り箸を美咲に渡してやる。

「す………すごっ、い、です………」

「そう言われると、俺としても作った意味が見出せる」

フツ、と鼻で笑って苦笑すると、美咲は一瞬にして赤面した。

美咲は掠れて聞こえるほどの小さな声で「いただきます」と言うと、
ちまちま食い始めた。

俺は右隣に座って俺の作った弁当を食う美咲を見守りながら、右目
に付けていた眼帯を――外した。

俺の右目は蒼い。だが、目の中心――瞳には、紅い羽根の模様が描
かれている。ちなみに左目は紅だ。瞳にも何も無い。

右目の瞳に描かれたこの羽根の模様は、EC因子エクリプスと呼ばれる毒によ
る副作用によって生まれた。

本来は体全身に模様が浮き出るのだが、俺は右目だけに浮き出てい
る。それと同時に、俺の右目にはある特殊な能力がある。

それは、支配眼と呼ばれる能力だ。

俺の右目が捕らえた光景を、最大10秒間スローモーションにし、その間俺はいつもと同じ速さで動くことができる。眼帯を付け直し、美咲の方へ振り向く。

「……………口に合うか？」

「へっ？ あ、はいっ。す、すごくっ、美味しいですっ！」

「そうか。それはよかった……………」

俺は後ろのポケットから薬草で拵えたタバコを取り出し、火をつける。すると、わたわたわたっ！ と美咲が腕を上下にばたばたさせていた。

「みつ、未成年の、ききつ、喫煙は禁止ですっ！」

「……………俺は27だが」

「ででっ、ですがっ！」

「それと、これは薬草だ」

「……………ほえ？」

「これはタバコの形状はしているが違う。俺の持病を抑える薬草だ

と言っている」

俺の吸っているタバコは、自分で作っている。

薬草で作られたこのタバコは、俺の持病………というより、？殺
人衝動？を抑える為に吸っている物だ。

吸える時に吸っておかないと、いざというときにジャック^{あいつ}が出て来
てしまうからな。この世界でそれだけは避けたい。

「そそっ、そうでしたかつ！ す、すみっ、すみませ、ごめんなさ
いっ！」

「……………いや、いい。学生の前で吸った俺が悪い。すまなか
った」

くしゃっ、とタバコを握りつぶし、^{デイスライザ}防弾制服・黒の内ポケットにし
まっである携帯灰皿に捨てる。

こういう注意のできる奴は、今となつては貴重だ。OHN^{うち}に来てく
れないかな。通信科^{コネクト}でも優秀だし、作戦指令本部で大活躍してくれ
そうだ。

「い、ごちそう、さま、でした……」

「……………む……………ああ。片付けて教室に——ッ！」

「——ふえっ！？」

俺は美咲を突き飛ばすように跳び付いて抱きかかえ、庇から落ちる。空中で俺と美咲の位置を入れ替えて、俺が下になり——屋上の床に叩き付けられた。

俺の腕の中でパニックになっている美咲を無視し、今まで俺たちの居た庇を見てみると、

パキイイイイイイイン！！

巨大な氷柱ができ、弁当や俺のDESERT EAGLE 14 inch もろとも氷付けにした。

俺はすぐに立ち上がって庇の下へ走り、階段へ続くドアに背を付ける。

「チツ……………！俺のは寒冷地仕様ではないのだぞ……………！」

DESERT EAGLE 14 inch は氷付けにされてしまったので、完全分解整備しない限り使い物にならないだろう。
ナイフは平気だが……………クソッ。面倒なことを。

「ああああああのっ！だ、ただっ、抱っこ、その、お、お姫様抱っこなんて！」

……………そうだ。

俺は咄嗟に美咲を抱き上げたばかりに、俗に言う『お姫様抱っこ』という状態になっている。

「シッ！……………今は黙っている」

「だっだまつ、そ、それなら先に、物陰に行つて、しし、シートを敷いた上でなら」

「何を言っている。とりあえず黙れ」

「ああでもまだ会つたばかりで、でも、も、妄想はしてたのでっ、初めてでは、あ、その、違ふんですっ。妄想なんてしてませんっ！」

「……………黙れ」

「だっ大丈夫です。どどっ、どうぞっ。あっ、わ、わたし、銀狼さんにならっ、いいんですっ。かっ、からだっ、すきにしていっ、いいんですっ」

「いい加減にしろッ」

「~~~~~っ!?!」

美咲の背中に廻している右腕とは逆——美咲の膝の裏に廻していた左腕を抜き、美咲を立たせてから右腕で顔を俺の胸に抱き寄せる。美咲が離れようとし、庇の陰から足が出てしまっていたので、空いている左腕で腰も抱き寄せる。

危ないな……………。運が悪ければ、今のでこいつが氷付けにされていたらところだ。隠れるからここに移動していて、先刻から「黙れ」と言っているのに。

「……………」

「……！！」

俺は美咲の背中を左手の指で、トン・トーン・トントン、と叩き、危険だという事だけを伝える。

トン・ツ！。

軍隊でも使われる、振動や音を使った暗号だ。

それを読み取った美咲は、少しだけ理解できたようだ。依然パニクっているままだが。

「美咲、このまま静かにしている」

耳元でささやくが、返事はない。

だが代わりに、ぎゅっ、と俺に抱きついてきた。

「そう、静かに……………良い子だ」

ぼん……………ぼん……………、と右手で頭を撫でていると、美咲の顔は真っ赤だが、少しだけ落ち着いてきていた。

このままやり過ぎせば……………切り抜けられるな。

10分ほどそうしていただろうか。

おそらくだが、昼休み終了のチャイムが鳴る数分前、といった時間だ。

隠れるために仕方なかったとはいえ、俺と美咲は密着しているので美咲の鼓動がはちきれんばかりに速くなっていたことに気付いた。

………というか、このシグナム級の胸部をどうにかしてほしいものだ。

「もう………平気か」

半径2キロ以内に敵性反応が無いことを確認した俺は、美咲を解放した。

すると、みさきは脚に力が入らないようで、倒れそうになったところで支える。

………こいつ、上がり症にも程があるだろう。

仕方無しに俺は一旦美咲をその場に寝かせ、庇の上に跳び乗り、巨大な氷柱の前に立つ。

防弾制服・黒の左袖をまくり、氷柱に手を付けて魔力を流す。
ディウイザー
ネロ

「マスターズ・チェンジャー発動、左腕変性・炎熱ツ」

左腕から炎が噴出し、巨大な氷柱を一瞬で溶かした。

これは俺の持つレアスキルステルスの1つだ。ここでいう超能力だな。

DESERT EAGLE 14 inchをホルスターに収め、ナイフも鞘にしまう。

庇を飛び降りて美咲を抱きかかえた俺は、教室に行く途中にある救護科^{ビュラス}へと向かった。^{アン}

5弾 小さくて（後書き）

あとがき

作者 「今回からゲストとして、白銀狼をよんていまーす」

白銀狼 「本名はイヴです」

銀狼 「本名は隼人だ」

作者 「本名明かすなよー。というわけで感想返し」

空牙刹那 様

作者 「……………いるのかな？」

銀狼 「知らん」

白銀狼 「私も知らない。見てないから」

黒鋼 様

銀狼 「……………そこからか」

白銀狼 「OHNに入学してもらう？」

銀狼 「使用弾薬とはそのままの意で、その銃が使う弾の事だ」

白銀狼 「黒色火薬はもう作られてないよ」

銀狼 「では問題。アリアの使うコルト ガバメントの使用弾薬は？」

次回予告

え？ 中空知ルート？ 理子ルート？ レキルート？ もうわけが
なかんねえ——！！ BY 作者

6 弾 学校行事

作者 「46です」

銀狼 「……………俺、多忙なのか…」

6弾 学校行事（前書き）

うわあああああ！

連日更新記録止まったあああああ！！

というわけで何故かわ知りませんが「ラブコメってんじゃねえ銀狼
！」という内容になります！

銀狼 「はアツ！？」

6弾 学校行事

『生徒呼び出し。下記の者は至急教務科^{マスタース}まで来るように。2年A組銀狼、2年B組星伽白雪^{ほしぎしらゆき}』

呼び出しを食らった。

俺はあの後、美咲を救護科^{アソビユラス}に置いていった帰りに掲示板のこれを見。

というわけで、現在俺は教務科^{マスタース}の綴^{つづり}の個室にいる。

隣には、真っ黒いストリートロングの、これまたシグナム級の胸部を持った女子。名を、星伽・白雪。

「でさあー、いい加減お前らボディーガードつけろよー」

「俺には無用だと何度言えばわかる」

「だあーかあーらあー。魔剣^{デュランダル}に勝てるわけ無いじゃあーん」

このゆっくりとしたイラつく喋り方をするのは、綴だ。

タバコなのかすら疑問に思うものを吸っていて、目が据わっている。

「あ、あの、私もボディーガードはちよつと……」

「第一、俺のG^{グレード}——超能力^{ステルス}の強さを表した数字——を知っての発言か？」

「知らなあーい。だつてお前S研——超能力捜査研究所——に顔出さないじゃあん……」

「……………いい度胸だ。俺のGは——427だ」

「——っ!?!」

目が据わっていた綴までもが目を見開き、俺を見ている。隣にいる白雪は、頭のリボンを触りながら、驚いている。

そして、何故か天井裏のダクトに隠れているアリアとキンジも、驚いている。

念のため、説明しておこう。

Gは10もあれば1流の超偵——超能力持ちの武偵——だ。世界最強クラスと呼ばれている奴でさえ、G25と言われている。

だが、何故俺がここまでずば抜けているかと言うと、こいつらとは発動方式がまるで違うからだ。

こいつらは精神力を使って発動させる?種超能力者だが、俺のはこの世界の定義に当てはまらない。それは、俺が魔力を使って、超能力ではなく魔法を使っているからだ。

だからこそ、俺はドイツ武偵局でこの数値をたたき出した。

「……………あの、銀狼さん」

「なんだ」

「貴方、ご自分の真名をご存知ですか……?」

「ああ。知っている。……………ハンブニーハンバード人食い玩具、だろう」

「っ…！ だから、そんなに強力な……………！！」

「怯えなくていい。人を襲う気は無い。とりあえず、ボディーガードの話は無かったことに「それ、あたしがやるわ！！」……………アリアか」

ダクトから降りてきたアリアがビシッ、と指を突き立てたので、俺はその手を軽く叩く。
ピシッ、とな。

「人を指差すな」

「うっさいわね。いくらママに世話役を言われてるからって……………」

「それと、俺にボディーガードはいらん。白雪こしろに就け」

俺はそれだけを言い残し、ドアを蹴破マスターズつて教務科を出た。

というか……………デュランダル魔剣……………ねえ。

まさか、クロノがこの世界に来てるとか無いよな。いやだが、先刻襲われたのも氷結系だったし……………。

あ、そうだ。

デュランダル魔剣はアリアの母親——かなえに冤罪を着せた1人だったな。
確か、剣の名手だとかアリアが言っていた記憶がある。

まさかクロノが来てるわけが無い。絶対に。

放課後。

俺はイヴの征服を作り、イヴとレキを連れて行き、今はもう全て終わり、女子寮に戻っている。

……俺はいい加減男子寮に戻りたいのだが、向こうにアリアと白雪が住み着いているため、帰れない。

ああ、それと、イヴとレキは物凄く仲が悪い。……間違えた。レキはイヴと物凄く仲が悪い。

イヴがレキを嫌っているわけではないのだが、レキはイヴのことが好ましくないらしい。

何故かと言うと……。いや、ここで伏せていても仕方ない。

はつきり言ってしまうおう。

『胸部』だ。

それを知ったのは、今さっき。イヴが風呂に入っているときに言われた。

何故か俺の脚の上で。

というのも、俺がテーブルの前で胡坐をかきながら、氷付けにされたDESSERT EAGLE 14inchの完全分解整備オーバーホールをしていると、机と俺の間に割り込み、胡坐をかいている俺の脚の上に座ったのだ。

こつは身長150センチなので、前が見えなくなることは無いのだ

が……………邪魔だ。

「……………貴方と白銀狼フワイトウルフが親子だと言う説を聞きましたが、真偽はいかなのでしょうか」

ぼすつ、と俺に寄りかかりながら見上げてくるレキ。

そのアーモンドのような瞳を見ないようにしながら、パーツにこびり付いている氷をマスターズ・チェンジャーの炎熱で溶かす。

流石に超金属オリハルコン製でも、動作に支障が出た。

なので、俺は魔剣との戦闘に備え、悪環境に強いAKを基に作られた、IMI ガリル ARMを追加で持ち歩くことにした。堅牢だしな。

「……………お前だからこそ言っておくが、事実だ。俺もあいつも名無しの1人だからな」

「名無し？ 俗称でしょうか」
オオカミ

「……………いや、名無しは俗称ではない。『傷持ち』を『スカー』と呼ぶように、人生の過程で名を捨てざるをえなかった者……………名を失ってしまった者を、名無しと呼んでいる」
オオカミ

「……………では、ギンもその1人と言う事ですか」

「ああ。名無しを束ね、群れを作らせ、銀狼リーダーとなった」

「他にも名無しはいるのですか？」
オオカミ

「かなり……な。だからこそ、俺は各地の名無しオオカミと接触し、新たな名コードネームを与えている」

パチンツ。

DESERT EAGLE 14 inchにマガジンを填めて鉄板の上に置くと、レキがヘッドホンを外し——耳を俺の左胸につけていた。

………そういえば、レキも名無しだ。オオカミウルスという47人の女性しかない部族に生まれた、チングス・ハンこと源義経の末裔の1人だ。

ウルス族の中でのみ子供を宿していたら、突然変異で女性しか生まれないと言う異例の窮地に陥り、47人しかないことで名字すら消えうせた、『失われた部族ロスト・ブリング』と呼ばれるうちの1つだ。

などと考えていると、いつのまにかレキは目を閉じ、かすかに聞こえる小さな吐息を立てて寝てしまった。………人の心音を子守唄にしやがって。

………だが、それだけ俺のことを信頼しているのか、心を許しているということだろう。でなかったらいつも通りドラグノフを抱えて体育座りで寝るはずだ。

こいつに信頼されるのは、自然と嫌ではない。

「いつか、本当の安からな眠りが、お前に来ることを……」

レキは完全に脱力し、頬を緩ませていて………それが、笑っているようにも見えた。

いつも無感情で、無口なレキ。
いつも無表情で、無言な銀狼^{オレ}。
組み合わせは悪くないのかもしれない。だがな、レキ。俺とお前は、
所詮、別次元の人間でしかないのだ。
この世界でも、別れは免れないだろう。だから頼む。あまり、俺に
深入りしないでくれ。——いつか来る……別れのときに、お前が
悲しむ顔は見たくない。俺とて、世界の拒絶だけは……どうにも
できないのだから。

「レキさん、お風呂空いたよ——って……寝ちゃった……？」

「……ああ。そのようだ」

俺が静かに、一定のリズムでレキの頭を撫でていると、完全に熟睡
してしまった。

今までは寝るときでさえ強張っていた気配が、今は完全に緩んでい
る。全身の力を抜き、俺の体を預けてしまっている。

静かにレキを床に寝かせ、防弾制服・黒の上着^{ディヴィーザ}を掛けてやる。一応
念のため、隣にドラグノフも置いておく。

「俺は風呂入ってくる。今日は魔力を使いすぎてな……少々きつい」

小さな欠伸をしながらネクタイをを緩め、脱衣所にあるかごの中へ
放り投げる。

俺は風呂に入らずともナノマシンが全身を洗淨してくれるので、入
らなくてもいいのだが……。魔力が乏しいときは、風呂に入った

方が回復が早い。理由は知らん。

服を脱いで腰にタオルを巻き、風呂場へ入る。

シャワーで髪をぬらし、洗い始める。

俺の髪は膝までと、クソ長いので洗うのにも一苦労だ。切ったら切ったでナノマシンの防衛機能が働いて瞬間的に再生するし……………もうやだ。

髪についている泡を全て流し、髪がお湯に入らないよう、首に緩く巻いてお湯につかる。

深いため息をついていると、すりガラス越しに誰かが居るのが見えた。

脱衣所には洗面台もあるので、歯でも磨いているのだろう。

そう思っ指をパキパキと鳴らしていると、指とは違う——カチヤ…………、という音が聞こえた。

背筋に冷たい物が进り、まさかと思いドアの方を見てみると……………

「ろ、6年ぶり、だよ…………ね。一緒に入るの」

「——ツ！？ なッ……………なッ……………なッ……………！？ 何故入ってくる！」

そこに居たのは、先程風呂から出たばかりの、イヴだった。一応タオルは体に巻いている。

ま、マズい。前ははまだセーフだ。あの時イヴは10歳だったからな。それに知識も無い。

「だ、だが…………！ 今はマズい！ イヴの年齢は16。それなりの知

識もある！

「は、入ってくるな！　というかそこ閉める！　誰かに、見られたら、マズ「ガリッ」~~~~ッ!?」

思い切り舌を噛み、千切れた。

ボトツ、と切れた舌が洗い場に落ちたので、水で洗ってから口の中に戻し……………ナノマシンで結合する。
こういうときは便利だな、ナノマシン。

「つ、つか、何故入ってきた！」

美咲と同じくらい言語を可笑しくしながらも、イヴに問いかける。
イヴは少し戸惑うと、桶でお湯をすくい、頭から被る。

そのまま髪のお湯を軽く切り、慎ましい水温を立てながらお湯にかかるイヴ。

髪は一応、纏め上げているらしい。

お、落ち着け、俺！

そうだ。弾の火薬の新しい調合を考えろ。

発火薬を0・1gに推進薬2・9g、弾頭内部に起爆剤を3g入れて……。

……………ふう。大分落ち着いた。

第一、俺とイヴは親子。何も問題は――

――大有りだ畜生！

「ほ、ほらっ。折角会えたから、その記念に……って、思ってた」

「……………阿呆が。よもや、ここに来る前もこういったふちらな行為をしていないだろうな…？」

「しっしてないよ！ 初……初めてだって隼人のために——っ！」

イヴは突然ハツとし、自分で自分の口を押さえた。
いや、まあ……………ふちらな事をしていないのであれば、構わんが……。

「……………まあ、会えた記念というのは少々不順な気もするが……。背中、流してくれるか」

「あっ……………うんっ！」

そっだ。如何わしい事ではない。

笑顔になったイヴが先に出て、俺はイヴの前に座る。

クソッ……………。イヴが10歳ならばまだ事は小さかったものの、こいつは16。

？間違いがあったら取り返しの付かない歳？になってしまったのだ。イヴが少し物足りない程度の力で背中を洗っていると、

「——ッ！ な、何故抱きつくッ!？」

「あ……つい。いや………だった？」

何故か、後ろからイヴが抱き付いてきた。

や、やめろ。今のお前は問題になる。特にそのフェイト級の胸部が。

「嫌だとかそういうことではなくだな、俺とお前は悪魔でも親子であって…」

「……………ごめん。ちゃんと洗うね。はや——きゃっ」

「ッ。大丈夫——ふ^かあ？」

イヴが小さな悲鳴を上げたので振り返ると、俺の目の前——鼻の先2センチにイヴの顔が迫っており、俺はイヴに押し倒されるようにして——転んだ。

どうやら、洗剤の泡でイヴが転び、俺が巻き込まれたらしい……………の……………だが。

イヴは恐怖のあまり両目を硬く瞑り、俺に抱きついていてる。ま、まあ、そこまでは赦そう。だが、俺とイヴの顔の距離は0センチ。口と口が、触れ合ってしまった。

体を強張らせ、両目を閉じていて、イヴはまだ気付いていないらしい。

今のうちに風呂から脱出を——できない！

マズい、非常にマズい！ 今俺が動けば、イヴを包んでいるタオルが取れる。今俺たちは互いに向き合って、口同士が触れているので動こうものならば何を見ても見ることになってしまう。イヴ、の、

は……………裸、を。

そして、もう1つ危険なものがある。タオルが取れば更に危険だが、今でさえフェイト級の胸部が俺に乗っているのだ。

こ……………殺される。俺がどという行動を取っても殺される。問答無用でイヴに殺される。

娘の裸を親が見るとかありえないからな。100%殺される。

「^{イヴ}いふ、^{はなれろ}はふあれろ」

「……………！」

「^{イヴ}いふ……………！」

「……………！……………っ！「うゝめん！」」

イヴが正気に戻ったのか、ガバツ！と起き上がると……………。案の定、取れてしまった。

イヴの。

タオルが。

バダアンツ！！

俺は音速を超えんばかりの速度で風呂場を出て、さっさと髪を拭いてYシャツと防弾性のズボンに着替える。

髪が所々跳ねているが、今はそれどころではない。

「い、イヴ！ 湯冷めしないうちに、早く出ておけ」

『は……はやと』

「……………なんだ」

『み、見た？』

「……………大丈夫だ。俺はなにも見ていない」

『う、うんっ。見てくれても、よかったんだけど……』

「バッ馬鹿を言うなッ。冗談はやめて、早く出て、寝ろ」

『……………うんっ』

俺は足早に部屋に戻ると、先程とは違う姿勢——いつものように壁際でドラグノフを抱きかかえ、体育座りで俺の防弾制服・黒ディヴィーザのネロ上着に包まっているレキを発見した。

……………こいつ、途中で起きたのか。

キツチリと就寝時間である9時を守るレキを見ると、落ち着いた。全く動かないから、逆に見ていて落ち着く。

「……ごめん。私、もう寝るから」

「ああ。早く寝ろ」

さっさと着替えて出てきたイヴが、テーブルの下に隠れるようにして寝転がると、すぐに寝てしまった。

俺は先刻の事もあり、魔力を回復させねばならないので……ポケッタから薬草のタバコを取り出し、口に銜えて火をつける。

この日、俺は一夜を寝ずに過ごした。

「……………警戒、お疲れ様です」

「まあ……………な。起きたのならそこにある飯食って、ドラゲノフの点検^{チェック}をしておけ」

「はい」

レキが俺の作っておいた朝飯を食い始め、弁当をカバンに入れた。続いてイヴが起きると、レキはさっさと俺の足元に座った。

……………イヴから離れるようにして。

「イヴ、飯食って弁当入れておけ」

「うん」

イヴが飯を食っている間にガリル A R Mの5・56ミリ N A T
O弾をマガジンに詰めていく。

俺の使うガリルのマガジンは35発のノーマルマガジン。一応50
発のボックスマガジンも持っているが、使う気にならない。
装弾数が多ければいいという問題ではないのだよ。

「……………バイポッドとホロサイトですか」

「俺は突撃小銃アサルトライフルの使用経験が殆ど無いからな。狙撃銃モデルのI M
I ガラッツも持っているが、この弾ではやる気にならん」

俺のガリル A R Mの上部には、リアサイトとフロントサイトの間
にレールを改造して付けてあり、そこにホロサイトを装着している。
それとハンドガードの下にバイポッドL M Gを装着しているので、狙撃も
可能。マガジンを変えて軽機関銃にもなる。

「俺はアドシアードのバンド練習があるから、先に行くぞ」

「……………私も行きます。スナイピング狙撃射撃の練習があるので」

「あつ、私も」

「……………ちっ……………」

「……………」

今、小さくレキが「ちっ」と舌打ちをしたような……………。
いや、気のせいだ。

俺は2人を無視して部屋を出て、全力疾走で逃げた。

何故かって？ そらな、後ろから45ACP弾をバカスカぶっ放しているアリアと、何処から手に入れたのかM60 LMGをフルオートでぶっ放している白雪と、それらから必死で逃げているキンジ。それを発見し、逃げた俺。

だが意外にもキンジの足が速く、追いつかれた。

「朝から性が出るな」

「お、おま！ 超偵だろ！？ 白雪を何とかしてくれ！！」

「フン。超偵といえど限界がある」

「じゃあ昨日のG427^{グレート}つてのはブラフかよ！！」

「事実だ。だがな、魔力が全快ではないのだ。それに俺のは強力すぎて、奴らの息の根を止めてしまう」

「役に立たねえ！！」

「ッ……………！？ いい度胸だ。OHN総帥の俺に？役に立たない？とな……………？ 遠山キンジ！ ガリルの錆にしてくれる！！」

「なんでそんなもん持ってたああああああ！！」

俺はガリルのチャージングレバーを引いて初弾を薬室に送り込み、
ホロサイトを起動させ——ガガガガガッ！
5・56ミリ NATO弾をキンジ目掛けて発砲した。

一般科目が終わり、俺は現在強襲科アサルトにいる。

イヴを紹介すると、蘭豹との決着を付けるためだ。

「おい銀狼！ さつさとやんぞおっ！」

「黙れ。……………たく。イヴ、待っててくれ」

「うん」

「さつさとしろい！」

強襲科アサルトの中心にある、防弾ガラスで覆われたドーム状の練習場へ上がる。

練習場の周りには、強襲科アサルトの生徒が集まり、はしゃいでいる。
無理も無い。俺はドイツ武偵高で強襲科アサルトの教官を潰している。それ

に、蘭豹は強襲科アサルトで最強とも言われているからな。ランクは特Sランクだ。

蘭豹は2メートルくらいの長刀を二本背負っており、両腰にはS & W M500が一丁ずつ。

「ブレードセット。戦闘準備」

「っ……！　おいおいおいおい！　その刀どっから出したあ！」

ブレードセットの掛け声と共に俺の背中には、刀身180センチ・全長220センチの斬馬刀スライサーが現れた。

斬馬刀の鐔の下にはトリガーが備え付けられており、こいつには仕込み銃が備わっている。

「魔法使いウィザード……この名は伊達じゃないようやな」

「………戦闘準備完了。来い、蘭豹」

「……はっ！　やったるでえっ！！」

蘭豹が左手にM500、右手に長刀を構えると、猪突猛進に走ってきた。

俺は後ろ腰にあるマッドブラックのDESERT EAGLE 14inchを両手に持ち、床を蹴って空高く跳ぶ。

この天井は高い。10メートルはある。

天上ギリギリまで跳んだ俺は空中で回転し、スライドを引く。

「身体能力は凄いやないか!!」

「刻限流、武刀・8弾・龍ノ眼」

「——うおっ!？」

回転しながら放った4発の50AE弾は防弾ガラスで兆弾し、4方向から蘭豹へ迫ったが——バックステップで避けられた。

着地と同時に俺と蘭豹は走り寄り、互いの武器をぶつけ合う。

左手のDESERT EAGLE 14inchは長刀を抑え、右手のDESERT EAGLE 14inchはM500と銃口同士を押し付けあう。

一触即発。

まさにその状況だ。

蘭豹が下がりながら5発放ってきたので、全てDESERT EAGLE 14inchの銃身で弾く。

「ちんみよーな技使いおつて!」

「刻鈴流、刻減・10弾・雀蜂」

「うっひゃあっ!!」

1歩後ろに下がると同時に左右4発ずつ——計8発を兆弾撃ちで放つが、全てギリギリで避けられた。

残弾は左右共に1発。この1発は、実弾ではなくゴム弾頭になっている。

DESERT EAGLE 14inchをホルスターに収め、背中の斬馬刀を左手に提げる。

「ほう？ あたしと切りあおうって!？」

「『サイコクゲントウメツリンネ ホトギムトウ最孤刻滅灯滅鈴音焰鳥武刀流』の名に懸けて。……いざ尋常に」

「ええよ！ やったる！」

「始刻！」

居合いの姿勢で待っていると、蘭豹が弾切れしたM500を投げ捨て、背中から長刀をもう一本抜いた。

俺は斬馬刀のみ。

蘭豹は長刀二刀流。
数では不利。だが、刻鈴流ならば……！

「なんやできるんかいな！」

「刻鈴流、トウメツ灯滅・ホムラ初弾・焰！」

俺の居合い切りによって生まれた斬撃が飛び、蘭豹は二本の長刀をクロスさせて防いだ。

やはりできるな。

互いにそう確信すると、俺は殺気を出さずにはいられなくなった。まあ蘭豹は最初から殺気全開だが。

「どっせい!!」

「甘い」

二本同時の横薙ぎを跳んでかわし、蘭豹の後ろに着地する。同時に蘭豹が長刀を両方捨て、M500を俺を見ずに撃ってきた。俺は瞬時にM500S&W弾を斬り、防弾ガラスに当てる。そのまま振りかぶり、頭上からの一閃!

「っ……………! やるやないの」

「フン。お前もだ。ここまでもった教師は初めてだ」

「そりゃどうも!」

俺の一閃を蘭豹はM500の銃身で防ぎ、今は互いに押し合っている状態だ。

だが、俺の勝ち揺るがない。

俺は鎧の下にあるトリガーを、引かずに押した。

キイイイイイイイイ!!

耳をつんざくような金属音が響き、段々と、M500のバレルが切れ始める。

—— 原始分解。

スライサー
俺の斬馬刀についている機能の一つで、刀身を特殊な超音波で振動させて触れている物体を切り裂くもの。これを使えば、オリハルコン超金属以外を斬ることができる。

バギンッ！

金属音が響き、M500のバレルが寸詰まりの短いショートモデルになった。

「ソードオフは気にいったか」

「アホウ！ 買いなおさなきゃいかんやんけ！！」

「知ったことか！」

スライサー
斬馬刀を蘭豹目掛けて投げると、蘭豹は短くなったM500で弾き

「食らうとも思つとるんか！ こんな——のッ……！？」

「ああ、思っている。お前は視界が狭いからな」

前のめりに、倒れた。

俺は斬馬刀を投げたと同時にDESSERT EAGLE 14inchスライサーを抜き、防弾ガラスを使つての兆弾撃ちで脊髄を撃つた。リフレク・ショット

ゴム弾なので、つまりは気絶。

俺は武偵帳のICカードで練習所のドアを開け、蘭豹を放り投げる。

「ブレードオフ」

練習場の床に刺さっている斬馬刀スライサーがチリになって消え、辺りの生徒が歓声をもらした。

う、五月蠅い。俺を取り囲むな。移動の邪魔だ。

「お前らは早く帰れ。5時からここはアドシアードのチアとバンドの練習に使用する」

俺は強襲科棟の隅に置いておいた、アマーティのヴァイオリンケースアサルトを取る。

俺は本来、アドシアードのオープニングでキンジたちと共にバンドをやる予定だったのだが、突如「お前ヴァイオリンやれ！」と言われてしまったので、仕方なく独りだ。ソロ
パクンッ

あ、間違えた。これFN F2000のダミー用ケースだ。

もう1つ置いてあるヴァイオリンケースと取替え、中からヴァイオリンを取り出す。

ちなみに、俺が演奏するのは、ドイツの歌劇・『魔弾の射手』オペラ

「小河さん、もう少し脚を高くー」

「はいっ！」

「アリアもねー」

「わかってるわよっ！」

と、強襲科棟の中心部で女子が集い、行われているのは——チアアサルトガールの練習だ。

といっても、恐らくこれは普通のチアではないのだろう。

普通のチアならば、ぽんぽんの中に自動拳銃ハンドガンを隠し持ったり、踊りの中に武道の型式を入れるということはしないはずだ。俺は知らないが。

「I'd like to thank the person...」
(感謝させてほしいよ...)

その後ろから聞こえてきたのは、ボーカル兼ギターの不知火の声。
キンジはDC59インヤンを引き、武藤はドラムを叩いている。

.....で、俺の後ろだが.....。

「はーやとーっ」

ものっそい笑顔で手を振るイヴ。
やめろ、やめてくれ。キンジや女子がガン見してるから。
それと本名を出すな。

「ホワイトウルフ白銀狼、お前は帰ったらどうだ」

「隼人の——あ、えと、銀狼の演奏聞いてから帰る」

「……………はあ……………」

右手の弓を番え、つが絃に触れさせる。

そのまま——奏でた。

射撃大会で成功するため、魔弾を作ってしまった男の嘆きを。

男を利用し、魔弾を作らせた魔女の眩きを。

7発の魔弾の銃声を。

最後の1発は、射手の命を食らう、『魔弾』の声を。

作りし者は絶対の命中率を手にする呪を。

いつか食われてしまう恐怖の調を。

愛する者のため、間の道に手を染めた者への報いを。

男の死を、悲しむ者の泣き声を……………。

一通り演奏が終わり、俺がケースにヴァイオリンを戻していると

「——あつ、こ、これで今日の練習は終わりにしますっ。お疲れ様でしたー」

皆が意識を手放したかのように、呆けていた。
唯一白雪は目覚めたが。

「……………う……………」

「……………お前……………」

キンジと武藤が小さく声を出すと、持っていたピックとスティックを落した。

……………どうしたというのだ。

「う……………上手すぎだろ！！？」

「なんだその才能！ お前ヴァイオリニストになりや良かったんじやねえの！？」

「自覚は無いが……………」

「俺でさえDC59インヤンが限界だったのに！」

「それは知らん」

「教えろ！ 俺にも教えてくれ！ なっ！ 頼む！」

「構わんが……………意味があるのか」

「いいんだよ！ できるっつーアドバンテージになるから！」

「そ、そうか」

武藤はよほどヴァイオリンが弾きたいらしい。

弾けたところで意味など無いというのに。

いい加減対応が面倒になった俺は、屋上へ行くことにした。
何故かキンジとイヴも一緒にだが。

「……………っかさ、お前らって本当に親子なのか？」

「はい。そうですよ？」

「まあ……な」

「……………今、銀狼が27だよな」

「ああ」

「で、白銀狼が16だよな」

「はい」

「……………銀狼。それ、犯罪だ」

「いつかそういう反応が来るだろうとは思っていたから何も言わんが、誤解だ」

「いやいやいやいや！ 明らかに前が11の時に生まれたっつー計算になるよな！？」

「えっと、このまえ次元震があつて、私の年代がズレてるんです」

「え？ じゃあ本当は」

「11です」

「結局犯罪じゃねえか！」

「待て。俺は26歳の任務中に違法武器商人の家からこいつを拉致してきただけだ」

「犯罪だッ！」

「いやだからな？　俺とイヴは血を分けた親子であると同時に」

「隼人は一緒に戦う戦友なんです」

そう言うと、キンジは固まった。

「……あれだな。思考回路が働いてない。パンクしたのだろう。古い家電を直すかのごとく横から叩くと、復活した。」

「……隼人とイヴって誰」

「……あ」

イヴと顔を見合わせ、「やってもうた」という顔をする俺とイヴ。
「……キンジには、話しておくべきか……？」

「聞かれたんだし、言ってもいいかな」

「仕方あるまい。……俺の名は隼人。隼の人で隼人だ。コードネームが銀狼」

「私はイヴ。イブじゃないので、気をつけてください。私のコードネームが白銀狼です」

「……名字は」

「捨てた」

「……というか、俺は元々持っていないな」

「私もね」

「なにもんだお前ら!？」

「OHNの総帥だ」

「隼人の子供」

「もうわけわかんねええええええええええ!!」

キンジが絶叫しながらその場に寝転がると、アリアが屋上にやってきた。

アリアは俺とイヴに見向きもせずにキンジの隣へ行き、右膝を上げる。

「ごすんっ！」

アリアはキンジの顔面を踏み潰すと、再び膝を上げ、がしっ! ぽすっ。

二発目はキンジがなんとかかわし、受け止めた。

「それならっ——!!」

今度は踵を頭より高く上げ、力を込めるアリア。それに対してキンジは上体を起こし、両手を構える。

ぱしっ！

ごすっ！

キンジの両手は空中で拍手を打ち、踵は脳天に直撃した。

……… どうやら、真剣白刃取りならぬ、脳天踵取りだったらしい。
失敗しているが。

「~~~~っ！」

「まったく、ダメダメね。そもそもなんで白雪を護ってないのよ！」

「はあ！？ 言っとくけどな、俺はボディガードをやるなんていった覚えはねえし、真剣白刃取りなんてできねえんだよ！ あれは達人技だ！」

「できなきゃ困るのよ！ 魔剣は剣の名手で、その剣は鋼鉄をも切り裂くって言われてるんだから！」

「ここ数日白雪に張ってたけど、なにも可笑しなことなんてなかっただろうが！ 魔剣なんていねーんだよ！」

「いるわ！ 魔剣はいる！！ あたしの直感がそういつてるの！」

「直感なんて信じられるか！」

む、一理あるな。

キンジに1票。

「そういうのを妄想っつーんだよ!!」

「なによそれ——あつたまきた！　そうよそうよね！　あんたは白雪と、ふ、服を脱がしあったり……サイッター！」

前言撤回。

キンジに - 20 票

「そ……それだつてそうだ！　お前は独断で物を決めすぎなんだよ！　ちよつと良い家に生まれたからって、いい気になんな！　お前は天才かも知れねーけどな、世の中は俺たち凡才が動かしてんだ！　お前はズレてんだよ!!」

キンジがキレてそう言うつと、アリアは——反論、しない。
それどころか、よたよたと後ずさつた。

俺は、このようなアリアを見たことが無い。

何かがショックだったのか、

それとも、

言葉に意味があつたのか。

それは俺にはわからない。

「あんたも……そう言うんだ」

アリアは小さく、震えた声で呟く。
これは俺の知っているアリアではない。

「みんな、あたしのことをわかってくれないんだ。みんなあたしのことを、先走りの、独り決めの、弾丸娘——ホームズ家の欠陥品って呼ぶ。あんたも——そう!!」

もはや、怒りに飲まれた野獣だ。
魔弾に取り付かれた咎人の如く。

「……………意味わかんねえことばっか言いやがって！ 敵なんかいねえんだよ!! 妄想女!!」

「この……………バカバカバカバカバカアアアアアアア!!」

アリアがコルト ガバメントを抜き、キンジの周りに連射した。
イヴはあわあわしながらそれを見ているが、俺はただ眺める。
手が出せる状況でもないからな。

「キンジのバカ！ バカの金メダル！ ノーベルどバカ賞——!!」

アリアが走り去るのを見届けてから、俺は撃たれたブツを見る。
近時の後ろにあった貯水タンクには、『バカキンジ』とい

う文字ができていた。弾痕で。

それでも納得のいかないような顔をしているキンジを見た俺は、ホルスターからDESSERT EAGLE 14inchを抜き、マガジンを取り替えてから戻す。

「……………キンジ」

「……なんだよ。説教か？ お前はアリアの世話役だもんな!？」

「……………戯言は死してから言え」

「——ッ!？」

俺はキンジの横顔を殴り、貯水タンクにぶち当てた。

驚いているイヴに帰るよう言い、両越しのナイフを両手に逆手で持つ。

「このクズが」

シュカカツ。

キンジの腕と脇の間にナイフを投げ、身動きを取れなくする。

「お前、アリアの家を知っていて、あれを言ったのか」

「ああそつだよ。それがどうした!」

「ッ……！　ここで貴様を殺してやりたいのは山々だが、問題が出る」

「つーかお前はアリアのなんなんだ！　どうして世話役なんて引き受けてる！」

「……………俺とアリアの直接的関係は無い。ただのクラスメイトだ」

「じゃあなんでー！！」

「『神崎かなえ』。……………彼女に——クライアント依頼主に、？アリアを頼む？と言われたからだ」

「んだよ……！　お前はかなえさんに言われたら、なんでもやるのかよ！？」

「ハッ。誰が。俺は報酬さえ貰えれば全てを成し遂げる。それが殺しだろうとな」

「……………っけわかんねえ……！！」

エアロ・スミスでナイフを抜き、キャッチしてから鞘に収める。

「命拾いしたな。クソガキ糞餓鬼」

俺はそういい残し、アサルト強襲科棟を出てバスに乗った。

で、バス内。

やりすぎたなー、などと考えつつも、いつものバス停で降りる。

—— グラッ

「ッ……！？ ………………目まい……？」

突如足元がふらつき、目の前が朦朧としてきた。

この賞状は——魔力切れだ。

だが何故？ 俺は魔力をそれほど消費していない。何故だ？

俺は覚束ない脚で女子寮へと歩いていたが、ついに、

「……………無念……」

女子寮の前で、俺は意識を手放した。

そのとき、俺は微かに、桜の香りを感じた……気がする……

6弾 学校行事（後書き）

あとがき

作者 「死ね銀狼！」

銀狼 「うオワッ！ 何をする作者！」

作者 「リア充爆発しろつつてんだよ！！」

銀狼 「リア充？ またお前、和輝のような発言を……」

作者 「うるせえ！ 死ね！！」

感想返し

黒鋼 様

作者 「はいというわけで、私はおっぱい大好きです！」

銀狼 「死ね！」

作者 「アサルト黙れ強襲科の死ね死ね団が！ おっぱいは正義！ 母性はステータス！」

銀狼 「……………もういい。ついていけん。まあいい。ところで、前回返信を忘れていたことがある」

作者 「そうなの？」

銀狼 「ああ。……………クーレデとはなんだ。あとツンデレとやらも」

作者 「……………え？ そこから？」

銀狼 「知っているのか？ ならば教えてくれ」

作者 「いや、お前には教えられない。和輝にでも訊いて。……………」

あ、そうだ。問題の答えは？」

銀狼 「いろいろと腑に落ちないが……。では答えだ。『正解』だな。自分で調べると言うのは、大事なことだ」

作者 「ちなみに私はどちらも甲乙付けがたいですね。ヤミもイヴもどっちも大好きです！」

カルマ 様

銀狼 「残念だが不正解だ」

作者 「アリアの持つコルト ガバメントは今年で100周年を向かえ……。なんて事は置いといて。ガバメントは45ACP弾という、9ミリパラベラム弾よりも着弾時の衝撃スロッピングパワーの強い弾を使用しています」

銀狼 「M92Fのようにダブルカラムマガジンではないので、装弾数は8発と少ないがな」

作者 「お前のDESSERT EAGLEなんて7発じゃん」

銀狼 「言っな」

次回予告

女子寮の前でぶっ倒れた銀狼。彼は誰かに助けてもらえるのか。それとも、そのまま朝を迎えるのか。イヴとレキは探しに来るのか？

次回、緋弾のアリア、魔弾の射手、7弾 ルート・√・Loott

銀狼 「というかこれの題名にある魔弾の射手って、歌劇のアレだよな。俺が今回演奏した」

作者	「そだよ」
銀狼	「……題名の謎、解明？」
作者	「いや？ 全然？」
銀狼	「……わけがわからん」

7 弾 ルート・√・L o o t（前書き）

まあた更新遅れたアアアアアア！

銀狼 「……………そうか」

反応薄ッ！ 読者様ゴメン！

銀狼 「……………とりあえず、本編へ」

7 弾 ルート・√・L o o t

.....ここは何処だろうか。

.....確か俺は、寮の前で倒れたような.....。

うつすらと目を開けてみると、何もないところだった。

.....ああ、アシビユラス救護科か。

ならばこの何もなさも頷ける。丁度良い。もう少し休ませてもらう。

そして.....

10分ほど寝ていると、誰かが入ってきた気がした。

看病に来るとしたら、イヴぐらいだろう。それが、レキが人間観察にでも.....。

思考が混乱する俺の額に、そつと熱を計る手を乗せられた気が.....した。

俺には最初から存在しなかった、母親のような.....

優しい、手、だった。

熱が無いとわかったのか、手の感触は消えた。

代わりに、『桜』の、匂いがした……………

目が覚めた。

魔力の足りていない体を起こすと、まずここが救護科ではないことに気付いた。

俺の寝ていたベッドが救護科にある物とは違うからだ。

それと、微かに桜の匂いもするようないや、気にしないでおう。

DESERT EAGLE 14inchなど装備を点検してから
ベッドを降り、ドアを探す。

どうやらここは寝室らしい。

ドアを見つけたので寝室から出てみると、視界を機械の山が埋めた見渡す限りアクセスランプが点滅し、ヘッドホンが電気屋のように並べられ、インカムや携帯が所狭しと並んでいる。

その中で、1つ。ちょこんと観葉植物があつた。

こうしてはおれん、と時計を見てみると、時刻は夜の8時半。

マズいな……………。イヴとレキが何を言うかわからん。そしてここは何処だ。

通信機器が並べられていると言うことは、通信科か？

などと考えていると、どこからか、ガチャン……………という音が聞こ

えた。

この音は知っている。

風呂場へ続くドアの音だ。

.....？風呂場へ続く？.....？

ななななな何故だろうかッ！ 壮絶に嫌な予感しかしないのだが！

ここから脱出せねば、と廊下へ続くドアを開けた瞬間――

「.....」

「.....」

タオル一枚の中空知・美咲と、出くわしてしまった。

だが美咲には俺が見えていないのか、気にせず歩いてくる。

マズい、と悟った俺は通信機器の並べられているリビングに後ずさり、事なきを得ようとした。

――今になって思う。それが最大の間違いだった。

「ふえっ!？」

風呂上りのためか、メガネをかけていない美咲は何も見えていないようで、ヘッドホンのコードに脚を引っ掛け――転んだ。俺を押し倒しながら。

突然のことで反応できていなかった美咲は、俺の上にうつ伏せで乗っており、目をぐるぐると回している。

.....弱ッ。

「いたたた.....またコードに引っかけちゃった.....あれ？」

美咲は自分の下にいる俺によやく気付いたのか、目を細めたあと、目をかつ開いて一瞬で顔を真っ赤にした。

.....和輝で言う、『お約束』や『ラブコメシチュエーション』

.....だったか？ 和輝よ。

「しっ.....しっ！ しるばー.....！？」

許容量がオーバーしたのか、美咲は気絶した。

そのせいで、俺の上にはタオル一枚を挟み、全裸の美咲が寝転がっている。

壮絶に悪寒しかない俺はさっさと美咲をタオルに包み、俺の着ていた防弾制服・黒の上着を羽織らせ、壁際に寝かせたのだった。

.....この時わかったのだが、こいつからは桜の香りでした。

.....あの時感じた優しい手も、こいつだったのだろうか.....？

数分後。

美咲が目が覚めたのと同時に、俺は背を向けていることを伝える。

「早く着替えろ」——と。

ちやつちやつと着替えを済ませた美咲のパジャマは、飾りっ気の無い薄いピンクだった。

「まずは俺を助けてくれたであろう事に感謝する。すまなかった」

「あつ、い、いえ、そんなつ。私つ、銀狼さんの、体をつ、いえ、なんでも、ないです！」

「……………そういえば、そうだったな」

俺はリビングの端に行き、背を向けながらインカムの通信機を起動させる。

コール先は、美咲の目の前にあるインカムだ。

「改めて礼を言う。すまなかった」

『いえ、とんでもありません。ですが、何故倒れていたのですか？』

「それが……俺にもよくわからんだ」

『わからない……？ 熱は無かったようですけど』

「そのようだな。考えられる可能性としては、魔力切れ……だな」

『魔力？』

「気にするな。………2つ、私用だがいいか」

『ええ、構いません』

俺はYシャツの胸ポケットからOHNの手帳を取り出し、後ろにいる美咲の手元に投げる。

それを拾い、中を見た美咲は驚いていた。

『OHNの、総帥……！？』

「ああ。隠していてすまなった。……それで、私的な頼みがある」

『頼み……ですか』

「お前の都合を第一に考えてくれて良い。できればだが、OHNに来てくれないだろうか」

『……………考慮しておきます。そのお話しは、またの機会に』

美咲が顔を真っ赤にしてそそくさとOHNの手帳と防弾制服・黒の
上着を渡しに来ると、マッハを越えたのではないだろうかと思うく
らいの速度で戻った。

「それと、もう1つだが……。今日ここに泊まらせてくれ」

『……………何故ですか？』

「今はもう就寝時刻の9時を過ぎてしまっている。外には出られないし、男子寮にも戻れない」

『確かに、そうですね…』

「無論、俺は玄関でも何処でも寝れる。明朝にはここを出る」

『……………明朝と言わず、ずっとでも……………』

「……………何か言ったか」

『いえ、なにも。宿泊の件ですが、構いません。ベッドが3つ余っていますので』

「すまない。助かった」

『困ったときはお互い様です』

そういつて通信を切ると、美咲は寝室にある2つの2段ベッドのうち、右上に入った。
俺が先程寝ていたのが、そこだった気がする。
俺は一番離れている左下に入り、寝ることにした。なぜなら、それ以外だと美咲の言語機能が本格的にヤバい事になるからだ。
経験上……………な。

銀狼さんの息が聞こえなくなった。
私は目が悪い分、耳が人より良いと自負している。だから、聞こえないと言うのは変だった。

さっきまでは普通に聞こえていた。コンマ1秒の狂いも無い規則的な呼吸が聞こえていたのに、今は全くの無音。聞こえるのは、自分の呼吸音だけ。

ふと気になって上体を起こし、銀狼さんの吐息が聞こえていた左下のベッドを見る。

——そこに、銀狼さんは居なかった。

ベッドの柵から身を乗り出して見渡すと、ベランダに銀狼さんは居た。

それでも変だ。たかだかガラス一枚を挟んだぐらいで、呼吸音が聞こえないなんて事はない。それぐらい私の耳は良い。

(……………隣に居るのは……………オオカミ……………?)

銀狼さんはベランダの手すりに座りながら、足元にいる狼と会話しているようにも見えた。

でも、狼は絶滅しているはずだ。

………違う。狼だけじゃない。手すりに隼と鴉もいる。狼の背には黒い猫も乗っていた。

不吉な生き物ばかりだ。

銀狼さんは黒くて変な形をした中折れ式回転式弾倉リボルバーをいじりながら、動物たちと会話している。一見ファンシーな光景かもしれないけど、相手が相手だ。森の中にいるウサギやリスではない。

『………お前らは………へ行け。リイン………やフェイ

………たちの様子………頼む』

(………何を言っているんだろう)

読唇術でも、よくわからない。月が銀狼さんと重なっていて、見づらい。

鴉と狼が何処かへ消えると、黒猫は手すりに跳び乗り、隼と共に会話を始めた。

今度の会話は、読唇術でもわからない。

黒猫は時々「にゃーん」と鳴いている様に見えるけど、銀狼さんは顔すら見えないくらいに影と同化してしまっている。

見えているのは、風でなびく白銀の長髪だけ。

時々舞い散る隼の羽が、風を切り、銀狼さんの影と同化する。聞こえない猫の鳴き声も、風に運ばれているような気がする。

『……………おい、美咲。こそこそ覗き見とは、良
い趣味だな』

「ひゃいつ!？」

『……………そこまで驚くな。流石に傷つくぞ……………』

銀狼さんの声は聞こえない。でも、口でそう言っていた。
手招きされたので窓を開け、ベランダに出る。

すると、銀狼さんは着ていた防弾制服・黒ネロの上着を貸してくれた。

……………少し寒かったので、丁度良い。

「……………」

「え…?」

「……………!」

「? ??」

銀狼さんはさっきから口をぱくぱくとしているが、何を言っているのかは聞こえない。
読唇術でも読めない。

「……………ッ。聞こえるか」

「あつ、はいっ」

「すまない。サイレンサー消音の解除を忘れていた」

「さ、サイレンサー消音？ 銃のあれですか？」

「俺のレアスキル——ああいや。こちらでは超能力ステルスだったな。兎に角、その副作用……とでもいうべきだろうか。そういうものだ」

「超能力ステルス……」

「深く考える必要は無い。俺は部外者イレギュラーが故に、この世界に住む奴らには理解し難いのもしれん」

銀狼さんはそう言うと、隼の頭を撫で、何処かへ飛ばした。黒猫はそれを追うように、手すりから外へ飛び降りた。……………ここ、7階なんだけどな。

段々と月が雲に覆われ始め、銀狼さんの顔が見えるようになった。

でも、それは——

「ククク……………。何故だろうな。お前には、言う必要の無いことを言ってしまう」

「い、いえ。気のせい、です、よ」

——何処までも悲しそうで——

「気のせい……か。そうだな。勘違いだ」

「……………はい。も、もう夜も遅いですし、寝た方が、よいのではと」

——紅い、深紅に染まった左目には——

「そうしよう。俺のせいでお前に風邪引かせたら、会わせる顔が無い」

「そ、そんなつ、気にしなくても」

「……………？気にしなくても？……………か。そう言ってくれるのだな……………お前も」

——血と、虚空だけが渦巻いていた。

上がり症な私でさえ、いつもより冷静になれてしまうほどの眼。

この人が、どれほど悲しい思いをしてきたのかは知らない。

長い……………永い時を過ごしてきたのかもしれない。

ずっと1人だったのかもしれない。

けれど、今、銀狼さんが独りなのはわかる。

大きな背中が、寂しそうに見えた。

20分経ったのだろうか。

私は、ずっと銀狼さんのことを見ていた。

私が寝ている右上とは反対の、左下のベッドに銀狼さんはいる。

今はもう、寝ているようだった。

「……………し、シルバーウルフ銀狼さあーん……………」

小さく名前を呼んでみるが、反応は無い。

でもなんでか、背中^{「ネクスト」}は正直だった。

インカムの映像で見ていたときは、ドラマの主人公のようでカッコ良いと思った。通信科で会ったときにも、その感想は変わりなかった。

でも、今は違う。

孤独で、寂しそうで、救いを求めているように見えて仕方が無い。

「起きてますかあー……………」

ベッドを降り、耳元でささやいても——反応は無い。

今の私は変だ。

いつもなら近くにいるだけでもダメなのに、今は自分から近づいて
いる。

「守ってあげなくちゃ」と思う自分がいる。

実際、戦闘になったら守られるのは確実に私だ。

それでもそう思う。これが、クラスの人たちの言う『母性本能』と
いう奴なのかは分からない。

私は銀狼さんの隣に潜り込み、肩と肩をくっつける。

不思議と今は恥ずかしくない。

心音も上昇してない。

悲しそうな背中を見た私は、

ただ、傍に居てあげたかった。

……………またか。

また、こうなってしまったか。

「……………んう……………」

「……………」

よくあることだ。

俺はそう割り切ろうとしているのだが、こいつが来るとは思わなかった。

まさかな。

美咲が俺のベッドに来るとは。

…………… 思うか？ 普通。

俺は美咲を起こさないようにベッドを降り、キッチンへ向かう。

冷蔵庫にはそこそこの食材があった。これならまあ…………… 朝食と弁当は作ってやれるだろう。

左手首の時計を見てみると、今は5時。こいつが登校するまであと2時間半。起きるまで1時間半。

とりあえず、俺は2人分の朝食と弁当を作ることにした。

朝食をとり、1人分の弁当と朝食をリビングのテーブルに置いていき、俺は部屋を出た。

女子寮の通路に出た俺は見つからないように移動し、階段を駆け上る。

で、レキの部屋の鍵を非接触ICカードキーで開け、

コンタクトレス

「……………」

「……………」

「……………」元談はやめてもらえるか」

「……………」

「……………」

ドアを開けた瞬間、レキがSVD ドラグノフを、イヴがCRK Mark・IVナイフを、それぞれ俺の喉元に突きつけていた。

……………最近、イヴがこういうところで黒くなってきた気がする。

最早、武偵高に馴染んだとしか言いようが無いな。

「……………」どこ、行ってたの？」

「……………」野暮用だ」

イヴは笑顔だ。

だが、背後の気迫が全く笑っていない。

ドス黒く感じる。

「……………直径7・62ミリの風穴を開けましょうか…?」

「結構だ。必要ない」

「……………」

「……………」

「……………」

CRK Mark・IVの切っ先^{ポイント}が俺の喉に触れ、ドラグノフの銃口が顎の裏に押し付けられる。
マズい。マズいぞ。こいつら……………俺を殺^やる気だ。

「落ち着け。まずは武器を下ろせ。？和平の兵は槍を持たず？と言
うだろう」

「和平は望んで無いよ?」

「求めているのは回答です」

「……………」

「……………」

「……………」

どうするか。

素直に「美咲のところへ行っていた」と言ったら、「みさ」まで言
って刺されるか撃たれるだろう。

こうなったら………！

「野暮用というのはだな、夜間訓練だ。最近はサバイバルもしてい
なかった」

「…………そのわりには制服キレイだね？」

「それは……あれだ。エアロ・スミスで」

というか、何故こいつら2人はこの朝早くに玄関で待ち構えている
のだろうか。

「…………へえ……？」

「…………正直な回答を要求します」

「真実を述べただけだ。嘘偽りは何一つ——ッ！」

「ふえっ!?!」「……!?!」

俺は背中を掠めて飛んだ弾丸を感じ取り、2人を押し倒すようにし
て俺は飛び込んだ。

エアロ・スミスで防弾性のドアを閉め、安堵のため息をつく。

恐らく、今の弾丸は寮長の物だろう。なにせ男子が女子寮にいるのだからな。ここは一応、男子禁制だ。反対に男子寮は女子禁制だが、誰も注意しない。

『くおら開けるー！　今男子が見えたぞおー！』

「ら、蘭豹先生！？」

『さつさと開けんかあー！』

俺は2人を飛び越えてエアロ・スミスで姿を消し、窓際に座る。レキが無言で玄関を開けると、蘭豹がずかずかと上がってきた。

「今銀狼いーひんかったか！？」

「知りませんが」

「んなわけない！　あの銀の長髪は明らかにあいつや！」

「あの、私も銀でロングなんですが……」

「それにあの長身！　お前みたいなチビとはちゃう！」

「ち、チビ……！？　ひ、酷いです……」

「……………んー……………しゃーない！　もし見つけたら連絡せい」

「はい」

蘭豹がドアを閉めると同時に、俺は不可視化ステルスを解いた。
危ないな……。あと少してバレる所だった。

「……………で。何処に行つてたの？」

「……………そろそろ、5時半か」

「話をそらさないでね？」

「すまない。俺は5時半から特務が入っていてな。これにて」

「特務？」

「俺やレキといった、特Sランク武偵——Sランクの中でも上位の武偵——には、時々公にできない依頼が来る。それだ」

「私も50件ほど、経験があります」

「というわけだ。俺は装備を整えねばならない」

上手いこと話を変えられた俺はベルトのホスルターを外し、腰周りの軽さを実感する。

DESERT EAGLE 14inch（本体のみ。マガジン未装着・装弾無し）の重さは約2.5キロ。更に予備弾倉スベアマガジン2つと50AE弾が計28発。全てを合計すると、約8キロ。

それが瞬時に無くなったのだから、その開放感は相当なものだ。
今なら40メートルくらいは上に跳べるかもしれない。

「なんで銃を……？」

「クライアント依頼人からの要望でな。銃の使用・持込が禁止になっている。俺が使うのは——これだ」

ウルブズのサーバーに脳内でアクセスし、武器庫からある物を転送させた。

それは全長170センチの、コンパウンド・テイクダウン式のツインリムアーチエリー。引きは120ポンドと重いが、コンパウンド式なので最終的には軽い。ちなみに、これの名はチェーサー。

右手首にリリーサーと呼ばれるトリガーをマジックテープベルクロバンドで付け、中心から真つ二つに疊んだチェーサーを左太股にベルクロバンドで付ける。

続いてカーボン製の矢を転送し、右太股にクイバー——矢を入れておく筒——をベルクロで付ける。

矢の数は20本。先端を尖らせてあるので、120ポンドの威力であるチェーサーと組み合わせれば、熊だろうと一撃で貫通できる威力はある。

……言い方を変えよう。無音の暗殺兵器だ。

「オールグリーン戦闘準備完了。……朝食には間に合うよう帰る。イヴ、頼む」

「……いいけど、なるべく早くね？ 訊きたい事もあるし……」

「……………さて、どうしたものか」

俺は適当なことを呟きながら、部屋を出た。
で、目の前には蘭豹が。

S & W M 5 0 0 を持つて構えている。

——ハンマーを起こしやがった。

「おんどりや 3 人、なんか言い残すことあつか？」（↑蘭豹）

「特務がある為先を急ぐ」（↑俺）

「愛してるんです家族としてじゃなく」（↑イヴ）

「私の全ては彼の物なので」（↑レキ）

「……………」（↑蘭豹）

「……………」（↑俺）

「……………」（↑イヴ）

「……………」（↑レキ）

「「はぁー……………」」（↑イヴとレキの発言に呆れてため息を漏らす俺と蘭豹）

流れるような動作で蘭豹が M 5 0 0 のセーフティを解除したので、

俺はポケットに手を入れるふりをしてナイフを抜く。

ガギンッ…！

で、M500の銃口に切っ先^{ポイント}を刺した。

「己はなあーに女子高生をたぶらかしとんじゃ…！」

「知らん…！俺とて理解できていないのだからな…！」

「先生、大丈夫です！愛さえあれば家族なんて壁は些細なことな
んです！」

「お前はフェイトと同じ様なことを言うな。おぞましい」

「か、家族！？銀狼お前、女子高生と結婚したんか！？しても
うたんか！？」

「和輝以上の馬鹿がここにいただと！？」

せめて親子だと思え。

俺は誰とも結婚はしない。する気もない。

俺の聖祥^{せいしょう}中学時代のクラスメイトが言っていたが、結婚とは『人生
の墓場』と読むらしいからな。
生きて墓場になど行きたくない。

「ええい！クソッ！俺は特務で先を急いでいるのだ！」

「この身もこの心も全ては銀狼の物です。どうぞご自由にお使いく

ださい」

「既に奴隷！？」

「違う！ 話をややこしくするなレキ！」

「何も違いません」

「クソツ……！ 頼むから、特務へ行かせろオオオオオおお！！」

俺の叫びは、空しく消えた。

後日、アーチエリーで殺害された死体があったそうなの。
無かったそうなの。

7 弾 ルート・√・L o o t（後書き）

あとがき

作者 「うつう……。PCが2時間しかできないから中々うつうできない……」

銀狼 「何故2時間」

作者 「11時に帰ってきて1時に寝るから」

銀狼 「……………多忙だな」

作者 「いいよ。リアルなんてクソゲーだから。それよりもお前がどどん泥沼に填まつてくのを書いた方が面白い」

銀狼 「……………貴様が元凶かアアアアアアアアア！？」

作者 「アハハハッ！？ 捕まえてみやがれこんちくしょおおおおお！」

銀狼 「いい度胸！ 死して償え！」

作者 「作者権限発動！ 速度倍k——グハッ！？」

銀狼 「死ぬがいい、作者」

作者 「ア————ッ！！」

感想返し

黒鋼 様

銀狼 「……………警察に突き飛ばすぞ」

作者 「……………」

銀狼 「次にイヴを視姦したらボコす」

作者 「……………ごめん。私もして「そこまでして死にたいか」「イ
イイイヤアアアアア!!」

銀狼 「ま、まあ、あれだ。最後まで考えているのであれば、親と
して認めざるをえんな」

作者 「……………」 (死亡)

銀狼 「それと、や、ヤンデレ? とはなんだ。俺はそっち方面に
疎くてな」

作者 「……………フェイトの事さ……………」 (半分復活)

銀狼 「フェイトの?」

作者 「そ……………。これでも見な」 (スクールデイズのDVDを渡す)

銀狼 「む、すまん。黒鋼も参考になるものを持っていないか?」

次回予告

アドシールドが近々に迫る中、光に身を隠した闇が動く…? デュランダル 魔剣

は誰をどうするのか。2匹の狼は何を考えているのか。大陸の姫は
誰を守るのか。

次回、緋弾のアリア! 魔弾の射手! 8弾 超常現象

銀狼 「こ、これが……………ヤンデレ……………だと……………!?!」 (ス
クールデイズ最終話を見る)

作者 「これはこれで良い愛情表現なりよ」

銀狼 「ま、まで! これでは俺が死ぬのではないのか!?!」

作者 「いいんじゃない? 包丁刺されたくらいじゃ死なないし」

銀狼 「首が飛べば命も飛ぶに決まっているだろう! マズいぞ。
エクリプス

EC因子を全開にしても生き残れるのか……………俺……………!?!」

作者 「ああそれと、プロローグの所に銃器紹介を追加しました。
その銃の使用弾薬・装弾数・使用者が書かれています。全ての銃に
画像があるので、わかりやすいかと。これで楽しんでいただければ
幸いです」

8 弾 超常現象

俺は花火を知らない。

花火と言う物が………何故あのような市販の迫撃砲が、人に娯楽を与えるのか、俺にとは到底理解できない。

俺は昔、いつも怯えていた。

いつ迫撃砲が飛んでくるのか。

いつ俺の頭が吹き飛ぶのか。

いつ死ねるのか。

俺は、それだけを考えていた。

俺は花火を知らない。

故に、花を知らない。

だが、火は知っている。

火は推進薬を起爆させ、弾頭を押し出してくれる。

……そうだ。

俺は、1つだけ花を知っている。

——桜だ。

俺は生まれた世界で、3度だけ……桜の花を見たことがある。

綺麗だった。

夢のようだった。

桜の花を見ていたときだけ、戦いを忘れられた。

あの人が俺の隣に居て、桜を見せてくれた。

そうだ。

彼女が居た時だけ、俺は桜を見れた。

あの時見た桜は、なによりも綺麗だった。

戦いを忘れて、平和だと思ってしまった。

俺は、それが偽りの平和だと知っていた。

だからこそ、身を以て知ることになった。

人ではない俺には、偽善しかないのだと。

《ねえ、貴方は何故戦うの？》

俺はこの問いに、答えられなかった。

答えてはならなかった。

けれど、答えねばならなかった。

《ごめんね、銀狼。最期まで、なにもしてあげられなくて》

それが彼女と交わした、最後の言葉だったから。

俺と彼女は、それ以上言葉を出さなかった。

俺はただ、目を閉じて黙っていることしかできなかった。

彼女も、黙って涙を流すだけだった。

それだけで、分かり合えたから。

それだけで、別れだと悟れたから。

それだけで……………彼女は死んでしまったから。

《ごめんね…………ごめんね…………ごめんね…………》

ただその言葉が、俺の頭の中で残響していた。

「……………あれから、13年……………か」

昔の夢を見た。かなり昔の夢だ。

俺がまだ生まれた世界に居たときの——レジスタンスで戦っていたときの記憶だ。

母親の居ない俺に、母親のように接してくれた彼女。

そいつが死んだのが、今から13年前の春だった。

桜の木の下で、静かに息を引き取った。

「……………墓参り、行くか」

俺は朝日の昇らない外を眺めながら、女子寮の屋上へ上がった。

ステルス
不可視化を起動させているウルブズに飛び乗り、上部ハッチを開けて中へ飛び込む。

今は遅れた桜が咲いている時期だ。まだあの木は、あるだろうか。

ウルブズの転送装置を起動させ、東京の外れにある広い野原へと転移する。

そこは森の中で、そこだけが木が無く、丸く開けている。その中心に、1本の桜の木がある。

桜は満開とまでは行かないが、そこそこ咲いていた。

俺はウルブズを降り、中心に咲く桜の木の下へ行った。木の下には何も無く、ただ芝生が広がっている。

「有栖・愛世。ありす まなせ お前はまだ、俺に？気にしないでいい？と言ってくれるのか……………」

防弾制服・黒の内ポケットから小さな銃を取り出し、ハンマーを起こす。ディヴィーザ ネロ

彼女が自殺用に常に連衡していた銃、ハイスタンダード デリンジヤー。41リムファイアと呼ばれる小さな弾丸を発射する、小型拳銃だ。

「貴殿への償いを、ここに」

小さな銃口を顎下に押し付け、小さなトリガーを引いた。

パンッ！

41リムファイア弾は俺の顎下に直撃し、俺は後ろへ仰け反りながら倒れた。

……だが、俺は生きている。この程度では、死ぬことができない。

上体を起こしてデリンジャーを桜の木の根に置き、肩膝を付きながら目を閉じる。

彼女を殺してしまった、罪を償うために——パンッ！……再び、小さな銃声が響いた。

銃口は俺を向けて置いておいたはずだ。だというのに、銃口は何も無い方向に向いていた。

「……今年もまた、同じ答え……か。いい加減俺を攻めてくれ。俺に、罪を償わせてくれ……！」

風で靡く花を見ながら、俺は木の幹に寄りかかった。

愛世、お前はいつになったら、俺を攻めてくれる？ お前はいつになったら、俺を悪だと言ってくれる？ お前はいつになったら、偽善者の俺を裁いてくれる……！

「……ッ……！ また来年、俺はここへ来る。お前が俺を裁くまで、何度でも……な」

デリンジャーを拾い、セーフティーレバーを180度回転させ、バレルを上スイングアウトして空になった薬莢を取り出し、桜の木の下に投げた。

ウルブズの後部ハッチから乗り込み、俺は武偵高へ戻った。

俺は、毎年こうしている。殺してしまった罪を償おうと、毎年……だが、彼女は俺を攻めない。？ 貴方は悪くない？ と、俺にさ

「さやきかけてくる……！」
「いつか彼女が俺を悪と認めてくれるまで、俺は永遠にここへ来るだろう。」

「イヴ、レキ。起きろ。もう朝に——………どういった「冗談だ……？」」

「どうしてまた朝帰りなの？」

「………私たちでは不満………ということでしょうか」

「………墓参りだ。他用は無い」

突きつけられている銃剣とナイフを手で返しながら、IMI ガリル ARM のマガジンに 5.56 ミリ NATO 弾を入れる。
よくゲームでマガジンを取り替えて、ほいほいマガジンを戦場に捨てていく真似をする馬鹿がいるが………あれを実際にやったら、大変なことになるぞ。
意外とマガジンは高いからな。リサイクルリサイクル。

「お前ら、今日からアドシールドなのだから、少しは緊張感を持て」

「「……………？」」

「2人揃って首をかしげるのはやめろ。………一応OHNの総帥として言うが、こういった大規模イベントは格好の的だ。俺もよく狙っていた」

「……………一理ありますね。ここ最近は、風に邪なものが混ざっています」

「自慢じゃないけど、全然わかんない」

「……………」

俺とレキは無言で銃の整備を始めた。

それに倣い、イヴもDESERT EAGLEの整備をしていた。
DESERT EAGLEのバレル清掃に、金属製のブラシは使えない。同時に、鉛弾も使えない。50AE弾や41AE弾は、弾頭が銅でできている。この銅にも色々あるのだが……まあ今はいい。
問題は、このガリルだ。

アサルトライフル
俺はARの経験が乏しい。過去3度くらいしか使っていないからな。
遊騎はハンドガン・アサルトライフル・ショットガンが長けていたし、和輝はマシンピストル・サブマシンガン・アサルトライフルが長けていた。飛鳥は……………考えたくも無い。あれは異常だ。何故全ての銃が使える……………！？

ハンドガン サブマシンガン スナイパーライフル
かくいう俺は、自動拳銃・SMG・狙撃銃だけだ。
しかも、ハンドガンは大口徑・ロングバレル限定ときた。

「……………銃を取りに行ってくる」

「何処に？」

「本来俺がいるべき場所だ」

男子寮を指差して言うと、イヴがしゅんとし、レキがボーっとして
いた。

……… 反応しているのかしていないのか、微妙だな。

部屋を出て男子寮にあるキンジの部屋のベランダに跳び込むと、ア
リアと白雪が争っていた形跡は消え、キレイになっていた。

その中で、キンジが阿呆面で寝ている。

窓の鍵をエアロ・スミスで風を操って開け、中に入る。

そのまま俺の小部屋へ行くと、あの頃のまま放置されていた。

……… 俺、絶対アリアあたりが銃を持ち逃げすると思っていたの
だが。意外とそういうことはしないのか…。

部屋の壁に掛かっている狙撃銃の中から、全体が銀色の銃を取る。

―― H & K P S G - 1 R B S S。 H & K 社に貰った、俺専用
の狙撃銃だ。スナイパーライフル

全体を銀色に塗装されており、なにより目立つのはそのバレル。

名前にも明記されているように、これはバレルを長く・冷却機構を
発達・消音性の向上がされている。

R B S S とは、RロングBバレル・SサイレントSスナイプカスタムの略だ。

P S G - 1 を背負って女子寮に跳び、ベランダから部屋に戻る。

「その銃は狙撃に向かないかと思うのですが」

「…………… その通りだ。だがあえて、銀色になっている」

普通、狙撃手は隠れて撃つものだ。スナイパー

だが銀色などと言う色をしていたら、一発で見つかるだろう。
そうして俺は敵に見見されるようにし、無線で相手の味方に俺の存在を発覚させ、全滅させる。

そうして俺は、銀狼の名が付いた。

目立つことを恐れず、白銀の銃を持つ者——故に銀。

常に1人で行動し、見たもの全てを殺す者——故に狼。

そして、俺はレジスタンスの総部隊長に、シルバーウルフ銀狼の名を貰った。

「俺は大人数殲滅用の20連マガジンを使う故にかなり重量はあるが、俺からしてみれば大した事はない」

「……………そうですか」

「弁当と朝食は置いてあるから、各自自分でとるように。俺は先に仕事へ行く」

「仕事？ アドシールドは？」

「報道陣の警備が仕事だ。あと、裏のも……………な」

そうだ。

俺は逃げてはいけない。

どれだけの人を殺しても、罪は消えない。

だから俺は、任務に忠を尽くすと決めた。

俺の戦友が——スネーク蛇が、BIG BOSSが？自分に忠を尽くすと決めたあの日、俺はあいつの目の前で誓った。

「お前は己に忠を尽くせ。俺は任務を遂行する俺に忠を尽くす」

——と。

今俺が付いている眼帯はリンフォースから貰ったバンダナのような物だが、俺には後2つ、眼帯がある。

1つは、俺の右目の角膜をくれたスヴェン・ボルフィードという、
スライバー掃除屋。

もう1つが、とある蛇という兵士に貰った眼帯。
スネーク

スヴェンからは、己の最後のときに使えと言われ。
スネーク

蛇には、戦いの真意を見つけたときに使え、と言われている。

俺はまだ、あいつには程遠い。VIC BOSSとは言われているものの、あいつではない。

スネーク蛇、俺はいつかお前を超える。人間としてな。

「まあ、そういうわけだ。遅れるなよ」

俺は魔剣デュランダルなどいないと思っていた。

いや、デュランダルはあるのだろうが（見たことあるし。クロノの奴を）、存在は怪しい。

イ・ウーのメンバーだということはわかっている。

だが、その姿を見た者が居ないのだ。

とまあそういう雑談を、俺と同じ場所に配属されたキンジと話して

いた。

隣には武藤と不知火もいる。

「でさあー、銀狼」

「なんだ」

武藤のやる気の無い問いに反応し、返答する。

俺たちが配属されたのは、報道陣の待機室の警備。しかもその門番のようなものだ。

暇だ！

「結局、お前は何処住んでんだ？」

「……………何処、か」

パイプ椅子をがたがた揺らす武藤を蹴り倒し、椅子を直す武藤を再び蹴り倒す。

暇だ。

「あ、それは僕も気になる。男子寮にはいないみたいだけど…？」

「……………ガリルの錆になると、P S G - 1の的になるの。どちらがいい」

「どっちもゴメンこうむる」

「痛いのはちょっとね」

「……………チッ」

色々あって、俺はPSG-1とガリル、両方を持ち歩いている。
重い。あと暇だ。

「俺は今レキと住んでいる。白銀狼も居るがな」

「「……………!!」「」」

「どうした。その？二股かけてハーレムだと……!!??という表情は」

「そのまんまだよッ!」

「いや、二股していないし」

「じゃあなんで女子寮に住んでんだよッ!？」

「それは……………あれだ。キンジがアリアと白雪を連れ込んでいたから、邪魔したら悪いかと。レキならば問題は無いだろうし」

「……………キンジ……!!?」

「お、おい! 待て! まずはパイソンをしまえ! おい! アー
——ッ——!!」

というのがあったのが、今から30分ほど前。

今は俺が独断で、行方不明となった白雪を探している。

なんでも、ケースD7——事件がどうかは不明なので、極秘裏に捜査せよ——の発令により、俺まで動いているわけだ。

探しているといっても、俺はパイプ椅子に座って目を閉じているだけ。

風と心身を一体化させるレアスキル、^{エアロ・スミス}森羅万象の覇者で学園島全体を見ているところだ。各教室、学科棟、武器庫、etc…。

そこで発見したのが、第9排水溝だ。一度外されて、付け直されたような痕がある。

学園島には雨などで入り込んだ水を排水するための水路が幾つかあり、その1つが第9排水溝。

武偵手帳でどこへつながっているのかを調べると、^{ジャンクション}地下倉庫へ繋がっていた。

ふむ……少々マズいな。

^{ジャンクション}地下倉庫には弾薬が大量に保管されている。もしそこに拉致されたというのなら……俺に分があるな。俺の弾は火薬に当たろうと引火はしない。

俺は学園島の横に設置されている第9排水溝のフタを力で引き剥がし、^{ジャン}脚から中へ入る。滑り台の要領で下へ折り続けると、暗い^{ジャン}地下倉庫にたどり着いた。

完全な闇ではないな。所々に緋色の非常灯がついている。

だが、俺にとっては完全な闇だろうとさして変わりはない。^{エクリ}EC因子^スのせいで、右目に光は入らない。入るのは、熱・気配・空気のみ。

っ。

敵対心や警戒度が上がればそれに応じて紅く見えるし、気流も見える。サーモグラフィのような感じた。

というわけで、しかたなくエクリプスEC因子を左目に集中させている。

流石にデИБライダーを出すわけにもいかないからな。一撃で全てを破壊してしまいそうだ。

俺は右手にDESERT EAGLE 14inchを持ち、左手にシース・ナイフを逆手で持つ。

曲がり角にさし当たるたびにその場でしゃがみ、ナイフを鏡の代わりにして先を見る。

——グリーン敵影なし。

「……………何処だ……………」

姿勢を低くしたままで全くの無音で走り、角で止まる。
そしてまた、ナイフで先を覗く。

——グリーン敵影なし。

ジャンクション
地下倉庫の奥、火薬庫へ行くと——

『デュランダル
魔剣……………どうして、私を……………』

——いた。

巫女装束を着た、白雪だ。

『力なら銀狼さんのほうがある。なのに、どうして……』

『……………あいつの力は強大すぎる。それこそ、イ・ウーを滅ぼしてしまえるほどに』

『……………』

『奴は言っていたな。^{グレート}G427だと』

白雪が黙った。

^{デュランダル}男喋りの魔剣の声は、確実に女だ。

どれほど声を変えようと、声帯は変えられない。

『世界に存在する最強のGは、27……………。奴は、人間ではない』

『……………^{ハンブニーハンバード}人食い玩具』

『……………まさしく、それだろう』

チツ。人の悪口ばかり。

もう面倒だ。正面から突っ込み、正攻法で^{デュランダル}魔剣をボコす！

DESERT EAGLE 14inchのグリップで壁をゴンゴン、と叩き、存在を知らせる。

『し、銀狼さ——きやあ!』
シルバーウルフ

『まさかな……。お前が来るとは』

ギイ……………ゴウンツ。

今のは何か思い鉄製の扉を閉めたような音だ。

壁のように積まれていた火薬の箱を飛び越えると、ツイストナノケブラー T N Kワイヤー
が1本落ちていた。

これは……………白雪の巫女服や武偵工の制服に使われている、強靱なワイヤーであり、攻撃、防御に転用できる。

それと、鎖を引きずったような痕と、同じ足跡が2つ。

これだけの情報があれば相手はわかる。

身長は150センチ強・体重30キロ前後・武具類を含めて40キ
口弱。

……………相当な重装備だな。恐らく何割かが鎧だろう。その程度足跡を見れば解る。

鉄製の扉を蹴り開けて中に入ると、小さな部屋に白雪が太い鉄パイ
プに縛られていた。鎖で。

鎖は鉄骨を吊るすような太い奴で、それを縛っている4つの鍵はド
ラム錠だ。そう簡単には開錠ヒッキングできんぞ。

「銀狼さん！ キンちゃんたちは無事ですか!？」

「今は己の心配をしる。一応、キンジは無事だ。阿呆面で寝てる」

「じゃ、じゃあ、デュランダル 魔剣を——デュランダル 魔剣を捕まえてください！ 私に構

わず！」

「黙れ。俺は任務を遂行するだけだ」

「に、任務？」

「？イ・ウー構成員の全てを一切の死者を出さずに、尚且つ無傷で捉えよ？。ここでお前を見殺しにはできない——が……これは少々な」

ゴポゴポツ、と水音がすると、床には海水が浸っていた。
部屋の端から——噴水のように海水が出始めている。

すぐ傍には上へつながらる梯子があるが、マンホールのような扉は閉ざされているな。

これだけの海水を止めるとなると、エアロ・スミスでは無理だな。
海水を逆流させてしまい、海が大変なことになる。

下手すれば大洪水に……………。

「すまないな。俺がキンジならば、お前も少しは気が楽だったろうに」

「そ、そんな！ 兎に角先に……」

海水は既に膝まできている。

この調子で行けば、あと2分もあれば首まで来るだろう。

……………だが、それは俺の話。縛られてるこいつなら、あと1分半で顔が埋まるだろう。

「……………ッ……………！ 背に腹は代えられないか」

魔法が使えない以上、エクリプスEC因子とナノマシンに頼らざるをえなくなる。

DESERT EAGLE 14inchをホルスターに収め、ナイフも鞘にしまう。

「今から見るのは、他言無用だ。……………いいな」

「……………はいっ」

トランス クレイモア
「変身・大剣！」

ズガンッ！

トランス幅広の大剣に両手を変身させ、一撃で鎖を断ち切った。
トランス瞬時に変身を解除し、後ろへ下がる。

「……………最早現実など、関係なし……………か。轟き叫べ、絶望へと――
――ハーツヴァイフロン」

左手に両刃両刀の金色の大剣が現れ、左手に収まった。
クレイモア幅広の大剣の柄頭同士をくっつけたような形状をしたこれは、破壊したはずの魔導書の力。何故か俺の体に残っていた。

全長は4メートル。片方の刀身は2メートルだ。特徴といえば、刀身に大きく刻まれている十字架以外が全て金に輝いていると言つことぐらいだろう。

「エアロ・スミス発動。デイバイド分断」

腰まで来た海水に右手をつけ、水素へ分解していく。水素は部屋の天上へ集まり、それを閉ざされた扉へと誘導。そこへ、左手を突っ込む。

「マスターズ・チェンジャー発動。左腕変性・炎熱」

空気が振動し、マンホールのような蓋が上へ吹き飛んだ。階段は無傷だ。これで上へ上がれる。

念のためこの部屋へ来た時の扉も破壊し、水を逃がす。

「白雪、お前はキンジたちが来るまではここにいろ。デュランダル魔剣は俺一人で捕らえる」

「待つて！デュランダル魔剣は超偵。超偵との戦闘経験はあるんですか!？」

「無い。第一、貴様ら超能力者など紛いものに過ぎん。ステルス俺は魔法使ヴィザい……いや、魔導師だ」

階段を使わずに上へ跳び上がり蓋を軽く閉めておく。
まああいつらなら来るときに押しのけられるだろう。

「出て来い、魔剣^{デュランダル}。騎士道精神に重んじて一対一だ」

『……………いいだろう。1人できたこと、後悔させてやる』

スーパーコンピューターが並んだ中で、1人の女が出てきた。
刃のような切れ長の瞳は、サファイアの色をしていて、2本の三つ
編みをつむじの辺りに上げて結ったストレートロングヘアは、氷の
ような銀色。どこか古めかしい日本語とは裏腹に、魔剣^{デュランダル}はまさに西
洋の歴史映画に出てきそうな——美しい、白人だった。

……………だからといって野放しにはできんがな。

「箆手・胸当て・ベルトスカート……………。俺の良く知るバリアジャ
ケットだな」

「バリアジャケット？　なんだそれは。これは由緒正しき甲冑だ」

「……………そうか。それはすまない。だが、お前のような女子が肩
や脇腹を露^{あらわ}にするというのは……………関心できんな」

ジャンヌの着ている甲冑は、胸元から首だけを隠すノースリーブの
インナーの上から着用しており、一応へそは通し布で隠れているの
だが、背中と脇は肌が露出している。ベルトスカートも腰当と布だ
けで、インナーはミニタイトスカートのようなものだ。

……ああ、目のやり場に困る。

「うつつ五月蠅い！　これは正装だといっておろうが！」

「……………そうだったな」

左手のハーツヴァイフロンを両手で持ち、中心から2つに分ける。
これで、俺には実質幅広の^{クレイモア}大剣二刀ということになる。

「……………で、どうする。俺はお前を確保する気はあるが、殺す気は無い」

「ふんっ。甘いな」

「甘くて結構。…………と、そうだ。お前の名は」

スーパーコンピューターに寄りかかり、訊いてみると、

「……………貴様の言動に敬意を払い、答えよう。私はジャンヌ。ジャンヌ・ダルク30世だ」

「——ッ！　Jeanne d'Arc…………？　それは、本当か」

「本当だ」

「……………まあ、いい。俺はお前を無傷で捕らえる。——来い」

ハーツヴァイフロンを構えると、ジャンヌは背中から取り出した幅^クレイモアデュランダル
広の大剣を——魔剣を、構え、

「いざ、尋常に……………」

「——勝負ッ！」

俺とジャンヌは、同時に走り出した。

「ふっ！ はあっ！！」

「脇が甘い。閉めろ」

「つく！ でやあっ！！」

ジャンヌの剣をハーツヴァイフロンでいなし、避け続ける。
ハーツヴァイフロンは全長4メートルと巨大なので小回りは利かな

いと思われるが、実はそうでもない。
両刀が故にできる、体を軸にしての回転斬り。
棒術ではよくあるパターンだ。

「ステルス超能力を使え。精神を強靱に保ちながらだ」

「このおっ!!」

「能力を秘匿するな。全力で来なければ倒せんぞ」

ギンツ！ ギギイツ、バギンツ！

金属音が響きながらも、辺りには小さな氷の結晶が浮いている。

……..
ダイヤモンドダスト燃える銀氷か。

「……鳴り止め」

俺の掛け声と共にハーツヴァイフロンが消え、その隙を突いてきた
デュランダルジャンヌの魔剣を避ける。

俺は背中の上の方に手を廻し、キーワードを口にする。

「ブレードセット」

背中に現れた斬馬刀スライサーを掴み、魔剣と鰐迫り合いになる。
デュランダル

——みれば、魔剣には氷が纏っている。
ステルス超能力を応用したか。

というか、説明しておこう。こいつは超能力者^{ステルス}で、氷を使う。まあ俺は全て使えるが。

「^{デュランダル}氷の魔剣か。面白い。俺の知り合いの剣を借りよう。……………唸^{レヴァンティン}れ、炎の魔剣！」

「なっ——！！！」

^{スライサー}斬馬刀の刀身に炎が纏い、ジャンヌの氷を溶かす。
だがそれでも、ジャンヌは俺の炎ごと凍らせようとしてきた。

「怯えるなッ。戦闘中に恐怖を持ち出せば死ぬぞ！」

「……………！」

「……………変性、^{バルディッシュ}雷の魔剣！」

「なにっ！？」

炎から雷に代わったことでジャンヌの反応は遅れ、俺の一太刀をまともにくらった。

と言っても、手加減をしているので胸当てに少し傷が付いた程度だ。

「氷、炎、雷……！？ 貴様、一体どれだけの属性を使えるんだ！」

「全てだ」

「全てだと!? ありえん! そんな奴がこの世界に存在するはずが「してしまうから、この世界は恐ろしい」——っ!」

「元々、俺はこの世界の部外者だ。^{イレギュラー}その程度の能力は持っていて不思議は無い」

「だ……だが、能力が強ければ精神力の減りも!」

「俺は精神力を使わ無い」

「なら札か! 第?種超能力者なのか!?」^{ステルス}

「違う。^{ノン}俺は異能。第零種超能力者——^{ステルス}魔導師だ」^{ヴィザード}

「ふ……ふざけるなあっ!!」

氷を纏った幅広の大剣を大きく振りかぶり、ジャンヌが走ってきた。^{クレイモア}
やれやれ……。俺は斬馬刀を消し、両手を下げて歩き出す。^{スライサー}

「私が、貴様なんぞにい!!」

「——……核の差をわきまえろ。小娘」

ジャンヌが俺の後ろに居た頃には、俺の左手に、大きな刀身が。

「……………っ……………！？ バカな……………！！」

「全てを斬る聖剣、デュランダル。その真意は、敵の心を凍らすことだ。馬鹿者が」

左手に持った大きな刀身を投げ捨て、座り込んでしまったジャンヌへ近づく。

俺はジャンヌに斬られる瞬間、左手で聖剣を受け止め、鰐の根元でへし折った。

よって、ジャンヌの右手には、柄と鰐だけになった聖剣がある。

「……………私の負けだ……………。煮るなり焼くなり、好きにするといい」

「む、そうか。なら話が早い」

投げ捨てた刀身をジャンヌに渡し、放すなよと忠告する。
俺は疑問符を浮かべるジャンヌを無視し、

「まっ、待て！ 確かに好きにしろとは言ったが、それとは意味が！」

「クククッ。敗者の声は聞こえんな」

軽々と抱き上げた。

だが、ジャンヌにデュランダルを持たせてあるので、俗に言う『お姫様抱っこ』の姿勢だ。

「やめろっ。こ、これは、違う意味で死ぬっ！」

「なら死ね」

「頼む！ これだけはやめてくれ！！」

「断る」

「何故だっ！！」

「俺は騎士道精神に則り、お前を『名』で呼んでいる。お前が俺を名で呼ばない限りは断る」

「それはわかった！ だが私はお前の名を知らない！」

「情報不足もいいところだな、ジャンヌ」

「策士の恥だということはわかっている！ だがせめてこれをやめてくれ！」

「却下。策を練れない策士へのお仕置きだ」

俺の腕の中で暴れるジャンヌと遊びながら、切り刻まれたスーパーコンピューターを避けて歩く。

流石は誇り高き魔女。オルレアンの乙女だ。

……だがな、ジャンヌ。俺とお前は、遺伝子的には家族に近いのだ。ジャンヌ・ダルクにあったとされる、『戦士の遺伝子』は、俺の中にも入っている。

……何か陰謀を感じるな。恐ろしいほどに。

「か、双剣双銃！　これでいいだろう！」

「大ハズレ」

「無刀無銃！」

「名ではない」

「ヴィ、魔導師！」

「それも2つ名だ」

「ええい！　お前は私に何をさせたいのだ！！」

「——それを、ここで言えると思っているのか？」

「……………え…………？」

火薬庫を通り過ぎ、ジャンヌを抱きかかえたまま上へと跳び移っていく。あと少しで地上に戻るな。

……………一方ジャンヌは、何を想像したのか、その白い顔を真っ赤にしていた。

……俺、ジャンヌは好きだけどな。騎士道精神をもってるし。

「き、貴様！ なにかやらしいことを考えていないだろうな！？」

「待て待て待て待て！ 何故そうなる！ そういつことを考えるお前はどくなのだ！」

「え！ あ、いや。た、他意はなくてだな！」

「無い方が困る！ せめて口が滑ったと言ってくれ」

「そうだ！ 口が滑っただけだ！ そういったことは考えていない！」

「それでいい。そうしてくれ。でないと俺が殺される」

来た時とは違うルートで地上へ出ると、良い具合に風が吹いていた。先刻まで地下で戦っていたせいかな、少しだけジャンヌも汗をかいている。冷たい風が心地よさそうに見える。

「ジャンヌ。OHNへ来い。それが今回の件を見逃す条件だ」

「……………嫌だと言ったら」

「この場で武偵高の尋問科^{タギョウ}に突き出してやる」

「……………わかった。OHNへ行こう」

「ああ。契約成立だ」

風に吹かれるジャンヌの顔は、何処までも清々しそだった――

8 弾 超常現象（後書き）

あとがき

作者 「えー……………イヴ・理子・レキ・美咲・ジャンヌフラグが立ちましたね」

銀狼 「頼む！ 頼むからやめてくれ！ これ以上ややこしくするな！…！」

作者 「えー！」

銀狼 「……………不満がダダ漏れたな」

作者 「お前が泥沼の修羅場に填まらないとつまんね」

感想返し

空牙刹那 様

銀狼 「遊騎に教わったからな。それに依頼人クライアントからの要望でもあったし」

作者 「……………つてか、この世界で遊騎たちって出てくるのかな」

銀狼 「……………来るのか？」

作者 「……………プロフェシオン教授戦では来るかも」

銀狼 「……………そうか」

黒鋼様

銀狼 「作者！ やめろ！ 縄を解け！」（椅子に縛られてる）

作者 「ほれほれ！。黒鋼さんから貰ったものでも見とけー」

銀狼 「や、やめろ！ くwhyせ@gfrふxじmbsこ!？」

作者 「あ……。銀狼壊れちった」

作者 「まあいいや。というわけでいただいた物を全て銀狼に見せた結果、発狂して失神しました」

アナウンス 「銀狼 が ログアウト しました」

次回予告

デュランダル

魔剣ことジャンヌ・ダルクを保護した銀狼。彼に課せられた任務の真意とは、守るための戦いの真意とは、魔弾の真意とは――？

次回、緋弾のアリアく魔弾の射手く 9弾 無限罪のブラド

作者 「次回から緋弾のアリア？巻の、く蜂蜜色の畏編くとなります」

9 弾 無限罪のフラド（前書き）

今回からは原作？巻の話ですよ

9 弾 無限罪のブラド

歓声が響いた。

俺はジャンヌをマスタース教務科に「知り合いだ」と言っで一時的に置かせてもらい、アドシアード開会式で魔弾の射手を演奏した。
その結果が、歓声の嵐だ。

……まあ、それはいい。

問題は、俺の前にやっていたキンジたちのバンドと、そのチアだ。

俺は必死に止めた。

お前はやるなと言った。

だがな。

案の定、あいつはやりやがった。

——チアを。

——イヴが。

「……………ふう」

そういった事があったのも、それは昼頃の話。

今はアドシアードも終わり、部屋で椅子に座り、コーヒ一片手にくつろいでいる。

で、足元には鎖で縛られ、転がっているジャンヌが。

「んー！ んー！！」

「……………ふう……………」

あまりにも五月蠅いので後ろ手にして銀の鎖で縛り、スカーフで口も塞いだ。

ああ、何故銀の鎖かというと、ステルス超能力者は対^{ステルス}超能力用の銀を使われると能力が使えなくなるからだ。俺は使えるがな。

言っておくが、趣味やそういう類でこいつを縛っているわけではない。
マスターズ

教務科で暴れたことから縛って持ち帰った。それだけだ。

こいつは曲がりなりにも英雄の子孫だ。それなりの扱いはしている。もしこいつが一般人であれば、問答無用で尋問しているところだ。

「……………いい加減、落ち着いたか」

「……………！！」

首を横に振り、否定を表す。

そつか、落ちて着いていないのか。なら鎖はほどけんな。

「……………んー！！」

「紙とペン……？ ……………ほれ」

床に転がっているジャンヌにメモ帳とボールペンを渡すと、後ろ手に縛られているにも関わらず、見えない状態で器用に文字を書き始めた。凄いな。俺でもできるかどうか。

「……………！」

「む……………フランス語か……？ それもかなり達筆な……………」

ボールペンでトントンとメモ帳を叩いていたので、拾って読んでみる。

えーと……………「S'il vous plait communique！」だど？

確かフランス語で……………ああ。「解放してくれ」か。

「断る。お前が騒いだ罰だ」

「……………っ」

投げ渡したメモ帳に再び何かを書くと、また達筆なフランス語だった。

「Que dois-je faire？」……………ええと……………「なら私は何をすればいい？」か。

「まずは落ち着け。そして自らの置かれた理解しろ」

「……………」

コクコク、とジャンヌが頷いたので、用件をメモ帳にフランス語で書いていく。

日本語訳すると、「一つ、お前は俺に敗れ、俺の支配下にある。一つ、現在のお前に自由は無い。一つ、大人しく俺に従え」だ。一応忠告しておくが、独占したいとかそういうことではない。こいつに危害を加えないために、あえてこうしている。

「……………理解できたか」

そう訊くと、ジャンヌはサファイアの瞳を瞬かせ、ゆっくりと頷いた。

同時に俺は鎖を解き、スカーフを外してやる。

「やつと解放され「忠告がある」…………なんだ」

「別にお前が暴れようが能力を使おうが俺の知ったことではないが、俺にわずかでも危害を加えた場合・俺に迷惑が掛かる場合は容赦なくお前を倒す」

「……………核の差がわかっていて、戦おうなど思わん」

「ならいい。……俺に何か用はあるのか」

「わ、私は解放されるのか？」

「それなりの行動制限はつけさせてもらう」

「……そうか」

ジャンヌは椅子に座り——と言っても、両足をキツチリ揃え、わずかに傾け清楚になのだが——静かに、安堵の息を吐いていた。俺は空いていた小部屋に増設したクローゼットからある物を1着取り、ジャンヌに渡す。そのままキツチンへ。

「コスタリカ・コーヒーしかないが、いいか」

「あ、ああ。ブラックで大丈夫だ。それより、これはなんだ」

「お前の制服だ。一応編入届けは出しておいた」

コーヒーを持ってリビングへ戻ると、ジャンヌは顔をしかめていた。……制服に何か不満があるような顔だな。

「何故私の寸法を知っている？ 明らかに寸分違わずぴったりだと思っただが」

「それを訊いてお前に特はあるのか」

「いや、無いが……」

「なら訊く必要も無いだろう」

「合理的には、な。だが、私はこの歳の女にしては長身だし、規定のサイズでもなさそうだが」

「気にするな。ただの発注品だ」

「そ、そうか。発注品か——って！ 何故私のサイズを知っている！？」

「見れば解る」

「み、見れば——っ！？ 視姦か！？ 視姦したのか！？」

「殴り殺すぞ阿呆が。………とりあえず、お前のデュランダルは折ってしまったし、侘びと言ってはあれだが……ほれ」

壁に立てかけてあった剣を取り、渡す。

デュランダルを作り直すのに1時間もかかるとは……。

「Panzerstecher………幅広の大剣には戻せん。幅
エストック
広の鎧貫剣に作り変えておいた」

「デュランダル！ まさか、私のために……！？」

「まあ……な。折ったのは俺だ。直す義務がある」

「……………すまない。私はお前のことを少々誤解していたようだ」

「どついつふつに」

「監禁した上に視姦する変態だと…」

「よし。その性根から叩き直してやろう」

DESERT EAGLE 14inchに手を掛けると、ジャンヌがあせり始めた。

「ほっ本当にすまなかった！……………名を、訊いても良いだろうか」

「……………コードネーム・銀狼。シルバーウルフ超偵だ」

「……………本名は」

「名は捨てた」

「……………そうか」

「ジャンヌ。お前には明日から武偵高へ通ってもらう。設定はパリからの留学生だ」

「なっ！ 何故私が武偵にならねばならない！」

「大人しくしろ。悪いようにはしない。先刻行動制限すると言ったが、ただ武偵高へ行けと言っているだけだ。私生活は自由にしろ。俺はそこまで干渉する気は無い」

「本当に、お前を信用して良いのか……！？」

「それも自由だ。それと、お前の銃を渡しておく」

防弾制服・黒の上着の下からCZ100を取り出し、ジャンヌにレ
ッグホルスターごと渡す。

9ミリパラベラム弾を使う、チェコの銃だ。

「お前は銃の経験が無い。これで充分だ」

「待て。何故私が銃を撃ったことが無いと知っている」

「腕を見るか触ればわかるだろう」

「さ、さわ——っ！ 貴様！ 私の腕を触ったのか……！」

「そう騒ぐな、減る物でもなし。そもそも触ってなどいない。俺にそういう趣味は無いのでな」

顔を真っ赤にしているジャンヌは——清楚正しい、お嬢様と言っ

ていいだろう。

言葉遣い、立ち回り、動き、反応……。その全てが、上品やそういったものではない。オルレアン^{マスタース}の乙女そのものだ。

「明朝、武偵高の教務科^{マスタース}へ行け。あとは担任がどうにかしてくれる」

「……………わかった。お前は所々不謹慎だが、信用がでкин奴ではなさそうだ」

「不謹慎なのはお前の思考回路だ。不健全な思春期の脳内め」

「そういうお前はどうかんだ！ 明らかに成人していると言つのに
も関わらず高校にいるとは！！」

「これは国からの命令だ。仕方ないだろう」

「国から！？ お前Sランク武偵か！？」

「お前に勝つ武偵がAランク以下で満足いくのか」

「いや、いけないが……。そうか。Sランクだったのか」

「厳密には超偵らしいがな。……………ともかくだ。お前の生活に必要な物は俺がそろえてやる。それがわかったら今日は大人しくして、何事も起こさずに静かにしている」

「……………未婚の乙女が同じ屋根の下だからと襲うなよ……！？」

「襲つかッ！！……………ったく。お前といるとどうにも

調子が狂う……。もういい。俺は寝る。7時になったら起こせ」

「嫌だと言ったら」

「勝手に起きる」

俺は髪をガシガシかきながら、空いている部屋に入って窓を全開にする。

窓枠に座り、俺は寝た。

(……………7時か)

体内時計を頼りに起きると、目の前にジャンヌがいた。

俺は目を半開きにしているので、起きているとは思っていないのだろつ。

「……………こうして見ると、悪い奴ではないのかも知れんな……………」

笑いそうになった。

いやな、ジャンヌが頬を赤らめながら言うと、どうにも笑いそうになる。

あれだ。イヴが顔を赤くして言い寄ってくるのとは違い、何処かむず痒い。面白い体験だ。

「銀狼。お前が聞いているかは知らないがな？ 私は、正直お前のことは嫌いではない」

そうか。

意外だな。

嫌われていると思ったのだが。

「半日前は敵同士だったにもかかわらず、その目の前で堂々と眠るとは……。殺されたいのか」

ジャンヌがデュランダルを構え、振りかぶり――

――デュランダルを、下ろした。

「……………無意味だな。私に勝ち目は無い。ここを逃げようにも、すぐに捕まる」

まあな。

逃げられたら捕まえるさ。

土日に何処へ出かけて泊まってこようが俺には関係ないが。

「……それにしても、何故手袋を……」

腕を組んでいる俺の手をつつき、手袋に興味津々なジャンヌ。

俺は風呂入るとき以外はこの黒地革手袋をしているので、誰でも不思議にも思っだろう。

「………仕方ない。お前が聞いていない事を祈って、イ・ウーについて教えてやろう」

聞こえていないのを祈るなよ。

言うだけ無駄だろ、それ。

「お前は理子のためにブラドを倒そうとしているようだが、やめろ。ブラドは人が勝てる相手ではない。あれに勝てるのは、プロフェッション教授ただ1人だ」

プロフェッション
教授………？

確か、イ・ウーの実質的なナンバー1だったな。

で、ブラドがナンバー2……。

『無限罪のブラド』ですら勝てなかった相手……か。

……一度、殺シアツテミタイナア……！

「——っ！？　なんだ、この殺気は……！」

うおっ。マズい。

危うくもつゝ^{ジャック}1人の俺が出てくるところだった。

この世界でジャック^{ハヤヒト}が早日渡を出せば、すぐに日本が滅んでしまう。
殺人衝動を抑えねばな……。

「………気のせい………か。まあいい。イ・ウーにお前
が関わっても、ロクな事はない。それだけ言っておく」

ジャンヌが部屋を出ようとしていたので、俺はその左手を掴んだ。
窓枠から降り、ジャンヌを引き寄せる。

「なら、何故お前はイ・ウーに入った」

「お前っ、起きていたのか！」

「ああ。全てな。^{プロフェシオン}教授とやらについて、もっ少し聞かせろ」

「ダメだ！　これ以上は危険すぎる！」

「ならイ・ウーは今何処にいる」

「わからない！ あれに私たちが帰るときは、数週間コールし続けてやっと返事がきて、それから帰れるのだ！ 今の私にはわからない！」

「ならば危険というのは」

「イ・ウーは私闘を禁じていない！ これ以上の情報は私が危険だ！」

「……………ならば守ってやる。だから聞かせろ」

「ま、守——っ!？」

そう言うと、ジャンヌは白い頬を真っ赤に染め——倒れた。俺に寄りかかるようにして。

あ、頭から煙が……。かなりキてるな。こいつ。

「……………仕方ない。寝かすか」

気絶してしまったジャンヌを壁際に座らせ、ディウイーザ防弾制服・ネロ黒の上着を
かけておく。

全く。世話の掛かるお嬢様だ。なあ？ オルレアンの乙女？

9 弾 『無限罪のブラド』

「まだ立つのか、ブラド」

「ゲウババババ……！ 貴様……よくも」

「流石にしぶといな。ブラド——いや、ドラキュラ伯爵」

「うるせえ……！ 死ねEEEEEEE！！」

人の頭を軽々と握りつぶせるほどの巨大な拳を避け、ブラドの巨大な顔にある、口の中へとDESERT EAGLE 14 inch を突っ込む。

「貴様は終わりだ。二度と、理子には手を出すな」

「このオレが………人間ごときにYYYYYYY！！！！？」

ガウンッ！

ブラドの舌にある目玉の模様を撃ち抜くと、その場でブラドは力なく倒れた。

俺は回収したブツをポケットに入れ、その場を去る。
ミッションコンプルート
任務完了。

「情けだ。次に会うとき、捕獲してやろう」

ガガガガウンッ！！

5発の50AE弾をブラドの顔に当て、俺はブラドの体をエアロ・スミスで視認不可能にしておいた。
あとはブツを、理子に渡すだけか。

「ゲハババ……。オメエ、どうして殺さねえんだ」

「貴様は殺す価値など無い。それだけだ」

「オメエの腕を千切ったんだぞ」

「……………腕の1本や2本でブツを取り返せるのならば、
気にする怪我でもない」

ポタッ、ポタッ。

俺の右肩から垂れる血が、俺が歩いた道を描く。
クソッ。予想外の出費だ。

「次は殺してやる。銀狼」

「ああ。そのほうが面白そうだ」

俺はラヴァル・ヴィザーを発動させ、武偵高・女子寮へ転移した。右肩からは血が溢れ、貧血気味だ。

女子寮の1011号室。

電子鍵をクラッキングして入ると、中にはあいつが居た。

「しっ、シーくん！？ なにその怪我！！」

「ブラドを倒してきた。それより、これを……」

ポケットからブツを取り出し、理子に渡す。すると、理子は泣き始めてしまった。

「泣くな。折角取り戻したと言うのに……」

「だって！　なんでシーくんが！！」

「俺の勝手だ。お前が気にすることでもなければ、この程度の怪我は大した事ではない」

「でも！ 理子は取替えしてなんて言っていない！」

「俺が取り返したかった。それでは駄目か」

「~~~~っ!!」

ぼすっ!!

理子が慌てて救急箱を取り出し、包帯を俺に巻こうとするが――
俺はその手を止めた。

目を伏せ、首を横に振り、「必要ない」と訴える。

「せめて止血だけでも！」

「いらん。腕の1本や2本に、そこまでしている時間は無い」

休息のためにベッドに座ると、俺の右隣に理子が正座し、おろおろしていた。

普段のおどけっぷりから見ると、ギャップが凄いな。

「ククッ……」

「笑ってる場合じゃないよ!？」

「ああいや、すまん。お前の慌てようが凄くてな」

右手で理子の頭を撫でようとし、右肩が空を切った。
……………そうだ。今の俺には、右腕が無い。

「——理子」

「ひゃいつ!？」

「お前は、俺が普通ではないことを知っているな」

「そ、そうだけど…!」

「そう。俺は普通ではない。今から起きることも、全て」

俺は、体内に存在するある物を右肩に集中させる。
ナノマシンではない。

それとは違う、もう1つの普通ではない物を。

「お前はこれを見て、何を言うか——ッ!」

ずりよっ!

俺の右肩の断面から骨が突き出し、腕の形を作る。
ぐじゅっ!　びじゅるるる……!　

神経・血管・筋肉・皮膚・その他諸々が骨を取り巻き——

「な……なに………それ……!」

「怖いだろう…？　俺は、これほどまでに普通ではない」

——俺の、新たな腕となった。

手を握り、開く。動きを確かめる限り、問題無いな。

「……………俺はな、お前らと同じ人間ではない。…………俺は、改造人
クロヴィテンス 間新人類近種だ」

ポケットから黒地革手袋を出し、右手に填める。
クソッ…………。防弾制服・黒ネロを買いなおさねばな。袖ごと持っていたか
れた。

「……………ねえ、銀狼……………」

「……………なんだ」

震えた声が、俺の右隣から聞こえた。

やはり、理子だ。

理子は顔を俯かせ、ベッドに数的のシミを作っていた。

「……………どうして、これを取り返してくれたの……………!？」

そう言つて握り締めたのは、超小型の二連拳銃——ワルサー デ
リンジャー。

俺が今回取り戻した、理子の母親の形見だ。

「……………お前が武偵高こっに戻つて来た祝いだ」

「……………じゃあどうして、理子のためにあんな怪我をしたの……
!？」

「勘違いをするな。俺はお前のために何かをした覚えは無い。俺が
そうしたいと思っただけだ」

「……………っ……………!!……………バカあ……………!」

小さな理子が俺の右腕を抱きしめ、涙で濡れた顔を押し付けてきた。
かすかな嗚咽が聞こえ、腕を掴む力が強くなる。

空いている左手で理子の頭をわしゃわしゃと撫で、小さくため息を
つく。

こいつ自身、そう悪い奴ではない。アリア並にプライドが高く、
しっかりとした志を持つ、良い子なのだ。

俺は、それを侮辱するブラドが許せなかった。

理子が服に執着するのも、アリアを倒すことに執着するのも、人よ
りプライドが高いのも。

全て、あいつのせいだ。

あいつが理子から奪った物は、全て俺が取り返す。

流石に時間は取り戻せないが、それを埋めるだけの至福を渡してや
る。

「理子。俺は半月後、もう一度ブラドと戦う。次は——お前の十字架を取り戻すために」

理子に放してもらい、俺はベッドから立ち上がった。
ネクストミッション クロス・オフ・バック
次の作戦は、十字架の奪還。
それに備えねば。

「まさか、強襲アサルトするの……！？」

「ああ。俺は潜入スニーク・強襲アサルト・狙撃スナイプしかできなくてな。奴から十字架を奪還するには、強襲アサルトしかない」

「待つて！ 理子が潜入の手立てを考える！ またこんな怪我されたら、理子がもたない！」

「……………頼めるのか」

「うん……！ うん！！ りこりん任せでっ！！」

天真爛漫な笑顔を咲かせた理子の目尻には、未だにかすかな涙があった。

——ああ。まただ。

——何故俺が怪我をすると、皆が泣く？

——わからない。

――俺が怪我をしたところで、お前らに害は無いだろうに。

――人の感覚が、理解できない。

――俺が怪我をすると、何故悲しがる？

――俺は、人間の感情が理解できない――^{ヒト}

後曰。

俺は何事も無かったかのように授業を受け、アリアを止め、キンジを蹴り、レキをなだめ、イヴをいなし、いつも通りの日常を送っている。

桜の花は跡形もなくなり、今は木だけが残っている。

ああそれと、ジャンヌは転入時にC組になり、中空知・美咲との相部屋だそうだ。

あの2人、やっていけるのか？

「銀狼はむう、あんたはむう、本当に料理はむう、上手いわね」

「俺個人、そうは思わんがな」

1はむう〓1口のペースで俺の弁当を盗むアリアに呆れながら、キンジの弁当をつつく。

で、キンジは明らかに過剰すぎる量の弁当に呆れつつ、アリアの弁当箱に具を入れる。
む、美味しいな。この弁当誰が……。

「白雪」

「そうか。あいつが」

そうか。白雪が作ったのか。
まあ巫女と言っくらいだし、料理はできても不思議は無い。

「丁度良い。今度レシピを訊いておいてくれ」

「……………別に、いいけどよ」

「ふむ。今度是对アリア用にハバネロでも突っ込んで…………」

慌てふためく様を拝めてやろう。

「銀狼はむう、それやったらはむう、風穴はむう地獄よはむう！」

「……………説得力の欠片も無いな」

「あははは……………」

と、俺の隣で苦笑しているのはイヴ。

イヴはアリアのももまんを分けてもらい、食べているのだが……。

「おい。餡子ついてるぞ」

「え？ どこどこ？」

「……………つたく、ほれ」

イヴの口元に付いていた餡子を指で取り、ピツ、と舐める。
む……………。今度ももまん食ってみるか。

「ありがとう」

「礼はいらん」

アリアの箸を俺の箸で弾き、から揚げを1つ食ってあとは全てアリアに渡した。
面倒だしな。

「……………さてと。俺は午後の授業フケて任務へ行ってくる」

俺はそう言い残し、一般授業棟を抜け出してアリアに弁償してもらった大型バイク——BMW・K1200Rに跨り、目的地へと向かった。

9 弾 無限罪のブラド（後書き）

あとがき

銀狼 「……ゴフッ………!!」

作者 「………どうしたの」

銀狼 「貴様が見せてきたDVDを見た結果だ大馬鹿者………!!」

作者 「………いいじゃんっ。理子がいたらもっ和大変だったんだよ？」

銀狼 「………まあ、それもそう——」

理子 「やつほー！ りっこりんでえーす!!」

銀狼 「ガハッ!？」

作者 「あ、失神した」

感想返し

黒鋼 様

作者 「もうやめて！ 銀狼のライフはゼロよ！」

理子 「もっともっとー」

銀狼 「ハ………ハハ………ッ。その川を渡ればいいのだな………？」

作者 「あ！ ちょ！ 本格的にマズくね!？」

銀狼 「フハハハッ………。待ってる。あと少しで川を渡れるぞ」

理子 「シーくん!？ 戻ってきて！ レッドゾーン行ってるよ!？」

作者 「くそおっ!! こうなったら『ヤンデレの妹に死ぬほど愛

されて眠れないCD』を耳元で無限リピートしてやるー!!」
銀狼 「香奈、ようやくお前のところに……………」
理子 「シーいくうううん!!」

次回予告

『インヴァジレ不可視の銃撃』・『ゴーストブレット亡霊の弾丸』・『マジックブレットシューター魔弾の射手』・『スコルピサソリの尾』。数多の技が交差し、2人の肉体をすり減らす。それは、？人類最強？と？新人類最強？の戦いだった……………？
次回、緋弾のアリアー魔弾の射手ー 10弾 H S S V S E C
L I P S E

作者 「人とヒト。新たな宿命が始まります」
理子 「りこりんの出番はー？」
作者 「……………さあ？」

10弾 HSS VS ECLIPSE

「ようやく見つけたぞ。遠山金一——いや、カナと呼ばばいいか」

「……………貴方は、キンジと一緒にいた……………」

「銀狼だ。……………お前は、何故イ・ウーにいる」

「……………『第二の可能性』に懸ける為よ」

「……………『第二の可能性』……………か。俺とてそれが可能ならば、そうしたいが……………」

「貴方、イ・ウーの内部情報を知っているの？」

「ああ。少々不明確だが……………な。まあ、今は任務中だ。俺は任務を遂行するのみ」

東京湾近くの大型倉庫内。

薄暗い体育館のような建物の中に、幾つものコンテナが置かれている。

そこで、俺はカナと向き合っている。キンジの兄であり、イ・ウーのメンバー。

腰まである髪を編み、ワンピースを着ているカナ。俺はこいつと、殺り合った事がある。こいつは強い。それは覚えている。

それこそ、下手をすればEC因子エクリプスを使わねばならないほどに。

「任務？」

「？イ・ウーの構成員全てを使者を出さずに、尚且つ無傷で捕らえよ？。それが俺の任務だ」

「……そう。なら、頑張ってみなさい」

パァン！

カナの左脇が一瞬光ったと思うと、天井に吊るされていたライトが落ちてきた。

俺は両手にDESERT EAGLE 14inchを抜き、コッ
キング。

——ガシャアアアアアアン！！

ライトが落ちたと同時にカナの左脇が光り、俺の右頬を銃弾が掠めた。

鮮血がほとばしり、白い煙が傷口から上がり、傷がふさがる。

「コルト
S&A 平和の作り手
4インチ。使用弾薬は45LC
弾か」

「……今の一瞬で全て見抜くなんてね……。流石よ」

「敵の装備を見抜くのは初歩だ。お前のガンアクション——」
「^{イン}不可視の銃撃」は少々厄介だな」

「あら。貴方の『不可視の銃撃』^{インヴィジブル}もかなりのものだと思うけれど」

「残念だが、俺のは不可視の銃撃ではない。『亡霊の弾丸』だ」
インヴィジレ ゴーストフレッド

「私たちの間では魔弾なんて呼ばれているけどね」

「フン。と言うことはつまり、俺は『魔弾の射手』とでも？」
マジックフレッドシューター

「そうかもしれないわ」

パパン！

俺の心臓目掛けて放たれた45LC弾を右手のDESERT EAGLE 14inchで弾き、左手のDESERT EAGLE 14inchでカナに向かって二発。
ギーンッ！

カナの髪によつて弾かれた50AE弾が俺に飛んでくると同時に、俺は床を蹴って上へ跳んだ。

コンテナの側面を駆け、カナの後ろへ回り込む。

「私に死角は存在しない」

「知っている」

カナの髪を避け、至近距離から50AE弾を撃ち込むが——避けられた。

編まれているカナの髪から金属片が大量に出てくると、ワイヤーが何かで組みあがり、

「私にこれを出させたのは、貴方が初めてよ」

「フンッ。これでようやく対等だ」

巨大な鎌に組み上がった。

それはフェイトの使うバルディッシュの、ハーケンフォームの様に
でかい。

「貴方は私に勝てない」

「違うな。貴様は俺に勝てん」

「強がりはいけないわ」

「貴様こそ」

ガガウギギンッ！

スライドをオープンさせたDESERT EAGLE 14inc
hをホルスターに収め、2本のシース・ナイフを抜く。

逆手で持った2本のナイフを鎌と切り合わせ、緋色の火花を上げた。

「何故かしらね。貴方からは邪なものが感じられない」

「俺は殺戮者だぞ」

「……そうね。だから私は貴方を殺す。『義』に生きる遠山家の人

間として」

「義……？ まさか、正義とでも……？」

「ええ。そうよ」

「ハッ。正義か。笑えんな」

バチィッ！

互いに後ろに下がり、武器^{エモノ}を構え直す。

スコルピオ

ブラックホーク

カナのサソリの尾・俺の特殊シース・ナイフ。

エクリプス

だが俺は、EC因子すら出していない。

「それと、下手な引^{フエイク}つ掛けはやめた方が良いわ。貴方のDEの装弾数は7発。まだ、両方とも5発ずつしか撃っていないもの」

「……………流石、だな」

そう。

俺のDESERTEAGLE 14inchは弾切れを起こしていない。

俺が弾切れしたように見せるために、わざとスライドをオープンさせたのだ。

だが、それならば見えたハズだ。

赤い——紅い50AE弾が。

「武偵弾……とは違うわね。なあに？ その特殊弾」

「俺の友人が開発した弾だ。名は……^{バースト}炸裂弾。小型の燃料気化弾頭
と思え」

「武偵弾に近い弾丸……。面白いわね」

「否。^{No}面白半分で使う物ではない」

「……………そうね。貴方の言っていることは、何一つ間違っていない。
でも「生き方が間違っている」のよ——っ！」

俺がカナに声を重ねると、目を見開き、驚いていた。

俺はこいつが言うことは大体理解できる。

次に何を言うのか、次に何をしていくるのか。こいつは合理的に考えれば、簡単に思考が読めてしまう。

「心拍・呼吸速度・血圧上昇・瞳孔の開孔を確認。緊張状態にある
と判断」

「……………まるで機械ね」

「ああ、機械だ。戦闘機人と呼ばれる新たな人類——^{ホモ・クロ}改造人間新
^{ヴィテンス}人類近種だ」

「…………？ 戦闘機人？ サイボーグかなにかかしら」

「^{ハーフ・ハーフ}半人半機・^{サイボーグ}新造人間。呼び名は色々あるが……………俺は俺のような

ホモ・クロヴィテンス
改造人間新人類近種を、人型戦闘機械と呼んでいる。」

「Human Kämpfer? 面白いわね。ホントに」

「……………そうだな。これは面白いかもしれん。だが」

言葉を切り、ナイフをしまつてDESERT EAGLE 14inchを抜く。

面倒だ。4発同時の超電磁炸裂弾^{バースト・レールガン}で仕留める。

殺すかもしれないが……………

「? I・U捕獲法第1条、イ・ウー構成員の全てを死者を出さずに、尚且つ無傷で捕らえよ? ……………俺はこれを破らなくてはならない」

「武偵法第9条は?」

「残念だったな。お前がイ・ウーの1人である限り、武偵法は適用されない」

「……………そう」

「俺はI・U捕獲法第1条の遂行を不可能と断定し、続いて第2条・第3条・第4条を不可能と仮定。? I・U捕獲法第5条? ————行動不能状態での捕獲を最優先とし、犠牲は問わない———へ移行^{シフト}」

「I・U捕獲法ねえ…………。法律が適用されるのかしら?」

「この『法』は『法律』にあらず。カナ、貴様を捕獲させてもらっ

マスターズ・チェンジャーで電気を発生させ、DESERT EAGLE 14inchに電気を蓄える。
充電完了まで、あと97%。

「私を？ 冗談でも言わない方が良いわ」

「冗談など言った覚えはない」

カナと俺は同時に走り出し、距離を無くす。
俺の首を刈るようにサソリスコルピオの尾を振るったカナの後ろに回りこみ、
グリップで後頭部を狙うも——弾かれた。
後ろに仰け反りつつも電気を溜め、DESERT EAGLE 14inchの銃身が赤黒く仄かに光り始めた。

「貴方が始めてよ。サソリスコルピオの尾を出させたのも、私の背後を取ったのも」

「光栄だな。女装癖のある褒められるとは」

皮肉混じりにそう言うと、カナはくすくすと笑っていた。
……………こいつのツボはまるでわからんな。

「カナ。お前は教授プロフェッサーについて何か知っているか」

「戦いの最中に訊く？」

「ああ。時間が無い」

スコルビオ オリハルコン
サソリの尾と超金属製のDESERT EAGLE 14inch
がぶつかり合い、火花を散らす。

時には切っ先が音速を超え、時には腕が音速を超える。
超高速戦闘。そうとしか、言いようが無い。

「いいわ。教えてあげる。^{プロフェシオン}教授について」

「助かる」

「貴方、シャーロック・ホームズって知ってる？ アリアの曾お爺
さんの」

「^{オウメンス}Holmes^{アインス}1世？ あいつとなら、何度か戦っているが」

「——っ！？」

ガシャンッ！ ガランッ、カラララ……
カナの振るっていたサソリ^{スコルビオ}の尾が手元を離れ、
………高速で回転しながら
………床に転がった。

な、なにかマズい事でも言ったのか？ 俺。

「……もう一度訊くわね。シャーロック・ホームズって知って「知っている。何度か戦ったと言っているだろう」……っ……!？」

「どうした。その？何故生きているんだ!??という顔は」

「……シャーロックが、その……プロフェシオン教授よ」

「……は？」

……

……

……

…

沈黙が続いた。

DESERT EAGLE 14inchに溜まっていた電機も何処かへと放散し、カナも俺も両手をダラリと下げている。
というか、2人して棒立ち。

「……」

「……」

切り出せない。

この場をどう切り出せばいいのかわからない。
イヴ・キンジ・アリア・理子・ジャンヌ・美咲。
誰でもいいから、この場をどうにかしてくれ。

「……………」

「……………」

カナが黙ったままサソリスコルピオの尾を拾い、無言で小さな破片にし、髪の中に隠した。

俺も口を閉じたままDESERT EAGLE 14inchをホルスターに収め、その場に立ち尽くす。

「……………」

「……………」

顔の暗いカナがコンテナを背にして体育座りしてしまったので、俺もやるせなく胡坐をかいて座る。

……………ええと……………どうするか。これ。

「……………貴方、本気で戦ってた？」

「……………いや、30%くらいで」

ずううううううううん……………

そんな効果音が聞こえそうなくらいに、カナは落ち込んでいた。もう既に、膝に顔がめり込んでいるようにも見える。

「……………まあ、でも、教授は強いわ。プロフェッション Gで直すのなら、800は超えてる」

「……………あいつ、ステルス超能力苦手だったような」

「……………あの人には推理がある。それは絶対よ」

「まあ、そうだな。あの推理力は恐ろしい。未来予知に近いだろう」

ぽつぽつと呟くカナを肯定すると、少しだけ明るくなった。未だに顔がめり込んでいるように見えるが。

「……………はあー……………」

低い、カナとは違うため息が続く。
俺のではない。

カナの本来の姿——遠山金一の声だ。

「……………萎えた、か」

「あたりまえだ。HSSは性的興奮によるもの。こうも気が落ちてはな」

そうだ。

HSS——ヒステリア・サヴァン・シンドローム（キンジ曰く、ヒステリアモード）は、性的興奮時に分泌される脳内物質を通常の何百倍も分泌することによって起きる、一種の遺伝性の病。

カナは——いや、金一はこれを『女装』によって自身を性的に興奮させ（つまり変態）、HSSを発動させている。

まあ初代よりはマシだな。確か、公衆の前面でマッパになってHSSを発動させていたらしいし。露出卿め。

というか、キンジが一番まともなのだ。発動方法としては。

「金一、俺のところへ来い。そろそろ……………近いのだろう」

「……………ああ。部屋、借りてもいいか」

「好きにしろ」

俺はDESERT EAGLE 14inchのホルスターを閉め、金一がカナの姿で欠伸をしながら俺の後を付いてきた。

声が男で姿が女とは——関わりたくないな。

バイクにキーを押し、エンジンを掛ける。カナは後ろに乗り、ぐーっ、と腕に力を入れて離れまいとしていた。

「途中で寝たらその場で突き落としていくからな」

「……………レディの扱いを知らないのね」

「何故ここで興奮する要素が……………!?」

いつのまにかHSSを発動させてカナに戻っていた金一に呆れながら、俺はアクセルを回した。

——この時、銀狼は思った。

……………女装癖のある男とのドライブは、ある意味恥辱だ……………。

——一方、金一は。

……………口調、丸被りねえ……………。

——……………確かに。

女子寮の最上階の部屋。そこが俺の住む、レキの部屋だ。イヴもいるが。

コンタクトレス

非接触ICカードキーを通し、玄関のドアを開ける。

……………よし。レキもイヴもいないな。

俺は蛇に教わった動きでリビングへ移動し、右腕を曲げ、クツ、とカナにこちらへ来るよう指示する。

——で、堂々とカナは歩いてきやがった。

この野郎……。俺が俺の心配をして潜入しているというのに……！！

……カタツ……

「——ッ！！」

バツ！

物音のした天上を見ると、天板が2枚外れ、つま先を天井に引っ掛けた2人が逆さまになってぶら下がっていた。

……ぶらっん……

効果音が聞こえそうなほどに、2人はぶら下がっている。

両手をだらりとし、髪を重力に任せ、セーラー服の上着をはだけさせ、スカートを盛大にひっくり返しながら。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

上からイヴ・レキ・俺・カナの順だ。

2人は俺の両手を掴み、TNKワイヤーで自分の手と縛った。
カナが俺の足元に来ると、俺の両足首を持ち、ぐっ、と上に持ち上げる。

それに連動して上の2人が俺の腕を引っ張り上げ――

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

パタムツ。

俺は、真っ暗な天井裏に拉致された。

……………アルエー？

「誰かな？ あの凄い綺麗な人」

「手伝ってくれたので、悪い方ではないと断定しますが」

「なにこれ怖い」

俺は初めて弱音を吐いた。

「ねえ……………隼人」

「本名を出すな」

「ここなら、その…………いい、よねっ」

突如、俺の背筋に氷が突き刺さったような悪寒がした。
しゅるしゅると、布擦れの音が聞こえる。

——逃げろ。

本能が告げる。

——逃げろ！

だが、体が動かない。

——早く逃げろ！！

俺は何かの強制力を受けているのか、逃げる事ができない！！
クソッ……………！ クソッ！！

作者貴様アアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！（号泣）

『私は下で寝てるから、ご自由にねー』

「まっ待てカナ！ 俺を見捨てるのか！」

『一応敵なのよ、私たち』

「チイツー!!」

「はやと……………見て？ 私、結構成長したでしょ…?」

「……………私とて、着やせしているだけですの…」

「お、おい。落ち着け。何を言っているのか支離滅裂でわからんぞ
!」

「触つて……………確かめてください」

「隼人つてこういうの、ずっと避けてたもんね。キンジさん並に。
いいんだよ、好きにして」

「くっ来るな！ こここここれ以上来るなア！」

ばたばたと足音を響かせて後ずさると、どんっ、と壁に当たった。
マズい。行き止まりだ。

俺は夜目が馬鹿みたいに効く———というか、昼間のように見える
———ので、光が1つも無い屋根裏でも、2人の姿がはっきりと見
えてしまっている！

2人はそれを知っての、確信犯だろう。

最初はセーラー服の、タイとスカーフの一体化した物を取り去った。
チイツ……………と独特の音がし、上着のファスナーを開けている。
やめろ。やめてくれ。

お前らには自分の姿も何も見えていないだろうがな、俺には全て見

えているのだぞ！

「落ちて着け！ お前らが何を望んでいるのかは知らんが、まずは落ち着け！」

「落ちていてるよ。落ちていてなかったら、もう隼人を襲ってる！」

「それはそれで危険だ！」

「私の理性はそこまで持ちません」

「自慢するな！」

ファスナーが上げられ、盛大にはだけたままの上着を着ている2人。その、服と体の隙間からは、見てはならないものが落ちたような気がした。

あ……明らかに、下着だ。今の。

「ダメだ！　ダメなのだ！　下手をするとあいつが——早日渡が出て来てしまう！」

俺は、閉所恐怖症だ。

多少の光と多少の広さがあれば問題ないのだが、多少広くてもその場に敵対勢力がいると、アウトだ。

今の敵対勢力は、この2人。
もしも早日渡が出たら、俺はこいつらを素手で――手刀で殺してし

まうだろう。

「じゃあこれで」

「なにっ!？」

パツ、と明かりがついたと思うと、それは俺のベルトについていた400ルーメンのフラッシュライトだった。

それをイヴがいつの間にか盗み、壁に当てるように照射している。これだけ狭いと、乱反射して日中並みに明るくなるな。

「確かにこれならばあいつは出てこないだろうが……………っておい！」

レキが持ち前の抜き足で俺の右隣を陣取り、下着の無い胸部を右腕に押し付けてくる。

イヴがフラッシュライトを俺に向けると同時に駆け、俺の左隣を陣取り、これまた下着の無い胸部を右腕に押し付けてきた。そして、イヴの脚によって、フラッシュライトが消える。

——闇。

それがあつたハズなのに、早日渡が出る心配は無かった。何故かって？

それはな、早日渡独特の血流感が感じられないからだ。

「「隼人（さん）、今日は一日このまま一緒だよ」」^{です}」

「……………もう、勝手にしろ」

ふっきてしまった俺は脱力し、静かにカナへ救難^{コール}信号を送るのであった。

10弾 HSS VS ECLIPSE（後書き）

あとがき

作者 「先に補正ば」

銀狼 「補正？」

作者 「原作3巻をしつかりと読んだ方はお気づきでしょうが、前回の話『無限罪のブラド』で銀狼が取り戻したのは『デリンジャー』です。原作3巻でジャンヌが『母親の形見の銃は取り戻したらしいがな』と言っています」

銀狼 「……………そうだったのか」

作者 「なので、どうやってそのデリンジャーを取り戻したのか、というのを銀狼にやらせました。まだ原作介入はしていません」

理子 「つまり、これから原作どおり大泥棒大作戦（十字架を盗む）をやるってことだよ」

銀狼 「また面倒な……………。というか作者。お前の文才不足だろ。そういう質問が来ると言うことは」

作者 「……………返す言葉も無い」

感想返し

黒鋼 様

銀狼 「気にするな。ブラドはもう一度シメる」

作者 「政府からの依頼で殺しちゃいけないからねー」

理子 「そうそうシーくん。こんなものが届いてるよ。ヤンデレメ

イドさんの――」

アナウンス 「銀狼 が ログアウト しました」

作者 「……………逃げ足はえー」

理子 「流石だねー…」

作者 「……………あつ、ああ、それと。もし学園黙示録に銀狼が行ったら、完璧に天魔無双ですね。コータくん大はしゃぎ（↑確定）」

理子 「ああいうゾンビは理子苦手かなー」

作者 「銀狼は恐らく素手で頭吹っ飛ばすでしょうし、銃を乱射したりするでしょうし、コータくん銃をあれこれと渡すでしょうし（笑）」

理子 「……………今以上に無双化するね」

作者 「だって銃騎士^{チート}だもの」

次回予告

理子が考えた十字架奪還作戦。それは『大泥棒大作戦』という『大』が2度も付く作戦だった。はたして、十字架は取り戻せるのか。次回、緋弾のARIA魔弾の射手！ 11弾 オオカミと銀狼

作者 「学園黙示録書こうかな……………」

理子 「原作持ってないじゃん」

作者 「我らがAmazonでok。アニメは見てた」

11弾 オオカミと銀狼

「キンジ、アリア。飯だ」

「ありがと、銀狼」

「ん〜……おう」

AM7:25分

第3男子寮・キンジの部屋にて。

「キンジ。いい加減顔を洗う習慣をつけたらどうだ」

「んまあ……………そうなんだけだよ」

欠伸をしているキンジに悪態をつくが、軽く流された。
む、俺が何故キンジの部屋にいるのかだと？
ハッ。簡単だ。イヴとレキから逃げてきた。

「あつ、ハンプニーさん。おはようございます」

「む……………ああ」

朝から90度近い深いお辞儀をしてきたのは、星伽・白雪。

S 研——超能力捜査研究科の優等生であり、先日ジャンヌの件で俺が助けた生徒だ。

偏差値45以下の武偵高で、偏差値75超えの超優等生。ちなみに俺の偏差値は67。

テストの点で言うと、

- ・現代国語100点
- ・数学100点
- ・科学100点
- ・社会100点
- ・英語0点

だ。

英語？ 日本にいるのに必要ないだろう。
ドイツ語で充分だ。

「ハンプニー？ 誰だそれ」

「一応俺だ。2つ目のコードネームセカンドネームとも思え」

「ふーん……。まいいや。飯だ飯」

アリア・キンジ・白雪の3人が昼食を食っている最中に、俺はDE
S E R T E A G L E 14inchの整備を始める。

ああ、平和だ。あの2人がいないと、これほどまでに平和なのk――

「やっぱりここにいたあー!!」

「な……………に……………！？」

——こいつ、（ある意味）できる。

DESERT EAGLE 14inchをホルスターに戻し、窓を開け放って外へ飛び出る。

ガシャッ！ ガシャン！

下にあった落下防止用の柵に着地すると同時に力を逃がすために前へ一回転し、柵を飛び降りて走り出す。
フンツ。ここまでくれば平気だろう。

「よし。撒いた——かつ！？」

ビシュッ！

俺の足元をライフル弾が通過し、革靴を掠めた。

今のは……………レキか！

チィッ！ 俺の安息の居場所は無いのか！？

「こうなったら……………教室へ行くか」

俺は全速力で走り出し、一般科棟の2年A組へと向かった。

「……………む、理子…？」

「あつ、シーくん！ 腕は平気なの！？」

「あ、ああ。異常なしだ」

教室に居た理子に右腕を見せると、付け根の辺りをぺたぺたと触り、安心したのか深く息を吐いた。

俺の肩の辺りには生え変わった新しい腕の白い肌と、今までの胴体の白に近い肌の2色が。

俺の肌が白っぽいのは、日焼けしてもナノマシンが治してしまうのもあり、青っ白い。

「ずっと心配してたんだよ…！ 昨日は授業を抜け出すから、右腕が痛むのかと思って、ずっと寝れなくて…！！」

「す、すまん。無事だとあの時言っただけだが」

「心配なの！ ……………でも、よかった」

「……………理子」

「…なに？」

「クロス・オフ・バック
十字架の奪還、予定はいつだ」

「……………キーくとアリアを交えた4人で、今週末辺りから」

「……………前衛は」

「私とシーくんが通信と物資補給担当で、アリアとキーくんが潜入担当」

「俺は後衛^{バックス}か」

「うん。また怪我をされたら、理子の命がいくつあっても足りないから」

「フツ。……………要らぬ心配をさせてしまったようだな。すまない」

ぽんぽん、と頭を撫でてやると、理子は恥ずかしそうに頬を朱に染め、嬉しそうに目を細めた。
器用な奴だな。

「……………なあ、理子」

「……………なあに…?」

「……………俺は、最近自分がわからなくなる。人を殺して喜ぶのが俺なのか、戦乱に身を投じるのが俺なのか、銃騎士が俺なのか……………」

「……………シーくんが生きたいように生きていれば、それが本当の自分だと思うよ」

「……………そう………なのか。だが、俺は『生きたいように生きる』という意味が、よくわからんのだ」

「やりたいことも？」

「無い。……………と言いたいが、この世に名を残さず、誰の記憶にも残らぬよう………消えたいと思う」

どかつ、と自席に座り、机に頬杖をついて俺と理子以外誰も居ない教室を見渡す。

散らかっている空薬莢、弾痕の残る黒板、アリアのせいでヒビの入った窓ガラス。

武偵高らしいといえば、武偵高らしい光景だ。

「俺は今まで、生きる意味を探していた。13年前は『決意』を意味にし、2年前は『刻限』を意味にしていた。……………だが、今の俺は……………何を生きる意味にすればいいのか、わからない」

決意の弾丸を放ち、あの世界での最期の刻限を待っていた。

だが俺はまた、ここで命を——生きる資格を与えられてしまった。それが誰の意思なのか、銃騎士の呪の一部なのか、世界の陰謀なのか。

俺には、到底理解できない。

「その点、俺はお前やキンジ——今を必死に生きようとしている人間^{おまえら}たちが、羨ましくなる。己が戦う意味を持ち、己が生きるために戦う……」

そうだ。

俺は理解できないだけではない。

理解以前に、生きる意味がわからない。

何故ここまで必死になって生きようとするのかが、わからない。

「Wirklich eine wunderbare Welt.
Aber ich weis nicht」

（本当は素晴らしい世界なのだろう。だが、俺には理解できない）

「……Pourquoi?」

（……どうして?）

「Ich bin nicht von einem Menschen.
Ich riefe? Human Kampfer?」

（俺が人間ではないからだ。俺は? 戦闘機人? と呼ばれる種族だからな）

ホモ・クロワイテンス
改造人間新人類近種

なのはたちの世界で言う、戦闘機人。俺は、まさにそれだ。

というか、やはり理子はフランス語上手いな。

それに俺がドイツ語で話しても普通に意味を理解しているし、かな

り頭良いのでは？

「Hey, Riko——ッ!!」

(なあ、理子——)

「えっ——!?!」

俺は窓の外から見えた光の反射を目にしたと同時に、窓際に居た理子に跳びかかるようにして突き飛ばし、理子が頭を床にぶつけないよう俺が下になり、抱きかかえて伏せる。

ガシャアアアアアンッ!!

同時に窓のガラスが割れ、辺りにガラス片が飛び散った。

今のは……狙撃だ。それもかなり近い距離からの。

光の反射のせいで姿は見えなかったが、距離はせいぜい200メートル前後……何処かの教科棟の屋上からの狙撃だな。

窓をブチ抜いたライフル弾は壁に突き刺さり、徐々に回転を無くしていく。

「……………第二射は……………無しか」

床に落ち、俺の顔の横にまで転がってきたライフル弾の弾頭を左手で拾い、眼前に持ってくる。

弾種は……………この特異な形状から見て、9×39ミリ弾だな。

確かこれを使うのは、ドラグノフと同じソ連の^{ソビエト}開発した減音機内蔵^{サブレッサー}インスペシャルフォーススナイパーライフル型特殊部隊用狙撃銃の——VSS ヴイントレスだ。

……………む？ 俺は、ヴイントレスを使う奴を知っているような……………

…。
いや、ありえん。和輝^{あいっ}がこの世界に来ているわけがない。

「なっとなにつ！？ 今の狙撃！」

「何者かの依頼か……。私的な行動か……。どちらにせよ、俺がお前の敵——いや、お前の敵は俺の敵か——俺の敵である可能性が高い。それに、的確に頭を狙ってきたということは、少なくとも武偵ではない」

「まさか、公案0課か武装検事……！？」

「それはない。あいつらはソ連の物ではなく、L96やM700辺りを選ぶはずだ。運が悪ければ、M16をな」

L96。

イギリス海軍などで正式採用されている、ボルトアクションライフルだ。

命中精度は非常に高く、バリエーションも豊富。俺も時折使用した経験がある。

M700。

一般的にはこれだけで理解する奴の方が多いが、正確にはレミントン M700だ。

こちらもボルトアクションライフルで、狙撃だけに注目すれば命中率・集弾性共にトップクラスに躍り出る。

M16。

正式名称はコルト ^{アーマ・ライト} AR15。
^{アサルトライフル} ^{スナイパーライフル}

突撃銃でありながら狙撃銃に匹敵する集弾性・命中率を持つ命銃だ。

スナイプ
狙撃科教諭の南郷もM16A2を改造した狙撃銃を使うからな。

だが、今の弾丸は9×39ミリ弾。
スナイパーライフル
狙撃銃の中でも珍しい口径だ。

「……………チツ。どちらにせよ、
イレイザーライセンス
殺しの免許証保持者か。厄介だな」

俺は武偵。

人を殺してはならない。

だが、あいつらは（恐らくだが）公案0課・武装検事のどちらか。
この2つは、殺すことを仕事にしている。

1人1人の強さで言えば、SEALsやグリーンベレー1個大隊ほどだ。
エクリプス

俺がEC因子無しで勝てるかどうか、本気で悩むほどの強さだろう。

ジャボーン スペシャル・フォース
「日本の特殊部隊……………」

そう呟きながら理子を見てみると、俺の胸に顔をうずめたまま頬を
真っ赤にし、

「……………！」

頭から湯気を出していた。どうやっているのだ、それ。

そつえば、と思い出して抱いたままだった理子ごと体を起こすと、

ガラッ、とドアが開き

「……………!」

「……………!」

「……………!？」

「……………!？」

この場全員が硬直した。

ちなみに、上から

どうするよ、俺！ な俺・湯気を出し続ける理子・もまんを床に落としたアリア・アリアがもまんを落とした事に驚き、俺と理子を見て更に驚いたキンジ。だ。

「Oh Gott . Was meinst du mich verlasssen?」(↑俺)

(おいコラ神。何故俺を見捨てやがった?)

「Wi……Windhole hell!!」(↑アリア)

(か……風穴地獄!!)

「お前ら、なに言ってた？ で、お前はなにやってんだ…?」(

↑キンジ)

瞬時に両手にコルト ガバメントをアリアが抜いたので、俺も瞬時に理子を抱きかかえたまま立ち上がる。
で、キンジたちがいないほうのドアを蹴破って逃げた。

「Bye!」

(さらばッ!)

「Wait! Windhole! Windhole hee eee eell!」

(待ちなさい! 風穴! 風穴地獄うううう!)

「だからなに言ってなにやってんだ!!?」

バンバン聞こえるアリアの銃声と銃弾を避けながら、俺は死に物狂いで逃げた。

というかキンジよ。地獄^{Hei}くらいはわかれ。英語0点の俺でもわかるぞ。

「おい理子。いい加減起きろ。俺が殺される」

お姫様抱っこで抱きかかえている理子に言うが、顔は真っ赤のままで返答は無い。

クソッ。失神したか?

おい大泥棒、早く起きろ。理由はわからんがお前のせいだぞ、これ。多分。

「Hey! Reveillez-vous!？」

(おい! 起きたか!?)

「……………!」

「……………チツ……………」

解りやすくフランス語で言ってやったが、ダメだった。
こいつ完全に伸びてるぞ、おい……………

あの後、俺の不意打ちによって敗北を認めたアリアからの強襲は無くなり、理子は救護科アンビュラスに置いてきた。

……………最近、救護科アンビュラスに行くことが多いな。俺。

等と考えつつ、5時間目終了のチャイムが間近に迫ってきたところで、俺は逃げる準備をした。

理由その1。イヴから逃げるため。1秒でも遅れたら窒息死させられかねない。

理由その2。レキに見つかからないようにするため。見つかったが最後、何処までも追ってくるぞ。

理由その3。男子生徒に殺されないようするため。何故か男子の視線(というか眼力?)が凄く痛々しい。というか痛い。

以上の理由により、俺は逃亡準備をしていたのだが、

「はい、それでは5時間目を終わりに——」

「ギン——！」

「な……………にい……………！？」

ゆとりの言葉を遮りながらアリアが俺に銀の手錠を掛け、満足げにしていた。

フツッ。俺に超能力封じは通用しない。
ステルス

力任せに手錠を引きちぎり、逃げた。

肩に異常な重みを感じながら。

「……………！？」

「逃がさないよ、隼人」

「か、空恐ろしいな。最近のお前は」

「愛の力は無限大……！」

「なん……………だと……………！？」

肩に引っ付いていたイヴを引き剥がそうにも引き剥がせずに苦戦しながら走っていると、ロボット娘ことレキが目の前に現れやがった。

——ま、そうなるよな。

レキも俺の肩に引っ付き、邪魔な枷が増えた。デカイストラップだな、この2つ。（↑現実逃避）

「H a h a h a h a h a ! 泣きたくてたまらんな！」

もうやだ。泣きたい。

これならまだフェイトの方がマシだ。あいつはここまで強引では――

――強引だった……！

そうだったッ！ リイン、リインフォースはまともだ！

流石にここまでされた覚えはあるぞちくしょう！

俺の周りは馬鹿ばっかだな！

「お前ら！ いい加減に離れ――ッ！？」

目の前から感じた殺気を感じ取り、2人を強引に振り払うと、目の前のガラスが割れた。

見える。先刻と同じ9×39ミリ弾が、俺の右目目掛けて飛んで来ているのが。

「――ケガッ！！」

パンッ！

着弾と同時に俺は後ろに仰け反り、倒れた。

倒れたということと、右目を撃たれたということだけわかる。

意識が朦朧としている。

「隼人っ！？ 隼人！！」

「狙撃です。白銀狼も身を伏せてっ」
ホワイトウルフ

「嫌だよ！ 隼人！ ねえ！！」

おいおい、確実に右目にヒットしたぞ。死んだか。

……………む？

撃たれたことがわかる？

……………チツ。礼を言うぞ、リインフォース。

ぐらぐらする頭を何とか支えながら、体を起こす。
軽い脳震盪を起こしているな。

「まさか……………な。魔法で戦うあの世界で、防弾性の眼帯を貰っていたとは」

しゅるっ……………パサッ。

バンダナのような眼帯が俺の頭から落ち、弾痕をあらわにする。

これは、リインフォースが14年前にくれた物だ。

まさか、それがこの防弾制服と同じTNKワイヤーできているとは、思いもしなかった。

「ルック・ターゲット
敵性存在視認。レキ、ドラグノフを貸せ」

「……どうぞ」

イヴと共に身を伏せているレキからドラグノフを受け取り、レバーを引いてコッキングする。

右目側の前髪を掻き分け、俺は蒼く、尚且つ紅い右目を出した。

「オールグリーン
狙撃準備完了。ファイア発射」

ダアンッ！

スコープを覗かずに放ったドラグノフの7・62ミリ×54R弾が飛んでいき、相手の銃に直撃した。

見える。

今なら敵の姿も。

敵は3人。
スナイパー狙撃手と、スリー・マンセル観測手と援護か。
基本より多い、3人組みでの行動……。

「リミット・チェンジ モード・ハンティング
倍率変更。視認可能距離最大」

ナノマシンを使って左目の水晶の形を変え、視力を12・0にする
と――

「……………アンノウン 未確認存在……………いや、
……………ノン ル・ターゲット 既確認存在……………？――
――まさかッ！！」

見えた。

見えてはいけないものが、見えた。

赤いメッシュのような髪と、金色のショートと、茶髪のロング。

1人が壊れたVSS ヴイントレスを持っている。

もう1人が、見覚えのあるリカーブアーチェリーを持っている。

最後の1人は、コルト ガバメント ダブルイーグルを持っている。

その3人の横には、見覚えのある身長30センチほどの人型が2つ
……………！

「何故だ……………！ 何故、ここにいつらが……………！？」

「隼人！ 平気なの！？」

「あ、ああ……。リンフォースあいつがくれた眼帯で無傷だったが……」

言うべきか、言わないべきか。

一応今のもじくりと見たわけではない。信憑性に欠ける。

「……………いない……………？ 逃げ足が速いな」

再び窓から覗いてみると、そこには誰もいなかった。
やはり見間違いだろう。あいつらがいるわけがない。
俺はレキにドラグノフを返し、階段を下りる。

今から俺は強襲科アサルトへ行き、授業だ。面倒なことにな。
で、まあ——この『授業』も色々あるのだが、今日はアリアとの
模擬戦となっている。

本来は蘭豹の座学のハズなのだが、あいつが「習うより慣れろ！
つーわけで戦って死ね！」という発言により、俺とアリアの試合に
なってしまった。

言うておくが、戦いにならんぞ。蘭豹よ。
俺とお前でさえ雲泥の差なのだからな。

「レキ。お前は狙撃科スナイプへ行け。授業をサボるな」

「……………わかりました。では、お気をつけて」

外靴に履き替えてレキと別れ、防弾ガラス・防弾シャッター・防弾

壁に守られた強襲科棟へ入る。
うっ。硝煙くさっ。

……だがまあ、その匂いで落ち着いてしまう俺がいるのだが。

「来たわね、銀狼」

「当たり前だ。お前こそ尻尾を巻いて逃げると思ったのが」

「それは私のセリフよ。負けて吼えるのはあんただから」

「……………良い、度胸だ」

スケートリンクのような訓練場へ入ると、アリアが両手にコルト
ガバメントを抜いた。

フンツ。最初はアル「カタ」——至近距離による拳銃戦闘の別称。防
弾着の着用を前提とし、銃弾を打撃に使う戦法——か。というか、
普通にCQB——室内等での近距離戦闘——でよくないか？ 態々
ガン「カタ」のように言わなくても。

「言っておくが、俺の弾はお前の3倍以上の威力がある」

「50AE弾……ね。よくまあそんな超大型拳銃を両手でバカス
力撃てるわね」

「一般人からしてみれば45口径も大型だ。俺からしてみれば小型
だな」

「言ったわね？ バトラー 軍事男」

「ハッ。貴様こそ。 ライミー ライム女」

アリアと俺がドイツ人とイギリス人の別称を言い合つと、アリアの額にDの字が浮かび上がった。

俺はあれを知っている。アリアがキレるとDの形に血管が浮き出るのだ。面白いことにな。

「もしもだ。万が一……いや、兆が一にもお前が俺に勝てたのなら、学園島全体にあるももまんを全て買い与えてやろう。それと45ACP弾を100発、産地直送でな」

「じゃあもしあんたが勝つたら、50AE弾を300発買ってあげるわ。IMI社に依頼して直送で」

「ほう？ あとで泣いても知らんぞ」

「ギンもね」

ピキッ。

アリアの額にあった血管が更に浮き出ると、髪留めのツノのような物が本当にツノに見えた。

おいおい。まさかアリアの奴、本気マジギレか……？

『いよしっ！ お前ら！ さっさと始めいー！』

「……………だそうだ」

「いいわ。やってやるうじゃないの」

バンッ！

アリアが床を蹴って俺から見て左側に走り出したので、俺は右側に走り出す。

拳銃戦では、利き腕を開かせた方が有利になる。

だが、俺とアリアは両利き——つまり、利き腕が無いのだ。普段アリアの使うセオリーは、俺に適用されない。

互いにぐるぐる回って何週かすると、アリアのトリガーが動いた。

バツ！ ババババツ！

「ハッ。何処を狙っている」

「~~~~っ！ すばしっこいわね！」

放たれた5発の45ACP弾を避け、両手のDESERT EAGLE 14inchのハンマーを親指で起こす。

DESERT EAGLEはシングルアクション——トリガーを引くと、ハンマーが落ちるだけのシステム——オンリーなので、最初にスライドを引くか、ハンマーを起こさねばならない。

その分引き金トリガーの引きも軽いがな。

「早くこちらへ来たらどうだ。得意のアルカタ戦では来ないのか？」

「……いいわ！ その気なら！！」

アリアがこちらへ走ってきたと同時に左手のDESERT EAGLE 14inchを後ろ腰のホルスターに納め、開いた左手を突き出すようにしてアリアに向かって走る。

そして――

ババツ！ バババガキャンツ！

――アリアの右手に持っていたガバメントのスライドが弾切れでオープンしたと同時に、分解した。

スライドリリースレバー・スライドグループ・マガジン・レシーバーグループの4つに分解された白銀のガバメントが、宙を舞う。

わかりやすく言うと、俺はアリアと交差する瞬間、刹那で通常分解フィールド・ストリッピングをしたのだ。

「次ッ！」

「なっ――！？」

ギャンツ！

スプリングが磨れる音と共にマッドブラックのガバメントが分解され、床へと落ちてゆく。

俺がやっているのは、アルカタではない。CQC――クローズ・クォーターズ・コンバットだ。

だが、流石はアリア。Sランク武偵という事と、双剣双銃カトラの二つ名を持つだけの事はある。

アリアは銃が使えないことを瞬時に悟り、背中に隠してあった小太

刀を2本抜いたのだ。

こういう切り替えの速さが生死を分かつ。良い判断だ。

「言っておくけど！ 徒手格闘で！ 狙撃手に負ける気はしないわ
！」

「世の中全ての狙撃手が近距離戦をできないわけではない」

「少なくともあんたは！！」

「……………寝言は死してから言え」

俺は零距離狙撃手だ。
スナイパーライフル

狙撃銃でCQBになったとしても、逆にそれを好機とする、な。

まず理由の1つに、スコープが必要なくなること。狙わずともいいからな。近いし。

そして2つめ。こちらがのリーチが長く、もしもナイフを出してきても銃身を切られる心配が無いこと。つまり、矛と盾なのだ。零距离での狙撃銃とは。
スナイパーライフル

「いいか。この世には3種類の狙撃手がいる」
スナイパー

「へえ。どんな？」

「まず1つ。狙撃を競技としている者」

「…そうね」

アリアの小太刀をDESERT EAGLE 14inchの銃身で反らしながら、続ける。

「次、2つめ。長距離狙撃を生業にしている者。まあ、これが普通だ」

「ならあんたはそれね。狙撃手だもん」
スナイパー

「違ソノう。俺は零距離狙撃手。スナイパー3つめの、至近距離での格闘を交えた狙撃を得意とする者だ」

「格闘を混ぜた狙撃？ 意味違うない？」

「狙撃とは『狙い撃つ』という意だ。違うない」

「ふうん。ビミョーね」

「お前の攻撃もな」

ブチッ！

突然鋭くなったアリアの突きを避け、左手で片方の小太刀の峰を持つ。

アリアが残った左手の小太刀を振るってきたので、DESERT EAGLE 14inchの銃身で受け止めた。

ほぼ零距离で拮抗していると、次第にアリアの力が強くなってきた。まあ俺はそれほど力を入れていないが、大した事ない。そもそも体

格も性別も違うのだ。そのぐらいの差はある。

「言ってくれるじゃない……！」

「事実を述べてはいかんのか」

「——っ！ 風穴……！」

「うおッ」

アリアに引き寄せられたかと思うと、俺は投げ飛ばされていた。

ふむ。柔道の巴投げか。バリー・トウードは何でもありだからな。

等と空中で考えながら、体をひねり——着地する。

というか巴投げは風穴と無縁の技だぞ。おい。

「お前はまだ未熟だ。パンピーの視点からヒントを与えてくれる相棒^{ディ}もない。いい加減キンジを丸め込めばどうだ」

「キンジはドレイよ。パートナーになるにはあのキンジじゃないと無理ね」

「……………一理あるな」

？あのキンジ？とは——恐らく、HSSのことだろう。

こいつは推理力が乏しいので、まだそのことを知らないようだが……

「……………む。そろそろ時間だ。The end time
」

ガウンッ！

俺のDESERT EAGLE 14inchから50AE弾が発射され、アリアはそれを両手の小太刀で受け止めつつも——後ろに吹っ飛んだ。

まあな。受け止めている最中に蹴ったし。

——で、試合終了。

「あー……………ねみイ。俺ア寝る」

「隼人っ。ならここでっ！」

「断る。安眠できそうもない。あと名を出すな」

ベンチに座っていたイヴが自分の太股をぼんぼんと示していたが、即答で断る。

もしも受け入れたらどうなるか……………。確実に、風穴を開けられるだろう。強襲科^{アサルト}の連中に。

俺ア自殺はしたくないのでな。

「蘭豹。5対1で暇つぶしでもしている」

「はっ。こんなミソツカスどもじゃああたしのあいてにゃならん！」

「そうか。ならアリアにでも頼め。俺は疲れた」

軽く欠伸をしながら足元に転がる大量の空薬莢を蹴散らしながら歩き、強襲科棟の隅にあるベンチに横になった。
アサルト
つか、いい加減この空薬莢誰か掃除しろ。

軽く1000はあるぞ。足の踏み場も無いという表現が正しいのだから、慣れれば全員蹴散らして歩くからな。誰も気にしない。だからこそさつさと掃除しろ。誰か。言っておくが俺はやらん。面倒だ。

などと考えているうちに、俺は深い眠りについていた。

11弾 オオカミと銀狼（後書き）

あとがき

白銀狼^{イヴ} 「えー、今回は隼人が寝ているので、変わりにアリアさんとキンジさん呼びました」

作者 「46」

キンジ 「何処だここ」

アリア 「あとがきらしいわ」

キンジ 「あとがきって……わけわからん」

作者 「まあいいじゃん。というわけで感想返しへGO」

感想返し

黒鋼 様

キンジ 「ああ、どうりであいつがいないと」

アリア 「ログアウトって……どこのチャットよ」

作者 「気にしたら負け」

白銀狼 「そうそう。プロローグ編に隼人についてのレポートがアップされてたよ」

アリア 「銀狼についての？ 興味あるわね」

キンジ 「あいつの弱点とか書いてあんのか？」

作者 「あるっちゃある。ないっちゃんない」

白銀狼 「いつもどおり適当だね、作者さん……」

次回予告

学校と言えば身体測定やスポーツテストは当たり前。というわけで平和な日常を過ごす銀狼たち。ま、平和があるわけ無いんだけど。次回、緋弾のアリア〜魔弾の射手〜 12弾 潜入準備

作者 「よろすく」

キンジ 「適当だな…」

アリア 「いい加減まともにやりなさいよ」

作者 「いーじゃん。それに今回の話で三銃士（？）も出てきたし」

白銀狼 「え？ あの3人が？」

12弾 潜入準備（前書き）

作者 「ほんつとすいません！ ISにはまってました！」

銀狼 「死ねよう」

作者 「キヤラ変わってるからね！？」

12弾 潜入準備

「ボルトだ！ ボルトがいるぞ！！」

「いや！ ボルトよりはええ！！」

今、俺たちはスポーツテストをやっている。

俺は100メートル走を終え、木陰で休んでいた。

ちなみに、タイムは4.27秒。

かのウサイン・ボルトを超えた。まあ俺は時速60キロ以上で走れるし。

「お前………外見と合わねーな」

「む、そうか…？」

「ああ。筋肉質には見えねえーし——まあ筋肉質でもないし——よ。のわりには力はあるし………」

「まあ、4歳から銃を握っていれば、な。お前もバレットを撃っていれば、こうなる」

「バレット？ バレットって、あれか？ 対物ライフルの」

「Barrett M82A1。正式科目としては対物自動小銃なのだが、何処か『小』なのか理解できんあれだ」

「確かに。あれって、機関銃用の50BMG弾だったよな、使うの」

「そう、対人使用がハーグ陸戦条約でも真偽が問われているあれだ。
OHNでも使っているがな」

「うへえっ……。グロいな」

「フツ。だがな、それほどまでに人は強力な物を生み出し、それに殺されているのだ」

バレット M82A1の重量は12・9キロ。全長144・78センチ。

俺はそれを両手に持ち、近接格闘close combatをやっている。というか、俺が先日アリアと模擬戦をしたときに言ったのがそれだ。俺は勝手にCQSと呼んでいるがな。

CQSとは、クローズ・クォーターズ・スナイプの略だ。

「そついや、OHNってどの国にあんだ？ 日本にあるのは知っているが……」

「地球上の主用国家全てだ。全国家から兵士を招き入れ、全国家へと配備する。それが地球上最大規模のPMC——OHNだ」

「全国家……ね。イギリスにもあったわね。そつえば」

「……アリアか」

「ああそれと、約束の50AE弾は発注しておいたわよ。イギリス

有数の銃弾技師バレットイスタに頼んで」

「誤差は10ナノメートル以下にしろ。それ以外は受け付けん」

「10ナノメートルって……それ誤差とかそういうレベルじゃないわよね」

「それが普通だ。少なくとも、俺やレキにとってはな」

100メートル走を終えたアリアが木陰にいた俺とキンジの間に割り込み、すとんつ、と腰を下ろしてきた。

よく見ると、ツイテールの髪を下ろしている。

体操服姿でこいつが髪を下ろしていると、武偵娘ブツキというよりただの中学1年生に見えるな。小さいから。

「で、どうだった」

「まあまあね。去年よりは良かった」

「そうか」

短い会話を追え、俺は自分の記録用紙に目を移す。

……… 平均値と比べると、最早怪物だな、俺。

キンジは……… まあ、普通だ。平均値とほぼ同じで。流石は普通を指すキンジだ。

ちなみにアリアは平均値よりも全体的に高い。といっても、体相応だな。

「……………キンジ」

「んー？」

「あいつは、何をしているのだ…？」

そういつて俺が指差したのは、ギリスーツ——狙撃手などが茂み
に隠れるさい、身に纏う高度な迷彩服——を着て植木の中に潜み、
デジカメを構えている武藤・剛気。

「どこ？」

「そこだ。ギリスーツを着ているだろう」

「あー……………んとだ。また盗撮だろ」

「盗撮て……………。あいつ、武偵3倍の法則を忘れたのか…？」

『武偵3倍刑』

武偵が犯罪を犯した場合、一般人よりも刑が重くなるのでこう言われている。

まあ、前科の無い武偵の方が少ないがな。

「誰撮ってんだろ」

「あの方向は……ホワイトウルフ 白銀狼たちね。あと特殊捜査研究科の連中CVR」

「C研？ …………… ああ、あのキャバ嬢のような……………」

「あいつらいつつも色仕掛けばっか練習してっからな！。今だってハニー・トラップ 女子高生だと日焼けでばれないためにブルマなんて履いてるし」

「不健全極まりないな。それを盗撮している剛気も——……………
む？ アリア。お前、誰を撮っていると言った」

「え？ だから、C研の連中をって」

「その前だ」

「えっと……………ホワイト 白銀ウル「殺してくる」はやっ！」

ギリースーツを身に纏う剛気の横へ行き、HDデジカメを奪う。
そのまま魔力を電気に変換し——ボンッ。瞬時に破壊。

「あーッ！ てっめ！ なにやっつけてんだー！」

「剛気、貴様。誰を被写体に使っていた……………？」

「はあ！？ 誰って、美少女の集まるC研をだ」

「正直に言え。今なら怒らない」

「だからC研の連中だっつの」

「正直に言え、と、言っただが…」

カキンッ。

DESERT EAGLE 14inchのスライドを引き、剛気の腹に突きつける。

すると、顔を青ざめさせた剛気の口が開いた。
ギリスーツでも。ゾー^リのように見えるが。

「……………ルフだ」

「……………」

「白銀狼……………だよ」

「よし。^{「a」}素直に言っただけ」

DESERT EAGLE 14inchをレッグホルスターに戻し、ぽん、と肩を叩く。

「——その度胸に免じて半殺しで済ませてやろう」

「なっ!?! さっき怒らねえつつたじゃんねえか!?!」

「ああ。俺は怒ってなどいない。ただ貴様を殺したくて仕方が無い

が、素直に認めたので半殺しで済ませてやろうと言う心の広い俺を敬え」

「敬えねえ！？」

「そうか。ならば死ね」

ガッ！

と剛気に腕を絡ませ、

ギリギリギリイーツ！

と間接を閉める。

「いだだだだだだだッ！！ ギブ！ ギブ！！」

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す」

「こわっ！ お前こわー！！」

ボギンツ！ という景気の良い音が聞こえたので、俺は剛気を蹴り飛ばして木陰に戻った。

俺の娘に付く悪い虫は「YESブチコロ・NO生存」だ。俺はそういう主義でな。

「俺は今から小テストがある。アリアを頼むぞ」

「頼むぞって……。お前はアリアのなんだよ」

「護衛。………とりたい所だが、厳密には違うな。俺はただかなえに言われてこいつを守っているだけだ」

「ホント、お前はかなえさん命だな」

「次それを言ったら殺す。俺はただ依頼人クライアントからの要望をこなしているだけにすぎん」

「……………依頼さえあれば、なんでもやるのか？」

「ああ。例え凶悪犯罪者の依頼だろうと、な」

俺はかつて、死刑の決まっていた犯罪者の依頼を幾度か受けている。彼は己の脱獄に手を貸せといった。手段を選ばず、確実に、と。だから俺は、そこにいた看守・警官・その他もろもろを全て殺し、彼を脱獄させた。

……………言い方を変えよう。

俺の設立したOHN——民間軍事会社、Outer・Heaven・nadaは、国際的に、尚且つ合法的に殺しが認められている。そして、銃器類の所持もだ。

「遺伝子学のテスト……………か。香奈の専門だったな…」

「——カナ？ お前、今カナつつたか！？」

「……………ああ。そうだが」

「まさか、兄さんについてなんか知ってるのか！」

「ま、まで。俺が言っているのはそちらのカナではない。俺が殺した実妹——大原・H・O・香奈だ」

「実妹？ お前、妹いたのか」

「ああ。存在的な妹と、血縁的な妹の2人が……な。1人は殺したが、もう1人は……」

言えない。

前の世界においてきたなどと、言うことができない。

「……………まア……………あれだ。今の俺に家族と言えるのは、白銀狼^{あいっ}1人ということだ」

「……………ふーん……………。よくわかんねえーけど、テスト行ってくんだろ？」

「ああ。頼むぞ」

俺は防弾制服・黒に着替えながら、テスト会場へ向かった。

そつえば、最高評議会の連中に殺されたとき、香奈が俺と精神融^{リンク・エ}合したままだが……………。まだ、俺の中に居るのだろうか。あいつらを殺した後にはもう声が聞こえなくなっていたが、どうだろう。

もしあいつがいれば、遺伝子学は楽なのだがなア。あいつ、遺伝子専門だったし。

「はい、みなさん。席についてくださーい」

と言いつつも俺と同時に教室に入ってきたのは、小夜鳴さよなきという名の非常勤講師。――と、もう1人。顔を隠すような黒髪で、黒い針金のような淵の、長方形をしたメガネをかけた野郎――！

「えー、今日から新しく非常勤講師として、微生物学者の方が来てくれました。挨拶、お願いします」

「はいこんにちは。えーと、僕は微生物や遺伝子について研究してる、岸边 翔とっています。よろしくねー」

「……………！」

俺は、目を見開くことしかできなかった。

岸边 翔

俺は奴を知っている。奴は、俺を作った張本人だ。

俺は足早に翔に近づき、白衣の胸倉を掴んで顔を寄せる。

「貴様、何故この世界に来た……！」

「さあ？　なんでだろうね？」

「ふざけるな！　貴様はあの世界の住人だ！　何故裏の世界である

「ここに来た！」

「忘れた？ アルハザードは、狭間の世界。狭間とは、何処にでもあるものなんだよ」

「ならばあいつらについても知っているのか！ あいつら——三銃士のことも！」

「うん、知ってるよ。彼らがこの世界に来てしまった事も、彼らが記憶をなくしていることも」

「なっ……………！？ 記憶を……………！？」

「彼らとイヴちゃんは極小規模の次元震に巻き込まれたんだ。幸い、イヴちゃんに傷害は無かったみたいだけど」

そう言われた俺は、力なく手を放した。

こいつの言っている事は、恐らく事実。それも、次元震ということならば、イヴの言っていたことと辻褃が合う。

ならば何故、あいつらは俺を狙撃した？ 俺は銃騎士、あいつらは三銃士。これは魂のつながりだ。

「さ、席に戻って。テスト始めるよ」

「……………ああ。すまない」

一番後ろの席に座り、配られたプリントに目を通す。

……簡単なものばかりだ。

遺伝子についてのテストといていたから、専門化並の問題かと思
っていたのだが、メンデル優勢の法則やら、その程度だ。

つまり、簡単すぎて暇。

この時間は強襲科^{アサルト}と狙撃科^{スナイプ}がテストを受けれる時間帯なのだが、あ
まりいない。といつても、男子がいらないという意味だ。女子は何故
か知らんが、飢えた目で俺を見ている。

あと、レキとイヴが俺の隣にいる。……アルエー？

「何故貴様らがここに……！？」

「単位のためです」

「単位——私欲のため」

イヴよ。言い直した意味があるのか？

「……………あ」

「？ どうしたの？」

「そつえば名を書いていなかった」

名を書き忘れたら0点だからな。

ポリポリと後頭部を書きながらシャーペンを取ると——む？ シ
ャーペン、何処だ。

確か机に突き刺しておいたはずなのだが……。

「……………シャープペン……………刺しておいたのだが」

「うん。刺さってるよ」

「……………いや、机に……………」

認めたくない。

俺の使っていたシャープペンが『ある場所』にあることを、認めたくない。俺のシャープペンは、机に刺したはずなのだ。

そう。決して……………決して！ イヴの胸の谷間になど刺していない！！

「そろそろ時間終わっちゃうよ？」

「……………」

……………なあ、フェイト、リインフォース。

俺、何処でイヴの育て方間違えた？ 昔は大人しくて清楚だったのに……………。何故ここまで積極的に———というか、強引になってしまったのだろうか……………？ 俺の居なかった5年間に一体何が……………！！？

「……………背に腹は、代えられぬか……………！！」

俺はそっぽを向きながらイヴの胸元へ手を伸ばし、先程シャーペンの見えた位置へ手を持っていく。
そつだ、落ち着け。俺なら出来る。イヴに一切触れずにシャーペンを奪還することがッ！

「あんっ……！ もう、大胆っ。ちょっとびっくり」

「いや、シャーペンの消しゴムだろう……？」

何か硬い物を触ったと思ったのだが……。

考えるのはよそう。今のは絶対にシャーペンのケツにある消しゴムだ。それ以外は認めん。

クソッ。こいつ、やけに柔らか——うオえっふ！！ 気にするな。

（↑キリッ）

よし、あつた。

「あの………銀狼さん。TPOって知ってますか？」

「……………世の中には、逃げるが勝ちという言葉がある。というわけでさらばッ！」

小夜鳴に何か言われる前に俺は教室から逃げた。

まあ、あれだ。イヴのセーラー服が盛大にはだけて胸元が露出していて、そこに俺が手をつっ込んでいた。それを見た小夜鳴が。という事だ。

……あ。名前、書いてない。0点確定だ。

「キンジ、遺伝子学のテスト、阿呆のように楽だぞ」

「マジか？」

「ああ。阿呆臭くてやる気も出ん」

「いや、でもこれで0・1単位ならやるしかねえだろ」

「……まあ、お前はお前なりに頑張れ」

グラウンドに戻った俺は木陰に入り、木の中に跳び込み、枝に座って寝た。

真下ではキンジが阿呆面で寝ている。

——ああ、平和だ。

——だが俺が居るべきは平和ではない。戦乱だ。

——いつかまた俺は言うだろう。俺に関わった者全てに対して。

——Auf wiedersehen

（お別れだ）

——と。

秋葉原某所。

メイド喫茶店内にて。

「……………」

「……………」

「……………」

現在ここに居るのは、アリア・俺・キンジの3人。

理子の提案した十字架奪還作戦クロス・オブ・バックの作戦会議ブリーフィングをするのがここだ。
で、ここを提案したのは言うまでもないが、理子だ。

「……………」

「……………」

「……………」

キンジが携帯で映画サイトを覗き、アリアと俺が髪の毛の枝毛を探していると言っ始末。

理子め……。集合時刻を20分以上オーバーしているぞ……。

「……………ギン」

「……………む……………？」

「あんた、理子と付き合ってるって聞いたけど」

「——うえっほえほっ！」

飲んでいた水でむせ、咳き込む。
い、一体コイツは何を急に。

「阿呆を言うなッ。俺は恋愛など興味は無い。銃騎士ガンズナイトとしても、前の世界において来た者たちのためにも、俺が殺した人々への償いとしても。俺は、そういうことをしないと決めている。そもそも同姓・異性共に興味が無い」

「そっそうよねっ。恋愛だなんてくっだらないつ！」

「いや、お前は年代が年代なのだから——あア——……………色金イロカネのせいか……………」

「イロカネ？」

「気にするな。こちらの話だ」

そういえば、こいつの体内にある色金の名は緋々色金^{ヒヒイロカネ}だったな。

一応俺も緋々色金^{ヒヒイロカネ}は持っている。他にも、璃々色金^{リリイロカネ}・魔々色金^{ママイロカネ}・亜

魔色金^{マイロカネ}・阿蒼色金^{アオイロカネ}・阿紅色金^{アカイロカネ}・e t c

緋々色金の特徴は、争いと恋愛を好むということだ。だが、アリアの精神が幼すぎるがために、恋愛方面は恐縮しているということか。

「お前らは一度きりの人生だ。今のうちに色々な事を楽しめ。後悔しないようにな」

「なんか、自分の人生は一度きりじゃないみたいない言い方ね」

「俺はもうかれこれ3回……いや、4回以上死している。致命傷で言えば、400回以上だな。拳銃弾、散弾、榴弾、戦車砲、迫撃砲……ああ、中には大陸間弾道ミサイル^{ICBM}を放ってきた馬鹿もいたな」

俺が苦笑混じりにそう言っていると、2人は目を見開き、

「それ、何処の世界大戦だよ……」

「まさか、イ・ウーに狙われてたの!？」

「違う^{ソン}。国家に追われていただけだ」

「指名手配犯!？」

「ああ」

「凶悪犯罪者!？」

「ああ」

「強狼魔!？」

「何故そうなる!」

こいつらの連想は凄いな!

「全く……………。それより、誰か理子に連絡の取れる奴はいないのか。いい加減殴るだけでは済ませなくなってきた」

「ごつめえーん! 遅刻しちゃったー! いそぐぞぶうーん!」

ようやく来たかと思えば、理子の両腕には多数の紙袋が。……………この野郎、道草食ってて遅れたのか。ブツ殺スぞ。

両手を広げて走ってきた理子が俺の隣に座り、さっさと注文した。

「んと、理子はいつものパフェといちごオレ! ダーリンにはマリアージュ・フレールの春積みダージリン! そのピンクいのと冴えないのにはももまんでも投げつけておいて!」

まさに水を得た魚である理子のテンションは、某宇宙船間の主砲並

の数値だろう。

無性にイラついている俺は理子の頬をつねり、無言の重圧を掛ける。

「遅れたら遅れたでそれなりの謝罪というものがあるはずだが……？」

「いひゃいひゃいひゃいよ〜！」

結局、ろくな説明もなしに今日は俺が理子を苛め続けて終わった。

翌日の放課後、^{アサルト}強襲科棟内部・射撃訓練場。
俺が^{ハンドガン}自動拳銃の^{トウマルテスト}中距離射撃実技——10メートルから15メートル先にあるマントーゲットを使つての拳銃射撃のテスト——をやっている、隣から蘭豹の怒り声が聞こえた。

「コルアッ！ 集中しろ！！ ^{パラベラム}9ミリ弾程度で手ぶれ起こすなや！
全然当たってへんやないか！！！」

「あちゃあ……………すみません」

「あいつ見てみい！ 9パラ——9ミリパラベラム弾——の軽く5倍以上反動のあるDE^DSERT EAGLE^Eで1つの穴に^{ワンホールショット}全て貫通しとるで！ しかも2丁^{ダブル}拳銃！」

「え、でも、あの人って確か20歳過ぎじゃ……」

「関係あらへん。2メートル過ぎの大男が使っても45度以上跳ね上がる反動を完全に抑えとる。意味がわかるか」

「さ、さあ？」

「完全に自分と一体化しとるっちゅうことや。あいつに教えてもらってこい！」

ギヤアンツ！

デンス・クイックドロウ

超高速10連射で放った50AE弾は、マンターゲットに初弾で開けた穴に吸い込まれるようにして入っていく。

同じ穴に後の弾を全て通す人外技の名が『ワンホールショット』なのだが、俺としては少し集中すればできることなので大した事ではない。

「あの、銀狼先ば「ぬツ！」ふえあっ！？」

ガウンツ……！ カシャガチャンツ。

俺は両手のDE^DSERT EAGLE 14inchのマガジンキヤッチを押し、マガジンを床に捨てた。

射撃台に置いてあるマガジンを挿し、DE^DSERT EAGLE

14 inchを台に置く。

「……………あのう……………」

「……………アサルト……………1年A組『間宮・あかり』・専門科目
『強襲科』・武偵ランクE……………だったな、お前は」

「あ、はいっ！ あの、なんでそこまで知って「チッ」ひいっ！？」

「……………そういえば、アリアと戦姉妹契約をしていたか。それで
……………何か用か。丁度貴様のせいで112発目のワンホールショットを外したところなのだがな」

111発全てをマントーゲットの脳天に開けられた1つの穴に貫通させていたのだが、話しかけられた拍子で手がぶれてしまい、112発目が心臓にいつてしまった。畜生が。

ちなみに言っておくと武偵は人を殺してはならないのでマントーゲットの頭や心臓は禁止エリアである。

「すつすみませんっ！！ あたしなんか話しかけてすみません！！」

「ああいや、お前を攻めているつもりはない。俺が集中不足だっただけだ」

アリアと同じくらいの背なので、少し膝を折って視線を合わせる。

もしアリアだったらそのようなことはしないが、流石に初対面で啖呵を切るのはあれだからな。

「それで、俺に用があるらしいが」

「えっと、その、射撃を見てほしくて……。めっ、迷惑だったらいいです！ 蘭豹先生に教えてもらうので！」

「蘭豹に訊くのはやめておけ。あいつは回転式弾倉流保持になってしまっているからな。お前の銃は銃声を聞いていた限りだと、クローズドボルト式で……。ああ、マイクロUZIか」

「なっ……。！？ なんでわかつたんですかー！」

「銃声とターゲットさえ見ていればわかる。お前は俺の隣のレーンで射撃をしていたからな」

「ほんとメチャクチャなやつちゃんあ、銀狼」

「普通だ。少なくとも俺やレキ——特Sランクにとってはな」

あかりの隣にいた蘭豹のレッグホルスターからS&W M500を掠め取り、視線をあかりに向けたまま右腕だけをレーンに突き出す。ガガガガガンッ！

フィフス・クイックドロウ

超高速5連射での500S&W弾を撃ち、マンターゲットにある銃口マークにワンホールショットで通す。

空薬莖を排出したM500を蘭豹に返し、あかりが首に掛けていたショットガナー——射撃訓練時に使うヘッドホンのような耳栓——

——を耳につけてやる。

あかりが呆けている間に隣のレーンからあかりのマイクロUZIを取り、20連マガジンを挿す。

マイクロUZIを渡し、ショットガナーを付けているので言葉を発しても聞こえないだろうから、射撃台を叩いてトン・ツーで伝える。

「構えてみる」

「は、はい！」

トン・ツーに対して返事をし、あかりがマイクロUZIを両手で構えた。

あかりの両手を取り、構えなおさせる。グリップینگ持ち方以外にも気になる点
がかなりあるが……一度に全て言っても理解できないだろう。
それに、全ての物事には流れというものがある。

「あかり、これは必要悪だからな」

「えっ——ひゃあっ!？」

「おお! 銀狼お前意外と大胆やなあっ!!」

「2人とも黙れ。事前に『必要悪だ』と言っただろう」

俺はあかりの足元に屈み、あかりの足を動かしていた。
ガチガチに緊張しているあかりの腰を押したり肩を引いたりし、ま

あこの程度かという姿勢にする。

「俺とて無闇に触りたくはない。——とりあえず立ち姿勢スタンディンでの射撃ゲでの基本だが、足は肩幅に開いて利き足の反対をやや後ろに出して反動に備え、それと同じ方の肩をやや後ろに。両手は突き出すように構えるが……」

「え、あの、ふえ？」

「……………基礎でダメか。まあ、我流でもいいのだが……………」

「さりげなく足とか腰触る辺り、相当慣れとるんじゃないか？」

「黙れ。確かに慣れてはいるが」

ニヤニヤしながら言ってくる蘭豹を睨みながら、昔の事を思い出す。イヴに射撃を教えたときはマンツーマンでみっちり教えたからな。かなりの出来だ。

「蘭豹、基礎くらいは教えられるだろう」

「へいへいっと。テスト終わって暇なら周りの奴らの見てこい。その分単位は上乘せしてやる」

「はア……………。今日中距離射撃実技をやってるのはあと5人か…………。0・2単位頼むぞ」
トウマルテスト

「0・1に決まってるやないか！」

「……………チッ……………」

射撃台に置いてあるDESERT EAGLE 14inchを後ろ腰にあるヒップホルスターに挿し、足元に押しているマガジンをポケットに入れ、空の薬莢を蹴散らしながら歩き始めた。
小型拳銃を使う奴、大型拳銃を使う奴、サブマシンガンサブマシンガンを使う奴、ARアサルトライフルを使う奴。そんな中、丁度テストを終わらせて帰り支度をしている奴を見つけた。ついでにそいつの注意点も。

「おい」

「ん？ ……………長身に白のロングヘア…………？ まっ、まさか『銀狼先輩』！？」

「どついう評価をされているのだ俺は……………」

「あ、いえ、決して嫌な評価じゃなくて……。えと、なんか用ですか？」

俺が声を掛けたのは、肩に掛かる程度の金髪ポニーテールという女子。

確かこいつも1年A組で、名は『火野・ライカひの』・専門科目『強襲アサルト科』・武偵ランクは……………忘れた。身長はアリアやイヴよりも大きく、約165くらい。平均だな。胸部は中の上か上の下くらいだ

ろう——って、なにやってんだ俺……！

「その職務怠慢教師に言われてお前らを観ていたのだが、1つ注意点がある」

「なんでしょうか」

「首のそれ、まさか実戦でもつけている気が」

「首の？ …………… ああ、ネックバンドですか？」

「自殺志願者ならば外せといわないが……そういったアクセサリ―類は敵に狙われる弱点ともなる。覚えておけ」

「は、はいっ。わかりました！」

わたたとライカが首のベルトのようなものをいじり、その手を止めた。

手に提げたカバンと俺の顔を交互に視線を移し、何故かあわあわとし始めた。

…………… わけわからん。

「テストはどうだった。その顔を見ると、いいのか悪いのか判断がつかないが」

「さっ、320点です！ 平均より下ですが……………」

「銃はなにを」

「IMI社のDESERT EAGLEをサブに使ってます。あつても、口径は銀狼先輩より下の41AEですが……」

「41AEでも手に余る反動だろう」

「はい……。初めて撃ったときは反動で銃が頭に当たって痛かったです……！」

思い出して痛みが蘇ったのか、ライカは頭をさすってハツとした。それにしても、この学校に俺以外でDESERT EAGLEを使う奴がいるとはな。

「あ、あの！ 銀狼先輩！」

「ああ。どうした」

「その……あの………」

「……………む？」

「……………あ……………あたしと、戦徒友契約してください
！！」「却下」「即答！？」

「俺は例え教務科^{マスタース}の命令であろうとも、そう簡単に時間をさけるほど暇ではない。ただでさえ面倒事が嫌い人で責任を押し付けて生きているというのに、これ以上面倒なことになってたまるか。帰れ」

「で、でも！ もう希望者のプリントに名前書いて提出しちゃいました！」

「……………はア……………。まあ、お前が誰と組もうとしても、それはお前の自由だ。仕方あるまい、『エンブレム』——やるぞ」

エンブレム——

武偵高の校章が印刷された星型のシールを戦徒友契約アミカをする先輩から奪うのが、エンブレムのルール。

これは先輩が己の何処に隠し持ってもよく、制限時間も先輩が決めていいという、後輩を試すための試練だ。

俺は何度もアミカ契約を迫られているが、今まで85人中全員が脱落。俺を諦めている。

まあ殆どはCQCで瞬殺したかな。

「制限時間は現時刻から1時間。いかなる手段を用いても俺からエンブレムを奪うこと。いいな」

「……………はい！」

「気迫・勢いは充分……………か。良く見ておけ、エンブレムはここだ。しっかり狙えよ」

シールを張るのは少々癢に触るので、ラベルを剥がさずに胸ポケットに入れる。

それは丁度心臓の位置と重なっている、ある意味いい場所だ。

「来るなら来い。俺は普通に私生活が続けるが………襲われればそれに答えよう」

「えっ？　そ、それはどういう……」

「何をグダグダしている。ノンストップ時間は常に動いている。タイム武偵は常在戦場……時刻は待つてくれんぞ」

「う……うすッ！　行きます！！」

ライカが走ってきたと同時に右腕を突き出してきたので、半歩動で腕を避けて歩き続ける。

全く、危ない動きだ。隙だらけで危なっかしい。これでよく武偵が勤まるな。

次々と繰り出されるCQCの動きを全て半歩動で避けながら、俺は男子寮へ歩いていく。別に女子寮に戻ってもいいが、イヴやレキに襲われるので却下。あー、めんどくせ。

「銃でもナイフでも好きに使え。当てられるのであれば——な」

適当に挑発しながら攻撃を避け、男子寮の階段を上っていく。

タントンと聞こえる一定リズムの俺の足音と、ダダンッ！　ダンッ

！　と聞こえる不規則なライカの足音。

コンタクトレス非接触ICカードキーで部屋の鍵を開け、中に入る。ライカも中に

入って俺を襲っている。

「キンジ、流れ弾に気をつけろよ」

「なんでお前はそうやって厄介事を拾ってくんだよ!!」

「俺とて好きでやっているわけではない。戦徒友^{アミカ}を迫られた以上エ
ンブレムをやらざるを得ないだろう」

「そりゃまあ確かにそうだけだよ……」

「お邪魔します!」

「うおおっ!?!」

俺はキンジを踏み台にしてリビングへ行き、ライカはDESERT
EAGLEの弾が切れると同時にスカートの下からナイフを抜い
た。

全長20センチほどのフォールディング・ナイフだ。強度は不十分。
簡単に壊せる。

「無駄弾を撃つから弾切れを起こす。銃を撃つのは相手に必ず当た
るとき・相手が動いていないとき・どうしても撃たねばならないと
きだ。ナイフは無闇に振るな。刃物というのは己を傷つける物でも
ある」

「おい銀狼! 今度弁償しろ!」

「断る。お前とて武偵だろう。己で稼いで直せ」

窓を開けてベルトのワイヤーを引っ掛け、一気に飛び降りる。

流石に追って来ないだろうと思って見上げると――案の定、スカートであることなどお構い無しにワイヤーを使って飛び降りていた。こいつ……………本気だ。

今まで俺にアミカ契約を持ちかけて来た奴らは、大体この辺りで諦める。

俺はちゃっちゃと駅へ行き、武偵帳を掲げて武偵権限で改札を乗り越える。ライカは電子マネーで改札を通過。

乗車口が閉まるぎりぎりまで電車に乗り込むと、ライカは車掌に見つからないように屋根に上った。ようやるな。

さて、今回は何処まで粘るかな。

12弾 潜入準備（後書き）

あとがき

作者 「……………ごめんなさい」

銀狼 「死ね」

レキ 「死になさい」

イヴ 「死んだらいいよ」

アリア 「DEAD」

キンジ 「消えろ」

作者 「主用キャラ全員に批判された!？」

感想返し

黒鋼 様

作者 「こちらではお久しぶりです。作者です」

銀狼 「奴らが三銃士かどうかはわからん」

作者 「ちょっと疑問ですが、銃をぶっ放すレキはヒロインですか？」

レキ 「……………自覚はありませんが、そんなに撃っているのですか
ようか」

銀狼 「俺は1日10発以上撃たれている気がするがな」

レキ 「……………そうですね」

作者 「あと、後半でアリアがキレてたのは銀狼の態度のせいです。
アリアはガキです」

アリア 「風穴！」

オートクレイル 様

銀狼 「はつきり言おう。わざとだ」

作者 「なんて言えばいいんですかね、こつ……………レベルアップしてく、みたなあれです」

銀狼 「……………つまり？」

作者 「後々変わっていくことさ」

いーちゃん 様

作者 「更新の催促にお答えできず、すみませんでした」

キンジ 「お前掛け持ちなんてこれからでいいのかよ」

作者 「そこはもう気合で！」

次回予告

今回はA Aのキャラが出ていましたね。次回からも出てきますが、そろそろブラドの館に行くんです。原作3巻です。

次回、緋弾のアリアゝ魔弾の射手ゝ 13弾 エンブレム

作者 「できるだけ早く更新します！」
銀狼 「常にそうしろ」

13 弾 エンブレム

「中々粘るな……………」

「何で壁歩いてんの——！？」

台場に着いた俺は商店街の壁を走りぬけ、後ろから人ごみを掛け分けて走ってくるライカを気付かれないように所々で待つ。

全力で逃げようものなら、既に国外にでも行けているさ。

俺は半分遊び気分なので、途中で缶ジュース買ってくつろいでいたり、棚に並べられた商品を見たりしている。で、ライカが後方10メートルくらいに来たときに逃げる。その繰り返し。

そっぴやファ。タって、グレイプ派かオレンジ派で分かれるよな。

俺は飲まないからどうでもいいけど。

しばらく遊びながら歩いていると、残り時間が5分を切った。

カカカカンッ！ と景気良く音を鳴らして俺が駆け上っているそこは、レインボーブリッジの極太ワイヤー。俺はその天辺にある門のような形をした柱の上に立っている。

「ここまでくれば……………ハッ。これでも来るか、火野・ライカ」

カカンッ、と靴を鳴らして隣を見ると、肩で息をしながら顔を青くしているライカがいた。

高さは10メートル越えだ。普通の人間ならば恐怖するだろう。しかし手すりなど無い。1歩間違えればそれで死亡確定となる。

「あたしの友達に、EランクなのにSランク武偵の戦妹アミガになった人がいるんです」

「知っている。『間宮・あかり』だろう。よくもまああいつが……いや、あいつだからこそアリアからエンブレムを取れたのか」

「だからあたしも諦めたくない。『最強』の名を欲しいままにしてる銀狼先輩からだって、頑張ればエンブレムを取れるはずだから！」

「……………諦めない、か。その心構えは大いに評価対象だが……………今は結果が全てだ。少々無粋な邪魔が入ったが、タイマーは止めんどぞ」

下から聞こえた銃声に振り向くと、武偵高の護送車が2台の車に襲われていた。恐らく護送中の奴らの仲間だろう。

護送車内の武偵は2人、しかも装備は防弾制服と拳銃1丁ずつのみ。対する襲撃者は8人組で、コルト M4が2丁とAK47が2丁。他にもハンドガンを持っているだろう。

護送車は横転し、中から右肩を負傷した武偵と足を捻挫した武偵が出てきていた。丁度バスを盾にするような形で。

「お前はそこにいるといい。少々暴れてくる」

「えっ————し、銀狼先輩——！！」
シルバールフ

トンツ、とワイヤーも無しに飛び降り、空中で両手にDESERT
EAGLE 14inchを抜いてコッキング。
着地まであと8メートル。姿勢制御が余裕でできる距離だ。
落下しながら戦場を観察していると、武偵の言葉が耳に入った。

『大至急強襲科と狙撃科の応援早く！』
アサルト スナイプ

「すまんが強襲科と狙撃科0・5人ずつでいいか」
アサルト スナイプ

ガガウンツ！
ダブル・クイックドロウ
超高速2連射で襲撃者の持っていたM4を破壊し、着地と同時に顎
を蹴り上げて気絶させる。残ったもう1人が襲い掛かってきたので、
ジャブをかわして水月に膝蹴りを叩き込み、応援要請を出していた
2人の場所へ隠れる。

「白のロングヘアーにロングバレルのDE……！？ まさか！」

「少し黙れ。……敵影はあと6か……。装備不完全だし……。……問
題ないか」

地面を蹴って跳び出ると同時に放った2つの50AE弾でAK47
を破壊し、一斉に襲い掛かってきた5人を相手にCQCを持ち込む。
マーシャルアーツ・カポエラ・古武術・アルカタ・CQC等々。様
々な型式を混ぜた動きで5人をボコしていると、唐突にエンジン音
が近づいてきた。
ワインレッドのオープンカーだ。それが俺に突っ込み——グワシ

ヤアンツ!!

「は……………ははっ。なんで……………なんで生きてんだよ……………!?」

「ほう。お前は隻眼の狼を車で引けば殺せると思っていたのか。心外だ——なアツ!」

「ひいッ!? なっとなななな馬鹿力とかそんなんじゃないぞ!？」

車の特攻を脚で受け止めた俺はボンネットに飛び乗り、硬く握った拳でエンジンごとボンネットを突き破った。

粉々になった金属片を見せてやると、乗っていた犯人は気絶し——
——全制圧完了。

ああ、ちなみに言うと、ボンネットを殴った瞬間腕にだけEC因子エクリプスを回していたからできた事であって、生身なら無理だ。流石に。

「えーと……………3年B組の伊藤・和幸いと・かずゆきといったな。事後処理は任せた」

「え、ちょ! 助けてくれたことに礼は言いますが戦やり逃げ——
暴れるだけ暴れて事後処理を逃サボげること——はやめてください!
!」

「精進しろよ」

ほいほいつ、と車を跳び越えて橋の端に行き、ワイヤーの外側に出

る。

横幅は20センチ。一瞬の迷いで水中に落ちてしまう場所だ。

何故俺がそのような場所に移動したかというところ、後ろから静かに隠^{スニ}密^{キング}でライカが迫って来ていたからだ。

「今にも転落しそうなほど怯えていても、結局は追ってくるのか——
——火野・ライカ」

「諦めないって、あかりにも約束したから……！」

「約束……か……。もし点数をつけるのであれば、今のお前は（1000点満点中）100点だ」

「点数じゃ意味が無いんです。銀狼先輩のエンブレムをとらないと——！」

「……ああ、そうだな。なら最後の隙^{チャンス}を与えよう。今度は避けても逃げもしない——というか、そのようなスペースは無いがな」

「こっ、ここで!? そんなのムリ」ただし——えっ?」

「今後一生、何かをやる前から『無理』だの『できない』等と言わない事。これらの言葉はお前ら人間^{ホモ・サピエンス}の持つ無限大の可能性を自ら押しとめてしまう呪言だ。いいな」

「っ……!!」

ライカがCQCの構え——つまりリラックス状態——を取ると、

一度頷いて予想外の言葉を発した。

「銀狼先輩——あたしを襲ってください」

「……………は？」

あまりにも予想外だった言葉に、俺は呆けてしまった。恐怖で気が狂ったのかとも思ったが、そうではなさそうだ。目には闘志が宿っている。

それともあれか。イヴやレキの言っている方の——つまり、異性としての『襲え』ということか？ それなら俺は却下だ。絶対にそう言うことはしたくない。

「銀狼先輩、ずっと逃げてました。あたし、逃げるだけの先輩とは戦妹^{アミカ}になりたくないです」

「……………クククツ……………ハハツ。いい……………良い度胸だ。前言撤回は通用せんぞ！」

両手の親指を内側に折り曲げて残りの4本はピンと伸ばし、どちらでも拳打を打てるようにする。

狙うは胸骨から指四本分下——『月の目』だ。決定打になりつつも相手へのダメージが最も少ない急所の1つ。

基本を無視した直線的な走りにすり足を織り交ぜ、姿勢を低くしてライカの懐に入り込む。

ライカが俺に手を伸ばしたと同時に右半身を前に出し、手の平同士

を合わせて合唱の姿勢になる。

この体勢から繰り出されるのはただ1つ、月の目への肘打ち。体にそれほどダメージを与えず、意識を刈り取る技。

——ドゴッ……！

鈍い音が俺の中を駆け巡り、ワンテンポ遅れてライカが水上に吹っ飛んだ。

「——つて、お前も強襲科なら命綱くらい付けておけ！」

頭から吹っ飛んだライカに跳び付いて空中で抱き抱え、水面を瞬時に凍らせて着地。

怪我は………月の目だけで他はなさそうだな。よかった。

凍らせた水面を元に戻すと同時にレンボーブリッジに跳び、ライカをおんぶする。流石に気絶しているのを見捨てるわけにはいかない。

………う………背中^うにレキよりも大きく理子よりも小さな胸の感触が………しかも理子寄りなので、わりと大きいし………

つてうオい！ 何を考えているのだ俺は！？ 正気を保て俺！！

はー………帰ろ。眠い。

「………う………あれ………？」

「む……やっとききたか」

「あたし……先輩に倒されて……」

「どうでもいいが起きたのなら自分で歩け。いい加減疲れた」

背負っていたライカを降ろし、立たせてみるが――

「うわっ――とど。す、すみません」

「すまん。強くやりすぎたか」

「い、いえ……」

立った瞬間よろけてしまったので、咄嗟に抑える。

月の目を狙ったのでそれほど痛みは無いだろうが、かなりのダメージが蓄積されているだろう。そういう技だからな。

ライカと共に歩いていると、学校支店の購買部から出てきたアリアと合流した。抱えている紙袋からは銀色の手錠ともまんが見えている。

「なにあんた、またたぶらかしたの？」

「初見の奴がいるのにそういう事を言うな。変な誤解をされるだろうが」

「あつ、始めまして。火野ライカです」

「よろしく」

「えと……神崎先輩、ですよ」

「そうよ。——で、なんでこいつと一緒にいんの？ 食事にでも誘われた？」

「ち、違います！」

「馬鹿を言っな。誰がこいつを」

「あ、そ。なんでもいいけど、結局なんなの？」

「戦徒友契約を迫られてエンブレムをやっていただけだ」
アマカ

「あんたも大変ね！。これで86人目でしょ？」

「まあな」

アリアがももまんを頬張り、俺はアリア紙袋からももまんを2つ取って1つをライカに渡す。

礼を言われたが無視し、ももまんを取られてキーキー怒っているアリアを無視する。

「お前もガキではないのだからこの程度で怒るな」

「怒るわよ！ あんただって自分の弾を取られたら怒るでしょ！？」

「通常弾で怒るわけなかるう。確かに武偵弾なら多少は怒るが……」

「あたしにとってもまんはそのくらいの価値があんのよ！」

「そうか。それはすまなかったな。それよりこの前の50AE弾はどうなった」

「明日にでも届くんじゃない？ あんたの言うとおり誤差は10ナノメートルにさせたわ」

「お前……本気でやらせたのか」

「あんたが言っただんでしょ！？」

「本気で信じるとは思わなかった……」

「~~~~~っ！！ 今度試合よ！ アルカタでばこぼこにしてあげるわ！」

「やってみろ。返り討ちにしてやる」

アリアを適当にあしらいながら男子寮に入る。

キンジの部屋に帰っていったアリアを見届けてから、階段を上がつて最上階にある部屋へ。

「あの、先輩」

「どうした」

「神崎先輩と仲良いんすか？」

「仲がよい、というわけではないな」

「え？　じゃあなんで……」

「……俺もあいつも、訳ありということだ」

コシタクトレス
非接触ICカードキーで鍵を開け、ライカを部屋に通す。
俺がこの前支給された、特Sランク用のVIPルームだ。

「そろそろ隠さずに出したらどうだ。そのエンブレムを」

「——っ！　……気付いて、いたんですか？」

「ああ。俺がお前に近づいた瞬間、俺の月の目への肘打ちを食らう
ムーンサイト・エルボー
と同時に俺の胸ポケットから掠め取っていただろっ」

「……はい。先輩がわざと取りやすくしてくれたから」

「さあな。そのような記憶は無い」

リビングにあるソファにライカを座らせ、テーブルを挟んだ反対側のソファに座る。

部屋に入る際に使ったICカードキーをテーブルに置き、ライカの方に突き出した。

「え？ あの、これは……」

「俺からエンブレムを奪った以上、お前は俺の戦妹だ。^{アミカ}これから1年間に過ごすことになるが、それにおいて幾つかの決まりがあつてな。その1つが——部屋の共有だ」

「す、すみません。あざっす！」

「ああ、変な誤解はするなよ。この部屋への出入りは自由とするが、俺はお前の部屋へは行かん」

「は、はい」

「……………少し、静かにしててくれ」

ポケットから携帯を取り出し、電話帳からある人物を呼び出す。懐かしい名だ。まさかこいつに電話をすることになるうとは。

「^{ハイ}Hey ^{フリードリッヒ}Friedrich・^{マイン}Main ^{ナーム}Name ^{イスト}ist ^スSilver ^{ウルフ}Wolf」
（フリードリヒ。銀狼だ^{オレ}）

「^{シルヴァー}Silver ^{ウルフ}Wolf? ……^{アー}Ach / ^{ランゲ}Langge ^{ツァイト}Zeit」

（銀狼？ …… ああ、久しぶり！）

「ナーハ Nach einem エクスコース Exkurs アルス . Als ブレット Bullet
ブラッツェン platzen フラーゲン Fragen ズイー Sie
」（余談は今度な。それより、『バースト炸裂弾』を頼みたい）

『ブレット Bullet ブラッツェン platzen？ …… ズイー Sie ヴィッセ wisse
ニヒト n nicht . Viele？』
（バースト炸裂弾？ …… あるかわからないよ。何発だい？）

「ヴァルテン Warten …… ライカ
（待ってくれ）

「なつ、なんスか？」

「アムド装備科とS研に超偵犯対策の純銀弾・ギンダン非法化と武偵弾の渡り発注
掛けられるツテはあるか」

「あ、いえ……」

ライカが首を横に振り、否定を表す。

まあ、流石に1年でツテのある奴の方が少ないか……。

「エントシュルデ Entschuldigen イゲン Sie ズイー , bitte ビッテ . Ich イチヒ
ペライイテ erite
（すまん。自分でそろえる）

『イチヒ Ich フエアシュテーエ verstehe バアイ . bye』

（わかった。じゃあね）

「Auf Wiedersehen, Friedrich」
アウフ ヴィーダーゼー エン フリードリッヒ
（ああ。じゃあな）

電話を切り、携帯をポケットにしまう。

ふむ……………やることはいくつかあるな。任せてみるか。
木製の棚からSMGが入りそうな大きさの木箱を取り出し、テーブルに置く。

「今度作戦で八木——通信アンテナの一種——を使うのだが、
組み立てておいてくれ。俺は先刻の件を注文してくる」

「は、はい！」

「必要な道具は全て入っているからな」

俺は机の引き出しから予備のICカードキーを取り、部屋を出た。

「……………なにをしている……………」

「すみません。独文……わからなくて……あたし」

「……そうか。まあ、今後わからないことは教えてやる。これは最初にお前の技能^{スキル}を確認しなかった俺が悪い。気にするな」

マニュアル通りに作れば誰でもできるようなアンテナなのだが、案の定ライカはマニュアルが読めていなかったらしい。

これに関しては全て俺の責任だ。戦徒^{アミカ}友契約をした以上、義理の兄妹も同然だからな。

「専門馬鹿……ではなさそうだが、なにか得意な事はあるのか。射撃・推理・鑑定・追跡・運転・どれでもいい」

「CQCと捕縛術が、他より……」

「至近距離格闘か……。お前、あかりにもなにか教わっているだろう。護身術……ではないな。あの動きは殺人術だ」

「……かつて忍びが使ったらしい、^{とびつか}鳶^{とび}穿^がつて奴を……」

「ああ、あれを……。まあ、格闘戦が得意ならそれを基に他を鍛えれば良い。焦ることは無いさ」

導線やらチューナーやらがバラバラになった八木を箱にかたし、リビングの隣の部屋にある俺の机から超大型拳銃^{ハンドキャノン}——予備のDESSERT EAGLE 14inchを取り出し、^{オーバーホール}完全分解整備に必

要な道具を全て持ってくる。

「これの清掃を頼んでいいか。DESERT EAGLEを持って
いるのだし、フィールドストリッピング通常分解清掃はできるだろう」

「は、はい！」

はつきり言つて、ライカは格闘馬鹿だ。

射撃は平均直下、運転は皆無、鑑識は人並み、推理は教科書通りテキストに
だけ……。1年なのだし仕方がないといえば仕方ないのだが、武偵
は幅広くできるに越したことはないからな。

「俺は晩飯を調達してくる。なにか希望はあるか」

「あ、コンビニ弁当で大丈夫っす！ 普段からそうなので」

「……………普段から、か。わかった。適当に買ってこよう」

普段からコンビニに弁当か……………少々栄養バランスが気になるな。

俺は部屋を出て男子寮の階段を駆け下り、知り合いの部屋に入る。

俺の部屋であるVIPルームは秘密にされているので、アリアやキ
ンジはあの部屋を知らない。

「ん？ ああ、銀狼か」

「……………どうした、その服」

「あーほら、理子の作戦で俺とアリアが潜入するだろ？　それで俺が執事役だから、先に慣れておけとか理子に言われて」

「そういうことか。——晩飯は食ったのか」

「お前の作り置きをな。美味かったぞ」

「そうか。アリアはいるのか」

「いるにはいるけど……………部屋は見ない方が良く。風穴開けられる」

「何故」

「……………大声じゃ言えねえけど、理子に無理矢理メイド服着せられてるから」

「……………そうか。まあ……………あれだ、頑張れ」

「そついや、俺らが潜入してる間お前はどうすんだ？」

俺が冷蔵庫からタッパを取り出して持ち帰ろうとしていると、キンジに止められた。

燕尾服で奉仕活動をしているキンジを想像すると、似合っているのが恐ろしい。

「少々面倒な依頼が来てしまったな。お前らの通信後方支援と並行

バックアップ

してそちらを続ける気だ」

「ん。了解。アリアにも伝えとく」

「頼む」

部屋を出て階段を上っていき、VIPルームに戻る
結構長く話していたな。5分か3分……ああ、長すぎる。
さつさと晩飯を用意せねば。

「あと数分で用意する」

「す、すみませんっ」

といっても、電子レンジで終わりだな。
タッパーの中身は肉じゃがだ。今朝俺が作っておいた。飯もある。
即席だが。

ライカの方だけを用意し、リビングへ持っていく。俺はいらん。

「冷めないうちに食っておけ。俺は弾の補充を——……………もう、
終わったのか？」

「はいっ。DEは他の銃と違ってかなりピーキーなんで、何度も掃
除してて」

「……………このグリス、それにマグエジェクトも……………」

ライカからDESERT EAGLE 14inchを受け取り、
マガジンを抜いてみる。

グリップ内部を金ヤスリで削って研磨剤で仕上げ、スライドとバレルの間やスプリングガイド、トリガーユニットやボルトとレシーバグループなどの接点にガングリスが塗布されている。

摩擦指数もかなり減っているな。スライドの引きも速いし、連射速度も上がるだろう。

「あ、あの、すみません！ 指示が無かったからって、あたし、勝手に……」

「……いや、構わんさ。俺の部下にもこれほど丁寧な通常分解清掃をする奴はいなかった。誰にもまして真剣な奴だ、お前は」

ぽんぽん、と頭を撫でてやると、その少々男勝りな性格とは裏腹にライカが目尻に涙を溜めてしまった。

俺、何かマズいこと言ったか？ 女心という奴は全くもってさっぱりわからん。

「銀狼先輩………せんぱーい！」

「お、おい、どうした」

突然泣き付かれ、なにをどうしていいのかわけがかわらなくなった。

「なんでも……なんでもありません……！」

「……………ぬう……………。とりあえず、冷めないうちに食べ、な。
泣かれているままではわけがわからんし、俺がどうこうできること
かもわからん」

「泣いて……ないっす」

「……………そうか。とりあえず飯を食え。俺はその間に色
々と準備をせねばならん」

「……………はい。わかりましたっ」

ぐしぐしとライカが袖で涙を拭い、ソファに座って肉じゃがを食い
始めた。

俺は隣の部屋へ行き、椅子に座って机の引き出しから弾頭とガンパ
ウダー、上皿天秤や空の薬莢を取り出す。

尚、1つ1つがかなり巨大な50BMG弾だ。どれほど分厚い鉄板
も1発貫通だな。俺が使うのは基本的^{アーミーピアシング}に全て徹甲弾だし。

え？ 何に使うのかって？ 簡単だ。人間に。

別に体が真つ二つになるうが知ったことではないしな。そもそもブ
ラドを相手にするのであれば、50AE弾ですら決定打にはならな
い。

なら人間が真つ二つになるくらいの威力を持っている50BMG弾
が適役だろう。

どうやってブラドを苛めるか考えながら弾を作っていると、室内に
インターホンが鳴り響いた。

ぴんぽこぴんぽこ連続して鳴らすということは、あいつしかいない。

「あ、私出ましょうか」

「いや、いい。あいつはお前が扱えるほど甘くない」

玄関を蹴りあけてDESERT EAGLE 14inchを構え、目の前の人物が『荒ぶるナントカのポーズ』をやっているのを確認し、部屋の中に入れた。そいつは遠慮という言葉は一切知らないのか、奇妙な言葉を発してさっさとリビングへ走っていった。

「おおっ！ シーくんが女の子連れ込んでる！ 凄い進展！！」

「黙れ。——例の物は」

「焦らない焦らない！ ちゃんここにあるよー！ マイダリーンっ」

最後の言葉に対して舌打ちで返すと、そいつは自分の胸を指差してからソファに寝転んだ。

あー、ウゼエ。このテンションどうにかならないものかね。

「あ、あの、この方は……？」

「ん？ 私？ 誰が呼んだか探偵科1の情報屋とは私のことさ！
その名も「峰・理子。探偵科1の情報屋改め馬鹿だ」^{インケスタ}シーくん酷い！
それはいくらなんでも酷いよ！？」

「事実だろうて」

「ちーがーうーのー！」

「あー、五月蠅い五月蠅い。黙れ」

「わかった。じゃあ黙ってあげる代わりに理子りん^{キス}にキスし「俺の拳と接吻するがいい」それってグーパンチだよね！？ 顔面だよね！？」

「いや違ったな。俺の革手袋とか」

「些細な違い！？」

「まあどうでもいい。それより……………来い」

視線で隣の部屋を指示し、理子が来たのを確認してから鍵を閉める。
この部屋からのみつながっているウォークイン・クローゼット（未使用なので服は1着も無い）の中を突き進み、その奥にある隠し部屋の中に入る。

何もない6畳ほどの部屋にいるのは、俺と理子だけ。
この状況ですることといえば、1つしかないだろう？

……………おい、今変なこと考えた奴出て来い。仕事の話に決まってるだろうが。

「――で、クロス・オブ・バック十字架奪還作戦の作戦計画はできたのか」

「できてるよ。どんな厳重に守られてても絶対平気。理子の物は理子の物なんだから」

「……そうだな。ところで質問だが、俺の役目はポジションどうなった」

「予定通り理子と一緒に通信で後方支援バックアップなんだけど、もし戦闘になったら……お願いしてもいい？」

「問題ない。ミッション・ポイント作戦地点は何処だ」

「えつとね、ここから離れたところにブラドの住んでるっていう屋敷があるの。今は管理人とハウスキーパーだけなんだけど、その金庫に十字架が隠してある」

「ブラドが不在……？ ……療養のためにルーマニアへ帰ったか……？」

「わかんない。んで、唯一居る使用人の2人が休暇を取るから、そこにキーくんとアリアをぶち込むの」

「……だが、どうやって。普通には無理だろう」

「だいじょーぶ！ 理子りんにお任せ！」

ピシッ！ と両手で敬礼のようなポーズをし、いつのまにか俺の右腕に絡み付いてきていた。

こいつは相変わらず動きが素早いというか意表を付いてくるというか……。

「派遣会社を装って契約までこぎつけたから、あとは2人が頑張ってくれば問題なっしんぐー！」

「だが、ブラドが帰ってこないという確信は」

「ここ何十年って帰ってないみたいだよ？ シーくんがブラドと戦ったのはどこだった？」

「……………信じるか否かは自由だが……………空、だな」

「空？」

「そう、空だ。そうとしか言いようが無いが……………実際の空とは違うな。架空の空だ」

右腕に絡み付いている理子を鬱陶しく振り払おうとしながらも、全く離れないので諦めつつ窓側へ行く。

昼間とは違う空。夜空を——夜天を見ていると、かつて戦った空を思い出す。

悲しくて泣きたくても泣けなくて、守りたい者すら満足に守れなくて、傷付いた心を癒す暇も無くて、ボロボロになっても飛び続けた空。

あの頃の俺が今の俺を見たら何を言うだろうか。

『平和だ』と言うか、『戦乱へ向かえ』と言うか、『腑抜けが』と

言われるか……………。

「ねえ、シーくん」

「……………なんだ」

「意外とロマンチスト？」

「否^シ。俺はただの一軍人にすぎん」

「軍人か……………。どうして軍人なのに、武偵になろうとしたの？
軍人にとって武偵って不都合なことばかりでしょ？」

「不都合だろうがそうでなからうが、俺は依頼と金で動く1人^{なんでも}の傭兵だ。武偵になれと言われたから研修のためにここに通っているに過ぎんさ」

何でも屋。

それは武偵も同じだが、規模と範囲が違う。

俺たちは通常の法では裁けないような裏の仕事をも引き受け、武偵は表の明るい仕事を請け負う。

それが明確な境界線。

簡単に言えば商売敵なのだ。OHNと武偵は。

「……………そろそろ消灯時刻か」

「もうそんな時間？　もつとシーくんといちゃいちゃしたい」

「せんでいい。うざったるくて面倒だ」

右腕にへばりついている理子を引きずっていき、ウォークイン・クローゼットを通ってリビングに戻る。
本気で時刻がヤバイ。寮長に見つかったら大変だ。

「ライカ」

「はっ、はい！」

「今すぐ自身の部屋に戻るかその空いている部屋へ行け。消灯時刻だ」

「えっ？ と、泊まっていいいんすか？」

「戦妹である以上部屋の共有が義務だ。泊まるか否かはお前が決める」

「あ、え、っと。服とか無いんで、今日は帰ります」

「そうか。なら早くしろ。寮長に見つかると厄介だ」

「はい！」

ばたばたとライカが慌しく部屋を出て行き、靴を履こうとしたところ——

「忘れ物だ」

「す、すみません！」

ライカが非接触ICカードキーを忘れそうだったので投げ渡す。
最大の問題は未だに俺の右腕に絡みついている理子だ。振り払っても押し退けても離れん。ウザい。

「いい加減離れろ。寝れんだろうが」

「シーくん」

「ああ？ なんだ」

「一緒に寝よ？」

「寝言は寝てから言え」

「うんっ。だから寝よ？」

「……………」

左手を顔にあて、呆れ果てる。
こいつには何を言っても無駄なのか？ 日本語が通じているのか怪しいぞ。

「そ・れ・にいゝ、理子りんのおっぱい感じちゃって嬉しいんでしょ？」

「いっぱい殺してやる」

「おおっ！ 『おっぱい』と『いっぱい』をかけたね！？ シークんにしては上手いとおも——……………本気？」

「ああ。本気だ」

チャキツ。

左手に持ったDESERT EAGLE 14inchを理子の腹に突きつけ、銃口を押し付ける。

この距離でなら内蔵えぐって即死だろう。

「ちえー。つまんないのー」

「今日は『エンブレム』をやったせいで疲れている。流石に寝かせてくれ」

「理子りんのお膝の上でどーぞっ！」

「よし、殺そう」

「うつそぴょんっ！」

理子が離れると同時に、リビングの隣——ベッド以外何も無い寝室へ行く。

理子は勝手に帰るだろう。いつも突然現れて突然消えるからな。

「俺は寝る。お前もほどほどにして帰れよ」

「もっと夜更かししよーよー！」

「断る。今日は疲れた」

壁際に置かれているベッドの隅で理子に背を向けるようにして寝転がり、手元にナイフとG18Cを置いて目を閉じる。

何故G18Cかと言うと、軽くて咄嗟の判断で使いやすいからだ。しかも9ミリパラベラム弾なので、急所にさえ撃たなければ殺すことは無い。

「……ふーん。じゃあ理子りんもねーっと」

「そうしろ。早く帰って——……………これはどういう冗談だ？」

「だってシーくん、？そうしろ？って言ったよ？」

「それは意味が違う」

「理子りんにとっては同じなの。それに……………ずっと傍

らにいて、守ってくれるって言ったよね」

俺が寝ようとしていると、不意に背中から柔らかい感触がした。
腹に巻きつくそれは、細く白い理子の腕。背中の感触は……………ま
あ、あれだ。

「……………へ理屈を言いやがって」

「へ理屈でもいいの。理子は理子で、理子はシーくんが好き」

「俺は嫌いだ。五月蠅い」

「嫌われててもいいの。……………ねえ、シーくん」

「なんだ」

「『理子』はだれ？」

「お前だ」

「じゃあ、『リュパン4世』は？」

「お前だ」

「それなら、『私』はだれ……………？」

……………どう、答えるべきだろうか。

こいつは自身を4世と呼ばれることを酷く嫌っている。その気持ち自体はわかる。

……あれしか、ないよな。

「『理子・峰・リュパン』。4世でもなにでもない、ただ1人の理^お子^{まえ}だ」

「……………うん……………ありがと、シーくん」

「礼を言われることはしていない。それより早く寝ろ。五月蠅い」

「おやすみ、シーくん」

「……………ああ」

理子の天敵——『無限罪のブラド』

それを討つために、俺は動く。
クライアント

依頼人の要望であれば何だってする。

そう決めたのだ。

俺が14歳の時に——時空管理局・特別遊撃隊『ケーリアス・グラウ』を作ったときに……………！

14弾 背後の影

「ふむ……………暇だな」

キンジとアリアがブラド不在のブラド宅に潜入してはいるものの、その間俺と理子は暇だ。

俺と理子は横浜ランドマークタワーの一角にあるオフィスビルにいる。一応臨時通信待機なので武偵高を休んでこうしてインカムを耳に当てているわけだが……………

「ねえーシーくうーん！ 理子といっぱい良い事しよーよー」

「断る。お前はリーダーを観ている」

「いーやーだー！ シーくんとイイ事したいー！」

「ええい離れろ！ ハイマキ！ 貴様もだ！ おいレキ！ 主人が
俺に引っ付くからハイマキが真似を——^{ベット}——ジャン又お前は近い！
顔が近いッ！」

……………まあ、そういうわけだ。

この部屋には俺と理子のほかに、レキとジャン又がいる。ちなみにハイマキというのは『コーカサスハクギンオオカミ』の名だ。こうなった経歴を簡単に説明しよう。

『さてキンジ。これは……どういうことだ』

『知らねえよ。俺が訊きたいつつの』

現在、俺とキンジはバイクでドライブ中だ。

俺とキンジが理子の命令で裸の女子が数人集まる第7保健室のロッカーに潜入していたところ（理由は訊くな）何故か突然コーカサスハクギンオオカミがロッカーに突っ込んできて、命からがら生徒たちの命を守った。そしてそのオオカミを追跡中。

……………うむ、わからん。

『お前は運転に集中しろ。1発で仕留める』

『……………麻醉弾、持ってるのか？』

『あるか馬鹿者。通常弾だ』

『……………そっか』

ということがあった。

意味がわからないだろう？

俺にもわからん。

なにせ気付いたらこうなっていたのだからな。

「ともかくだな。レキとジャンヌは学校をサボっているわけだし、さっさと戻れ」

「私にはトオヤマとアリアを見守る義務がある」

「ねエよ」

「私には銀狼とハイマキを見守る義務があります」

「ねエから」

「「義務が」」

「ねエつつの！」

と、俺が半分キレる始末。

理子は俺の左腕に抱きついてゴロゴロと喉を鳴らしているので（どうやっていいのか気になるが）もう離れてくれないだろうと諦めた。不幸中の幸いと言うべきか、ここにはイヴがいない。これで少しはマシだ。

それに俺の膝の上に寝ているハイマキがもふもふしていて安らぐ。まあ全長がかなりデカいし、100キロ近くあるので相当重い。

まあその分筋力はあるし鼻も利く。いざとなったらシャー・ペイ――

――中国で軍用や寮などに用いられる犬――なんぞ一噛みだろう。狼は強いぞ。知能も高いから共存性のある動物と共に戦うこともあ

るし、連携がしやすい。
ただし飯代がシャレにならんがな。

「おいジャンヌ。お前いい加減そのお絵かきをやめたらどうだ」

「お絵かきとはなんだ！ ブラドはこんな感じだ！」

「いや、実物と似てるには似てるが……。まあいい。その画力でイラストを描いたお前の勇氣は認めよう」

さつきから俺の真隣——かなり顔が近く、恐らく10センチほどしか離れていない——でジャンヌがサインペンを使ってノートにブラドの絵を書いているのだが、かなり酷い。
3歳児のお絵かきと同等か、それ以下か……。某悪魔のス。ーのような絵だ。かなり酷い。

だが、酷いには酷いが大まかにはそれであっているのだ。実際的にあいつはかなりでかい。人間の顔を軽々と握れるほどの手をしているし、それに比例して身体もデカいからな。

しかも俺たちがトマトを簡単に握りつぶせるように、あいつは人間を簡単に握りつぶせてしまう。

言うなれば鬼。

事実、あいつは鬼——オーガ・バンヒエス——吸血鬼だ。

「レキ。ハイマキに兵糧じゆうりやうを与えておけ。ジャンヌと理子は離れる。通信の邪魔だ」

「ハイマキ、お座り」

「シーくんのいけずー！」

「腑に落ちないことがあるが……邪魔になつては迷惑だな。すまない」

……………。

素直に引いたのはレキとハイマキとジャンヌか。

理子は……………まあ、文句を言つてはいるが離れたか。ならいい。

俺はちゃっちゃとインカムを準備し、自身の携帯に平型ジャックをぶち込む。うわー、音質わりー。

「キンジ、聞こえているか。作戦終了時刻まであと4分だ。急げ」

『わかつてる。丁度金庫に到着した。例の物を使う』

「ああ。パスコードはT・T・Aだ。間違えるな」

『おう。効果範囲は半径40センチ……………だったよな』

「早くしろ。効果持続時間は1分とない」

キンジがヘッドバンドでくつつけているカメラからの映像が俺の携帯に映し出され、俺はそれを基に指示を送る。

現在キンジは紅鳴館こうめいかんの地下金庫室にいて、そこに理子の十字架が保管されている。

それを取り戻す実行部隊がキンジとアリア。キンジは十字架奪還を、

アリアは管理人の注意を引く困役だ。

そしてキンジが使った『例の物』というのは、俺の持つ能力『森羅^{エア}ロ・スミス万象の覇者』の効果を擬似的に持った装置のことだ。

これを使用することにより、一時的に赤外線などの工学センサー類を無効化できるという利点がある。

欠点として、その効果範囲が装置の半径40センチという極小規模ということだ。

『……………っし。偽物とすり替え終わったぜ』

「OK・早急にアリアと共に帰還しろ。合流場所はK-307地点だ」

『りょーかい。っか、お前の英語発音ってかなりキレイだよな』

「余談は後にしろ。帰還を確認後、メディカル・チェックをする。オーヴァー」

ブツッ。

携帯の通信を切り、インカムを外してポケットに投げ込む。

あとは2人が帰ってくるのを待つて、キンジとアリア、レキとジャンヌとハイマキから記憶を消せば作戦完了だ。^{ミッション・コンプリート}

今回の件はあまりにも私的で貴族の家柄に関わるものだった。外部^{トオ}の貴族であるアリア^{ホームズ}にジャンヌの家系、ましてや貴族でもないキンジ家とオオカミだ。記憶は消さねばなるまい。

いや、遠山家はそれなりに裏では高い地位に居るのだが……………その、キンジとその兄である金一がその事を知らないので、実質的地位は一般市民と大差ないのだ。

「理子、合流地点はK - 307だ。ジャンヌとレキは――……………」
「あー……………どういう意味だ、それは」

鈍く光る人工の殺意――SVD ドラグノフ。
その銃口が俺の顔に向けられていた。

「何故私がジャンヌさんより後に呼ばれたのでしょうか」

「無意識だ。他意は無い」

「……………そうですか」

本当に他意はない。

そう念じていると、2人と1匹は玄関から颯爽と帰っていった。

……………あ、こら、ハイマキ。食ったらゴミはゴミ箱に捨てる。お
前がやらないと俺が^{かいめし}レキが手間をかけさせられるのだぞ。

「行くぞ」

「うつうー！ りょーかいー！」

「……………了解、という文字には『相手の言葉を理解した』という
切実な思いが込められていてだな、そう簡単に軽い発音で言ってい
いものではない」

「シーくん説教はあと！！ アリアんとキーくんが帰ってくるよ！」

「む……そうか。ならばまた今度にしよう」

はぐらかされた気もするが………いいか。

鍵をポケットにねじ込み、部屋を出てエレベーターに乗り込む。

合流地点はこの屋上。

合流時間は10分後。

そこで理子の十字架を引き渡す。

アリアには金を、キンジには単位をそれぞれ引き渡し、この任務は完了する。

なにもブラドを殺す必要は無いしな。あいつら吸血鬼——魔族のデータは高値で売れる。OHNの大きな戦力となるだろう。

エレベーターから出ると、運悪く嵐だった。

雷と雨が打ちつけられて痛い。

「……………シーくん」

「なんだ」

「……………これが終わっても、私と一緒に居てくれる？」

「……………ああ。そういう契約だからな。俺はお前が自由になるまで——全ての柵しがみという束縛から抜け出すまでは、俺はお前の傍に居よう」

「……………うんっ。ありがと、シーくん」

「それが契約だ。傭兵^{プロ}である以上契約は絶対に――……………いや、それを関係無しに俺はお前を守るだろう。……………余談はやめだ。奴らが来た」

真正面から来たへりを見上げていると、中からアリアとキンジが跳び下りてきた。

俺はアリアをキャッチし、キンジは足を滑らせてすっ転んだ。

「ん、ありがとう」

「何で俺じゃねえんだよ!？」

「誰がお前を受け止めるか。俺はアリアの無事を確保せねばならない」

「ま、それがママの依頼だしね」

「ああ。ともかくだ、キンジ」

「……………チツ。これだろ」

キンジから青い小さな宝石がちりばめられた小さな十字架を受け取り、俺は理子の首に掛けた。

イロカネが微量に含まれた十字架。リュパン家の家宝。

それが、今本来の持ち主の下に戻った。

「^{ミッシェル・コンフリー}作戦完了。メディカル・チェックをする。来い」

「……………ねえ、銀狼」

「なんだ」

「あんたもう、武偵ライセンス持つてるでしょ？」

「……………さあな。俺は東京武偵高の生徒だ」

キンジの腕を診ながら答えると、アリアは「あ、そ」と言って同じく腕を出してきた。

俺の場合そいつの体の一部に触れれば全てがわかる。
なので腕を触るのだ。

「血圧、心拍、疲労、共に良好……。キンジはいいとして、アリア、お前は少々問題がある」

「なによ」

「心拍数が高い。何かで緊張……。いや、何かに怯えて——ああ、カミナ」
「にやあああああッ！！」「ウゴフッ！？」

アリアに鳩尾を殴られ、言葉を遮られた。
クッ……………イテエ。

「なっなんのことかしらね！ あたしはなんにも怖くなんてないわ
！」

「おいアリア、ギンが本気で痛がつてるぞ」

「知らない！」

「このクソ女^{アマ}ア……！」

今ので胃と背骨が逝ったぞ……！
しかも何故か再生に時間がかかるし……！
リカバリー

「ゲホッケホッ。……ンンッ。とりあえず怪我はなさそうだな」

「そうね」「まあな」

「で、こちらからの報酬だが、理子」

「はいはーいっ。約束どーりりこりんはアリアんの裁判で証言する
よ。これはシーくんとの愛の約束だからぜーったいにねっ！」

「誰が愛か。五月蠅いから黙れ」

「シーくんの見栄っ張りっ！」

「……………」

無言で理子の顔面を鷲掴みにし、フェンスの外に追い遣る。
ここで俺が手を離せばすぐお陀仏だ。
これ以上馬鹿をするのであればここで死ね。

「……………シーくん」

「……………ア？」

「……………ごめんちゃい」

「——死ね」

「ちょおおおっ！？　すとーっぷ！　すとーっぷ！！　落ちるよ
！　りこりん落ちちゃうよ！？」

「……………チッ」

手を離れたのだが、理子は運良くフェンスにしがみ付いて助かった。
……………死ねばよかったのに。

「ま、これであたしたちの仕事は終わりね」

「そうだな。早く帰れ」

「そうしたい所だけど——……………ちょっと、質問いい？」

「…………… 1つだけな」

はあ、とため息をつき、フェンスに寄りかかる。
こいつからの質問は多いが、今回はなにかが違う。
いつもより深刻そうな、そういう感覚だ。

「そのDEのグリップだけど」

「……で」

「それ、だれ？ 人の顔よね」

「……………だれ、か。そのような質問をしてきた
のはお前が初めてだ」

DESERT EAGLE 14 inchのフィンガーグリップの
カメラに彫られている女性の顔。

それは、左右の銃の左右に全て違う人が掘られている。

左手の左側に？大原・H・香奈？を。

左手の右側に？フェイト・T・ハラOWN？を。

右手の左側に？リインフォース？を。

右手の右側に？イヴ？を。

「かつては家族であると信じていた者、幾度とない別れを告げた者、
2心一体を誓った者、ジユウを授けた者。全ては俺と血を交えた者
であり、俺の家族だ」
パートナー

「ふうん……。つまり、あんたにとって大切な人……。ってこと？」

「そうなるな。……………だが、香奈はもういない。俺が9歳の頃に……………」

香奈は俺が殺した。

守ると決めたはずなのに、俺は守ることができなかった。
それは俺のミスであり、俺の汚点だ。

「なあ、ギン」

「なんだ」

「お前、なんで泣いてんだ？」

「泣いてなどいない。よく見る」

「いや、普通に泣いてるし」

「なっ……………。フン。この程度、ただの体内異物に
対する反応であって感情ではない」

「ほーう……………」

む……………キンジの感覚が鋭いな。
まさかHSSを発動させているのか？

「御託はいい。お前らは早く戻れ。あまり良くない風が吹いている」

「犯罪者ならあたしも手伝うわよ」

「足手まといだ。味方などただの邪魔に過ぎん」

アリアとキンジの2人に帰るように指示を出し、帰りに飯でも食っていけと少々の金を渡した。
時間はもう夕暮れだ。
飯を食うのには丁度いいだろう。
この邪悪な風さえなければ。

「理子、気をつける。なにか邪なものを感じる」

「うん……。この感じ、りこりん嫌い」

「俺もあまり好いてはいないな。だが……………昔を思い出す」

「昔？ 私たちくらいのときのこと？」

「ああ。俺がまだ14だったときのことだ。——気配が近い、警戒を「うぐっ……………くう！」理子！」

『動かないでくださいね、先生？』

バチッ！ という放電の音が聞こえたと同時に振り返ると、俺の後ろで理子が倒れていた。

そこには2匹のコーカサスハクギンオオカミと、シャチのような力ラーリングをした銃を持つ小夜鳴、さらには猛獣用であろう大型スタンガンが。

あの銃は古いものだな。たしかクジール・モデル74という銃だ。骨董品と呼ばれても差し支えないほど古い銃で、もし整備不良だとすればそのトリガーは恐ろしく甘い。

銃口が理子に向けている以上、うかつには動けんか……。

「何をしている、小夜鳴。それと俺は教師ではない」

「では言い方を変えましょうか。OHNの総帥であり、エージェント工作員である銀狼さん？」

「……………貴様、どこからそれを」

「私は全て知っていますよ。貴方が武偵ライセンスを執りにきたという名目で武偵高に潜入していたことも、貴方がブラドの仇でもあることも」

「フン。そこまで知っているのか」

「更に言うのであれば、貴方がこの世界の人間でもないことも知っていますよ」

「ッ…………。翔からの入れ知恵か」

「彼はいい働きをしてくれました。それに何故か、貴方のことをよ

く知っていましたしね」

「あたりまえだ。あいつもこの世界の住人ではないからな」

岸辺・翔。

あいつはなにかと敵対してくる阿呆だ。
だが、俺の生みの親でもある。

「……………御託はよそう。まずはそこを離れる。これは命令だ」

「それはできません」

「なぜ」

「貴方がブラドの仇だからです。ブラドは貴方との再戦を望んでいる」

「馬鹿が。あいつが俺に勝つことは未来永劫無い」

「さて、それはどうでしょう？　もしも——」

小夜鳴がクジール・モデル74を捨てると、後ろにおいてあったボ
ストンバッグから何かを取り出した。

青白く、途中で間接があるかのように曲がったそれは——

「もしも、貴方の腕から遺伝子を採取していたら？」

「貴様……！ まさかあの時の腕か」

「ええ。優良な遺伝子が取れましたよ。人を見せ付けるカリスマ性に、人知を超えた身体能力、はてには別世界の能力まで」

「その力を得たからと言って貴様が——ブラドが扱えるものではない。使用しない方がいい」

「それを決めるのは私ではありません。ブラドです」

「だがそのブラドはここにいない。もし貴様が呼ぶのであれば、今すぐ貴様を殺す」

「いえ、彼はもうすぐそこまで来ていますよ。貴方の遺伝子のおかげで、より簡単にHSSを発動できましたしね……」

——ピリッ——

小夜鳴の言葉と同時に空気が張り詰め、雰囲気急変していった。この感覚はブラドのものだ。だが、ブラドの気配は感じられない。何処だ……何処にいる！

「ひとついいことを教えてあげましょうか。この前貴方が4世と不順な遊びをしていたときに流れていたDVDの、その補講です」

「……………遺伝子か」

「ええ。貴方が知るとおり遺伝子は気まぐれなものです。父と母の

長所が遺伝すれば『有能』 な子、短所が遺伝すれば『無能』 な子が生まれます」

「ああそうだ。貴様が発表した論文の通り、人間とは遺伝子で決まる。いうなればそいつは失敗作だろう」

「ファイ・ブッコロスすばらしい。話が通じるようで嬉しいですよ」

「だがしかし、それは先天的資質に過ぎない」

「後天的なものは全てゴミ以下です。貴方がいい例でしょう？ 後から得た力など一つもなく、全ては生まれたときから決まっていた貴方なら」

「確かに俺の資質は先天的なものだ。だからこそ……俺は人間に価値を見出している。こいつらならばその理論を打破してくれると」

4世は失敗作。

そう言われても仕方が無いだろう。

事実、こいつにはリユパンとしての素質の遺伝は無かった。

だがそれでいいじゃないか。

俺のように無理やりDNAをつぎ込まれるのではなく、父母の愛によって生まれてきたのだから。

「しかし『これ』は所詮ガラクタです。宝石にはなれない石なんですよ」

「世の中には磨けば光る原石もあることを知らんのか」

「いいですか、あくまでも『これ』は石ころ。原石ではありません」

小夜鳴がポケットから小さな十字架を取り出すと、痺れて動けない理子の口に無理やり押し込んだ。
虚ろで光の無い瞳。

かつて妹が見せていたものを、俺は再び見てしまった。

——もう、抑えられないだろう。
この感情を……欲望を。

「理子、聞こえているか」

「……………しー……………くん……………」

「今までお前がどれだけ辛い思いをしてきたのか、それはわからない。だが、今後お前に降りかかる火の粉は俺が全てなぎ払ってやる。だから泣くな、理子」

「……………うん……………うん……………」

「そうだ……………それでいい。これで、契約は成立した」

そう呟き、右手にDESERT EAGLE 14inchを抜く。
それを見た小夜鳴は足元のクジールを蹴り飛ばし、ビルから落とした。

——同じだ。

——先日ブラドと戦ったときと同じ行動。
やはりこいつが……。

「さて、もう貴方と話している時間は無いようです。彼が来ました」

「そうらしいな。小夜鳴——いや、ドラキュラ・ブラド」

「そうですね……………では、私はもう退場します」

ビリッ……………ビリッ

小夜鳴の着ていたスーツが紙のように破け、中から赤褐色の肌が現れた。

人の3倍以上はある巨大な体躯に、化け物と呼ばざるをえない毛むくじらの足。

そうだ——こいつが

「無限罪のブラド……………。やはりあれは擬態だったか」

「おう、久しぶりじゃねえか。銀狼」

「よもや小夜鳴という殻に籠っていたとはな」

「俺だって不本意だ。だが……………おかげで4世を捕まえられた。おめえも久しぶりだな、4世」

「ブラド……………卑怯……………だぞ……………！」

「卑怯？ ゲウバハハハハッ！ おもしれえことを言いやがる」

「ブラド、死にたくなければ理子を開放しろ。今ならば半殺しで済ませる」

「強がりはいけねえなあ……。こつちにはテメエの遺伝子があんだ。この前と同じだと思ふなよ」

「フン……どうだな」

ブラドが理子の頭を掴み、ぶらぶらと揺らしていた。

理子は必死に抵抗するが、意味も無い。

こいつの筋力は人の数十倍——いや、それ以上だろう。無駄に力があるからな、こいつは。

「おら4世、もっと抗ってみろよ。これじゃ虐め我意がねえ」

「……………やめろ……………！」

「アア？ 聞こえねえな。もっと大きく鳴いたらどうだ？」

「やめてっ……………！」

「ゲウバハハハハ！ いい声で鳴けるじゃねえか！ なあ銀狼、この無能な4世とお前の遺伝子を掛け合わせてみねえか？ 運が良けりゃ優良の5世が生まれるぜ」

「下衆野郎が……」

「おっと、うかつに動くんじゃないぞ。テメエが変な行動した瞬間、こいつの頭がトマトになっちまうぜ?」

「……………ブラド」

「ア? なんだ、銀狼」

「……………そもそも俺には感情が無い。それは別の人格に奪われてしまったからだ。だが——」

——貴様は俺を怒らせた——

「ゲウバハハハババ！ だったらなんだっていうんだア！？」

「来い、下等種^{ヒミ}。貴様は世界で一番酷い死に方を選ばせてやる」

「やれるんならなァッ！！」

ブラドが勢いよく振ってきた右腕が俺の体に直撃し、目の前で煙のように消えた。

——ガガウッ！

だが俺は、ブラドの後ろから2発の50AE弾を放ち、理子を掴んでいる左手首を撃ち抜く。

「……………どういうことだ？」

「この世の中には危険な薬品が多数存在する。だが、肺呼吸をする生物である以上抗えない行動もある。——呼吸だ」

「それがどうしたってんだ……。テメエの遺伝子は持ってたんだよ！」

再びブラドの腕が迫ってくるが、やはり当たった俺の体は霧になって消える。

その光景が俺に見えている——つまり、消えた俺は俺ではないということだ。

「そら、どうした吸血鬼。ご自慢の再生能力が遅れているぞ」

「んなっ……。テメエ、なにをしゃがった！」

「簡単なことだ。貴様は俺の血を飲んだ。ならばその血液中にある成分を流し込むだけで、貴様は体内から破壊されていく」

「ウイルスか！？　だが、俺のからだにや抵抗体がうようよ——」

「馬鹿が。貴様が吸い込んだのはウイルスではない。チャフだ」

「ア……？　チャフ？」

「俺の血液中にはナノマシンが数億存在している。貴様がそれを飲んだのが間違いだ。俺はただ、貴様の体内にあるナノマシンで血液を逆流させているにすぎん」

「——ッ！　グガエッ！　ガハッ！　てっ……テメエ！」

「苦しめ、ブラド。本来ならば殺さずに捕らえる予定だったが、こっちはそれもあるまい。塵芥も残させん」

空いていた左手でシース・ナイフを抜き、理子を掴む左手を切り落とす。

血液が逆流しているせいでブラドは呼吸困難に陥り、今では血にはつくばって必死に呼吸している。

周りにいたオオカミもそれをいたわってか、日陰を作ろうとしていた。

「理子、怪我は」

「だい……………じょぶ。首が痛いけど、なんとか」

「……………すまん。救出が遅れてしまった」

「うっん……………助けてくれただけで、嬉しい……………！」

ブラドの右手から理子を抱き上げると、ボロボロの体で抱きついてきた。

普段ならここから突き落としているが、今は場合が違う。少しくらいは許そう。

あとはブラドが死ぬのを待つのみだが――

……………どうにも、嫌な予感がする。

「これで……………勝った気になるなよ」

「ああ。まだお前の体が消えていない。終わっていないさ」

「ゲバハハ……。俺アテムエの遺伝子のおかげで、再生が操れるようになったんだよオ!!」

急に起き上がったブラドの拳を避け、背骨を蹴り碎く。
いくら再生能力があると言っても、あの弱点をつけばそれも無くなる。

だが、それには同時に4箇所を攻撃しなければならないからな……。

「理子、少しだけ離れていてくれ。ここでは危険がある」

「……………うん」

理子が屋上の端に逃げたのを見届け、ナイフを収めて両手にDESSERT EAGLE 14inchを持った。

あいつを殺すには『弱点』を4箇所同時に——それも0・1秒の間もあけずに攻撃しなければならぬ。

それをやるには変身がEC因子トランス エクリプスを使わざるをえない。

「いつまでも話してんじゃねエツ!」

「ッ——!!?」

再生していたブラドの左腕に弾き飛ばされ、ビルの外へ放り出されてしまった。

ここは296メートル。落ちれば俺でもそう簡単に復活できないだ

ろっ。

だが――！

「忘れたか、俺は森羅万象を操ると」

ダンッ！

何も無い空中に着地し、空気を蹴って屋上へ舞い戻る。

ブラドの上空についたと同時に右手のDESERT EAGLE
14inchをホルスターに収め、肩を踏んで跳躍する。

「ゲウバハハッ！ 今銃は2つしかねえ！ テメエに俺は殺せねえ
んだよ！」

「誰が銃を使うと言った？」

ドスッ――ドドドドドドッ！

大きく口を開き、舌を出して笑っていたブラドは――

「グバ……………ハ…………ハ」

「俺は言ったはずだ。塵芥も残させないとな」

全方向から全身に銃弾の嵐を受け、立ち尽くしていた。
俺は今の一瞬でトリガー・ハッピーを発動させ、こいつの全身に反

応炸裂弾を撃ち込んだ。

弱点である両肩と右わき腹、さらに舌のど真ん中にある目玉模様も全て撃ち抜いた。

つまり、こいつはもう再生ができない。

「消える。下等種が」

ガウンツ！

俺が真上に撃ったDESERT EAGLE 14inchの銃声に合わせ、ブラドの全身に撃ち込まれていた反応炸裂弾が爆発した。爆散した血肉が別の爆発に巻き込まれ、連鎖反応を起こし、全てを消し去った。

文字通り、ブラドの痕跡は何1つ無い。

「はア……。これでイ・ウーの組員を1人消してしまった……。命令違反は禁止にしたのだから……」

DESERT EAGLE 14inchをホルスターに戻し、理子の下へ向かおうとしたとき――

「シーくん！！ 危ない！！」

「……………？ ブラドはもう殺し――」

後ろから、何かに襲われた。

15弾 終わり、そして次へ（前書き）

長らく更新をお待たせしていました。やっとのことで更新です。
いやあ、ここ最近ISやらなのはやらで、放置していたのでござい
まするよ……。

15弾 終わり、そして次へ

「ゲウバババハハハハ！！ 流石のテメエも後ろからなら1発つかアツ！？」

「シー君！ シー君！！ やだ……………死んじゃ嫌だよ！！」

「こいつに何を言っても無駄だア！ テメエも檻の中に逆戻りだな！」

目の前が掠れて見える。

頬に生暖かい液体——血が、ついているのがわかる。

大量のナノマシンが媒介する赤黒い血。

それが、白い俺と髪と、黒いスーツを侵食していた。

「おい4世、やっぱりテメエはこいつと掛け合わせてみるか？ 優良種が生まれることに違いはねえしな」

？下衆が？

そう呟くことすらできず、俺は顔をコンクリに押し付けて倒れている。

それ以外にどうすることもできない、するしかない。

再生が終わっていない状態で動けば、余計に再生が遅れてしまう。

俺は英雄^{ヒーロー}じゃない。

ただの破壊者だ。

人を救うために悪を討つわけでもない。
依頼されたから『悪^{それ}』を消しているだけだ。

故に救世主でもない。^{シーファ}

救うためでなく、殺すために力を振るう。

己が欲望のためではない。

他人の目的のために。

よって

俺は

——ただの人殺し——

という答えが

導きだされる。

マシンドール
感情無き人形。

そう呼ばれても仕方ないだろう。実際、俺には怒りと憎しみ以外の感情が存在しない。

その理由は1つ。俺という体には、3つの精神が既存しているからだ。

俺と、ジャックと、ハヤヒト。

3人で感情を分けてしまったがために、俺にはこれしかない。殺戮に不必要な感情はすべていらぬ。

——だからといって

だからといって、このまま這い蹲っていれば、それで全ては終わるのだろうか？

放っておけばいつかは終焉となるだろう。

だがそれは、良き終わりではない。

誰かにとっては良き終わりであっても、もう一方にとっては悪しき終わりだ。

よお、お前ら――

俺はあいつに言われたはずだ。
この世界を頼むと。

全ての世界を守ってくれと。

こんな世界で満足か――

全ての世界から争いをなくし、平和でいたいと願う人たちが笑って
すこせる世界。

そんな理想郷を作ってくれと、頼まれんたんだ。

俺は、嫌だね――

俺だつて――

――俺だつて嫌さ

こんな腐りきつた世界で必死に生きる奴らを見殺しにするのも
この世界に巢食う邪な奴らを野放しにするのも
力無き者が命を戦わなければならないのも
子供が戦わなくてはならないのも
弱者が泣かなければならないのも
全て、終わりにすると誓ったのに。

「そくだ……………俺は……………俺^{OHN}たちはッ……………！」

力が入らない。

多分、後頭部をやられたのだろう。

それでも、立たなければならないんだ。

「幾多もの世界を背負って……………幾多もの人の心を背負って……………」

「お？ まだ生きてやがったのか。しぶてえな」

「救われた命を使って、その命で救って——生きていくしかないんだッ！ こうして俺がここにいるのも、こうして俺が人を救えるのも、前の銃騎士が——あいつが俺を助けてくれたから！俺は貴様を許さんッ、それが今俺にできる全てだ！」

後ろ腰の鞘に収められているシース・ナイフを両手に抜き、余裕をかましているブラドに向かって駆け出す。

飛び上がりざまに両肩の目玉模様を切り裂き、空中で振り返ると同時に切り裂いた目玉模様に向かってナイフを投げる。

「やるじゃねえか！ このハエがアッ！！」

着地と同時にEC因子^{エクリプス}を発動させ、両手に抜いた白銀のDESSERT EAGLE 14 inchを乱射した。

先ほど俺が爆破したにもかかわらずこいつが生きているのは、俺の遺伝子から取った能力だろう。

俺と同じように、空気を操って分身を生み出していたと思っていいたが、あれは想像以上に体力や魔力を消費する。おそらくは……………もう使えないはず。

ブラドの巨大な腕を避けながら50AE弾を放っていると、途中でブラドは俺を無視して歩き出した。

その先にあるのは——巨大な鉄柱。いや、携帯かなにかの電波アンテナだろう。軽く見積もっても重さは数トンだ。

「これで殴りや、テメエも1発だ。覚悟するんだなア」

「……………俺がなぜ、最初からこの力を使わなかったかわかるか」

「温存だろ？ 意地汚ねえ人間のやるこつた」

「そう……か」

ブラドの振るうアンテナが眼前に迫りながら、俺は右手を突き出した。

ズガンツ——！

俺はそれを、受け止めるために。

「残念だが貴様の解は不正解だ。俺がこれを使わなかったのは、貴様を生かしておく自信が無かったからだ」

両手のDESERT EAGLE 14inchでブラドの右わき腹と舌を狙うが、どうしても顔だけは腕で守られてしまう。……ならば——

DESERT EAGLE 14inchを空高く投げ、一気に駆け寄ってブラドの両肩から抜けかけていたナイフを抜き、両腕を切

り落とすと同時に両肩に刺しなおす。

落ちてきたDESSERT EAGLE 14inchを拾いながら
もトリガーを引き、その弾丸は舌と右わき腹を貫いた。

つまり——全ての弱点を破壊した今、こいつに再生能力は無い。

「お……………お、おおっ!？」

ブラドはしだいに力を失っていき、傷跡から自慢の血液を噴出させていた。

——もし、もしもだ。

今の俺が？イ・ウー構成員の全てを一切の死者を出さずに、尚且つ
無傷で捉えよ？という任務を背負っていなければ、こいつを殺すの
に1分といらなかっただろう。

だが今回は話が別だ。

命令どおりこいつの傷は直さねばならないが、その前に二度と俺に
逆らえないようにしておこう。

でないと復活したときに調子こくからな。

「そら、どうしたブラドッ！ もう終わるか、理子を苦しめた貴様
はこれで終わりなのか!! まだ俺の弾は余っているぞ!」

ガガウッ！ ガウンッ！

倒れて動けないブラドの目玉模様にむかって50AE弾を放つた
びに、ブラドは苦しそうにうめき声を出していた。

俺はそれを見殺ししながら銃を撃ち続け、弾が切れればマガジンを入

れ替える。

「理子、銃はあるか」

「え、あ……うん」

「借りるぞ。弾も」

まだ完全に痺れが抜けないのか、立ち上がれない理子の両太ももからウルサーP99を2丁とマガジンを4つ抜く。
ウルサーを両手に持ってセーフティを解除し、コッキングした。
バスバスバスッ！ ババツ！ バスバスバスバスバスッ！

「おいブラド、わかるか？ これが銃弾の感触だ。貴様が散々笑っていた物の傷みだ。よく覚えておけよ」

「ウ……………グ……………ア！」

「まだ足りないか？ ………………ああ、すまんな気づけなくて。目玉模様ではなく目玉に直接欲しいのだな？」

ゼロ距離でブラドの目玉に向かって9ミリパラベラム弾を撃ち込むと、ついに気絶してしまった。
飛び散った血肉と硝煙の匂い。昔から嗅ぎ慣れていて、俺の心が高揚する最高のステージだ。

「チッ……もう終わりか。——おいアルファード、聞こえているか」

『はい。事後処理ですね』

「^{アホ}県警に伝えておけ、銀の鎖を忘れるなど」

『了解。では』

右耳につけていたインカムを外し、電源を切って胸ポケットにしま
う。

借りていたワルサーとそのマガジンを理子に返し、いわゆるお姫様
抱っこというやつで抱き上げた。

「……シー……くん？」

「………なんだ、理子」

「……シー君、だよな」

「ああ。俺は俺だ」

「………今のシー君、なんだか怖い。いつもならこんな風に抱か
れたら嬉しいのに……私は、シー君が怖い」

「………それでいい。本来俺は人に受け入れられるべき
存在ではないからな」

屋上のフェンスを蹴破り、屋上から屋上へと、徐々に低い位置へ飛び降りていく。

人は俺に恐れおののかなければならない。そうして距離をおくことで、俺は人との関わりを深くしすぎないようにするしかないのだ。銃騎士であるかぎりな。

「シー君」

「……なんだ」

「あとで話が……大事な、話があるの。聞いて、くれる……？」

「……ああ。話くらいは聞いてやる。お前が満足行くまで、聞くくらいはな」

いくら違う世界の存在とはいえ、聞いてやるくらいはいいだろう？
目の前で死線をくぐった奴がいるのだ、それくらいはしてやっても……いいだろう？ 俺よ。

このようなナリをしていても、所詮はまだ子供だ。怖いことも、それを慰めて欲しい時も……あるだろうて。皆が皆、俺のように戦争の中を生き抜いてきた訳ではないのだ。悲しい思いをしてきた奴らに少しくらいは甘くしても……罰は当たらんさ。

「シー君……聞くだけじゃないくて、返事もくれる？」

「必要最低限のはな。会話が成り立つ程度に……少しくらいなら」

そう言つて理子の頭を撫で、少しだけ強く抱く。俺の加護から抜け出せぬように、非業の戦火に落としてしまわないように。

——俺は理子を守る

そういつそう強く決意したのは、この時だった。

＋＋＋＋＋

シルバークロウ
「銀狼、お前は何に忠を尽くす」

「それは俺の台詞だ。お前こそ、何に忠義を尽くすつもりだ」

「俺は『俺』に忠を尽くす。ビッグボスに鍛えられ、恩師を殺した俺自身に！」

「……………そうか。ならば俺はお前と相入れることが出来んだろう」

「何故だ。これまでも、お前とはよくやっていられた」

「俺はな、己自身を信じてはいない。誰の側にも就き、裏切りさえも厭わない己を信ずることが出るわけがない」

「だがお前は――」

「わかってる。……しかし、俺と『俺』の意味とはそういうものなのだ。しかり、俺は『任務』に忠を尽くす。感情などない。ただ与えられた依頼と、任務にだけな」

「……何故だ！ お前なら――いや、お前こそ己に全てをかけて戦うべきだ！ その大切さを教えてくれたのはお前だろう！？」

「そもそもお前と俺は違う。お前は伝説の英雄ヒーローとなるべくした者だが、俺は破壊者としてこの世に憚る存在だ。やることは同じだが、目的が違う」

「ならお前は銃を捨てるのか！」

「やがていつかはそうならざるを得ない時が来るッ！！ お前も！俺も！！……俺はな、一度未来を見てきた。酷いものだったさ。俺は銃を捨て、再びそれを取ることも叶わず、トリガーを引けども弾はでない」

「……お前は、自分の過去をも否定するのか」

「否定などしない。俺は俺であり、今まで戦ってきた俺もまた『俺』だ。しかし、いつか全ての者が銃を手放す時が来てしまう。それを言いたかった」

「平和が来るならばそれもいい。だが悪は存在し続けるッ」

「そうだ。だからこそ、俺が最後の悪になり、悪が武器を捨てれば完全な恒久和平が実現する。それで終わりだ」

「それは……………そうだが」

「平和など、何か犠牲にならなければ保てぬものさ。ならば永遠に俺が犠牲となればいいだけの話だ」

「お前はそれでいいのか」

「なにが」

「誰の信頼も得られず、ただ1人で抗い続ける……。それでいいのか？」

「孤独であることは問題ない。むしろ独りでないほうが問題だ。誰もこの道に賛同してはならない。永遠に独りで、俺以外の全てを敵に回し、武器を持たず、対立し続ける……。それで、全てが終わる」

「……………1人の犠牲で、平和が訪れるのなら安いものだ？」

「ああ。ましてやその犠牲は人間ですらない。もともとはならない部外者イレギュラーなのだから、問題は1つも無い。それで……………いいではないか」

＋＋＋＋＋

——夢を見た。

多次元展開している俺の、俺の誰かの見た世界だ。

俺は銃騎士として世界から切り離された時、次元の制約を受けなくなった。……つまり、多次元に同時に存在できるのだ。無論意識も共有できるし、支障がなければ物品を転送することもできる。

この夢は……どこかの世界で戦い続け、平和を望む傭兵と共闘している俺の記憶か。

「うにゅう……」

「……………」

なんの音かと思って横を見ると、机に突っ伏して死んでいる理子だった。

先日のブラド戦から、すでに3日。アリアも、キンジも、理子も、レキも、ジャンヌも。何事もなかったように学園生活を謳歌している。

俺からしてみれば何もなかったが、理子にとっては一生忘れることのない出来事だったろう。

あのあとの……会話については、特にな。

「キンジ」

「ん？　なんだよ、授業中に」

「いやなに、渡すものがあってな。一応持っておけ」

「あ？ …………… なんだこれ。 武偵弾？」

「厳密には違うが似たようなものだ。 マガジンに同種の弾がフルで入っている。 護符代わりだ、持っている」

「何をくれるのかと思ったら弾かよ……。 つまんねえ」

「言っておくがそのマガジン1本で軽く20万を突破していることだけを伝えておこう」

「OKありがたくもらっておく」

キンジに渡したのは9ミリパラベラムのホローポイント弾だ。 正確にはホローポイントのOHN製特殊弾薬だがな。
弾頭が水色に着色されているので、そうそう通常弾と間違えることはないだろう。

「つか、なんで急に？」

「嫌な予感がする。 下手をすればアリアでさえ命を落としかねない
………… 凶悪な予感だ」

「そんな俺がどうにかできるわけねえだろ」

「戦力にならんよりはマシだ。 お前とて罔にはなるだろう」

「罔かよ……。 ったく、一応もらっておくけど使う気はないからな。
なんの弾かも知らねえし」

「それでいい」

季節は夏。下手な弾丸が暴発する時期だ。最近の弾だとありえんがな。

……っと、こうしてはられん。授業だ授業。

「……それじゃあ今日はここまで。おつかれー」

……聞けなかった。

しかも今の授業は法規なので、俺は少しでも聞いておくべきだったのだが……。まあいい、後で調べるか。
って、次は体育かよ。ダルいな。………しかも水泳。C4でも起爆させて遊ぶか。

「シーくん、あとで遊びに行くね」

「……水を得た魚だな、お前は」

「ふっふっふ、この暑さから逃れられれば天国！」

「……そうか。暑苦しいから騒ぐな」

てってけ走り去る理子を知り目に、ダルさに負けて机に突っ伏す。
ここ最近まともな死闘をしてないせいかな、気だるくてたまらん。誰

か殺し合いやってくんねーかなー。

「ギン、行こうぜ」

「……ああ。了解した」

遅刻すると体育の顧問も務めている蘭豹が五月蠅いので、遅れない程度にしないとな。
それにしても水泳か。懐かしいものだ。昔はよくハンドガンを複数所持しながら訓練をしたものだ。

「にしても、一気に気温上がったな」

「そうだな。これでは体が追いつかん……」

「……大丈夫かよ」

「なに、しばらくすれば慣れる。俺はお前らと違って変温性なのでな」

「は？ 人間って恒温動物だろ？」

「俺はナノマシンのせいで人間とは違う部分が多々ある。これもその1つだ」

「うへ……不便そう」

「不便だ」

なんだかんだと言いながら水着に着替え（俺の場合はハーフパンツだが）室内プールへ移動する。

さすがにこれは男女別だ。そうでなかったらキンジが死んでいる。

「…………ダアル…………」

準備運動すら面倒なのでデッキチェアに寝そべり携帯をいじる。
残有弾薬数、銃種、残存兵力、OHNの兵器類の報告書……。様々な情報がこの端末に送られてくるので、定期的にチェックせねば異常な量溜まってしまふ。一日で2万通くらいは報告書が来るし。

「やつほー、シーくうーん」

「…………来るな、暑苦しい…………」

1人2人死ぬまで水球やれ！　と言って消えた蘭豹がないのをいいことに、数人の車両科と女子が入ってきた。おい、ここは男子プールだ。

しかも理子までいるし……。ホルターネックの水着にパレオとか、どこのビーチだ。

『どけ不知火！　今から俺達がこのプールを占領する！』

「ねーねーシーくん、今度一緒にお祭りいこーよー」

『俺らの最高傑作、ボストーク号の邪魔するんじゃないねえッ』

「……………地域集会の警備、か。別に構わんが……………」

「うっうー！　じゃあ決まりね！　詳しい日程はあとで送るから！」

『てめえ！　なに送ってんだこの！』

「了解した……………」

「りこりんの可愛い浴衣姿を見て興奮しちゃ駄目だよ、シーくんっ」

バーン、と指で銃を撃つ真似をしたかと思うと、理子は隣のデスクチェアに座った。

くそ……………理子が日陰になっていて調度良かったのに。眩しい……………。

「残念ながら俺にそういう趣味はないのでな」

「ぐぬぬ……………りこりんのメロメロパワーで骨抜きにしちゃう」

『くっそ！　ふざけんな！』

「できるのならやってみるがいい。挑戦くらいならば受けてやる」

「……………ふうん？　じゃあ、こ・れ・は？」

……！

二の腕に何か柔らかい物の感触が走り、瞬時にそれが何であるかを理解した。

まっ……マズい。このままだと周りの奴らに狙われかね――

『『『『銀狼デメエツ！！』』』』

………ほらな？

ここには危険なので、理子を抱えて戦線を離脱した。

理子とは途中で別れ、俺はちゃっちゃと着替えて強襲科^{アサルト}の屋上へ逃げる。ここへくる人はそうそういないし、授業をフケるには丁度いい場所だ。

それに庇もあるので快適だ。風だけ通りぬけ、直接日光は当たらない。しかしここに椅子がないのが残念だな……。

………アモ缶――金属製の弾薬箱――でも積んで椅子にするか。

「………はア。まったく………理子は」

あの日、俺と理子はまる１日語り合った。互いのことを理解するため……互いのことを知るため。

そしてその結果、俺と理子は………その、なんだ？ なぜか……付き合う、ことになってしまったのだ。

元々の原因としては、俺が『お前が全ての柵^{しがらみ}から逃れるまで、俺は

お前の傍らで守ってやる』と言ってしまったのが悪かった。

それをあいつはどう聞き違えたのか、こうなってしまったわけだ。まあ理子が結果だけを言いふらしたせいで、この学校では公認の出来事になってしまったが……どうやら、俺が理子と一緒にいることについてはツツコまないが、理子が俺にちょっかいを出しているのは許せんらしい。

まあ、この調子で止めてくれたほうが俺も助かるが、俺が標的にされているので逃げるだけだ。

「……………しかし、そろそろ動くはずか……………」

話を戻そう。

俺が今日、キンジに弾を渡したのには意味がある。

まず先日、イ・ウーのNO・2であるブラドを倒してしまったことだ。2位が崩れたとなれば、なんらかの変革が起きても不思議はない。それも相まってか嫌な予感がするのだ。

なにか、大きな出来事か……。イ・ウーのことだ。アリアやジャンヌ、理子を狙ってくるのはわかる。しかし俺やキンジも標的に入っていると考えるべきだろうな。

それを思うと気が気ではないのだ。面倒な事になりそうだし。

それで念のために、キンジに特殊弾薬を渡したわけだ。偉いな俺。

「正確な時さえわかれば……………あるいは——」

「あら、久しぶりね」

「……………カナ？」

誰かがドアを開けて入ってきたので見てみると、武偵高の制服を着た力ナだった。

また女装してるのか、こいつは。

「なんのようだ、東京に」

「アリアの状態を見に来たのよ。第2の可能性があるかどうか」

「現段階では十二分にありうる。手を出すな」

「そうね、でも私自身で調べたいの」

「……勝手にしろ」

第2の可能性――

俺とて、それが可能ならばそうしたい。

しかし、それができぬかもしれん。その可否を調べるためにこいつは来たのか。

ドンパチやらかすのは勝手だが、俺に被害が無いようにしてほしいものだ。面倒だから。

「それじゃ、貴方もやってくれるわよね」

「……何故だ」

「第2の可能性のためよ」

「俺が協力せばならない理由はない。勝手にやっている」

「そう。……なら、アリアを殺すわ」

「……………お前な、「冗談に聞こえん」「本当よ」……………はア。わかった、わかったから殺すな。俺は何をすればいい」

「大前提として、彼女が自分よりも強い武偵が貴方以外に理解しないといけないわ。その手伝いをしてもらいたい」

「……………了解した。適度に横槍を入れさせてもらう。残りは俺の独自判断で動く」

「お願いね」

そう言ってカナは姿を消してしまったので、仕方なしに携帯を開く。アリアがここにくるように仕向けなければならぬし、あ……………面倒だ。

……………少し、寝よう……………。

タアン……ガンツ……パアンツ！

……銃声？ マズい！ 今何時だ！？

「クソッ！　すでに始まったのか！」

飛び起きて屋上から駆けると、すでに練習場ではカナとアリアが戦っていた。

しかもキンジまで混ざってやがる。あいつは下手に動くから流れ弾が当たる可能性が高い。たとえばカナにその気がなくとも……。

出入り口をICカードで開け放ち、リング内に入ると同時にキンジに向かって大きく飛翔する。左手を前に出して狙いを定め、右手を引いて力を溜める。

あいつは一撃で戦闘不能にする。でなければ奴に危険が及びからな。

「キンジイッ！！」

「は？　ちよつ、なつ——ッ！！」

キンジが振り向いたと同時に右手でアイアンクローを決め、そのまま空中前方回転でキンジごと周り——ズガアンツ！
空中で俺と共に一回転したキンジを顔面から床に叩きつけ、アリアに迫っていた45LC弾を平手で弾き飛ばす。

「ギン!？」

「アリア、諦める。奴はお前が適う敵ではない」

「そんなことないわ！ 私はまだ戦える！」

ボロボロの制服に、かすり傷だらけの手足。
まったく、護衛の任務があるというのに……。

「……寝言を……。ここからは俺も加勢する。死ぬなよ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9904p/>

緋弾のARIA～魔弾の射手～

2012年1月9日22時49分発行